

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第682集

おとべの
乙部野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊)

2018

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

(公財) 岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第682集

乙部野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

(第1分冊)

2018

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

乙部野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊)

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されており、先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成27年に発掘調査を行った宮古市田老字乙部野83他に所在する乙部野Ⅱ遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査では、縄文時代後期初頭を主体とする竪穴住居跡が多数見つかったほか、縄文時代前期と弥生時代前期の竪穴住居跡、縄文時代の陥し穴など、当地域における縄文時代前期前葉、後期初頭、弥生時代前期の集落跡や狩猟場の存在が明らかになりました。

この報告書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成30年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理 事 長 菅 野 洋 樹

例 言

- 1 本書は岩手県宮古市田老字乙部野83他における乙部野Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は三陸沿岸道路建設事業に関連して、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受け、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 岩手県遺跡台帳登録の遺跡番号と調査時の遺跡略号は以下のとおりである。
遺跡番号 KG84-2107、遺跡略号 OTBⅡ-15
- 4 本調査の調査期間と面積は以下のとおりである。現地調査は松政里奈、北村忠昭、高橋工、佐々木隆英、森裕樹が担当した。
平成27年8月3日～12月18日 面積4,494㎡
- 5 本調査の整理期間と担当は以下のとおりである。整理作業は松政里奈、森裕樹が担当した。本書の執筆はⅣ章を担当者間で分担し、Ⅰ～Ⅲ章は星雅之、松政、Ⅴ章は松政、菊池貴広、星、金子佐知子、その他は松政、星が担当した。編集は松政、星が行った。
平成27年11月1日～平成28年3月31日 松政里奈
平成28年4月1日～平成29年3月31日 松政里奈
- 6 野外調査における基準点測量は釜石測量設計(株)に、航空写真撮影は東邦航空(株)にそれぞれ業務委託した。また、科学分析および鑑定は以下の機関に依頼した。
放射性炭素年代測定(AMS測定)・・・(株)加速器分析研究所
火山灰分析・・・・・・・・・・・・(株)火山灰考古学研究所
花粉分析・珪藻分析・・・・・・・・・・古代の森研究舎
炭化材樹種同定・種実同定・・・・・・・・古代の森研究舎
植物珪酸体分析・・・・・・・・・・・・バリノ・サーヴェイ(株)
顔料分析・・・・・・・・・・・・・・(株)第四紀地質研究所
黒曜石産地同定・・・・・・・・・・・・(株)古環境研究所
アスファルト分析・・・・・・・・・・・・(株)古環境研究所
土器胎土分析・・・・・・・・・・・・バリノ・サーヴェイ(株)
石質鑑定・・・・・・・・・・・・・・花崗岩研究所
- 7 本書では土層及び土器の色調の記載にあたり『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)を使用した。
- 8 現地調査及び整理作業にあたり、以下の機関からの指導と協力を得た。(敬称略)
宮古市教育委員会、阿部昭典(千葉大学)、石川日出志(明治大学)、神原雄一郎(盛岡市遺跡の学び館)、佐藤祐輔(仙台市縄文の森広場)、佐藤由紀男(岩手大学)、金子昭彦(岩手県立博物館)、佐藤剛(北海道埋蔵文化財センター)、篠宮正(兵庫県教育委員会)
- 9 調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
- 10 今回の調査に関わる成果については、現地説明会資料やホームページ等にて一部公開しているが、本書の内容が優先する。

凡 例

1 本書における遺構図の凡例は、以下のとおりである。

- (1) 方位 遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。
- (2) 土層 基本土層はローマ数字、遺構内の堆積土は算用数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。土色の観察には『新版 標準土色帖』2000年版を使用した。
- (3) 標高 海拔標高を示す。
- (4) 縮尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (5) 破線 遺構平面図では、短破線は遺構の推定線を示す。

2 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮尺 縮小率は遺物の大きさと性格により適宜決定し、スケールの上を示した。
- (2) 遺物番号 通し番号を付した。
- (3) 法量 遺物の法量については、観察表に表記した。推定値は ()、残存値は <>内に示した。

3 本書で使用した記号(略号)やトーンは以下のとおりである。

(1) 遺構



(2) 遺物

[土器類]



[石器類]



目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	遺跡の概要	2
1	遺跡の位置	2
2	地理的環境	2
3	周辺の遺跡	2
III	調査の概要	8
1	野外調査	8
2	室内整理	8
IV	検出遺構	13
1	基本層序	13
2	竪穴住居跡	14
3	竪穴状遺構	46
4	土坑	48
5	フラスコ状土坑	59
6	陥し穴	63
7	焼土遺構・炉跡	67
8	不明遺構	71
9	柱穴	72
10	捨て場	72
V	出土遺物	167
1	縄文・弥生土器	167
2	土製品	172
3	石器	174
4	石製品	177
5	陶磁器	178

VI 自然科学分析	309
1 放射性炭素年代 (AMS測定) -平成27年度-	309
2 放射性炭素年代 (AMS測定) -平成28年度-	315
3 出土火山灰分析	321
4 炭化材同定分析	327
5 種子同定分析	330
6 花粉分析	332
7 珪藻分析	336
8 植物珪酸体分析	338
9 顔料分析	341
10 黒曜石産地同定	348
11 アスファルト産地同定	351
12 胎土分析	355
VII 総括	365
1 遺跡と遺物	365
2 自然科学分析について	368
報告書抄録	373

図版目次

第1図	岩手県図・遺跡の位置図	3	第43図	SI58	108
第2図	地形分類図	4	第44図	SI32	109
第3図	周辺の遺跡図	6	第45図	SI33	110
第4図	グリッド・遺構配置図	9	第46図	SI34	111
第5図	遺構配置図	10	第47図	SI35	112
第6図	B区遺構配置図	11	第48図	SI36	113
第7図	基本層序	12	第49図	SI37	114
第8図	SI01	73	第50図	SI38	115
第9図	SI02	74	第51図	SI39	116
第10図	SI03	75	第52図	SI40	117
第11図	SI04	76	第53図	SI41	118
第12図	SI05	77	第54図	SI42	119
第13図	SI06	78	第55図	SI43	120
第14図	SI07	79	第56図	SI44	121
第15図	SI10	80	第57図	SI45	122
第16図	SI07・10	81	第58図	SI46	123
第17図	SI11	82	第59図	SI49	124
第18図	SI12	83	第60図	SI51	125
第19図	SI13	84	第61図	SI52	126
第20図	SI15	85	第62図	SI53	127
第21図	SI16 (1)	86	第63図	SI54	128
第22図	SI16 (2)	87	第64図	SI55	129
第23図	SI17 (1)	88	第65図	SI57・60・63	130
第24図	SI17 (2)	89	第66図	SI57	131
第25図	SI19	90	第67図	SI60・63	132
第26図	SI20	91	第68図	SI59 (1)	133
第27図	SI23・48・56	92	第69図	SI59 (2)	134
第28図	SI23	93	第70図	SI61	135
第29図	SI48	94	第71図	SI62	136
第30図	SI56	95	第72図	SI64	137
第31図	SI24 (1)	96	第73図	SI65	138
第32図	SI24 (2)	97	第74図	SI66・68	139
第33図	SI25 (1)	98	第75図	SI66	140
第34図	SI25 (2)	99	第76図	SI68	141
第35図	SI26	100	第77図	SI67	142
第36図	SI27	101	第78図	SI69	143
第37図	SI28	102	第79図	SK101・02	144
第38図	SI29・30	103	第80図	SK103・04	145
第39図	SI29	104	第81図	SK105	146
第40図	SI30	105	第82図	SK106・07	147
第41図	SI31・58	106	第83図	SK01・03～06・08	148
第42図	SI31	107	第84図	SK09・10・12・14・15	149

第85区	SK16 ~ 21	150	第130区	遺構内土器29	207
第86区	SK22 ~ 25・27	151	第131区	遺構内土器30	208
第87区	SK28 ~ 30・32 ~ 34	152	第132区	遺構内土器31	209
第88区	SK36・37・40 ~ 43	153	第133区	遺構内土器32	210
第89区	SK44・45	154	第134区	遺構内土器33	211
第90区	SKF01 ~ 04	155	第135区	遺構内土器34	212
第91区	SKF05 ~ 07	156	第136区	遺構内土器35	213
第92区	SKF08 ~ 11	157	第137区	遺構内土器36	214
第93区	SKT01 ~ 04	158	第138区	遺構内土器37	215
第94区	SKT05 ~ 08	159	第139区	遺構内土器38	216
第95区	SKT09 ~ 11	160	第140区	遺構内土器39	217
第96区	SL01 ~ 07	161	第141区	遺構内土器40	218
第97区	SL08・09・11・12・15・16・18	162	第142区	遺構内土器41	219
第98区	SX01・02・04	163	第143区	遺構内土器42	220
第99区	柱穴区	164	第144区	遺構内土器43	221
第100区	捨て場 (C区遺物包含層) (1)	165	第145区	遺構内土器44	222
第101区	捨て場 (C区遺物包含層) (2)	166	第146区	遺構外土器1	223
第102区	遺構内土器1	179	第147区	遺構外土器2	224
第103区	遺構内土器2	180	第148区	遺構外土器3	225
第104区	遺構内土器3	181	第149区	遺構外土器4	226
第105区	遺構内土器4	182	第150区	遺構外土器5	227
第106区	遺構内土器5	183	第151区	遺構外土器6	228
第107区	遺構内土器6	184	第152区	遺構外土器7	229
第108区	遺構内土器7	185	第153区	遺構外土器8	230
第109区	遺構内土器8	186	第154区	遺構外土器9	231
第110区	遺構内土器9	187	第155区	遺構外土器10	232
第111区	遺構内土器10	188	第156区	遺構外土器11	233
第112区	遺構内土器11	189	第157区	遺構外土器12	234
第113区	遺構内土器12	190	第158区	遺構外土器13	235
第114区	遺構内土器13	191	第159区	遺構外土器14	236
第115区	遺構内土器14	192	第160区	遺構外土器15	237
第116区	遺構内土器15	193	第161区	遺構外土器16	238
第117区	遺構内土器16	194	第162区	遺構外土器17	239
第118区	遺構内土器17	195	第163区	遺構外土器18	240
第119区	遺構内土器18	196	第164区	遺構外土器19	241
第120区	遺構内土器19	197	第165区	遺構外土器20	242
第121区	遺構内土器20	198	第166区	遺構外土器21	243
第122区	遺構内土器21	199	第167区	遺構外土器22	244
第123区	遺構内土器22	200	第168区	遺構外土器23	245
第124区	遺構内土器23	201	第169区	遺構外土器24	246
第125区	遺構内土器24	202	第170区	遺構外土器25	247
第126区	遺構内土器25	203	第171区	遺構外土器26	248
第127区	遺構内土器26	204	第172区	遺構外土器27	249
第128区	遺構内土器27	205	第173区	遺構外土器28	250
第129区	遺構内土器28	206	第174区	遺構内土製品1	251

第175図	遺構内土製品 2	252	第204図	遺構内礫石器15	281
第176図	遺構内土製品 3	253	第205図	遺構内礫石器16	282
第177図	遺構外土製品 1	254	第206図	遺構内礫石器17	283
第178図	遺構外土製品 2	255	第207図	遺構内礫石器18	284
第179図	遺構外土製品 3、陶磁器	256	第208図	遺構内礫石器19	285
第180図	遺構内剥片石器 1	257	第209図	遺構内礫石器20	286
第181図	遺構内剥片石器 2	258	第210図	遺構内礫石器21	287
第182図	遺構内剥片石器 3	259	第211図	遺構内礫石器22	288
第183図	遺構内剥片石器 4	260	第212図	遺構内礫石器23	289
第184図	遺構内剥片石器 5	261	第213図	遺構外礫石器 1	290
第185図	遺構外剥片石器 1	262	第214図	遺構外礫石器 2	291
第186図	遺構外剥片石器 2	263	第215図	遺構外礫石器 3	292
第187図	遺構外剥片石器 3	264	第216図	遺構外礫石器 4	293
第188図	遺構外剥片石器 4	265	第217図	遺構外礫石器 5	294
第189図	遺構外剥片石器 5	266	第218図	遺構外礫石器 6	295
第190図	遺構内礫石器 1	267	第219図	遺構外礫石器 7	296
第191図	遺構内礫石器 2	268	第220図	遺構外礫石器 8	297
第192図	遺構内礫石器 3	269	第221図	遺構外礫石器 9	298
第193図	遺構内礫石器 4	270	第222図	遺構外礫石器10	299
第194図	遺構内礫石器 5	271	第223図	遺構外礫石器11	300
第195図	遺構内礫石器 6	272	第224図	遺構外礫石器12	301
第196図	遺構内礫石器 7	273	第225図	遺構外礫石器13	302
第197図	遺構内礫石器 8	274	第226図	遺構外礫石器14	303
第198図	遺構内礫石器 9	275	第227図	遺構外礫石器15	304
第199図	遺構内礫石器10	276	第228図	遺構外礫石器16	305
第200図	遺構内礫石器11	277	第229図	遺構内石製品 1	306
第201図	遺構内礫石器12	278	第230図	遺構内石製品 2、遺構外石製品 1	307
第202図	遺構内礫石器13	279	第231図	遺構外石製品 2	308
第203図	遺構内礫石器14	280	第232図	遺物出土傾向図	372

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	7
-----	---------	---

I 発掘調査に至る経過

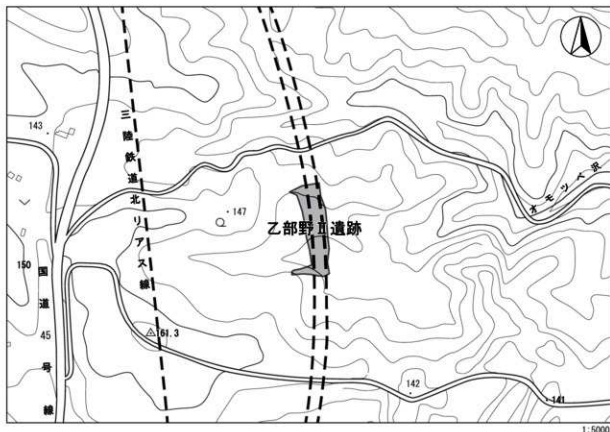
乙部野Ⅱ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(宮古～田老)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復刻に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年4月9日付け国東整陸一調第4号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成26年4月21日～23日にわたり試掘調査を行い、平成26年5月26日付け教生第369号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成27年4月10日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



II 遺跡の概要

1 遺跡の位置

乙部野II遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東には太平洋、西には北上山地を擁する。平成17年6月6日に田老町、新里村と新設合併、平成22年1月1日に西に隣接していた川井村を編入合併し新製の宮古市となった。現在の面積は1,259.15km²、人口は56,436人（平成28年2月1日現在）である。隣接する自治体は北に下閉伊郡岩泉町、西に盛岡市、南西に遠野市、花巻市、南に上閉伊郡大槌町、下閉伊郡山田町となった。

本遺跡の所在する田老地区は宮古市北部に位置し、宮古市田老字乙部野83地内に所在する。三陸鉄道北リアス線田老駅の北北東約3.5kmに、真崎海岸からの直線距離は約3kmである。調査区中央における緯度・経度は、北緯39度45分44秒、東経141度58分12秒である。国土地理院発行の5万分の1地形図「田老」及び、2万5千分の1地形図「田老鉱山」の図幅に属する。

2 地理的環境

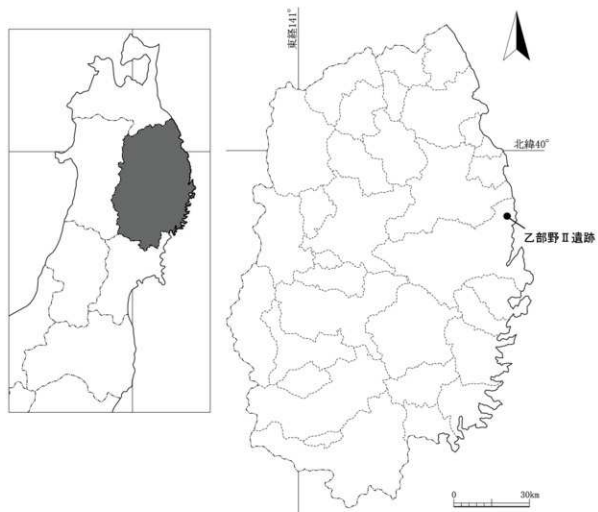
本遺跡の所在する田老地区の地形分類図を第2図に示した。地形の大勢として西側が高く、東側に向かって低くなる。図幅内では、大きく捉えれば山地・丘陵・台地・低地に区分されるが、海岸線に沿って見られる小本丘陵（第2図の丘陵地I）は、海岸段丘が開析されて形成されたもので、段丘面も残存することで、本来は台地として扱うべき地形のようである。

この小本丘陵は、西側の山地（第2図の中起伏山地）とは、海岸線にほぼ平行して走る高度不連続線を持って境とし、北は岩泉、南は宮古市までの南北に延びて分布する。そして、東端では比高約100mの海食崖が形成されている。丘陵頂部にかなり広い段丘面を残存するが、全体的には保存状態が悪く、大半は失われている。従って、古生界や、中生界の堆積岩、花崗岩類からなる基盤岩の露出地帯となっている。ここで本地域の段丘区分に触れると、段丘面高度180～240mが拱待段丘、同100～160mを田老段丘、同70～90mを古里段丘に分類されており、各段丘面高度は南方方向に向かい低下する傾向が指摘されている。遺跡周辺は、田老段丘に相当するが、一段低い古里段丘との区分は明瞭ではなく、従って一括して上位段丘とされる（第2図では丘陵地Iに包括されている）。

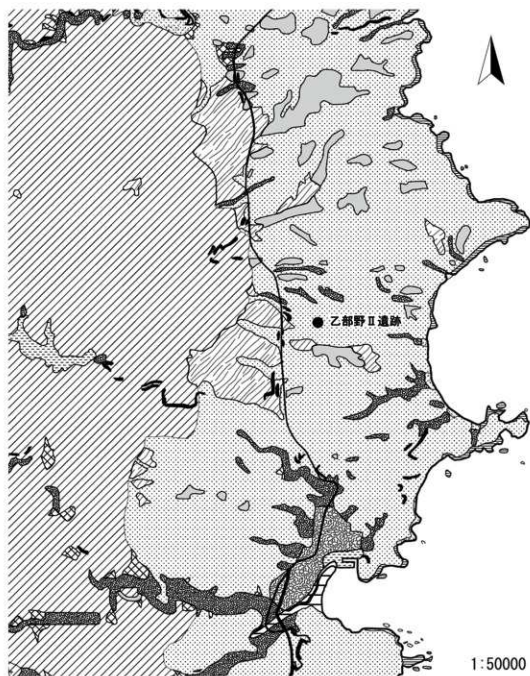
本遺跡の周辺は、谷と丘陵が入り組んだ地形で、北は東流して太平洋に注ぐオモツベ沢と接する。調査地は西から東へ延びる尾根の緩やかな南向き斜面に立地している。尾根は北で東流するオモツベ沢と南で調査区に接する沢に挟まれ、南側のゆるやかな傾斜に対して北側は急傾斜となる。調査地の標高は126～139mである。

3 周辺の遺跡

昭和36年から昭和49年にかけて行われた分布調査の成果に基づいて、田老地区では平成18年度時点で63箇所の遺跡が所在していた。その後、平成18年から行われた宮古市教育委員会による分布調査や、三陸沿岸道路建設に伴う試掘調査によって遺跡の新規発見や統合・範囲変更が行われた。平成27年度の岩手県遺跡情報検索システムによると、田老地区の遺跡は81箇所である。



第1図 岩手県図・遺跡の位置図



第2図 地形分類図

第3図には本遺跡を中心に図框中の範囲に分布する遺跡を図示した。

田老地区においては、近年まで開発等に伴う大規模な発掘調査が行われた事例が少なく、内容が明らかになっている遺跡が少なかった。その中で比較的大規模な調査事例として、昭和56年度に行われた田老大規模年金保養基地（現在のグリーンピア三陸みやこ）建設に伴う発掘調査がある。この調査では縄文時代早期～前期の土器、石器が出土しているものの、これに伴う遺構は確認されていない。なお、この発掘調査の成果は『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』（岩手埋文：1983）として刊行されているが、現在はそのような名前が岩手県遺跡台帳に記載されている遺跡はない。報告書に記載された遺跡の位置と現在の遺跡分布図を照合すると、向新田Ⅹ遺跡付近と思われる。

平成23年から平成25年にかけて、宮古市教育委員会による椗内Ⅰ遺跡の発掘調査が行われた。椗内Ⅰ遺跡は平成18年の分布調査により椗内里遺跡と椗内沖遺跡が統合された遺跡である。平成23年に2次・3次・4次調査、平成24年に5次調査、平成25年に6次調査が行われた。通年の調査で縄文時代中期の竪穴住居跡と遺物（おおよそ大木8a式～10式）が出土した。

近年では、三陸沿岸道路建設に伴う緊急発掘調査として、乙部遺跡（平成25・27年度）、青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（平成26年度）、向新田Ⅲ遺跡（平成26年度）、平成27年度には越田松長根Ⅰ遺跡、重津部Ⅰ遺跡、乙部野Ⅱ遺跡の発掘調査が相次いで実施された。これらの調査では、主に縄文時代前期～後期の土器、石器が出土した。

乙部遺跡は、縄文前期前葉大木2a式を主体とした遺跡で、岩手県教育委員会による平成27年度の調査では竪穴住居跡などの遺構に加え、比較的多くの遺物も出土している。遺構の上部には十和田中撤テフラ（To-Cu）も認められている。

青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は、青野滝川の北岸の丘陵（海岸段丘）が同川により浸食され形成された谷地形に立地する。3遺跡合せて8,500㎡が調査され、縄文中期後葉～末葉の竪穴住居跡が18棟検出（※Ⅰが15棟、Ⅱが1棟、Ⅲが2棟）された。加えて、早期中葉や後期初頭～前葉の土器も出土している。

向新田Ⅲ遺跡は、縄文前期前葉4棟と縄文晩期末葉～弥生前期11棟の竪穴住居跡などが検出されている。出土土器は、縄文早期後半、縄文中期の円筒上層式をはじめ、比較的多岐に亘る。

越田松長根Ⅰ遺跡は、縄文前期前葉の竪穴住居跡25棟をはじめ縄文中期～後期の捨て場が検出されている。土器は、縄文前期初頭～前葉や中期後葉～後期初頭を中心に、早期前葉の押型文や弥生中期、奈良時代の土師器なども出土している。特記事項としては、縄文前期前葉の組縄縄文（俗称ビッチリ縄文）を施文する土器が一定量以上出土している点が挙げられる。

重津部Ⅰ遺跡は、縄文前期前葉の大型住居などが検出されている。土器は縄文前期初頭～後期初頭及び弥生土器や平安時代の土師器が出土している。

最後に、東日本大震災復興道路建設に関連して近年実施された発掘調査により、田老地区には新発見を発信する遺跡事例が相次いだ。特に、縄文前期前葉、縄文中期後葉～後期前葉、弥生前期においては、複数遺跡から竪穴住居跡が検出されており、上記時期において小本丘陵を舞台とする本地域全体的に、人的活動が展開されたことが明らかになった。特記事項の一つである弥生時代に触れるなら、過去に行われた田老地区の分布調査で水沢Ⅰ遺跡と向新田ⅩⅤ遺跡から弥生土器の破片は採取されていたが、集落跡が確認された事例は小堀内Ⅰ遺跡の調査に先立って行われた昭和54年の試掘調査のみの状況であった。向新田Ⅲ遺跡や乙部野Ⅱ遺跡からまとまった資料を得られたことは、当地域における弥生時代の様相を解明する手掛かりに繋がると評価される。



第3図 周辺の遺跡図

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代	出土遺構・遺物	参考文献
1	乙部野目	集落跡	縄文・弥生		
2	新田I	散布地	縄文	縄文土器	3
3	滝の沢I	散布地	縄文		3
4	乙部野目I	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)、石鏡、石鏡、石斧	3
5	越田長巻I	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、石斧	9
6	貞崎	散布地	縄文	縄文土器(晩期)、石鏡、石斧、木炭	4
7	高田	集落跡	縄文・古代	縄文土器、土師器	4
8	青砂里I	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	4
9	三平塚	城郭跡(?)	中世	三重空堀(?)	4
10	赤山山	散布地・城郭跡(?)	縄文・中世	縄文土器(前期)、石器、土葬、平埴(?)	4
11	田老町寺山	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、半磨製石、斧、石斧、石鏡、アザリ貝、イボニシ貝	4
12	龍	散布地	縄文	縄文土器	4
13	八幡大神I	散布地	古代以降	鉄鏡	4
14	神田南	散布地	縄文	縄文(中期) 大型かめ、石鏡、石斧、石皿、板状石、石斧	4
15	神田北	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後期)、石鏡、石鏡	4
16	越田I	生産遺跡	古代・中世	炭釜	4
17	重津部I	散布地	縄文	縄文土器(中・後・晩期)、石器	10
18	青野塚I	キャンプ地	縄文	土器、小輪渡平又は蛇王洞土、実器器、未完成品、フレーク	3
19	青野塚II	集落跡	縄文	縄文土器(中期)	3
20	青野塚III	集落跡	縄文	縄文土器(前期)	3
21	物見峠I	散布地	縄文	縄文土器(前期)	3
22	物見峠II	散布地	縄文	縄文土器(中期)、石斧、フレーク	3
23	物見峠III	散布地	縄文	縄文土器(前期)	3
24	青野塚北I	集落跡	縄文	縄文土器、石器	7
25	青野塚北II	集落跡	縄文	土坑、縄文土器	7
26	青野塚北III	集落跡	縄文	竈穴住居跡、土坑跡、縄文土器	7
27	乙部	散布地	縄文	縄文土器(中期)	8
28	小堀内南I	散布地	縄文	縄文土器、埴輪	3
29	小堀内	散布地	縄文	縄文土器(前期)	3
30	向新田I	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期) 川筒器及び(織師土器・縄文(中・後期)土器)	3
31	向新田II	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)	3
32	向新田III	集落跡	縄文・弥生	縄文土器(中期)、弥生土器、石鏡	6
33	向新田IV	散布地	縄文	縄文土器(中期)	3
34	向新田IX	散布地	縄文	縄文土器(中・晩期)、石鏡	3
35	向新田X	散布地	縄文	縄文土器(前期)	3
36	向新田XI	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)、アザリ石、石斧、フレーク	3
37	向新田XII	集落跡	縄文・弥生	縄文土器(前期)、弥生土器	3
38	向新田XIII	散布地	縄文	縄文土器	3
39	向新田XIV	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)、弥生土器、フレーク	3
40	向新田XV	散布地	縄文	縄文土器(早期)	3
41	向新田XVIII	散布地	縄文	縄文土器(早期)	4
42	向新田XIX	散布地	縄文	縄文土器、石器	3
43	水尻I	散布地	縄文・弥生	縄文土器(早・前・中・後期)、弥生土器、アザリ石、石斧	3
44	龍の塚	城郭跡(伝)・散布地	縄文	縄文土器、石器	3
45	浜崎	散布地	縄文	縄文(中期) 厚手土器、石鏡、石斧	3
46	明神塚	散布地	弥生	弥生土器	1
47	外川目I	集落跡	縄文	縄文土器(前期)、石器	1
48	外川目II	散布地	縄文	縄文土器	1
49	豊岡I	散布地	縄文・弥生	縄文土器(前期)、弥生土器	1
50	豊岡II	散布地	縄文	縄文土器(前期)	1
51	豊岡III	散布地	縄文	縄文土器(中～後期)	1
52	豊岡IV	散布地	縄文	縄文土器(前期)	1
53	豊岡V	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安	縄文土器(早～後期)、土師器、弥生土器、石鏡	1
54	豊岡VI	散布地	縄文	縄文土器	1
55	豊岡VII	散布地	縄文	縄文土器(前期)	1
56	豊岡VIII	散布地	縄文	縄文土器(前期)	1
57	豊岡IX	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	縄文土器(前期)、弥生土器、土師器、石鏡	1
58	豊岡X	散布地	縄文	縄文土器(前期)、石器	1
59	豊岡XI	散布地	縄文	縄文土器(前期)	1
60	小成	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	縄文土器(前期)、弥生土器、土師器、石鏡	1
61	茂崎太平I	散布地	縄文	縄文土器	1
62	茂崎太平II	散布地	縄文・弥生	縄文土器(前・後期)、弥生土器	1
63	茂崎上野	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器(前～中・晩期)	1
64	茂崎日塚	日塚	縄文	縄文土器(早～晩期)、土偶、石椁	2
65	小成II	集落跡	縄文	縄文土器(早～晩期)、石鏡、ミニチュア土器	5

<参考文献>

1. 岩泉町教育委員会 1992 『岩泉町内遺跡分布調査報告書Ⅱ(小・水・有沢地区)』 岩泉町文化財調査報告書第24集
2. 岩泉町教育委員会 1995 『茂崎日塚一年成6年度発掘調査概報』 岩泉町文化財調査報告書第29集
3. 宮古市教育委員会 2010 『宮古市遺跡分布調査報告書6』 宮古市埋蔵文化財調査報告書77
4. 宮古市教育委員会 2011 『宮古市遺跡分布調査報告書7』 宮古市埋蔵文化財調査報告書78
5. (公財) 若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015 『小成II遺跡発掘調査報告書』 若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第644集
6. (公財) 若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016 『向新田II遺跡発掘調査報告書』 若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第657集
7. (公財) 若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016 『青野塚I・II・III遺跡発掘調査報告書』 若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第658集
8. (公財) 若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2017 『平成28年度発掘調査概報』 若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集
9. (公財) 若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2017 『越田長巻I遺跡発掘調査報告書』 若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第666集
10. (公財) 若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2017 『重津部I遺跡発掘調査報告書』 若手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第664集

Ⅲ 調査の概要

1 野外調査

調査地は、南北約140m、東西約60mにわたり、面積は4,494㎡である。現況は山林である。

調査地内各地点は、大・小メッシュグリッドを設定して呼称した(第4図)。世界測地系の基準点測量成果により、調査区北西のX=-25708m、Y=97312mを原点とし、原点を通る座標正南北線(Y軸)をⅠ～Ⅶに、同東西線(X軸)をA～Dに20m間隔で大グリッドを設定した。さらに大グリッドを4m間隔で区画した小グリッドを設定した。小グリッドは、a～yと命名した(第4図参照)。グリッドの表記に際してはⅠAaグリッドなどとなる。

調査開始と共に草木などの雑物撤去を行い、続いて各所に試掘トレンチを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その結果、遺跡の基本層序はⅠ～Ⅴ層に分層可能と判断され、そのうち、遺物を主に包含するのはⅠ・Ⅱ層であることを把握でき、またⅡ層は出土する遺物の時期から更なる分層を行った。

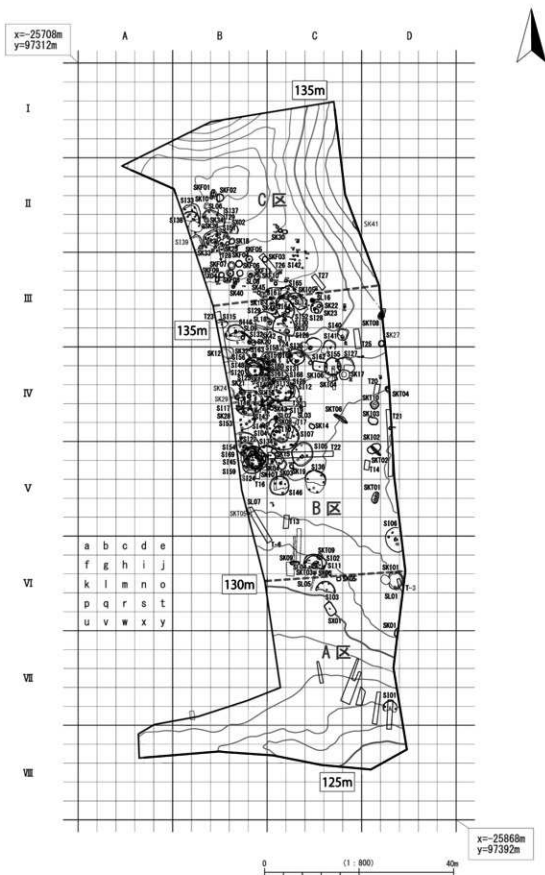
遺構の平面図作成は、CUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行った。遺構および地層断面図の作成は、オートレベルを用いた手測りで行った。これらの測量の基準点は、前述の世界測地系基準点である。現場の写真撮影については、キャノンEOS50D(デジタルカメラ)を中心に使用した。

2 室内整理

本書の原稿執筆と各種表作成は、Ⅰ章を三陸国道事務所が、Ⅱ章星、Ⅲ章松政、Ⅳ章松政・北村・佐々木・森・星、Ⅴ章松政・星・金子・菊池、Ⅶ章星・松政が、それぞれ分筆し、全体の編集・校正は松政・星が行った。

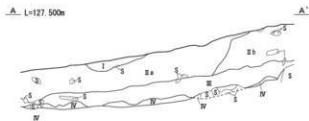
遺構関係は、遺構図版は電子平板のデータを整理・修正した第2原図を作成し、現場で人力により図化した断面図と合わせてデジタルトレースして編集・構成した。遺構図版の縮尺は、1/50を原則とし、遺構の規模に応じた縮尺を採用している。遺構写真図版はIllustratorCS6を使用し、作成・編集した。

遺物の整理について、水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。遺物の選択基準は、土器・土製品は遺構内出土を優先し、遺構外は口縁部資料や文様特徴が明確なものを優先した。仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。石器類は全てに仮番号を付し登録した後、加工痕や使用痕が明瞭なものを掲載物として選択した。遺物図版は、手実測・トレースしたものと外注委託によって図化したものの、2種類がある。掲載縮尺は、土器類1/3、土製品1/2、剥片石器2/3、礫石器・石製品1/3を原則とし、遺物の大きさに応じた縮尺を適宜採用している。遺物写真図版は、本文や遺物図版と同様の掲載順とした。

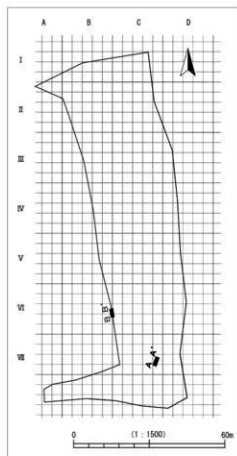
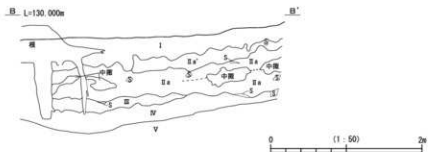


第4図 グリッド・遺構配置図

基本層序①



基本層序②



第7圖 基本層序

IV 検出遺構

今回の調査では、竪穴住居跡(SI)61棟、竪穴状遺構(SKI)7基、土坑(SK)36基、プラスチック状土坑(SKF)11基、陥し穴(SKT)11基、焼土遺構(SL)14基、不明遺構(SX)3基、柱穴117個、捨て場1カ所を検出した。

遺構の帰属時期は縄文時代前期前葉、縄文時代後期初頭～前葉、弥生時代前期の3つに概ね大別される。従って、時期不明としたものや縄文時代とのみ記載した遺構の時期についても、上述の時期に帰属されるものと推定される。

なお野外調査時当初に命名した遺構の中で、精査途中に遺構登録を抹消したものがある。以下のものである。

SI・・・SI08・09・14・18・21・22・47・50

SK・・・SK02・07・11・13・26・31・35・38・39

SL・・・SL10・13・14・17

SX・・・SX03

1 基本層序

本調査区の基本的な層序は第7図に掲載した土層断面のとおりである。

I層は現表土で、南の谷側は堆積が厚く北の尾根上は堆積が薄い。尾根上は色調が黒色シルトではなく暗褐色であった。

II層は暗褐色を呈し、中位に十和田中礫火山灰を挟んで、上位・下位に分かれる。中礫火山灰は層状ではなく、ブロック状の塊がまばらに散見されるが、調査区中央から谷までの間で部分的に確認することができる。調査区北側の尾根上付近では、十和田中礫火山灰が検出されないことから、II層は上下に分層できない(分かれなとも云えよう)。

III層は南の谷側に堆積する黒褐色のシルト層で、谷から調査区中央の平坦面に向かう斜面で堆積が途絶える。

V層は地山層であり、IV層は地山層とIII層(部分的にII層)との漸移層である。

以下には各層について詳述する。

I層は現表土として一括したが、雑物が入り赤味のある上部と黒味が強く雑物の少ない下部に分けられ、明瞭なところでは下部をI層下部として分層している。I層下部からは弥生時代の遺物が出土しており、実際は弥生時代の遺構検出面であった可能性があるが、重機による表土掘削では平面に遺構を確認できないことから、調査区のほとんどはII層上面まで下げて遺構検出をおこなった。

II層は上位が縄文時代後期の遺物包含層、中位～下位が縄文時代前期の遺物包含層である。II層上面で弥生時代の遺構および縄文時代後期の遺構を検出している。さらに調査区南側では傾斜が急になる東端でIIa層とIII層の間に、谷部へ向けて徐々に厚く堆積する褐色の層があり、これをIIb層とした。縄文時代後期の土器が数点出土している。また調査区中央ではIIa層上位と中礫火山灰の入るIIa層中位の間に焼土粒や炭化物が多量に混入する褐色の層と、その下に黒色の層を確認し、前者をIIa(褐色)層、後者をIIa(黒色)層と細分した。この2層は調査区中央の真ん中あたりから西側の平坦な部分に対応するように検出しており、西側の調査区外にも続くようである。どちらからも遺物

が出土し、特にⅡa(褐色)層は縄文時代後期と前期の土器を多く包含していた。

Ⅲ層は無遺物層である。調査時は旧沢跡と想定していたが、珪藻分析ではⅢ層から湿潤環境を示す結果は得られなかった。

Ⅳ層は上面が縄文時代の遺構検出面である

2 竪穴住居跡 (S1)

SI01 (第8図、写真図版4)

〔位置〕 A区東側のVII D q グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 Ⅱa層中で炭化物を含んだ黒色シルトの円形気味プランとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 南側は斜面で削平されているため全体の形状は不明であるが、残存部からの連続性で推定すると円形基調と判断される。規模は東西方向で3m、南北方向は2.5m以上を測る。

〔埋土〕 黒色シルトを主体とし、壁際に小礫を少量含んだ黒褐色シルトが三角形に堆積している。

〔壁・床の状況〕 壁は、残存する北壁や西壁では床面から直線的に外傾しながら立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔炉〕 住居のほぼ中央に炭化物を少量含む赤褐色の焼土を検出した。焼土の周りに炉石はなく、炉石の抜き取り痕も確認できなかったため、地床炉と捉えた。

〔付属施設〕 2個の柱穴を検出した。埋土はPit 1・2ともに炭化物を少量含む、黒色シルトを主体とする。床面からの深さは最大で51cmである。

〔遺物出土状況〕 土器1, 118, 8g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第102・180図、写真図版93・159) 土器(No.1~7)、石器(No.2001)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭~前葉に帰属する。

SI02 (第9図、写真図版5)

〔位置〕 B区南側のVIC h グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 Ⅱa~Ⅳ層上面で暗褐色土の半円形の広がりとして確認した。B区は東西の中央に向かって地形が高まり、表土から基本土層V層の地山までの堆積が薄い。SI02の北東側は表土を掘り下げた段階でややⅣ層上面が見えていた。遺構の南側は斜面の崩落による削平で床面および壁の立ち上がりは確認できなかった。

〔重複〕 SKT03→SKT09→SI11→SI02、SL04→SI02。

〔規模〕 残存する部分の最大幅は4.5mで、楕円形またはやや隅丸方形を呈する。

〔埋土〕 2層に分層した。斜面上の北東側はⅣ層上面を掘り込み、その他はⅡa層を掘り込んで、Ⅱa~Ⅳ層上面を床面にしている。確認できた埋土は斜面上が暗褐色シルトを主体とし、炉から南側は黒褐色シルトで埋没している。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大11cmである。床面はやや斜面にそって南側に緩やかに傾斜し、壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕 残存する床面中央のやや東寄りに燃焼面とそれを囲む石組みを検出した。炉石は燃焼部を囲むもののまばらに配列され、炉石の掘り方が認め難く床面に対してやや沈む程度で設置されている。石囲炉と判断されるが、当地域の縄文中期の石囲炉と比較して、精巧とは言えない作りである。燃焼部

の焼土は厚さ5cm程に発達する。

〔付属施設〕4個の柱穴を検出した。柱穴の埋土はどれも単層で暗褐色シルトを主体とし炭化物を少量含む。床面からの深さは最大48cmである。

〔遺物出土状況〕土器734.4g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第102図、写真図版93)土器(No.8・9)を掲載した。

〔時代・時期〕時期は特定できないが、状況から縄文後期と推定される。

SI03 (第10図、写真図版6)

〔位置〕A区北側のVICmグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕表土を除去した段階のIIa層中で暗褐色の半円形のプランを確認した。現況は北から南に下る斜面地である。遺構プランの南側は認め難く、あるいは既に消失していた可能性もある。

〔重複〕なし。

〔規模〕残存する部分の最大幅は4.1mであり、形状は円形基調である。

〔埋土〕2層に分層した。埋土は暗褐色シルトを主体とする。南側は1、2層にわたって攪乱で切られていた。

〔壁・床の状況〕IIa層の中位(To-Cuが部分的に含まれる)を掘り込み、IIa層の下位を床面に構築されている。壁は直立気味に立ち上がる。検出面から床面までの深さは最大36cmである。床面は、床下のIIa層下位と埋土2層が類似し、区分別が困難であったが、若干の硬化面と炉の高さから床面と把握した。床面は斜面に沿って緩やかに傾斜している。

〔炉〕遺構内の中央南側に燃焼面を1つ確認した。燃焼面の上部は埋土からの攪乱で削平されていた。残存する燃焼部の焼土層は深いところで13cm程である。燃焼面の北側に床面からやや沈む程度の石を1点検出し、石の左右には抜き取り痕と思われる窪みを2つ確認したため石囲炉の可能性もある。

〔付属施設〕柱穴を4個検出した。柱穴の埋土はすべて単層で暗褐色シルトを主体とする。最も深いPit 1は床面からの深さ22cmを測る。

〔遺物出土状況〕土器1,034.5g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第102・174・180・190図、写真図版93・154・159・165)土器(No.10～16)、土製品(No.1201)、石器(No.2002・2201)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SI04 (第11図、写真図版7)

〔位置〕IVBxグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕I層の表土層を重機掘削した際に石囲炉と思われる炉石の一部が露出したため、その周辺が住居跡と判断した。その後の検出作業でIIa層上面にてIIa層よりも暗い暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

〔重複〕SKI07→SI4→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕東西方向5.0m以上、南北方向4.8mの楕円形基調にある。

〔埋土〕本遺構の埋土はIIa層に似た暗褐色シルトで、IIa層よりもやや暗い特徴があり、壁や床面との識別が困難である。ただ、土器や礫が周辺と比較して出土量が多いことも、埋土とした判断根拠である。また本遺構では、床面中央から北西側の調査区境付近の埋土内から炭化物と焼土ブロックが集中している箇所(焼土1～焼土3)が見られた。炭化物は残存状態がよく、焼土も一部硬化してい

るものも見受けられた。廃棄されたものと考えられ、本遺構埋土は人為堆積の可能性がある。

〔壁・床の状況〕壁面は僅かで、埋土よりもやや明るい壁面がやや外傾しながら床面から開口部に向けて立ち上がる。壁高は最大で17cmを測る。床面は概ね平坦である。

〔炉〕床面中央から南西側に寄った位置に石囲炉、北東側に寄った位置に地床炉が設置されている。この2つの炉は、住居の主軸上（北東-南西方向）に位置している。石囲炉は87×74cmの円形を呈し、炉内に生成された焼土の厚さは10cm弱である。赤変はしているが、顕著な硬化は見られなかった。地床炉は40×39cmの円形を呈し、焼土の厚さは3～4cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitを2個検出した。床面中央から北側と北東側に位置し、床面よりやや暗い暗褐色シルトの円形のプランが確認できた。埋土には黄褐色シルトが塊状に入っていたため、Pitは人為堆積と想定される。Pit 1は深さ31cm、Pit 2は25cmを測る。

〔遺物出土状況〕土器9,463.6g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第102・103・180・190・229図、写真図版93・159・165・184)土器(No.17～29)、石器(No.2003・2202)、石製品(No.2501)を掲載した。

〔時代・時期〕縄文時代後期と推定される。

S105 (第12図、写真図版8)

〔位置〕V C b グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕IV層上面にて炭化物粒を含む、暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出し、住居跡の存在が推定された。その後、石囲炉の検出などから認知した。

〔重複〕なし。

〔規模〕5.12×4.60mのやや歪な楕円形を呈する。

〔埋土〕2層に分類した。埋土の主体はII a層相当の暗褐色シルト層である。

〔壁・床の状況〕壁は残存状態が良い北西壁などの状況から、床面から検出面に向けてやや外傾しながら緩やかに立ち上がる。壁高は最大18cmである。床面はほぼ平坦である。

〔炉〕石囲炉1つと地床炉が2つ設置されている。石囲炉は床面中央からやや南側に位置している。規模は80×60cmで炉石はやや楕円形に配されている。一部炉石間が空いている箇所が見られたが抜き取り跡等は確認できなかったため、もともと炉石は設置されていなかったと捉えた。炉内の焼土被熱層の厚さは5～6cmである。地床炉1は石囲炉の南西側、石囲炉とともに住居の主軸（北東-南西軸）上に位置している。規模は88×68cmの楕円形で、被熱層の厚さは6～7cmである。地床炉2は床面中央より北側の壁際に位置している。規模は50cm×48cmの不整形で、被熱層の厚さは3～4cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitを2個検出した。住居中心からほぼ対角線状に位置する。埋土は暗褐色シルトの単層で、地山相当の黄褐色シルトが塊状に入るため人為堆積と推定される。床面からの深さはPit 1が45cm、Pit 2は48cmである。

〔遺物出土状況〕土器3,836.5g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第103・174・190図、写真図版93・94・154)土器(No.30～40)、土製品(No.1202・1203)、石器(No.2203・2204)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

S106 (第13図、写真図版9)

〔位置〕B区東側のV D v グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕表土除去後に炉が直に露出したことで、住居跡と判断した。

〔重複〕なし。

〔規模〕検出の段階でほぼ床面の状態だったことと、プラン東側が調査区外に続くため、全体の形状は不明である。床面と想定されるやや硬化した範囲や、炉と柱穴の位置から推定すると、5 m前後の円形もしくは楕円形と推定される。

〔埋土〕暗褐色シルト主体である。

〔壁・床の状況〕壁は未検出だが、検出状況から元々浅い壁であった可能性も考えられる。床面はほぼ平坦である。

〔炉〕石囲炉と地床炉の2基を検出した。石囲炉は、おおよそ60×50cmの範囲で楕円形気味である。炉石は、全周囲われておらず、北東側と南側が未設置である（開いた状態にある）。地床炉は、76×67cmの楕円形に焼土が発達する。燃焼部では両炉とも良好な焼土層が形成されている。

〔付属施設〕2個の柱穴を検出した。埋土はPit 1・2ともに暗褐色シルトを主体とする。床面からの深さは最大で31cmである。

〔遺物出土状況〕土器193.0 g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第103・191図、写真図版94・165)土器(No.41・42)、石器(No.2205・2206)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI07 (第14・16図、写真図版10)

〔位置〕IVCuグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕重機掘削後に試掘トレンチを入れたところ、トレンチ壁の観察から住居の立ち上がりと思われる箇所が確認された。その後トレンチ周辺をIV層まで下げ、黒褐色シルト～暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出し住居跡と認知した。

〔重複〕SK08≦SI07→SI10。

〔規模〕6.35×5.28mの楕円形を呈する。残存深度は30cmである。

〔埋土〕土層観察用ベルト3本の内、2本(B-B'・C-C'ベルト)はSI10と共通の土層ベルトとし図化・図示した。SI07の埋土は4つに分層した。1・2層を主体とし、レンズ状に堆積している。壁際には3・4層が三角状に堆積しており壁崩落土と推定される。

〔壁・床の状況〕壁は検出面に向けてやや外傾し緩やかに立ち上がる。床面は平坦で、一部硬化している箇所も確認できる。

〔炉〕床面中央より南西側に地床炉が一つ設置されている。規模は100×81cmで、被熱層の厚さは15～16cm、層上面は顕著な硬化が確認できる。炉周辺には風化した花崗岩がいくつか認められることから、本来は石囲炉であった可能性も窺える。また、地床炉の南西側には、長軸132cm、短軸100cm、深さ30cmの円形の窪みが併設されている。これを前庭部と捉えれば、本遺構の炉は広義の複式炉とする解釈も成り立つ。ただ、後期初頭に複式炉が存在するものか躊躇もあり、複式炉とするかどうかは要検討としておきたい。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitが24個検出された。各Pitの詳細は図版に付属する表に記載する。規模と配置より本住居の主柱穴はPit 1・2・4・5・7・19が想定され、これらからは柱痕跡も確認された。主柱の補助的な壁柱穴としては、Pit 3・8・10・15・17・21・22が考えられる。Pit 3は床面に対してやや斜めに掘りこまれており、柱も斜めに設置されていたと推定される。Pitの埋土は全て暗褐色シルトである。また北東壁の屋外に浅く掘られた張り出しが認められる。これは、上端か

ら10cm程度下がったステップ状を呈する。炉や柱穴の配置を勘案すると、住居の出入り口であった可能性が窺える。

〔遺物出土状況〕 土器14,642.0g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第103・104・174・191・229図、写真図版94・154・166・184)土器(No.43～49)、土製品(No.1204)、石器(No.2207～2211)、石製品(No.2502・2504)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SI10 (第15・16図、写真図版11)

〔位置〕 IV C u グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 II a 層上面より黒褐色シルト～暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出し、住居跡と想定された。その後、石囲炉の検出により認知した。

〔重複〕 SI07を切っている。また住居中央から北東側は壁や床面が未検出である。調査では把握出来かねたが、本遺構北東側には別の住居跡が存在した可能性がある。SK08≦SI07→SI10。

〔規模〕 5.57×4.21mのやや歪な楕円形を呈する。残存深度は24cmである。

〔埋土〕 重複関係にあるSI07と共通の土層観察用ベルトを設定して調査を進めた。本遺構は2層に分層した。埋土の主体は1層黒褐色～暗褐色シルトで、SI07の埋土1層より明るい色調であったことで区分した。壁際には地山起源の黄褐色シルト粒を含む褐色シルトが三角状に堆積するため、壁崩落土と捉えられる。

〔壁・床の状況〕 床面は平坦である。壁は残存する部分で観察すると、床面より検出面に向けてやや外傾し緩やかに立ち上がっている。

〔炉〕 石囲炉1つと地床炉が2つ確認されている。石囲炉は床面のほぼ中央に位置している。規模は75×61cmで炉石はやや方形に設置されている。炉内に焼土が確認され、被熱層の厚さは5～6cmである。地床炉1は床面中央より南西側、石囲炉とともに住居の主軸(北西-南東軸)上に位置している。規模は28×21cmの楕円形を呈し、被熱層の厚さは5cmである。地床炉2は床面中央から北西側の壁際に位置している。規模は24×12cmの楕円形を呈し、被熱層の厚さは3～4cmである。

〔付属施設〕 柱穴と思われるPitを1個検出した。埋土は黒褐色シルト層で、塊状の褐色シルトが少量入る。床面からの深さは15cmである。

〔遺物出土状況〕 土器22,566.6g 他が出土している。特記事項として、床面直上より土偶片が1点(No.1205)出土している。

〔掲載遺物〕 (第104・105・174・180・192図、写真図版94・95・96・154・159・166)土器22,566.6g 出土し、土器(No.50～79)、土製品(No.1205～1208)、石器(No.2004～2010・2212～2216)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI11 (第17図、写真図版12)

〔位置〕 B区南側、VIC h グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 SI02床面下からII a 層類似の暗褐色シルトを掘り下げたところ焼土を検出し、遺構として認識した。本遺構南側は未検出である。誤って掘り下げ過ぎたことも考えられるが、既に消失していた可能性もある。

〔重複〕 SKT03→SKT09→SI11→SI02。

〔規模〕 残存する部分の最大幅は3.6mであり、形状は円形基調である。

〔埋土〕 2層に分層した。確認できた埋土は暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕 北東側はIV層上面を、他はII a層を掘り込み構築されている。壁は直立気味に立ち上がり、壁高は最大12cmである。床面はII a層～IV層中でほぼ平坦にある。

〔炉〕 遺構中央で焼土を確認し地床炉と判断した。焼土の周縁にはやや床面より沈む程度の石と、炉石の抜き取り痕とおぼしき小穴を検出していた。本来は石囲炉であったと想定される。抜き取り痕は埋土2層で埋没していた。

〔付属施設〕 柱穴を2個検出した。埋土は全て暗褐色シルトを主体とし、床面からの深さは最大51cmである。

〔遺物出土状況〕 土器268.2g他が出土している。特記事項として床面からNo.80が1点出土した。

〔掲載遺物〕 (第106図、写真図版96)土器(No.80・81)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物や重複遺構との関係から縄文後期に帰属する可能性が高い。

SI12 (第18図、写真図版13)

〔位置〕 IV C 1 グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV C 1 グリッド内を掘り下げ途中で、石囲炉と思われる礎の一部を確認し、住居跡の存在が想定された。その後周辺を面的に掘り広げ検出作業を行ったところ、II a層上面にてII a層よりもやや明るい暗褐色シルトによる弧状気味のプランを検出した。

〔重複〕 SI25→SI13≦SI12。

〔規模〕 遺構プランは痕跡的に残存するのみで、全体の形状は不明である。残存部から4m弱の円形を呈すると推定される。

〔埋土〕 II a層由来の暗褐色シルトの単層で炭化物粒が少量入る。

〔壁・床の状況〕 壁は残存する北東側から観察すると、床面より検出面にかけて外傾しながら緩やかに立ち上がる。壁高は最大11cmである。床面は平坦である。

〔炉〕 残存する北東壁から南西約1.9mの位置に石囲炉が設置されている。規模は70×66cmで炉石は円形状に配されている。炉の焼土は28×24cmの楕円形に広がり、被熱層の厚さは6～7cmで発達する。

〔付属施設〕 なし。

〔遺物出土状況〕 土器2,460.4g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第106・174・180・192図、写真図版96・154・159・166)土器(No.82～89)、土製品(No.1209)、石器(No.2011・2217)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物より弥生時代前期に帰属する。

SI13 (第19図、写真図版14)

〔位置〕 IV C f グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 IV C f ～k グリッド内を掘り下げている途中で、石囲炉と思われる礎の一部が確認された。その後周辺を面的に掘り広げ検出を行ったところ、II a層上面にてII a層よりもやや明るい暗褐色シルトの円形気味のプランを検出し、住居跡と認知した。プランは不明瞭な状況であった。

〔重複〕 SI49→SI25→SI13≦SI12。

〔規模〕 床面中央より斜面下方となる南西側は流失していることから、全体の形状は不明である。概ね円形を呈するものと思われる。残存部の規模は4.50×4.22mである。

〔埋土〕 2層に分類した。II a層由来の暗褐色シルトである2層が埋土の主体である。

〔壁・床の状況〕壁は床面より検出面にかけて外傾しながら緩やかに立ち上がる。壁高は最大31cmである。床面は概ね平坦である。

〔炉〕床面中央よりやや南西側に石囲炉が1つ設置されている。規模は70×68cmで、炉石は一部石と石との間隔が空く箇所も見られるが、概ね円形状に配されている。炉内の焼土規模は24×24cmの楕円形に広がり、被熱層の厚さは5～6cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitが5個検出された。各Pitの詳細は、図版に付属する表に記載する。深さや配置より、全て本住居の主柱穴である可能性がある。埋土は住居埋土に似た暗褐色シルト層である。地山起源の黄褐色シルトが塊状に混入することから、人為堆積（埋戻し）であると考えられる。

〔遺物出土状況〕土器12, 178.4g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第106・107・175・180・192図、写真図版96・97・155・159・166・167)土器(№90～108)、土製品(№1210)、石器(№2012～2016・2218～2221)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から弥生時代前期に帰属する。

S115 (第20図、写真図版15)

〔位置〕B区北側の西端、ⅢB r グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕T23の掘削途中で暗褐色土の広がりを確認し、周辺を面的に掘り上げたところIV層を切る不明瞭な半円形の広がりを検出した。また北側は一部で風倒木痕による攪乱層(Ⅱa層とIV層の土からなる)を切っている。遺構周辺は地山までの堆積層が薄く、斜面下となる遺構南側はⅡa層上面の検出段階で削平されていた。

〔重複〕なし。

〔規模〕確認できた部分の最大幅は2.4mで、形状は円形もしくは隅丸方形基調である。

〔埋土〕2層に分層した。確認できた埋土は暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕Ⅱa層～IV層を掘り込み構築されている。壁は垂直気味に立ち上がる。床面は、斜面上はIV層を、斜面下はⅡa層中にある。床面は斜面下に緩やかに傾斜している。

〔炉〕遺構中央のやや南側から焼土を、その北側に炉石と思われる礫を検出した。炉石は床面からやや沈む程度で検出された。直下に掘り方も認められる。状況から石囲炉であった可能性が高い。

〔付属施設〕北側の壁際に柱穴を1個検出した。暗褐色シルトの単層で埋没し、床面からの深さは最大26cmである。

〔遺物出土状況〕土器669.0g 他が出土している。特記事項として土層ベルトで№109と№110が出土した。

〔掲載遺物〕(第107・180図、写真図版97・159)土器(№109～111)、石器(№2017)を掲載した。

〔時代・時期〕時期の特定は難しいが、出土遺物から弥生時代の可能性がある。

S116 (第21・22図、写真図版16・17)

〔位置〕B区北側の西、ⅢB x グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕IV層上面で暗褐色シルトによる北側がやや窄まる半円形(上面視は達磨に似た形状)の広がりとして確認した。斜面下方はプランが不明瞭にあった。遺構中央および南東には木根があり、攪乱を受けている。ベルトを設定しサブレンチを入れた段階で、検出面が異なる石囲炉を2基確認した(新しい方を炉1、古い方を炉2と命名した)。埋土1層下で検出した床面と想定した若干の硬化面と上段で検出した炉1の高さが合うことから、この硬化面を新しい段階の住居床面と認識し、上

段の炉1を伴う住居をSI16新、下段の炉2を伴う住居をSI16古として報告する。

〔重複〕SI32→SI09→SI16。

〔規模〕斜面下方である南側は残存する埋土が薄く、立ち上がりは未確認である。SI16新の最大幅は、残存値からは3.7mで楕円形基調である。SI16古は、最大幅4.1mで上述のとおり違磨形を呈する。

〔埋土〕5層に分層した。1・2層はSI16新の埋土、3～5層はSI16古の埋土と考えられる。SI16新はIV層上面を掘り込みSI16古の埋土を床面とし、黒褐色シルト主体とした埋土である。このSI16新からは、北東側に焼土層と炭化材がまとまって出土した。SI16古は、北側が基本土層IV層、南側がII a層を掘り込み、II a～IV層を床面とし、埋土は暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕検出面から床面の深さはSI16新が最大14cm、SI16古が最大20cmである。床面はSI16新古とも斜面に沿ってやや傾斜し、壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕上述のとおり遺構内の中央で上下に重なる二つの石囲炉を検出した。炉1は石が円形に組まれる。炉2は石がやや方形に組まれ、炉1の下方側となる北側の炉石はなく、抜き取り痕と思われる長楕円形の掘り込みが認められる。燃焼部は厚いところで約7cmにわたり焼土が発達する。炉2は掘り方は浅く、西側の炉石1個は炉1の石組みとして検出したが、炉2の石組みの掘り方で及ぶため、両方の時期に使用されていたものと考えられる（※炉2で設置した炉石を再利用して炉1に用いられている可能性がある）。燃焼部の被熱層は、厚いところで3cm程である。

〔付属施設〕柱穴を6個検出した。Pit 1は褐色シルトで埋没し、床面からの深さは最大30cmである。

〔遺物出土状況〕土器4,179.6g他が出土している。特記事項として床面直上より土器が1点出土している。またSI16新の硬化面直上から残りの良い炭化材を検出し、4点について放射性炭素年代測定の実施している。

〔掲載遺物〕(第107・108・180・193図、写真図版97・98・159・167)土器(No.112～132)、石器(No.2018～2025・2223～2226)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物および放射性炭素年代測定の結果からSI16新は弥生時代に帰属する。年代測定値は4点何れも2,200yrBP前後を示す。SI16古は、出土遺物からSI16新とほぼ同様の時期に帰属すると考えられる。従って、この両者の関係は、最初にSI16古が作られ、その後床面を嵩上げするなどして建て替えた段階がSI16新と判断されよう。

SI17 (第23・24図、写真図版18・19・20)

〔位置〕IVB n・IVB o・IVB s・IVB t グリッド間に位置する。

〔検出状況〕II a層(褐色シルト)上面にて、暗褐色シルトの楕円形のプランとして検出した。

〔重複〕SK29≦SK21≦SL15→SI17、SK28→SI53→SI17、SI43≦SI44≦SI49→SI17。

〔規模〕6.12×5.24mの楕円形を呈し、残存深度は26cmである。

〔埋土〕5層に分類した。3～5層は観察から焼失の痕跡が認められる。5層は床面一帯を覆う黒褐色シルトで、全体に炭化物ブロックや炭化物粒が混入しており、床面直上からは状態の良い炭化材が出土している。5層直上の一部からは3・4層といった赤変した焼土層があり、総じて焼失時の堆積物と考えられる。

〔壁・床の状況〕床面は黄褐色シルト層で概ね平坦である。また一部硬化した箇所も認められる。壁は床面から検出面にかけてやや外傾し、緩やかに立ち上がる。

〔炉〕サブトレンチを入れた際、大きく破損してしまっていたが、竅穴中央で焼土を検出した。周辺からは炉石や抜き取り痕が検出されなかったことから、床面のほぼ中央に位置する地床炉と考えられる。

推定での規模は37×22cmで、被熱層の厚さは5～6cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitが15個検出された。各Pitの平面規模や深度は、図版に付属する表に記載する。規模や配置の関係からPit 1・3・8・10・11は本住居の主柱穴である可能性が高い。

Pit 2以外の埋土は暗褐色シルト～黒褐色シルト層で、炭化物粒が混入している。Pit 2は暗褐色シルトの上位に十和田中敷火山灰層が塊状に堆積していたが、この火山灰塊は降下以降の人為堆積の可能性がある。またPit 3は底面より、底部の欠けた壺が1点出土しており、柱穴とは別の施設であると思われる。埋土がⅡa層由来の暗褐色シルトで、地山起源の黄褐色シルトが塊状に入っていたことから、人為堆積によるものと考えられる。先述した通り、本住居は焼失により廃棄されているということからも、Pit 3が焼失時に埋没したとは考えづらい。Pit 3は住居使用時、または住居構築時に掘られ、人為的に埋められたものである可能性がある。

〔遺物出土状況〕土器28, 608.6g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第108～112・175・180・193～195図、写真図版98～102・154・159・167・168)土器(No.133～169)、土製品(No.1211・1212)、石器(No.2026～2028・2227～2236)を掲載した。

〔時代・時期〕床面直上より採取した木炭3点について放射性炭素年代測定を実施したところ、2,180±20yrBP～2500±20yrBPという結果を得られた。また出土遺物の年代観からみても弥生時代前期に帰属する。

SI19 (第25図、写真図版21)

〔位置〕IV C k・IV C p グリッド間に位置している。

〔検出状況〕IV層上面にて暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

〔重複〕SK43→SI19→SL02、SI19とSI25は新旧不明。

〔規模〕斜面下方になる南側は消失しており、全体の形状は不明であるが、残存部から楕円形を呈するものと思われる。残存部の規模は4.24～3.62mで、残存深度は残りの良い北壁15cmを測る。

〔埋土〕Ⅱa層起源の1層暗褐色シルトによる単層である。一部の壁際には塊状の褐色シルトが混る1層よりやや明るい暗褐色シルトが三角状に堆積しており、壁崩落土と考えられる。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は床面から検出面にむけて、やや外傾しながら緩やかに立ち上がる。

〔炉〕竪穴中央から南側にかなり偏った位置に石囲炉が1つ設置されている。規模は72×68cmで、炉石は円形状に配されている。炉内からは焼土が確認され、焼土の規模は25×24cmの円形を呈し、被熱層の厚さは3cm～4cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitが10個検出された。各Pitの平面規模や深度は、図版に付属する表に記載する。配置の関係から、Pit 1・10は主柱穴、Pit 2～6・8は壁柱穴であると考えられる。埋土は全て暗褐色シルト層である。

〔遺物出土状況〕土器6, 401.2g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第113・181・195図、写真図版102・159・168)土器(No.170～180)、石器(No.2029～2031・2237～2242)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

〔その他〕所見として、石囲炉の検出位置は残存する壁の連続性から推定して南壁際である可能性が考えられる。つまりは複式炉を踏襲した位置にもみてとれる。

SI20 (第26図、写真図版22)

〔位置〕 B区北西側、IV B j グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 I 層下部からII a 層上面において、黒褐色シルトの不明瞭な円形基調の広がりを確認した。検出時は遺構の埋土上層の沈み込みと認識されたが、若干の掘り下げて硬化した燃焼面を検出したことから、ほぼ床面に近い段階であったと捉えられる。南北と西側には木根があり攪乱されていた。

〔重複〕 SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

〔規模〕 残存する部分の最大幅は3.2mである。形状は根による攪乱で不明瞭だが円形もしくは楕円形が想定される。

〔埋土〕 2層に分層した。基本土層II a 層を掘り込み、II a 層を床面している。埋土は黒褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大13cmである。床面の硬化は確認できなかった。床面は斜面に沿ってやや傾斜し、壁は直立気味に外傾して立ち上がる。

〔炉〕 北壁寄りて地床炉を検出した。燃焼部の被熱層は厚いところで7cm程である。

〔付属施設〕 柱穴を3個検出した。Pitはすべて暗褐色シルトを主体とする埋土で埋没し、床面からの深さは最大30cmである。

〔遺物出土状況〕 土器220.4g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第113・181・196図、写真図版103・159・168) 土器(№181～183)、石器(№2032・2243)を掲載した。

〔時代・時期〕 埋土から出土した土器は全て小破片であり詳細な時期は特定が難しい。ただ、遺構同士の重複関係から、弥生時代と特定される。

SI23 (第27・28図、写真図版23・24)

〔位置〕 B区北西側、IV B j グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 II a 層中で黒褐色シルトがまばらに入る暗褐色シルトの円形のプランを確認した。検出段階ではひとまわり大きいSI48が一番新しい遺構と認識し精査していたが、SI48床面で炉は検出されず、その下位にSI48を切るひとまわり小さい円形のプランとそれに伴う炉を検出してSI23を認知するに至った。

〔重複〕 SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。遺構同士の重複関係が激しい状況にあるが、本遺構はSI20に次いで新しい。

〔規模〕 2.78×2.53mの円形基調である。

〔埋土〕 7層に分層した。基本土層のII a 層を掘り込み、V 層を床面している。埋土は暗褐色シルトを主体とする。南側は壁の明瞭な立ち上がりがなく凹凸を持ちながらなだらかに外へ開くため、壁の崩落が想定され、6層は南壁の崩落土と考えられる。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大64cmである。床面は平坦で、壁は床から10cm程垂直気味に立ち上がりその後なだらかに外へ開く。

〔炉〕 堅穴中央に一段掘り下がる円形の窪みを検出し、窪み底面に焼土が認められた。地床炉と捉えたい。焼土は厚いところで3cm程である。補足として、焼土を囲むように複数の溝を検出しており、これらは炉石の掘り方(炉石抜取痕)の可能性も考えられるが、本来石囲炉だったかどうか確定はできない。

〔付属施設〕 柱穴は6個検出した。Pit 1は暗褐色シルトを主体に埋没し、Pit 2～3もPit 1の2

層で埋没している。床面からの深さは最大68cmである。

〔遺物出土状況〕 土器6, 595.2g 他が出土している。特記事項として床面直上より土器が2点出土した(184・185)。184は弥生時代の壺である。

〔掲載遺物〕 (第113・114・181・196図、写真図版103・159・168)土器(No.184～203)、石器(No.2033・2245)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土した遺物から弥生時代に帰属する。

SI24 (第31・32図、写真図版25)

〔位置〕 B区西側、V B e・j グリッドに位置する。

〔検出状況〕 II a層で検出した。グリッド掘りで面的に下げたところ、黄褐色シルトの貼床を検出した。

〔重複〕 SKI07→SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕 ベルト部分でしか上端と下端をおさえることができなかったため、全体の形状は不明だが、炉と柱穴、貼床範囲の位置から推定すると楕円形と推定される。

〔埋土〕 炭化物を少量含む、黒褐色シルト主体である。貼床は黄褐色シルトを主体とし、黒褐色シルト、炭化物少量、焼土を微量含む。

〔壁・床の状況〕 壁は、ベルトで残った部分を見ると緩やかに立ち上がると思われる。床はSI45の埋土直上の窪んだ部分に貼床をして整地したと思われ、ほぼ平坦である。

〔炉〕 地床炉を1基検出した。平面形は46×31cmの楕円形を呈し、燃燒部は暗赤褐色である。

〔付属施設〕 3個の柱穴を検出した。埋土はどれも炭化物を微量含む、黒褐色シルトを主体とする。床面からの深さは最大で34cmである。

〔遺物出土状況〕 土器6, 956.0g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第114・115・175・181・196図、写真図版104・154・159・168)土器(No.204～213)、土製品(No.1213・1214)、石器(No.2034・2246)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI25 (第33・34図、写真図版26)

〔位置〕 I V C f・I V C k・I V C l グリッド間に位置する。

〔検出状況〕 IV層上面にて、暗褐色シルト～褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

〔重複〕 SI68→SI61→SI49→SI25→SI13≦SI12、SI19とSI25は新旧不明。

〔規模〕 5.73×5.10mの楕円形を呈する。床面まで残存深度は最大で40cmである。

〔埋土〕 3層に分類した。埋土の主体はII a層(褐色シルト)由来の褐色シルトである。壁際には地山起源の黄褐色シルトが三角状に堆積しており、壁の崩落土と考えられる。

〔壁・床の状況〕 床面は概ね平坦で、一部硬化した箇所が見受けられる。壁は床面から検出面に向けて外傾しながら緩やかに立ち上がる。

〔炉〕 床面中央よりやや西側に地床炉が1つ設置されている。攪乱により一部を大きく破損しているが、80×66cmの不整形を呈し、被熱層の厚さは6～7cmである。層の上面は顕著な硬化が見られる。

〔付属施設〕 柱穴と思われるPitが11個検出された。各Pitの詳細は、図版に付属する表に記載する。規模や配置よりPit 1・5・6は本住居の主柱穴の可能性が高い。埋土は全て暗褐色のシルト層である。

〔遺物出土状況〕 土器30,980.7g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第116・117・175・181・196・197・229図、写真図版104～106・155・159・160・168・169・184) 土器(№214～246)、土製品(№1215～1219)、石器(№2035～2040・2247～2256)、石製品(№2505)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

S126 (第35図、写真図版27)

〔位置〕 B区中央のⅢCwグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 II a層上面で石囲炉を確認したため、堅穴住居を想定して掘り下げを行ったところ、北側の壁の一部と床面を確認できたため、堅穴住居跡と判断した。

〔重複〕 S126の精査段階ではなし。

〔規模〕 確認できた部分が堅穴住居の一部であるため、詳細な規模は不明である。残存する部分から長辺は5m前後と考えられる。

〔埋土〕 炭化物粒・焼土粒・地山粒を含む黒褐色シルトの単層である。

〔壁・床の状況〕 北側から西側にかけての壁の一部を確認した。確認できた壁は床面から直線的に立ち上がる。床面は南側に緩やかに傾斜しているが、明瞭な凹凸は確認できない。明らかな硬化面は確認できなかった。

〔炉〕 石囲炉を検出した。住居プランが判然としないため断定はできないが、中央より西側に寄った位置にあると推定される。

〔付属施設〕 なし。

〔遺物出土状況〕 土器3,404.6g 他が出土している。埋土一括として取り上げた縄文土器が一定量出土している。

〔掲載遺物〕 (第118・175・181・198図、写真図版106・155・160・169) 土器(№247～256)、土製品(№1220・1221)、石器(№2041～2043・2258)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属すると考えられる。

S127 (第36図、写真図版28)

〔位置〕 B区東側のⅣC eグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 IV層上面で暗褐色シルトのプランとして検出した。

〔重複〕 S155→S127→SK17。

〔規模〕 南東側を掘り過ぎていますが、残存する部分から判断すると、3.5×3m前後で方形基調のプランと考えられる。

〔埋土〕 3層に分層した。壁際には地山起源の褐色へにぶい黄褐色シルトが堆積し、II層起源の暗褐色シルトで埋没している。全体的に夾雑物が多く人為堆積の可能性が想定される。

〔壁・床の状況〕 遺構の南東側は掘り過ぎてしまったこと、斜面で削平されているため壁面の状態は不明である。確認できた北壁や西壁は、床面からなだらかに立ち上がる。床面には明瞭な凹凸は確認できなかった。

〔炉〕 床面で焼土を確認したが、被熱層は非常に薄く熱変化の弱い様子で、地床炉と特定できるのか躊躇する状況である。

〔付属施設〕 なし。

〔遺物出土状況〕 土器1,641.4g 他が出土している。特記事項として堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第118・175・181図、写真図版107・155・160) 土器(No.257～262)、土製品(No.1222)、石器(No.2044)を掲載した。

〔時代・時期〕 検出面や出土遺物から縄文時代前期に帰属する可能性が高い。

S128 (第37図、写真図版29)

〔位置〕 B区中央のⅢCmグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 IV層上面でブロック焼土と被熱した礫を検出し、竪穴住居跡の炉であろうと想定して掘り下げを行ったところ、その直下で炉と床面、北側で壁の一部を確認したため、竪穴住居跡と判断した。なお、斜面下方となる南側は消失している。

〔重複〕 BP41と重複している。SK22=SK23→SI28→BP41。

〔規模〕 東西方向のプランから判断すると、直径2.5m前後の円形基調のプランと推定される。

〔埋土〕 住居の堆積土は2層に分層した。大部分は地山起源の暗褐色シルトブロックを含む明黄褐色シルトで埋没しており、上部に薄くにぶい黄褐色シルトが堆積している。人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔壁・床の状況〕 西壁・北壁・東壁ではわずかであるが、床面から直線的に立ち上がる壁を確認した。斜面下方の壁は上述のとおり状況から確認できなかった。床面は斜面下方の南側に向かって緩やかに傾斜しているが、明瞭な凹凸はなく、さらには明らかな硬化面も確認できなかった。

〔炉〕 床面の中央やや南西寄り土器埋設炉(斜位)を確認した。床を掘り窪めて、粗製の深鉢形土器を斜位に設置している。土器周辺も被熱により赤変しているが、土器に隣接する中央部分が円形状に赤変している。炉内はにぶい赤褐～赤みを帯びた褐色シルトで埋没している。

〔付属施設〕 柱穴を2個確認した。当初BP41も本遺構に伴うものと考えていたが、住居の壁より新しいことが確認できたため、別遺構と判断した。

〔遺物出土状況〕 土器1,645.6g 他が出土している。特記事項として堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第118・181・198図、写真図版107・160・169) 土器(No.263～266)、石器(No.2045・2259・2260)を掲載した。

〔時代・時期〕 炉体の土器や住居の形態から縄文時代後期に帰属すると考えられる。

S129 (第38・39図、写真図版30)

〔位置〕 B区北側、ⅢBtグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 重機による表土剥ぎ後の検出で、IV層上面に焼土粒の混入する暗褐色シルトのやや不明瞭な半円形の広がりを確認した。斜面下方となる遺構南側と南西側は削平され残存していなかった。遺構西側は直上の木の根による攪乱で床面および壁は不明瞭であった。

〔重複〕 SK42≦SL18→SI29→SI30、SK37→SL11≦SI29→SI30。

〔規模〕 確認できた部分の最大幅は4.43mで、円形基調である。

〔埋土〕 4層に分層した。Ⅱa層(褐色シルト)～IV層を掘り込み、IV層を床面にしている。埋土は暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大21cmである。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上が

る。

〔炉〕 堅穴中央より東に寄った位置で、北東-南西に広がる燃焼面とその北西と南東で燃焼部を囲むように組まれた炉石を検出した。また、燃焼部の南西端には斜位に埋設された土器の底部片が出土した（※脆く接合・復元ができなかったので不掲載とした）。従って、石囲埋設土器炉と判断される。埋設されていた土器は、南西に底部を向けて燃焼部中央に口縁を向けるよう設置されていた。燃焼部の被熱層は厚いところで12cm程ある。

〔付属施設〕 柱穴は3個検出した。Pitはすべて暗褐色シルト主体で埋没し、床面からの深さは最大29cmである。Pit 3は床面が残存していない南側で検出したが、埋土が同様で位置も遺構内であるためSI29のPitとした。

〔遺物出土状況〕 土器1, 149.9g 他が出土している。特記事項として炉から埋設土器が1点出土している。

〔掲載遺物〕 (第118・175・181・198図、写真図版107・155・160・169) 土器(No.267～275)、土製品(No.1223)、石器(No.2046～2048・2261)を掲載した。

〔時代・時期〕 詳細な時期は不明だが、石囲炉に斜位土器埋設を伴う特徴はSI57やSI67など縄文時代後期初頭の炉形態に類似することから、本遺構も当該期に帰属するものと考えられる。

SI30 (第38・40図、写真図版31)

〔位置〕 B区北側、ⅢC p グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 重機による表土剥ぎ後の検出で、II a 層～IV層上面で焼土粒の混入する暗褐色の半円形の広がりとその中央にやや赤変した褐色シルトを検出した。斜面下方の遺構南側は削平され残存していなかった。

〔重複〕 SK42≤SL18→SI29→SI30、SK37→SL11≤SI29→SI30、SI52→SI30。

〔規模〕 確認できた残存部の最大幅は5.07mで円形基調である。北壁は一部攪乱で削平されていた。

〔埋土〕 3層に分層した。II a 層(褐)～IV層上面を掘り込み、IV層を床面になっている。埋土は暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大22cmである。床面は斜面に沿ってやや南に傾斜し、壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕 堅穴の中央付近で燃焼面を確認した。燃焼部は東西に広がり、燃焼部東側には焼土の中に深鉢土器が正位で埋設されていた(No.276)。土器埋設炉と判断される。燃焼部の被熱層は厚いところで12cm程である。なお、燃焼部上に黄褐色の風化した花崗岩粒(約10cmの規模で)が乗るように出土しているが、炉石とは判断できない。

〔付属施設〕 柱穴は6個検出した。すべて暗褐色シルト主体の単層で埋没し、床面からの深さは最大35cmである。

〔遺物出土状況〕 土器5, 263.2g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第119・176・182・198図、写真図版107・108・155・160・169) 土器(No.276～285)、土製品(No.1224)、石器(No.2049・2262・2263)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土した遺物から縄文時代後期初頭に帰属すると考えられる。また炉の燃焼面に被るように風化した花崗岩粒(真砂土)が検出されたのはSI107やSI57と同様である。正位に土器が埋設された炉は本遺構のみであるが、類似する炉の遺構時期から後期初頭に帰属するものと考えられる。

SI31 (第41・42図、写真図版32)

〔位置〕 B区北西側、IV B e グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 II a 層上面で黒色シルトの円形の広がりを確認した。黒色シルトを掘り下げたところ炉や柱穴は確認できず、さらにグリッドに沿ったベルトを残して周辺を下げていったところ、暗褐色〜黒褐色の不明瞭な円形の広がりを呈していた。断面の立ち上がりや炉を確認して遺構と認識した。

〔重複〕 SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

〔規模〕 確認できた部分の最大幅は4.02mで円形基調である。北側は立ち上がりを確認できなかった。

〔埋土〕 本遺構に伴う土層は1・2・4・5層で4層に分層される。

〔壁・床の状況〕 II a 層 (暗褐色) とSI58埋土を掘り込み、SI56・57埋土を床面にしている。検出面から床面の深さは最大42cmである。床面は平坦で遺構南側がなだらかに斜面に沿って南に傾斜する。壁は直立気味に立ち上がり徐々に外へ開いていく。

〔炉〕 遺構内の中央からやや南寄りに円形の石囲炉を検出した。石組みの中には燃焼面を確認できる。燃焼部は硬化があり、にがい赤褐色シルトで赤変が弱く、厚さは最大で5cm程であった。

〔付属施設〕 柱穴は4個検出した。Pit 1は暗褐色シルトを主体に埋没し、Pit 2〜3は暗褐色シルトの単層であった。床面からの深さは最大65cmである。

〔遺物出土状況〕 土器9,437.3g 他が出土している。特記事項として検出面直下の黒色シルト (1層) の出土遺物はほぼ弥生土器であった。また、本遺構精査当初に埋土一括として取り上げていた土器は、重複関係にあるSI58に帰属する遺物と捉えられる。特に№287・290・289・291など縄文時代後期の土器はその可能性が高い。

〔掲載遺物〕 (第119・120・176・182図、写真図版108・109・156・160) 土器(№286〜311)、土製品(№1225・1226)、石器(№2050〜2055)を掲載した。上記の理由から確実にSI31出土といえる土器は第119・120図286・292・293・294・297に限られる。

〔時代・時期〕 出土土器は縄文後期と弥生が混在しており、詳細な時期特定の材料にはならない。ただ、遺構同士の重複関係から弥生時代に帰属すると推定される。

SI32 (第44図、写真図版33)

〔位置〕 B区北西側、III B x グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 SI16床面およびIII B y・IV B e グリッドの南北に残したベルトの断面で、同様の褐色シルトで埋没する複数の柱穴と溝および立ち上がりを確認した。またSI16下に水平に広がる厚さ4cm程の褐色シルトの堆積とその直下から燃焼面を検出し、竪穴住居跡として認識した。

〔重複〕 SI32→SI09→SI16。

〔規模〕 残存部が少なく形状は不明であるが、周溝と柱穴の位置から確認できる最大幅は4.3mであり、北東―南西方向に長軸を持つ長方形の大型住居の可能性もある。SI16と重複する部分になる本遺構南東側は木根による攪乱があり、柱穴の形状が不明瞭であった。炉から南側は木根攪乱のため、破壊を受け確認できなかった。

〔埋土〕 2層に分層した。埋土は褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕 IV層を掘り込み、V層を床面にしている。残存する検出面から床面の深さは最大33cmである。床面は斜面に沿ってなだらかに南へ傾斜し、壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕 中央よりやや南に寄った位置で、楕円形の燃焼面を検出し地床炉と判断した。燃焼部の被熱層は厚いところで8cm程あり、中央が窪み周辺が高くなり、いずれも硬化が認められた。

〔付属施設〕本遺構に伴うものとして柱穴12個を検出した。すべて褐色シルトで埋没し、床面からの深さは最大60cmである。またベルトで立ち上がりを確認できた北東壁には周溝を検出した。同じく褐色シルト（埋土2層）で埋没していた。

〔遺物出土状況〕土器152.6g他が出土している。

〔掲載遺物〕（第120・229図、写真図版109・184）土器（No.312～314）、石製品（No.2506）を掲載した。

〔時代・時期〕詳細な時期は不明であるが、SI16より古い。推定される住居の平面形などから長方形の大型住居の可能性が高く、時期は縄文時代前期と考えられる。

SI33（第45図、写真図版34）

〔位置〕C区北西側、II B k グリッドに位置する。

〔検出状況〕II a 層で検出した。

〔重複〕SI33→SI38。

〔規模〕北西から南東で4.2m、南西から北東で3.9mのほぼ円形を呈すると推定される。

〔埋土〕単層で炭化物を微量含む、黒褐色シルト主体である。

〔壁・床の状況〕北側は直線的に緩やかに立ち上がるが、南側は削平され、壁面が残存しない。床はほぼ平坦である。

〔炉〕北壁に近い位置で地床炉を検出した。焼土層は約10cm前後で発達している。

〔付属施設〕柱穴6個を検出した。柱穴埋土は黒褐色シルトを主体とする。柱穴の深さはPit 5が27cmと突出して深い以外、他の5基は12～15cmの範囲にある。

〔遺物出土状況〕土器6,346.0g他が出土している。まとまった量の遺物が出土している。

〔掲載遺物〕（第121・176・182・198・199図、写真図版109・110・156・160・170）土器（No.315～329）、土製品（No.1227・1228）、石器（No.2056～2058・2264～2266）を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI34（第46図、写真図版35）

〔位置〕B区西側、V B e、V C a グリッドに位置する。

〔検出状況〕II a 層で検出した。

〔重複〕SK107→SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕北西から南東で4.2m、南西から北東で3.9mのほぼ円形を呈すると思われる。

〔埋土〕埋土は黒褐色シルトの単層で炭化物を微量含む。

〔壁・床の状況〕北側は直線的に緩やかに立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔炉〕なし。

〔付属施設〕北東側ではSK15に切られる周溝を検出した。周溝の深さは最大で22cm、埋土は炭化物を微量含む黒褐色シルトを主体とする。柱穴は3個検出した。柱穴の埋土はどれも炭化物を微量含む黒褐色シルトを主体とする。柱穴は全般に深く、Pit 1が72cm、Pit 2が58cm、Pit 3が55cmである。

〔遺物出土状況〕土器1,466.3g他が出土している。

〔掲載遺物〕（第122・199図、写真図版110・170）土器（No.330～337）、石器（No.2267）を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭と判断される。

SI35 (第47図、写真図版36)

〔位置〕 B区中央のIVC b グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 調査区中央の捨て場にあたるIVC b グリッドのII a 層 (上) 中で石囲炉を検出し、同面でのやや硬化した床と北側で壁を確認したため、竪穴住居跡と判断した。

〔重複〕 SI66→SI62→SI35。

〔規模〕 炉と柱穴を結ぶ線を中心線とすると、南北約3.5m、東西約3.2mの円形基調のプランである。

〔埋土〕 9層に分層した。土器片を多く含む暗褐色へにぶい黄褐色シルトを主体とする。大部分が同一層で埋没しており、人為堆積の可能性が高い。

〔壁・床の状況〕 斜面下方は他の遺構と同じく残存状態が悪いため判然としないが、その他の壁は比較的良好に残存しており、床面から直線的に立ち上がる。床面下から土器片が突き出していたり、柔らかかったりする部分があり、また一部床面を掘り過ぎた部分があるものの、精査で確認できた床面部分では明瞭な凹凸は確認できなかった。

〔炉〕 斜面下方に相当する南壁寄りですべて石囲炉を検出した。拳大から人頭大の礫を円形に配置して炉を構築している。明瞭な掘り方は確認できなかった。

〔付属施設〕 炉の延長線上の斜面上方で柱穴を1個検出した。

〔遺物出土状況〕 土器12,967.1g 他が出土している。堆積土から多量の縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第122～124・199・200・230図、写真図版110～112・170・184) 土器(No.338～364)、石器(No.2268～2271)、石製品(No.2507・2508)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物や遺構の形態から弥生時代に帰属するものと考えられる。また、検出面より採取した木炭1点放射性炭素年代測定を実施したところ、2,200±20yrBPという結果を得られた。

SI36 (第48図、写真図版37)

〔位置〕 B区中央やや南側、VCh・mグリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層上面までグリッド掘りしたところ、炉と北側の壁を検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 北側は周溝と壁が浅く残っているが、南側は削平されほとんど残っていないため、全体の形状は不明である。炉と周溝、柱穴の位置から平面形を推定すると楕円形と思われる。

〔埋土〕 検出作業時において、グリッド掘りで面的に床面と焼土が出るまで掘り下げたことから、埋土断面記録を欠く。ただ、柱穴の埋土とはほぼ同様に、炭化物を微量含む暗褐色シルト主体である。

〔壁・床の状況〕 北側は緩やかに浅く立ち上がる。南側は削平され、壁が立ち上がらなかった。床はほぼ平坦である。

〔炉〕 竪穴住居中央より南に寄った位置で土器埋設炉 (斜位) を検出した。埋設土器の上部は潰れていて残りが悪かったが、斜位に埋設されている。

〔付属施設〕 北側に周溝と6個の柱穴を検出した。周溝・柱穴とも埋土は褐色土を微量含む暗褐色シルト主体である。周溝の深さは最大で18cm、柱穴は最大で61cmである。

〔遺物出土状況〕 土器1,628.2g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第124・125・200図、写真図版112・170) 土器(No.365～369)、石器(No.2272・2273)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SI37 (第49図、写真図版38)

〔位置〕 C区北西側のⅡB1グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 にぶい黄褐色シルトによる半円形のプランを検出、ペルトを設定し掘り下げたところ、北側と東側で壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と認知した。なお、プラン南側は木根で破壊を受けている。

〔重複〕 SK34→SI37→SI06。

〔規模〕 全般に遺存が悪く、平面形・規模ともに不明にある。残存部からは、東西約5mの楕円形と推定される。

〔埋土〕 炭化物が混在するにぶい黄褐色シルトの単層である。人為堆積の可能性が高い。

〔壁・床の状況〕 一番残りの良い北壁は直立気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、明瞭な凹凸は確認できなかった。

〔炉〕 地床炉を検出した。東側は木根で破壊を受けている。

〔付属施設〕 柱穴を7個検出した。傾向としては壁に近い位置で検出されている。

〔遺物出土状況〕 土器202.6g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第125・182図、写真図版112・160)土器(No.370・371)、石器(No.2059)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から弥生時代に帰属すると推定される。

SI38 (第50図、写真図版39・40)

〔位置〕 C区北西側のⅡBqグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 倒木痕に大きく破壊されてはいるものの灰黄褐色粘土質シルトによる半円形気味のプランを確認し、竪穴住居跡と判断した。

〔重複〕 SI13→SI38。

〔規模〕 遺存する北壁から南側床面で検出したPit 7までの間隔が約5mであることから、南北方向の長軸線上で約5.5mと推定される。平面形は北壁～東壁の連続性から推定して楕円形基調とみられる。

〔埋土〕 3層に分層した。全て人為堆積の可能性が高い。

〔壁・床の状況〕 壁は北壁や東壁を見る限り外傾気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔炉〕 竪穴住居中央よりかなり南に寄った位置で地床炉を検出した。

〔付属施設〕 柱穴を8個検出した。

〔遺物出土状況〕 土器6,612.5g他が出土している。堆積土から多量の縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第125・126・176図、写真図版112・113・156)土器(No.372～391)、土製品(No.1229)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物は縄文時代後期の土器が多い。遺構同士の重複関係からは縄文時代後期もしくはそれより新しい。

SI39 (第51図、写真図版39・40)

〔位置〕 C区北西側のⅡBvグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 灰黄褐色粘土質シルトによる不整形のプランを確認し、竪穴住居跡と判断した。

〔重複〕 SK33→SI39。

〔規模〕 遺存状態が悪く、平面形・規模ともに不明である。

〔埋土〕 灰黄褐色シルトの単層で人為堆積の可能性が高い。

〔壁・床の状況〕 残存状態が悪いため判断としないが、北壁を見る限り直立気味に立ち上がる。床面はやや凹凸がある。

〔炉〕 未検出である。

〔付属施設〕 特になし。

〔遺物出土状況〕 土器2,099.7g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第126図、写真図版113)土器(No.392～395)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭と推定される。

SI40 (第52図、写真図版41)

〔位置〕 B区中央～東側のⅢCx・ⅢCyグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 Ⅳ層面で暗褐色シルトのプランとして検出した。プラン内には炉石と考えられる礫が円形に巡る様子が確認できる。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 残存する部分から判断すると、南北約2.4m、東西2.4mの隅丸方形基調と推定される。炉の平面規模と比較して竪穴の規模がやや小さいことが指摘できる。

〔埋土〕 埋土は2層に分層した。下位には黒褐色シルトを含む地山起源の黄褐色シルトが斜面と同調的に堆積し、暗褐色シルトで完全に埋没している。層理面は波打っているが、水平気味に堆積しており、人為堆積の可能性はある。

〔壁・床の状況〕 斜面下方の南壁は確認できなかったが、プランの約半分にあたる斜面上方の北壁側壁面を確認できた。壁は床面から鋭角に直線的に立ち上がる。床面は斜面下方に向かって緩やかに傾斜しているが、明瞭な凹凸や明らかな硬化面は確認できなかった。

〔炉〕 斜面下方の南側で石囲炉を検出した。人頭大程の礫を円形～方形に配置している様子であるが、東側は炉石1個で簡易なつくりである。炉内は炭化物や焼土粒、黄褐色シルト塊の混入する暗褐色シルトの単層で埋没している。斜面下方ではわずかであるが、炉底の掘り方が確認できた。

〔付属施設〕 なし。

〔遺物出土状況〕 土器443.8g 他が出土している。堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第126・176・182・200図、写真図版113・156・160・171)土器(No.396～399)、土製品(No.1230)、石器(No.2060・2274)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物や遺構の形態から縄文時代後期に帰属するものと考えられる。

SI41 (第53図、写真図版42)

〔位置〕 B区中央～東側のⅢCxグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 Ⅱa層中で炉石の可能性が高い礫2個を確認し、その後それと同調的な焼土層を確認したことで、石囲炉と判断した。斜面下方にあたる南側では、炉を確認した段階では掘り下げを完了していたこともあり、プランは確認できなかった。また、掘り下げの途中段階では床面らしき硬化した面は確認できなかった。斜面上方(北側)は炉の高さを勘案して掘り下げを行ったところ、床面と考えられるやや硬化した面と壁を確認したため住居と判断したが、炉が若干床面より高い。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 前述の通りであるため、詳細な規模は不明であるが、残存する東西方向から判断すると、直

径2.5～2.6mの円形基調のプランと考えられる。

〔埋土〕焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色シルトの単層である。層高がなく、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔壁・床の状況〕確認できた斜面上方の壁は床面からなだらかに立ち上がる。床面は周辺の自然堆積層よりは若干硬化しているが、顕著ではない。明瞭な凹凸は確認できなかった。

〔炉〕中央東寄りに石囲炉を検出した。炉石は一部のみの残存と判断した。

〔付属施設〕なし。

〔遺物出土状況〕土器596.0g他が出土している。堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕(第126・182・201図、写真図版113・160・171)土器(No.400～402)、石器(No.2061・2275)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物や検出面から縄文時代後期に帰属するものと考えられる。

SI42 (第54図、写真図版43)

〔位置〕C区III C b グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕IV層面で炉と判断される焼土と、それを中心とした配置が窺われる柱穴を3個検出したため、堅穴住居跡と判断した。

〔重複〕複数の柱穴群とプランでは重複するが、本遺構の残存状態が悪く、新旧関係を把握することはできなかった。

〔規模〕前述の通りであるため、詳細な規模は不明である。

〔埋土〕確認できなかった。

〔壁・床の状況〕炉周辺は概ね平坦であるが、残存状態が悪く、詳細は不明である。

〔炉〕地床炉を検出した。地山層が被熱により橙色に変色しており、被熱層は3cm程である。

〔付属施設〕炉を中心に三角形状に配置される柱穴を確認した。Pit 1・3は暗褐色シルト主体、Pit 2は黄褐色シルト主体の堆積土である。

〔出土遺物〕なし。

〔時代・時期〕縄文時代に帰属する遺構ではあるが、詳細な時期は特定できなかった。

SI43 (第55図、写真図版44)

〔位置〕IV B t グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV B t グリッド内を掘り下げていたところ、IV a 層上面から赤褐色シルトの焼土範囲を確認した。その周辺を再検出したところIV a 層上面より暗褐色シルトの不明瞭なプランの一部を検出した。

〔重複〕SI43≦SI44≦SI49→SI17。位置関係からSI44と関連する可能性があるが、新旧関係は不明である。

〔規模〕全体形状は把握できなかった。

〔埋土〕残存深度が浅いため明確ではないが、II a 層相当の暗褐色シルトが埋土であったと考えられる。床面からの残存深度は6～7cm程度である。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は北東側に残存する箇所から推定して、床面から外傾しながら立ち上がるものと考えられる。

〔炉〕残存する壁から南西側約2mの位置に焼土層が広がり、焼土層の北東側には斜位に埋設された

土器が検出された。状況から土器埋設炉(斜位)と判断される。焼土層の平面規模は115×74cmで不整形楕円形を呈している。被熱層の厚さは10cmで、層の上面はやや硬化している。埋設土器は、底部～胴部まで残存する一個体の土器が底部を南西に向けてやや斜めに設置されていた。

〔付属施設〕残存する壁付近からPitが1個検出された。深さ39cmで、埋土は暗褐色のシルト層である。

〔遺物出土状況〕土器1,406.1g 他が出土している。縄文土器が出土している

〔掲載遺物〕(第126・176図、写真図版114・156)土器(No.403～406)、土製品(No.1231)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI44 (第56図、写真図版45)

〔位置〕IV B t・y グリッドに位置している。

〔検出状況〕IV B t・y グリッド内を層位で掘り下げているところ、IV a 層上面にて褐色シルト～暗褐色シルトの不明瞭な広がりの一部を検出した。

〔重複〕SI43≦SI44≦SI49→SI17。位置関係からSI43と関連する可能性があるが、新旧関係は不明である。

〔規模〕全体形状は把握できなかった。

〔埋土〕埋土の主体はII a 層(褐色シルト)相当の褐色シルトである。床面からの残存深度は26cmである。

〔壁・床の状況〕床面は平坦である。壁は西側に残存する箇所と、土層ベルト部の状態から推定して、床面から検出面にかけてやや外傾し、緩やかに立ち上がるものと考えられる。

〔炉〕残存する北西側の壁から南東約2.9mの位置に石囲炉が1つ、その石囲炉から北西側には地床炉が1つ検出されている。石囲炉は規模98×86cmで、炉石は南東側の一部が失われているが、おおよそ円形状に配されている。炉石の一部は風化花崗岩(真砂土)として床面直上に乗っている形で検出された。炉内には焼土跡が確認され、焼土の規模は74×62cmの楕円形を呈しており、被熱層の厚さは10cmである。地床炉は65×54cmの不整形で、被熱層の厚さは14cmである。

〔付属施設〕柱床と思われるPitが6個検出された。深さや配置より、Pit 4～6は本住居の主柱穴となる可能性がある。埋土はすべてII a 層由来の暗褐色シルト層である。

〔遺物出土状況〕土器4,038.9g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第126・127図、写真図版114)土器(No.407～415)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI45 (第57図、写真図版46)

〔位置〕B区西側、V B e・V B j グリッドに位置する。

〔検出状況〕SI24の貼床の断面を記録するためトレンチを入れたところ、炉を検出し、本住居の存在を確認した。

〔重複〕SKI07→SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕東西4.1m、南北3.7mの楕円形を呈すると推定される。

〔埋土〕1層はSI24の貼床層で、2層は炭化物を少量含む黒褐色シルトを主体とする。SI45の主埋土である2層は自然堆積で、浅く窪んだ場(1層とした貼床(人為堆積)をしてSI24が構築されたと思われる。

〔壁・床の状況〕壁は全体的に残りが良く、直線的に緩やかに立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔炉〕石囲炉を1基検出した。平面形は53×46cmの楕円形を呈し、燃焼部は赤褐色である。

〔付属施設〕5個の柱穴を検出した。柱穴の埋土はどれも炭化物を微量含む、黒褐色シルトを主体とする。深さは最大で46cmである。他の柱穴よりも規模がやや大きいPit 4からは石皿が出土している。

〔遺物出土状況〕土器3,834.7g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第127・201・230図、写真図版114・171・184)土器(No.416～422)、石器(No.2276～2278)、石製品(No.2509)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI46 (第58図、写真図版47)

〔位置〕B区南西側、V C k グリッドに位置する。

〔検出状況〕グリッド掘りで面的にIV層まで下げたところ地床炉と推定される焼土を検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕床面が北東側しか残存していないため、全体の形状は不明である。焼土と柱穴の位置から推定すると平面形は楕円形、規模は一辺4m前後と推定される。

〔埋土〕炭化物を少量含む、黒褐色シルト主体の単層である。

〔壁・床の状況〕壁は、北壁と北東壁のみの検出に留まるが、ベルトの断面を見ると直線的に外傾して立ち上がる。床面は、貼床は施されていないが、ほぼ平坦である。

〔炉〕地床炉を1基検出した。平面形は75×65cmの楕円形を呈し、燃焼部は暗赤褐色である。補足として、燃焼部直上の礫は石囲炉の残骸かと思われたが、礫に被熱痕が見られないのと炉石の抜き取り痕が無いことから、石囲炉ではなく地床炉と判断した。

〔付属施設〕5個の柱穴を検出した。柱穴の埋土はどれも暗褐色シルトを主体とする。深さは最大でPit 5の31cmである。

〔遺物出土状況〕土器2,552.7g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第127図、写真図版114・115)土器(No.423～430)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI48 (第27・29図、写真図版23・24)

〔位置〕B区北西側、IV B j グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕II a 層～IV層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして確認した。遺構内はひとまわり小さいSI23によって床下まで削平をうけ、壁周辺の埋土と壁の立ち上がり、壁際に巡る柱穴のみの検出である。

〔重複〕SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

〔規模〕規模は残存部から4.24×3.77m、平面形は楕円形を呈すると推定される。補足として、北壁の一部は根攪乱を受け、南西壁は検出前にグリッドで先に掘り下げており確認できなかった。

〔埋土〕4層に分層した。II a 層～IV層を掘り込み、V層を床面にしている。確認できた埋土は暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕検出面から床面の深さは最大36cmである。残存する床面は南側に向けて傾斜しており、壁は直立気味に立ち上がってからなだらかに外へ開く。

〔炉〕なし。

〔付属施設〕柱穴は8個検出した。Pit 1～6は北側半分の壁際を巡るように検出した。Pit 1は暗

褐色シルトと黄褐色シルトで埋没し、他のPitも暗褐色シルト主体で埋没する。床面からの深さは最大70cmである。

〔遺物出土状況〕 土器75.1g 出土している。土器は微量出土したが、小片で時期特定し難いため不掲載とした。

〔時代・時期〕 重複遺構との新旧関係から、弥生時代に帰属する遺構と考えられる。

S149 (第59図、写真図版48)

〔位置〕 IV B j・IV C f・IV B o・IV C k グリッド間に位置する。

〔検出状況〕 IV層上面、暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

〔重複〕 断面図上 (A-A' 1～2層) では焼土遺構に切られていた。SI61→SI49→SI25→SI13、SI49→SKT11、SI43≤SI44≤SI49→SI17。

〔規模〕 全体の形状は不明である。おおよそ楕円形を呈し、規模5.5×4.5m程と推定される。

〔埋土〕 6層に分類した。埋土の主体はII a層 (褐色シルト) 由来の褐色シルトの4層である。壁際には地山起源の黄褐色シルトが三角状に堆積した5層が入る。6層は炉の埋土の一部である。

〔壁・床の状況〕 床面は概ね平坦である。壁は残存する箇所から推定して、床面から検出面に向けてやや外傾し緩やかに立ち上がると考えられる。残存深度は28cmである。

〔炉〕 床面のほぼ中央に石囲炉と思われる焼土範囲と、炉石の一部が検出された。焼土の規模は80×60cmで、おおよそ楕円形を呈する。被熱層の厚さは10cm弱で、層の上面は顕著に硬化している。

〔付属施設〕 柱穴と思われるPitが10個検出された。各Pitの詳細は、図版に付属する表に記載する。深さや配置より、Pit 1・3・5・7・9は本住居の柱穴の可能性がある。埋土はすべて暗褐色シルト層である。

〔遺物出土状況〕 土器8,937.4g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第128・176・182・201～203図、写真図版115・156・160・171・172・184) 土器(No.431～444)、土製品(No.1232)、石器(No.2062・2279～2287)、石製品(No.2510)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI51 (第60図、写真図版49)

〔位置〕 C区北西側のII Bvグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 褐灰色土による半円形気味のプランを検出し精査を進めたところ、西壁～北壁の立ち上がりを確認し竪穴住居跡と判断した。

〔重複〕 SK18≤SK25→SI51→SK36。

〔規模〕 平面形、規模共に明確にはできないが、残存部から5.5m前後の円形と推定される。

〔埋土〕 2つに分層される。2層褐灰～灰黄褐色砂質シルトを主体とし、斜面下方側に1層黒褐色シルトが局所的に認められる。1層は人為堆積層で後世の攪乱層の可能性もある。

〔壁・床の状況〕 斜面上方側である西壁や北壁は残りが良く約25cmの壁高を持つ。床面は北～南に向かって緩く下る。

〔炉〕 炉は未検出である。

〔付属施設〕 Pitとして登録したものが27個ある。柱の建て替えが行われている可能性もあり、またその配置関係からもランダムな様相で、支柱穴などの特定は難しい。推定で記載するなら、支柱はPit 5・7・8・13・14・15・23などに求められようか。また、壁柱穴としてPit 3・19・20などが

想定される。Pit 1・2・27は壁溝内の比較的深い部分をPit登録したが、あるいは抜き取り痕の可能性もある。最も南に位置するPit22は、屋外柱穴もしくは本遺構以外に帰属する可能性もある。

〔遺物出土状況〕 土器6,793.0g 他が出土している。堆積土から縄文土器が一定量出土している。

〔掲載遺物〕 (第128・129・182・203図、写真図版115・116・160・172) 土器(No.445～456)、石器(No.2063～2067・2288・2289)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI52 (第61図、写真図版50)

〔位置〕 C区北側、III C k グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 IV層上面で暗褐色シルトの楕円形の広がりとして確認した。遺構中央と北側には切株がかり、根による攪乱を受けていた。北側の切株は周辺の複数の遺構埋土に根が絡んでおり、調査区中央のため人力による切株除去が必要となり時間がかかることと、除去の際に遺構埋土が削平され重複関係が不明になる可能性があったため切株を残して精査を進めることとした。

〔重複〕 SI67→SI65→SI64→SK105→SI52→SI30。

〔規模〕 残存する部分から4.9×3.6m程の楕円形を呈する。補足として、遺構の残存は悪く、南側はSI30に完全に切られ、北壁は木根の攪乱を受けている。また、南西側はすでに掘り下げたため立ち上がりを確認できなかった。

〔埋土〕 4層に分層した。埋土は褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大26cmで、IV層を掘り込み、IV層を床面になっている。床面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がる。北側の切株下は壁が直立して立ち上がるが根の影響が想定される。

〔炉〕 堅穴の南側と東側に、2つの焼土層の広がりを検出し、地床炉2箇所(2基)と判断した。南側の地床炉燃焼部の被熱層は厚い所で11cm程ある。東側の地床炉燃焼部の被熱層は、厚い所で18cm程あり、上面中央は被熱が強かったのか黄褐色に変色し硬化していた。この東側の地床炉燃焼部の北側は、根によって攪乱されている。

〔付属施設〕 柱穴は2個検出した。Pit 1は暗褐色シルトの単層で埋没し、Pit 2は褐色シルトの単層で埋没する。床面からの深さは最大44cmである。Pit 1は床面の高さで検出したが、埋土が遺構埋土と異なるため本遺構に伴うものか不明瞭である。

〔遺物出土状況〕 土器2,221.4g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第129・176・182・203図、写真図版116・156・160・172) 土器(No.457～464)、土製品(No.1233)、石器(No.2068～2070・2290・2291)を掲載した。また遺構埋土から壺形のミニチュア土器が出土した(第176図1233)。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属するものと考えられる。

SI53 (第62図、写真図版51)

〔位置〕 IV B s・IV B x・IV B t・IV B y グリッド間に位置する。

〔検出状況〕 IV B t グリッド内を層位で掘り下げていたところ、IV層上面にて暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

〔重複〕 SK28→SI53→SI17、SI53→SI44。

〔規模〕 調査区境であることと、トレンチによって西側を大きく失っているが、一辺約4.5mの隅丸

方形を呈する。

〔埋土〕3層に分類した。埋土の主体はⅡa層（褐色シルト）由来の褐色シルトである1層である。壁際には地山由来の黄褐色シルトである2層が三角状に堆積しており、壁の崩落シルトであると思われる。3層は本住居に伴う地床炉の被熱層の一部である。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は床面から検出面に向けて外傾しながら緩やかに立ち上がり、床面からの残存深度は約16cmである。

〔炉〕床面中央よりやや北側に地床炉が設置されている。焼土の規模は32×22cmの方形を呈する。被熱層の厚さは7～8cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitが6個検出された。各Pitの詳細は、図版に付属する表に記載する。深さや配置より、Pit 2・4は本住居の柱穴である可能性がある。Pitの埋土はすべて暗褐色シルト層である。

〔遺物出土状況〕土器1, 189.3g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第129・203図、写真図版116・172)土器(No.465～471)、石器(No.2292)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

S154 (第63図、写真図版52)

〔位置〕B区西側、V B d・V B eグリッドに位置する。

〔検出状況〕Ⅱa層の下の黒褐色シルトで検出した。

〔重複〕SKI07→SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕西側調査区境に位置することと、SI59に切られているため、全体的な形状は不明であるが、炉と柱穴の位置から推定すると楕円形を呈すると思われる。

〔埋土〕4層に分層した。1・2層は住居埋土である。1層は炭化物を微量含む暗褐色シルトを主体とする。2層は炭化物を少量、焼土ブロックを微量含む黒褐色シルトを主体とする。3層は風化した花崗岩が密に混じる層で、炉石が風化して崩れた跡だと思われる。4層は炉内埋土で焼土ブロックと炭化物を少量含む黒褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕北壁は直線的に緩やかに立ち上がるが、南壁はSI59に切られているため残存しない。床はほぼ平坦である。

〔炉〕斜位土器埋設炉(斜位)を1基検出した。焼土層の厚さは30～36cmの範囲で発達し、土器は焼土層の北端付近に斜位に埋設されている。

〔付属施設〕2個の柱穴を検出した。柱穴の埋土はどれも炭化物を微量含む黒褐色シルトを主体とする。深さは最大で50cmである。

〔遺物出土状況〕土器3, 901.2g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第129・130・176・182・204図、写真図版116・156・160・161・173)土器(No.472～485)、土製品(No.1234)、石器(No.2071・2072・2293)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期と推定される。

S155 (第64図、写真図版53)

〔位置〕B区中央、IV C d・IV C iグリッドに位置する。

〔検出状況〕グリッド掘りでの面的に下げたところ、IV層で検出した。

〔重複〕SKI06≦SKI04→SI55→SI27→SK17。

〔規模〕全体の形状は不明だが、炉と柱穴の位置からほぼ円形を呈すると思われる。

〔埋土〕暗褐色シルトを主体とする単層である。

〔壁・床の状況〕グリッド掘りで面的に掘り下げる作業段階で、住居埋土と認識するのが遅れ、ほぼ床面まで下げてしまったため壁はほとんど残らなかった。しかしながら、土層断面を見る限り北壁は直線的に緩やかに立ち上がると思われる。床はほぼ平坦である。

〔炉〕地床炉を1基検出した。平面形は、64×54cmの楕円形を呈し、燃焼部は赤褐色である。

〔付属施設〕5個の柱穴を検出した。柱穴の埋土はどれも暗褐色シルトを主体とする。深さは最大で33cmである。

〔遺物出土状況〕土器601.4g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第130図、写真図版116)土器(No.486～488)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代前期前葉と推定される。

SI56 (第27・30図、写真図版54)

〔位置〕B区北西側、IV B e グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕SI23の断面でSI48とは別のIV層を水平に削平したのちに立ち上がる堆積を確認した。また、平面でもIV層上面でSI48に切れ三日月状に残る暗褐色シルトの広がりを検出した。

〔重複〕SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20、SI56→SK32。

〔規模〕残存する部分の最大幅は4.08mで円形基調である。

〔埋土〕確認できた埋土は2層で、暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕IV層を掘り込み、IV～V層を床面にしている。検出面から床面の深さは確認できた所で最大12cm程である。床面はやや斜面に沿って南に傾斜しており、壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕なし。

〔付属施設〕柱穴8個と東西の壁直下に1箇所ずつ短い周溝を検出した。Pit 1・8は暗褐色シルト主体で埋没し、他のPitは褐色シルト主体で埋没する。床面からの深さは最大60cmである。

〔遺物出土状況〕土器124.7g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第130図、写真図版116)土器(No.489)を掲載した。Pit 1から1点のみ土器片が出土した(第130図489)。

〔時代・時期〕詳細な時期は不明だが、出土遺物と重複関係から縄文時代後期初頭以降に帰属するものと考えられる。

SI57 (第65・66図、写真図版55・56)

〔位置〕B区北西側、IV C a グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕IV C a・IV C f グリッドの南北に残したベルトの断面でIV層を床面と壁にする立ち上がりとし、SI31床面でSI56・60に切られる暗褐色土のやや不明瞭な円形の広がりとして確認した。北東の壁の一部はSI31と重複していなかったが、SI31検出時に既に周辺も掘り下げていたため実際の検出面は不明である。

〔重複〕SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

〔規模〕残存する部分の最大幅は2.92mの円形基調である。西側と北東側はV層までのトレンチを入れたため立ち上がりを確認できなかった。

〔埋土〕残存していた埋土は2層に分層した。II a 層を掘り込み、II a 層～IV層を床面にしている。

暗褐色シルト主体である。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大35cmである。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕 竪穴中央付近に、東西に広がる燃焼面とそれを囲む石組みを検出し、さらには炉西側から埋設土器が見つかり、石圍土器埋設炉(斜位)と判断した。石組みは、燃焼部の北東を楕円形基調に囲み、南側の燃焼部脇にも二つの石が並ぶ。埋設土器は、燃焼部の西隙を挟んで外側から焼土内側に口縁が向くよう斜位に埋設されていた(No.490)。燃焼面の東側には風化した花崗岩粒が燃焼部を囲むように弧状に検出された。燃焼部の被熱層は厚い所で5cm程である。

〔付属施設〕 柱穴は3個検出した。また炉の少し東にずれた下に掘り込みを確認しPit 4とした。Pit 1～3は全て炭化物和焼土粒が少量入る暗褐色シルトを主体に単層で埋没し、床面からの深さは最大52cmである。Pit 4も暗褐色シルトを主体とするが炉の掘り方に切られており、形状が炉の掘り方と同様に東西に広がる楕円形を呈していることから、検出した炉は作り変えた炉でその前の掘り方が残っていたか、重複するSI58の炉の掘り方であった可能性が考えられる。しかしPit 4埋土に燃焼面や焼土粒は確認できなかった。

〔遺物出土状況〕 土器6,926.9g他が出土している。特記事項として炉から埋設土器が1点出土している。

〔掲載遺物〕 (第130・183・204図、写真図版117・161・173)土器(No.490～496)、石器(No.2073・2074・2294)を掲載した。

〔時代・時期〕 炉の埋設土器から縄文時代後期初頭に帰属するものと考えられる。東西に楕円に広がる石圍炉と、炉の東側に風化した花崗岩粒を検出する炉の向きと形態はSI59と類似している。

SI58 (第41・43図、写真図版55・56)

〔位置〕 B区北西側、IVC a グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 IVC a・IVC f グリッドに南北に残したベルトの断面で、SI31の北側でSI31に切られる別の立ち上がりを確認し、床面がSI31検出時に出土していた焼土塊と土器の高さに対応していることを確認した。残っていたグリッドに沿った他のベルト以外はほぼ床面まで掘り下げていたが、ベルトの断面で同様の立ち上がりを確認することができた。

〔重複〕 SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

SI58→SI68→SI61→SI49→SI25→SI13。

〔規模〕 残存する部分の最大幅は4.4mである。形状は明瞭ではないが円形基調が想定される。

〔埋土〕 確認できた埋土は2層に分層した。II a 層(黒)を掘り込み、II a 層下位～IV層を床面にしている。埋土は暗褐色シルト主体である。北側の床面近くで焼土塊と土器がまとまって出土した。

〔壁・床の状況〕 検出面から床面の深さは最大32cmである。床面は緩やかに南側へ傾斜し、壁はなだらかに外側へ立ち上がる。

〔炉〕 なし。

〔付属施設〕 柱穴は2個検出した。Pitは暗褐色シルト主体で埋没し、床面からの深さは最大57cmである。

〔遺物出土状況〕 土器4,634.3g他が出土している。特記事項として、床直からNo.497の略完形土器が出土している。また、北側焼土塊付近から遺物がまとまって出土したが、本遺構を認識する以前のSI31埋土一括遺物として取り上げた。掲載した中では、No.287・289・290・291は本遺構に帰属すると

捉えられる。

〔掲載遺物〕(第130・131・176・183図、写真図版117・156・161)土器(No.497～501)、土製品(No.1235・1236)、石器(No.2075・2076)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物と重複関係から、縄文時代後期初頭に帰属するものと考えられる。

SI59 (第68・69図、写真図版57)

〔位置〕B区西側、V B j グリッドに位置する。

〔検出状況〕II a 層下に認められた黒褐色シルト層面で検出した。

〔重複〕SKI07→SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕南西から北東で4.3m、北西から南東で3.9mのほぼ円形を呈する。

〔埋土〕2層に分層した。1層は炭化物を微量含む黒褐色シルトを主体とし、2層は炭化物を少量・褐色ブロックを微量含む暗褐色シルトを主体とする。

〔壁・床の状況〕壁面の西側はSI45に切られ、また南側は削平により全体に遺存が悪い。しっかり残っている北西側の壁を見る限り、直線的に緩やかに立ち上るとと思われる。

〔炉〕石囲炉を2基検出した。右側の炉石が風化している石囲炉が古く、左側のしっかり炉石が残っている石囲炉が新しいと判断した。何らかの原因で炉を作り替えたのではないと思われる。平面形は、左側の新しい炉は68×47cmの楕円形を呈し、燃焼部は赤褐色である。右側の古い炉は左側の新しい炉に壊されているため、全体の形状は不明である。燃焼部は暗赤褐色である。

〔付属施設〕11個の柱穴を検出した。その内のPit 1・3・6・10が右側の古い石囲炉に伴う柱穴で、柱穴の掘り方と柱当たりが残っている。深さは最大で64cmである。埋土は2層に分層され、1層は炭化物を微量含む黒褐色シルト主体である。2層は褐色ブロックを少量含む暗褐色シルト主体である。これ以外のPit 2・4・5・7・8・9・11が左側の新しい石囲炉に伴う柱穴で、深さは最大で55cmである。埋土は炭化物と褐色ブロックを微量含む、黒褐色シルト主体の単層である。

〔遺物出土状況〕土器5,041.7g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第131・176・183・204図、写真図版117・118・156・161・173)土器(No.502～506)、土製品(No.1237)、石器(No.2077・2078・2295・2296)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SI60 (第65・67図、写真図版55・56)

〔位置〕B区北西側、IV B j グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕SI31床面でSI57を切る暗褐色の扇状の広がりとして確認し、断面でもIV層～V層を切る平坦な堆積と立ち上がりを確認し遺構と判断した。

〔重複〕SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

〔規模〕残存する部分が少なく規模は不明であるが、立ち上がりが弧状を呈しているため遺構の形状は円形または楕円形が想定される。南と東西を重複遺構に削平される。南西側はSI48とSI49の間に遺構の重複しない部分があったが、本遺構床面より下のV層上面まで掘り下げてしまったため、床面及び立ち上がりは確認できていない。

〔埋土〕5層に分層した。重複する遺構埋土からIV層を掘り込み、IV層～V層を床面にしている。埋土は暗褐色シルトを主体とする。5層は周溝の埋土である。

〔壁・床の状況〕確認できた検出面から床面の深さは最大35cmである。床面は北壁から南に向かって

80cm程平坦でその後側に傾斜する。壁は直立気味に立ち上がる。

〔炉〕なし。

〔付属施設〕柱穴は3個検出した。Pit 1は2層で他は単層でいずれも暗褐色シルト主体で埋没する。床面からの深さは最大49cmである。北壁直下から少し南側に短い周溝を検出した。

〔遺物出土状況〕土器2, 190.7g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第131・205図、写真図版118・173)土器(No.507～509)、石器(No.2297)を掲載した。埋土から縄文時代後期前葉の土器片が出土している(第131図509)。

〔時代・時期〕遺構同士の重複関係と出土遺物から縄文時代後期に帰属するものと考えられる。

SI61 (第70図、写真図版58)

〔位置〕B区北西側、IVC f グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕SI25の北側に南北で入れたサブトレンチでV層を平坦に切って立ち上がる堆積を確認し、SI31床面でも不明瞭であったがSI60を切る暗褐色の別の広がり遺構の埋土と認識した。

〔重複〕SI63→SI58→SI57→SI56→SI60→SI61→SI31→SI48→SI23→SI20。

SI68→SI61→SI49→SI25→SI13≦SI12。

〔規模〕残存する部分の最大幅は3.96mで西側はやや隅丸方形基調だが東側は丸みがあり不整形である。

〔埋土〕4層に分層した。II a 層(黒～下位)を掘り込み、V層を床面にしている。埋土は暗褐色シルト主体である。

〔壁・床の状況〕検出面から床面の深さは最大44cmである。確認できた床は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。IV層～V層をさきる壁の立ち上がりは明瞭であったが北東側のII a 層またはSI68埋土を切る立ち上がりは不明瞭であった。

〔炉〕なし。

〔付属施設〕柱穴は7個検出した。床面からの深さは最大88cmである。すべて暗褐色シルト主体で埋没するが、Pit 5・6は炭化物と焼土粒が目立ちブロック状の黄褐色シルトが混ざる。SI68Pit 1の埋土と類似していた。Pit 3は浅く、中に粗製土器の底部が正位で埋設されていた。胴部は破損して底部の中に重なるように出土している。

〔遺物出土状況〕土器3, 918.4g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第132・183・205図、写真図版118・161・173)土器(No.510～516)、石器(No.2079・2080・2298)を掲載した。

〔時代・時期〕遺構同士の重複関係と出土遺物から縄文時代後期に帰属するものと考えられる。

SI62 (第71図、写真図版59)

〔位置〕IVC b・IVC g グリッド間に位置する。

〔検出状況〕IVC b グリッドを層位ごとに掘り下げたところ、II a 層(褐色シルト)上面より暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

〔重複〕SI66→SI62→SI35。

〔規模〕斜面下方は流失しているが、おおよそ円形または楕円形を呈する。

〔埋土〕4層に分類した。埋土の主体は2・3層で、2層は十和田中継火山灰が塊状に入る人為堆積の暗褐色シルト層で、3層はII a 層(褐色シルト)によく似る褐色シルトである。壁際には3層

よりも明るい褐色シルトである4層が三角状に堆積しており、壁崩落土であると思われる。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は床面から検出面に向けて外傾しながら緩やかに立ち上がる。床面からの残存深度は22cmである。

〔炉〕北側の壁から南約1.7mの位置に地床炉が認められる。焼土の規模は44×42cmの不整形を呈し、被熱層の厚さは4～5cmである。

〔付属施設〕柱穴と思われるPitが5個検出された。各Pitの詳細は、図版に付属する表に記載する。配置よりPit 1～4は本住居の柱穴である可能性がある。埋土は全て暗褐色シルト層である。

〔遺物出土状況〕土器6, 420.4g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第132・133・183図、写真図版118・119・161)土器(No.517～542)、石器(No.2081・2082)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代前期前葉に帰属する。また、十和田中撤火山灰との新旧関係からも、テフラより本遺構が古いことから年代観と矛盾しない。

S163 (第65・67図、写真図版55)

〔位置〕B区北側のIV B e グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕遺構同士の重複が非常に激しく、なおかつその中で一番古い遺構である。S157・58・56などの精査を終えた後の再確認作業時に壁溝を検出した。

〔重複〕S163→S158→S157→S156→S160→S161→S131→S148→S123→S120。

〔規模〕遺存が悪く、平面形、規模とも不明である。壁溝の連続性からは円形基調の可能性がある。

〔埋土〕壁溝埋土は黒褐色シルトである。

〔壁・床の状況〕壁は未検出である。床面もS157などに破壊され消失している。

〔炉〕未検出である。

〔付属施設〕Pitを3個と壁溝の一端を検出している。

〔遺物出土状況〕土器23.5g 他が出土している。

〔掲載遺物〕なし。

〔時代・時期〕遺構同士の重複関係から縄文時代後期に帰属する。

S164 (第72図、写真図版60)

〔位置〕B区中央北側のIII C k グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕SK105の北西側に地山層とは異なる焼土粒や炭化物粒を含む褐色面が広がっており、別の遺構が存在するものとして、掘り下げを行ったところ、切株周辺で二段の平坦面と壁を確認した。低い面で新しい住居をS164、古く上の面の住居をS165とした。

〔重複〕S167→S165→S164→SK105→S152。

〔規模〕プランの北西側しか残存していないため、詳細な規模は不明である。

〔埋土〕3層に分層した。床面直上にブロック状に褐色～黄褐色砂質シルト層が確認できるが、大部分は炭化物粒・焼土粒の混入する褐色シルトの単層である。ほぼ単一の堆積土で埋められており、人為堆積の可能性が高い。

〔壁・床の状況〕確認できた壁は床面から内傾気味に立ち上がる。確認できた床面は概ね平坦である。

〔炉〕なし。

〔付属施設〕なし。

〔遺物出土状況〕 土器750.2g 他が出土している。堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第133・183・205図、写真図版119・161・173) 土器(No.543～545)、石器(No.2083・2084・2299)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属すると考えられる。

SI65 (第73図、写真図版60)

〔位置〕 B区中央北側のⅢCkグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 SI64に記載した通り、古い段階の住居である。

〔重複〕 SI67→SI65→SI64→SKI05→SI52。

〔規模〕 一部しか残存しないため、詳細な規模は不明である。

〔埋土〕 2層に分層した。壁際には地山起源の褐色砂質シルト層が三角形に堆積しており、この部分は自然堆積と考えられる。大部分は黄褐色シルト塊・炭化物粒・焼土粒を含む褐色シルトの単層で埋まっており、人為堆積の可能性が高いと考えられる。

〔壁・床の状況〕 大きな木根の影響を受けて凹凸が目立つが、影響の少ない床面は概ね平坦と捉えられる。斜面上方の壁は残存状態が比較的良好で床面から内傾気味に立ち上がる。

〔炉〕 堅穴中央より北側において、切株の下で焼土層を検出し地床炉と判断した。焼土に隣接して土器の伴う浅いピットを確認し、炉に伴う埋設土器の可能性も想定したが、木根の破壊を受けており、埋設土器との断定には至らなかった。

〔付属施設〕 柱穴を3個検出した。

〔遺物出土状況〕 土器1,720.5g 他が出土している。堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第133・205図、写真図版119・173) 土器(No.546～550)、石器(No.2300)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属すると考えられる。

SI66 (第74・75図、写真図版61)

〔位置〕 B区中央のⅣCaグリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 SI68の精査用土層ベルトの延長線上で、上位に十和田中掬テフラが堆積する暗褐色シルトを確認、平面検出を行ったところ楕円形もしくは隅丸方形気味のプランを確認し、堅穴住居跡を想定して調査を行った。最終的には北壁や西壁の立ち上がりが認められたことから検出した。

〔重複〕 SI66→SI62→SI35、SI66→SI68。

〔規模〕 重複遺構に破壊を受け、平面形、規模とも不明である。推定としては一辺4m以上の楕円形基調と考えられる。

〔埋土〕 第74図の断面図で3層とした暗褐色シルトによる単層である。この3層の上位に十和田中掬テフラの堆積が認められる。

〔壁・床の状況〕 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔炉〕 未検出である。

〔付属施設〕 柱穴1個を検出した。

〔遺物出土状況〕 土器2,703.4g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第133・134・183・205図、写真図版119・120・161・173) 土器(No.551～563)、石器(No.2085・2086・2301)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代前期前葉に帰属する。加えて、十和田中掬テフラ降下時期より

古いと考えられる。

SI67 (第77図、写真図版62)

〔位置〕 C区のⅢB o～ⅢC k グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 ⅢC k グリッド付近において焼土を検出し、竪穴住居跡の炉と判断し精査を行った。

〔重複〕 SI67→SK45・44・16、SI67→SI65→SI64→SKI05→SI52。

〔規模〕 平面形、規模ともに不明である。床面と推定される硬化面の広がりから、楕円形基調と考えられる。

〔埋土〕 確認できた埋土はわずかで暗褐色シルトの単層である。

〔壁・床の状況〕 壁は未検出である。床面はやや硬くほぼ平坦と想定できる。

〔炉〕 焼土層中から斜位に埋設される土器を検出し、土器埋設炉(斜位)と判断した。焼土は100×60cm程に広がる。

〔付属施設〕 柱穴1個を検出した。

〔遺物出土状況〕 土器1,433.2g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第134図、写真図版120)土器(№564～567)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SI68 (第74・76図、写真図版63)

〔位置〕 B区中央のⅣC f グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 SI13やSI49の北側で竪穴住居跡と想定される壁の立ち上がりを確認した。

〔重複〕 SI58→SI68→SI61→SI49→SI25→SI13≤SI12。

〔規模〕 平面形、規模ともに不明である。残存部分から推定すると、直径5m程の円形の可能性がある。

〔埋土〕 暗褐色シルトによる単層である。

〔壁・床の状況〕 北壁と東壁の一部を確認した。ほぼ直立気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔炉〕 未検出である。

〔付属施設〕 柱穴5個を検出した。ただし、これらの柱穴が全て本遺構に帰属するかどうか、判断に迷うところもある。

〔遺物出土状況〕 土器911.9g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第134・183図、写真図版120・161)土器(№568～573)、石器(№2087・2088)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物及び重複遺構との新旧関係から縄文時代後期初頭と推定される。

SI69 (第78図、写真図版64)

〔位置〕 B区西側、VB d・e グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で検出した。

〔重複〕 SKI07→SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SI24→SI04。

〔規模〕 重複する遺構に切られ全体の形状は不明だが、炉と柱穴、北側に少し残った壁から推定すると楕円形を呈すると思われる。

〔埋土〕 黒褐色シルト主体の単層である。

〔壁・床の状況〕 北側の床面と壁が少し残っているだけの状態であるが、北壁は緩やかに立ち上がる。南壁はSI59に削平を受けて残っていない。

3 竪穴状遺構 (SK I)

[炉] 土器埋設炉(横位)を検出した。焼土層は20～30cmで発達し、土器は焼土層の北端付近に横位に埋設されている。風化した花崗岩が埋設土器に近接して検出されているが、あるいは炉石の残存か。

[付属施設] 4個の柱穴を検出した。柱穴の埋土はどれも炭化物を微量含む、黒褐色シルトを主体とする。深さは最大で31cmである。

[遺物出土状況] 土器486.6g他が出土している。

[掲載遺物] (第134図、写真図版120)土器(No.574～577)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

3 竪穴状遺構 (SK I)

SK101 (第79図、写真図版65)

[位置] VID 1 グリッドに位置する。

[検出状況] IV層上面にて褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

[重複] SK101→SL01。

[規模] 3.42×3.10mの円形を呈し、残存深度は18cmである。

[埋土] 埋土の主体は2層で、II a層(褐色シルト)相当の褐色シルトである。壁際には地山起源の黄褐色シルトである3層が三角状に堆積している。

[壁・床の状況] 床面は概ね平坦である。壁は床面から検出面に向けて、外傾し緩やかに立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器108.9g他が出土している。

[掲載遺物] (第135図、写真図版121)土器(No.578)を掲載した。

[時代・時期] 詳細な時期は明らかではないが、出土土器は縄文時代後期である。

SK102 (第79図、写真図版66)

[位置] B区東側のVD a グリッド付近に位置する。

[検出状況] 重機により3段階に分けて掘り下げた最終段階のV層上面で褐色シルトのプランで検出した。

[重複] SK102→SKT02。

[規模] 北東-南西方向約3m、北西-南東方向約1.9mの不整形である。

[埋土] 2層に分層した。壁際に地山起源の黄褐色シルト層が三角形に堆積し、その他は黄褐色シルトブロックが混在する褐色シルトで埋没している。

[壁・床の状況] 床面は概ね平坦である。V層を掘り下げて確認をしたため、壁の残存状態は悪く、数cmから数十cm立ち上がるのみである。

[遺物出土状況] 土器111.1g他が出土している。

[掲載遺物] (第135図、写真図版121)土器(No.579)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物や検出面、遺構の形態から縄文時代前期に帰属すると考えられる。

SK103 (第80図、写真図版67)

[位置] B区東側のIV D p グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕重機により3段階に分けて掘り下げた最終段階のV層上面で褐色のプランで検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕東西方向約2.2m、南北方向約1.6mの歪な楕円形である。

〔埋土〕黄褐色シルトブロックが混在する褐色シルトの単層である。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。V層を掘り下げて確認をしたため、壁の残存状態は悪く、数cmから数十cm立ち上がるのみである。

〔付属施設〕壁際に小規模な柱穴を7個検出した。堆積土は褐色シルト小塊や炭化物粒を含むにぶい黄褐色シルトの単層である。

〔遺物出土状況〕土器107.9g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第135図、写真図版121)土器(Na580)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物や検出面、遺構の形態から縄文時代前期に帰属すると考えられる。

SK104 (第80図、写真図版68)

〔位置〕B区中央のIV C i グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕IV層上面で暗褐色のプランとして検出した。

〔重複〕SK106≦SK104→SI55→SI27→SK17。

〔規模〕東西方向約2.1m、南北方向約1.6mの不整長方形である。

〔埋土〕2層に分層した。下位はにぶい黄褐色シルト、上位は暗褐色シルト主体で、全体的に夾雑物が多い。

〔壁・床の状況〕壁は床面からなだらかに立ち上がる。床面は北から南に向かってやや傾斜を呈する。

〔遺物出土状況〕土器711.2g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第135・183図、写真図版121・161)土器(Na581～583)、石器(Na2089)を掲載した。

〔時代・時期〕出土土器は縄文時代後期である。

SK105 (第81図、写真図版69)

〔位置〕B区中央のIII C i グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕IV層上面で炭化物の含む褐色シルトのプランとして検出した。

〔重複〕SI67→SI65→SI64→SK105→SI52、SK105→SI12。

〔規模〕北西-南東方向で約4.5m、北東-南西方向で約2.8mの長楕円形である。

〔埋土〕明黄褐色シルト塊や炭化物粒を含む褐色シルトの単層である。層高がなく、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔壁・床の状況〕壁は床面からなだらかに立ち上がる。中央付近が浅く窪んでいるが、明瞭な凹凸は確認できなかった。

〔付属施設〕柱穴を4個検出した。4個ともにぶい黄褐色シルトの単層である。

〔遺物出土状況〕土器1,399.9g他が出土している。堆積土中から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕(第135・183・205図、写真図版121・161・173)土器(Na584～588)、石器(Na2090・2302)を掲載した。

〔時代・時期〕遺構同士の重複関係や出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SK106 (第82図、写真図版70)

〔位置〕 B区中央、IVC e・IVCh グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で暗褐色の方形の広がりとして検出した。

〔重複〕 SK106≦SK104→SI55→SI27→SK17。

〔規模〕 東西に3.1m、南北に2.1mの方形を呈するものと思われる。

〔埋土〕 2層に分層した。1層は暗褐色シルトを主体とし、2層は褐色ブロックを含む暗褐色シルトで北壁際に三角形に堆積している。

〔壁・床の状況〕 壁は直線的に緩やかに立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔付属施設〕 住居のほぼ中央に1個の柱穴を検出した。埋土は褐色ブロックを微量含む、暗褐色シルトを主体とする。深さは42cmである。

〔遺物出土状況〕 土器23.9g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第135図、写真図版121) 土器(Na589)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK107 (第82図、写真図版71)

〔位置〕 B区西側、VB e・VB j グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で暗褐色の方形の広がりとして検出した。

〔重複〕 SK107→SI54。

〔規模〕 北西から南東に3.7m、北東から南西に2.9mの方形を呈するものと思われる。

〔埋土〕 炭化物を微量含む、暗褐色シルトを主体の単層である。

〔壁・床の状況〕 壁は直線的に緩やかに立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔付属施設〕 住居のほぼ中央に1個の柱穴を検出した。埋土は暗褐色シルト主体の単層である。深さは29cmである。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 遺構同士の重複関係からは縄文時代後期より古い。検出面や埋土の様相からは縄文時代前期前葉の可能性はある。

4 土坑 (SK)

SK01 (第83図、写真図版72)

〔位置〕 VID v・VID b グリッド間に位置する。

〔検出状況〕 調査区際の子層直下のV層上面で、暗褐色シルトの不明瞭な半楕円形のプランを検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 調査区際であることと、削平の影響を受けている可能性があるため正確ではない。残存部のみで判断した場合、開口部2.1×1.72mの楕円形を呈し、残存深度は34cmである。

〔埋土〕 4層に分類。2～3層は攪拌され、層の境が明瞭ではない。削平の影響が考えられるが明確にはできなかった。本遺構の埋土主体は4層の暗褐色シルトである。しかし層高が薄いため人為堆積または自然堆積の判断はできない。

〔壁・底の状況〕 底部はほぼ平坦で、壁は開口部にむけて緩やかに外傾して立ち上がる。

- 〔遺物出土状況〕 土器139.5g 他が出土している。
 〔掲載遺物〕 (第135図、写真図版121) 土器(No.590)を掲載した。
 〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SK03 (第83図、写真図版72)

- 〔位置〕 V C f グリッドに位置する。
 〔検出状況〕 IV層上面にて暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。
 〔重複〕 SK03→SK04。
 〔規模〕 残存部のみで判断した場合、開口部2.16×1.92mの不整楕円形を呈する。残存深度は20cmである。
 〔埋土〕 II a層相当の暗褐色シルトの単層で、廃棄焼土と思われる塊状の焼土が混じっているため人為により堆積した可能性がある。
 〔壁・底状況〕 底面は概ね平坦である。壁は開口部にかけて緩やかに外傾し立ち上がる。
 〔遺物出土状況〕 土器 1,924.7g 他が出土している。
 〔掲載遺物〕 (第135・176図、写真図版121・156) 土器(No.591～603)、土製品(No.1238)を掲載した。
 〔時代・時期〕 出土遺物から弥生時代に帰属する。

SK04 (第83図、写真図版72)

- 〔位置〕 V C a グリッドに位置する。
 〔検出状況〕 SK03の北西側の壁を精査中に、SK03とは違うプランの広がりを確認した。再度その周辺の再検出を行ったところ、IV層上面に暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。SK03との重複関係を把握するために南北に土層観察用のベルトを設けて精査にあたった。
 〔重複〕 SK03→SK04。
 〔規模〕 不手際により、SK03と新旧を逆転させて精査したため、規模はおおよそのものである。開口部1.91×1.90mの不整円形を呈する。残存深度は40cmである。
 〔埋土〕 II a層相当の暗褐色シルトの単層で開口部から床面まで一様である。SK03とは異なり、人為堆積か否かの判断は難しい。
 〔壁・底の状況〕 底面は平坦で、壁は開口部にむけて緩やかに外傾して立ち上がる。
 〔遺物出土状況〕 土器1,157.5g 他が出土している。
 〔掲載遺物〕 (第135・136・176・206図、写真図版121・156・173・174) 土器(No.604～609)、土製品(No.1239)、石器(No.2303～2305)を掲載した。
 〔時代・時期〕 出土遺物から弥生時代に帰属する。

SK05 (第83図、写真図版72)

- 〔位置〕 A区北側の端、VIC n グリッドに位置する。
 〔検出状況〕 IV層上面で暗褐色のプランとして確認した。
 〔重複〕 なし。
 〔規模〕 開口部で長軸0.97m、短軸0.94mの円形基調である。検出面からの残存深度は38cmである。
 〔埋土〕 3層に分層した。暗褐色シルトを主体とする。
 〔壁・底の状況〕 底面は中央が窪み、壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器54.5g 他が出土している。特記事項として縄文土器が埋土から2点出土しており、1点は縄文時代早期の土器片である。

〔掲載遺物〕 (第136図、写真図版121) 土器(No.610・611)を掲載した。

〔時代・時期〕 詳細な時期は不明であるが、縄文時代に帰属する可能性が高い。

SK06 (第83図、写真図版73)

〔位置〕 B区の南端、VIC h グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 SI02・11の断面精査時に南に延ばしたトレンチ断面でII a層を検出面とする掘り込みを検出し、平面からも暗褐色の円形プランを確認した。西側はトレンチ掘削時に削平したため確認できなかった。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 残存する長軸は0.67mで円形基調である。検出面からの残存深度は61cmである。

〔埋土〕 2層に分層した。暗褐色土を主体としている。

〔壁・底の状況〕 底面は中央が窪んで、壁は底面から直線的に立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器20.1g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第136図、写真図版121) 土器(No.612)を掲載した。

〔時代・時期〕 詳細な時期は不明であるが、縄文時代前期に帰属する可能性が高い。

SK08 (第83図、写真図版73)

〔位置〕 IV C u グリッドに位置している。

〔検出状況〕 SI10を精査中にその床面 (IV層上面) において、暗褐色シルトの不明瞭なプランを確認した。SI10の精査後に床面を下げたところ、明瞭な楕円形のプランとして検出した。

〔重複〕 SK08≦SI07→SI10。

〔規模〕 開口部1.20×0.85mの楕円形を呈する。残存深度は30cmである。

〔埋土〕 埋土の主体はII a層由来の暗褐色シルトで、本来の色よりやや明るい。一部の壁際には壁崩落土と思われる褐色シルトが堆積している。

〔壁・底の状況〕 底面は概ね平坦である。壁は底面よりほぼ直立して立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器477.2g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第176図、写真図版156) 土製品(No.1240)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK09 (第84図、写真図版73)

〔位置〕 B区の南側、VIC g グリッドに位置する。

〔検出状況〕 グリッドに沿って東西2mごと南北にベルトを残してIV層上面まで掘削していたところ、IV層上面で暗褐色の楕円形の広がりを検出し、VIC gのベルト側面にも対応する掘り込みを確認して遺構と認識した。IV層上面では底面から中端のプランは認識できたが、ベルトに残るII a層内では明瞭な壁を確認することができなかった。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 長軸1.82m、短軸0.62mで楕円形を呈する。底面までの残存深度は約60～80cmである。

〔埋土〕 5層に分層した。暗褐色シルトと黄褐色シルトを主体としている。

〔壁・底の状況〕底面はやや中央が窪んで、壁は底面から直線的に外傾して立ち上がる。

〔出土遺物〕なし。

〔時代・時期〕時代の特定できる遺物が伴わず帰属時期は不明である。

SK10 (第84図、写真図版73)

〔位置〕C区北側、II B 1 グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面で暗褐色の円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕南東側がトレンチで欠けているが、開口部で1.48×1.03mと推定され、楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は52cmである。

〔埋土〕褐色ブロックを微量含む、暗褐色シルト主体の単層である。

〔壁・底の状況〕斜面南は不明瞭だが、北壁は直線的に緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器125.2g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第136図、写真図版121)土器(№613)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK12 (第84図、写真図版74)

〔位置〕B区北側の西端、IV B c グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕トレンチ23のII a層上面で遺物を多く含む黒褐色の広がりを確認し、調査区西壁にII a層を掘り込む黒褐色～黒色の掘り込みを確認した。周辺は切株が多く根による攪乱でプランが不明瞭であったが、トレンチから東側にかけて黒褐色～黒色の沈み込みを確認したため遺構として検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕残存部分で長軸2.53m、短軸2.36mの不整形である。検出面から底面までの残存深度は32cmである。

〔埋土〕3層に分層した。黒色シルトを主体する。根によって北側や部分的に攪乱を受けている。

〔壁・底の状況〕底面は凹凸があり斜面に沿ってやや傾斜する。壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕土器539.3g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第136図、写真図版122)土器(№614～619)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から、弥生時代に帰属する可能性が高い。

SK14 (第84図、写真図版74)

〔位置〕B区東側のIV C w グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕V層上面で暗褐色のプランとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕長軸1.27m、短軸0.97mの長方形基調の土坑である。

〔埋土〕暗褐色シルトの単層である。人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

〔壁・底の状況〕底面は概ね平坦で、壁は底面から内傾気味に立ち上がる。

〔遺物出土状況〕土器135.5g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第136図、写真図版122)土器(№620)を掲載した。

〔時代・時期〕縄文時代に帰属する遺構ではあるが、詳細な時期を判断できる資料は確認できなかった。

た。

SK15 (第84図、写真図版74)

〔位置〕 B区中央、V C a グリッドに位置する。

〔検出状況〕 II a 層で黒色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 SI54→SI69→SI59→SI45→SI34→SK15。

〔規模〕 開口部で1.26×1.12mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は45cmである。

〔埋土〕 黒色シルト主体の単層である。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 状況から縄文時代と推定される。

SK16 (第85図、写真図版74)

〔位置〕 B区北端、III C k グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 V層上面で不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出した。

〔重複〕 SI67→SK45・44・16。

〔規模〕 開口部1.47×1.32mの不整楕円形を呈し、残存深度は45cm。

〔埋土〕 II a 層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

〔壁・底の状況〕 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器603.7g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第136図、写真図版122)土器(No.621・622)を掲載した。

〔時代・時期〕 遺構同士の重複関係や出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

SK17 (第85図、写真図版75)

〔位置〕 B区東側のIV C j グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 II a 層面で黒褐色シルトのプランとして検出した。

〔重複〕 SI27と重複。SI55→SI27→SK17。

〔規模〕 長軸2.29m、短軸2.21mの円形基調の土坑である。

〔埋土〕 3層に分層し、斜面上方の底面付近に地山起源の明黄褐色シルトがブロック状に堆積し、斜面下方には暗褐色シルトが堆積している。中央付近の大部分は黒褐色シルトで埋没している。最下層は自然堆積の様相を呈するが、大部分が同質の堆積土で埋没しており、人為堆積の可能性が想定される。

〔壁・底の状況〕 底面は皿状に窪んでおり、壁は底面からなだらかに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器6,787.7g他が出土している。堆積土から縄文土器が出土している。

〔掲載遺物〕 (第136・137・206・207図、写真図版122・174)土器(No.623～647)、石器(No.2306～2308)を掲載した。

〔時代・時期〕 縄文時代に帰属する遺構ではあるが、詳細な時期を判断できる資料は確認できなかった。

SK18 (第85図、写真図版75)

〔位置〕 C区西側、II B x グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で暗褐色の円形の広がりとして検出した。検出面はIV層だが本来の掘り込み面はより上位であったと思われる。

〔重複〕 SK18≦SK25→SI51→SK36。

〔規模〕 開口部で1.40×1.16mの楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は70cmである。

〔埋土〕 3層に分層した。1・3層は暗褐色シルトを主体とし、混入物などで明確に分層できた。2層は壁が崩落して堆積したものと思われる。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕 土器85.9g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第137図、写真図版123)土器(Na648・649)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK19 (第85図、写真図版75)

〔位置〕 B区南西側、V C g グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で黒褐色の円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部で0.96×0.88mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は71cmである。

〔埋土〕 3層に分層した。1層は暗褐色ブロック少量、炭化物微量含む、黒褐色シルトを主体とし、2・3層は時間幅が少し開くが壁が崩落して堆積したものと思われる。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕 土器552.3g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第137図、写真図版123)土器(Na650)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK20 (第85図、写真図版75)

〔位置〕 B区北西側、III B y グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 V層上面で不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 1.08×(1.32)m、深度は18cm。

〔埋土〕 II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

〔壁・底の状況〕 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器269.4g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第137図、写真図版123)土器(Na651)を掲載した。

〔時代・時期〕 Na651の土器から、弥生時代と推定される。

SK21 (第85図、写真図版76)

〔位置〕 IV B n グリッドに位置する。

[検出状況] IV層上面にて、暗褐色シルトの明瞭な円形のプランとして検出。

[重複] SK29≦SK21≦SL15→SI17。

[規模] 開口部1.17×1.10mの円形を呈す。残存深度は深いところで24cm、浅いところで17cmである。

[埋土] II a層由来の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は不均一で所々凸凹がある。壁は開口部に向けて緩やかに外傾し立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器309.0g他が出土している。

[掲載遺物] (第137図、写真図版123)土器(No.652・653)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK22 (第86図、写真図版76)

[位置] B区中央のIII C_mグリッド付近に位置する。

[検出状況] SI28の床面にてぶい黄褐色シルトのプランとして検出した。

[重複] SK22=SK23→SI28。

[規模] 長軸1.34m、短軸1.04mの円形基調の土坑である。深度は25cm。

[埋土] 3層に分層した。底面付近には褐色シルトが確認でき、暗褐色シルト、ぶい黄褐色シルトの順で埋没している。最下層は夾雑物が少なく自然堆積の可能性が高いが、中～上位は人為堆積の可能性を否定できない。

[壁・底の状況] 底面は概ね平坦で、壁はオーバーハング気味に立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器335.0g他が出土している。

[掲載遺物] (第137図、写真図版123)土器(No.654～659)を掲載した。

[時代・時期] SI28との重複関係から縄文時代後期以前であることは確実であるが、詳細な時期は不明である。

SK23 (第86図、写真図版76)

[位置] B区中央のIII C_mグリッド付近に位置する。

[検出状況] SI28の床面にてぶい黄褐色シルトのプランとして検出した。

[重複] SK22=SK23→SI28。

[規模] 長軸0.74m、短軸0.71mの円形基調の土坑である。深度は23cm

[埋土] 2層に分層した。壁際に地山起源の明黄褐色シルトの堆積が確認できるが、大部分は明黄褐色シルト塊や炭化物を含む褐色砂質シルトで埋没している。夾雑物が多く、人為堆積の可能性が高い。

[壁・底の状況] 底面は概ね平坦で、壁は底面から直立気味に立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器78.9g他が出土している。

[掲載遺物] なし。

[時代・時期] SI28との重複関係から縄文時代後期以前であることは確実であるが、詳細な時期は不明である。

SK24 (第86図、写真図版76)

[位置] IV B_nグリッドに位置する。

[検出状況] 調査区際のV層上面にて褐色シルト～暗褐色シルトの半楕円形のプランとして検出。

[重複] なし。

〔規模〕 残存部から判断した場合、開口部より2.38×1.62mの楕円形を呈し、残存深度は14cmである。

〔埋土〕 IV層相当と思われる褐色シルトで開口部から床面まで一様である。

〔壁・底の状況〕 底面は平坦で、壁は開口部にかけて緩やかに立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器366.0g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第137図、写真図版123)土器(Na660)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK25 (第86図、写真図版77)

〔位置〕 C区II B w グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

〔重複〕 SK18≦SK25→SI51→SK36。

〔規模〕 開口部1.00×0.90mの不整楕円形を呈し、残存深度は35cm。

〔埋土〕 II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

〔壁・底の状況〕 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 時代を特定できる遺物が伴わず帰属時期は不明である。

SK27 (第86図、写真図版77)

〔位置〕 B区北東側、III D u・III D v グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で黒褐色の円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部で1.35×1.26mのほぼ円形を呈する。検出面から底面までの残存深度は87cmである。

〔埋土〕 5層に分層した。1層は黒褐色シルトを主体とし、2層は暗褐色シルトを主体として、レンズ状に堆積している。3層は褐色シルトの壁が崩落して堆積したと思われる。4層は褐色シルト主体、5層は暗褐色シルト主体で、1・2層とは違い、フラットに堆積している。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 詳細な時期は不明であるが、検出面や埋土の様相から縄文時代に帰属する。

SK28 (第87図、写真図版77)

〔位置〕 IV B s グリッドに位置する。

〔検出状況〕 SI17精査後V層上面にて暗褐色シルトの楕円形のプランとして検出。

〔重複〕 SK28→SI53→SI17。

〔規模〕 開口部1.07×0.84mの楕円形を呈し、残存深度は40cmである。

〔埋土〕 埋土の主体はII a層相当の暗褐色シルトである。一部の壁際には崩落土と思われる砂質の黄褐色シルトが堆積している。

〔壁・底の状況〕 底面は概ね平坦である。壁は開口部に向けてやや外傾しながら立ち上がる。

〔遺物出土状況〕 土器114.3g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第137図、写真図版123)土器(Na661・662)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK29 (第87図、写真図版77)

[位置] IV B n グリッドに位置する。

[検出状況] V層上面にて暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出した。

[重複] SK29≤SK21≤SL15→SI17。

[規模] 開口部1.02×1.00mの円形を呈し、残存深度は48cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は開口部に向けてやや外傾しながら立ち上がる。

[遺物出土状況] なし。

[時代・時期] 縄文時代と推定される。

SK30 (第87図、写真図版78)

[位置] C区東側のII C p グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面でしまりの異なる黄褐色シルトのプランとして検出した。

[重複] なし。

[規模] 長軸0.98m、短軸0.81mの楕円形基調の土坑である。深度は31cm。

[埋土] 明黄褐色シルト塊を含む黄褐色シルトの単層である。人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。

[壁・底の状況] 底面は概ね平坦で、壁は底面から直線的に立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器65.1g 他が出土している。

[掲載遺物] なし。

[時代・時期] 縄文時代に帰属する遺構ではあるが、詳細な時期を判断できる資料は確認できなかった。

SK32 (第87図、写真図版78)

[位置] B区西側、IV B e グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出

[重複] SI56→SK32。

[規模] (0.9)×0.85m、深度20cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器204.5g 他が出土している。

[掲載遺物] (第138図、写真図版123)土器(No.663)を掲載した。

[時代・時期] 時代を特定できる遺物が伴わず帰属時期は不明である。

SK33 (第87図、写真図版78)

[位置] II B v グリッドに位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

[重複] SK33≤SI39。

[規模] 1.0×0.95m、深度25cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] なし。

[時代・時期] 不明である。

SK34 (第87図、写真図版78)

[位置] C区II B q グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

[重複] SK34→SI37→SI06。

[規模] 1.09×1.05m、深度20cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器137.6g他が出土している。

[掲載遺物] (第138図、写真図版123)土器(No.664～666)を掲載した。

[時代・時期] 時代を特定できる遺物が伴わず帰属時期は不明である。

SK36 (第88図、写真図版79)

[位置] C区II B r グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

[重複] SK18≦SK25→SI51→SK36。

[規模] 一部のみ検出(1.13)×(0.95)m。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器1,287.0g他が出土している。

[掲載遺物] (第138・183図、写真図版123・161)土器(No.667～670)、石器(No.2091)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物から縄文時代後期初頭の帰属と考えられる。

SK37 (第88図、写真図版79)

[位置] III C v グリッドに位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

[重複] SK37→SI11≦SI29→SI30。

[規模] 開口部1.00×0.80mの不整楕円形を呈し、残存深度は35cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器56.6g他が出土している。

[掲載遺物] (第138図、写真図版123)土器(No.671・672)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK40 (第88図、写真図版79)

- [位置] III B i グリッドに位置する。
- [検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。
- [重複] なし。
- [規模] 0.73×0.62m。深度41cm。
- [埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。
- [壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。
- [遺物出土状況] 土器5.0g出土した。
- [掲載遺物] なし。
- [時代・時期] 時代を特定できる遺物が伴わず帰属時期は不明である。

SK41 (第88図、写真図版79)

- [位置] C区東側の調査区際II C t グリッド付近に位置する。
- [検出状況] 捨て場の堆積土を掘削終了後、V層上面で暗褐色シルトのプランとして検出した。
- [重複] 捨て場より古い。
- [規模] 一部のみ検出であるため、詳細な規模は不明である。
- [埋土] 2層に分層した。壁際に褐色シルトが堆積し、中央付近には暗褐色シルトが堆積している。一部であることと、層高がないため、人為堆積か自然堆積かの判断はできなかった。
- [壁・底の状況] 確認できた底面には明瞭な凹凸は確認できず、壁は底面からなだらかに立ち上がる。
- [遺物出土状況] なし。
- [時代・時期] 捨て場との関係から縄文時代後期以前であることは確実であるが、詳細な時期を判断できる資料は確認できなかった。

SK42 (第88図、写真図版79)

- [位置] III B y グリッドに位置する。
- [検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。
- [重複] SK42≤SL18→SI29→SI30。
- [規模] 一部のみ検出。長軸のみ1.20m。深度60cm。
- [埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。
- [壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。
- [遺物出土状況] 土器349.8g他が出土している。
- [掲載遺物] (第138・184図、写真図版123・161)土器(Na673～676)、石器(Na2092)を掲載した。
- [時代・時期] 時代を特定できる遺物が伴わず帰属時期は不明である。

SK43 (第88図、写真図版80)

- [位置] IV C p グリッドに位置する。
- [検出状況] V層上面より暗褐色シルトの不明瞭な広がりを検出。
- [重複] SK43→SI19→SL02。
- [規模] 開口部0.92×0.81mの楕円形を呈し、残存深度は17cmである。
- [埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁はほぼ直立して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器172.6g 他が出土している。

[掲載遺物] (第138図、写真図版123)土器(№677)を掲載した。

[時代・時期] 出土遺物から縄文時代に帰属する。

SK44 (第89図、写真図版80)

[位置] III C k グリッドに位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

[重複] SI67→SK45・44・16。

[規模] 0.98×(1.01)m。深度75cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器27.8gが出土している。

[掲載遺物] なし。

[時代・時期] 遺構同士の重複関係から縄文時代後期に帰属する。

SK45 (第89図、写真図版80)

[位置] III B o グリッドに位置する。

[検出状況] V層上面より不明瞭な暗褐色シルトの広がりを検出。

[重複] SI67→SK45・44・16。

[規模] 1.38×1.20m、深度53cm。

[埋土] II a層相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

[壁・底の状況] 底面は平坦で、壁は底面から開口部にかけて外傾して立ち上がる。

[遺物出土状況] 土器684.6g 他が出土している。

[掲載遺物] (第138図、写真図版123)土器(№678～682)を掲載した。

[時代・時期] 遺構同士の重複関係や出土遺物から縄文時代後期に帰属する。

5 フラスコ状土坑 (SKF)

SKF01 (第90図、写真図版81)

[位置] C区北側、II B h グリッドに位置する。

[検出状況] IV層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

[重複] なし。

[規模] 開口部は1.01×0.85mで、底面は1.44×1.36mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は131cmである。

[埋土] 6層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体だが、所々に炭化物を少量含む、黒褐色シルトが介在する。底面には黄褐色シルトが堆積している。

[壁・底の状況] 壁は底面から内湾気味に立ち上がり、途中から直線的に立ち上がるフラスコ状を呈すると思われる。底面はほぼ平坦である。

[遺物出土状況] 土器86.5g 他が出土している。

〔掲載遺物〕(第138図、写真図版124)土器(No.683・684)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF02 (第90図、写真図版81)

〔位置〕C区北側、II B m グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面で暗褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部は1.66×1.45mで、底面は1.50×1.33mの楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は158cmである。

〔埋土〕10層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体で、締めりや混入物で明確に分層できた。

〔壁・底の状況〕壁は底面から内湾気味に立ち上がり、途中からやや外傾しながら立ち上がるフラスコ状を呈すると思われる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器1,156.5g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第138・207図、写真図版124・174)土器(No.685～687)、石器(No.2310)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF03 (第90図、写真図版81)

〔位置〕C区南西側、III B e グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部は1.23×1.12mで、底面は1.14×1.02mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は115cmである。

〔埋土〕6層に分層した。暗褐色シルト主体で、締めりや混入物で明確に分層できた。

〔壁・底の状況〕壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器391.2g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第138・207・208図、写真図版124・174)土器(No.688)、石器(No.2311～2313)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF04 (第90図、写真図版81)

〔位置〕C区南西側、III B d グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部は1.49×1.46mで、底面は1.34×1.26mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は144cmである。

〔埋土〕9層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体で、下部には暗赤褐色焼土層がある。その上部に炭化物和焼土ブロックを少量含む黒褐色シルト層が堆積し、遺物も多く出土している。

〔壁・底の状況〕壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器5,565.9g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第139・140・208図、写真図版124・125・174)土器(No.689～694)、石器(No.2314)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF05 (第91図、写真図版82)

〔位置〕 C区南西側、ⅢB d・ⅢB e グリッドに位置する。

〔検出状況〕 Ⅳ層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部は1.42×1.34mで、底面は1.30×1.23mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は138cmである。

〔埋土〕 12層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体で、底面の両端には暗赤褐色焼土層がある。その上部に炭化物を少量含む黒褐色シルト層が堆積し、遺物も多く出土している。補足として、堆積土はSKF04と類似する。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央に副穴がある。副穴の深さは17cmで、暗褐色シルト主体の埋土である。

〔遺物出土状況〕 土器4,883.6g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第140・209・210図、写真図版125・174・175) 土器(№695～701)、石器(№2315～2317)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF06 (第91図、写真図版82)

〔位置〕 C区南西側、ⅢB i グリッドに位置する。

〔検出状況〕 Ⅳ層上面で黒褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部は1.41×1.31mで、底面は1.23×1.16mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は185cmである。

〔埋土〕 11層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体である。細かく分層したが、主体土や粘性、締まりがほぼ同一ということから2～11層は人為堆積の可能性があると思われる。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕 土器132.7g他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第140図、写真図版126) 土器(№702)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF07 (第91図、写真図版82)

〔位置〕 C区南西側、ⅢB d グリッドに位置する。

〔検出状況〕 Ⅳ層上面で暗褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部は1.65×1.50mで、底面は1.06×1.03mの楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は144cmである。

〔埋土〕 9層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体で、締まりや混入物で明確に分層できた。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕 土器367.1g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第140・210・211図、写真図版126・175)土器(Na.703・704)、石器(Na.2318・2319)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF08 (第92図、写真図版82)

〔位置〕C区南西側、ⅢB i グリッドに位置する。

〔検出状況〕Ⅳ層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部は1.48×1.41mで、底面は1.60×1.53mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は165cmである。

〔埋土〕11層に分層した。大部分は暗褐色シルト主体で、締めりや混入物で明確に分層できた。

〔壁・底の状況〕壁は底面から内湾気味に立ち上がり、途中からやや外傾しながら立ち上がるフラスコ状を呈すると思われる。底面はほぼ平坦で、中央に副穴がある。副穴の深さは7cmで、赤褐色シルト主体の埋土である。

〔遺物出土状況〕土器1,792.8g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第141・176・184・211図、写真図版126・156・161・175)土器(Na.705～707)、土製品(Na.1241)、石器(Na.2093・2320)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF09 (第92図、写真図版83)

〔位置〕C区南西側、ⅢB h グリッドに位置する。

〔検出状況〕Ⅳ層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部は1.01×1.09mで、底面は1.22×1.12mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は158cmである。

〔埋土〕3層に分層した。埋土上位～下位は1層灰黄褐色砂質シルトによる人為堆積層である。埋土下位の2・3層は地山土で、壁の地山崩落土と判断される。

〔壁・底の状況〕壁は底面から内湾気味に立ち上がり、胴部中心から開口部にかけて窄むフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器938.4g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第141・211図、写真図版126・175)土器(Na.708～713)、石器(2321・2322)を掲載した。

〔時代・時期〕出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF10 (第92図、写真図版83)

〔位置〕C区南西側、ⅢB j グリッドに位置する。

〔検出状況〕Ⅳ層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部は0.98×1.20mで、底面は1.37×1.49mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は165cmである。

〔埋土〕10層に分層した。基本的に自然堆積であるが、9層など人為が介在する土層も認められる。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から外傾気味に立ち上がり、胴部途中から強く内傾し立ち上がるプラスチック状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央に副穴がある。副穴の深さは5cmである。

〔遺物出土状況〕 土器6,048.3g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第141・142図、写真図版126・127) 土器(No.714～728)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

SKF11 (第92図、写真図版83)

〔位置〕 C区南西側、III B j グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層上面で暗褐色シルトの円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 SKF11→SL08。

〔規模〕 開口部は0.95×0.84mで、底面は1.58×1.53mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は128cmである。

〔埋土〕 5層に分層した。1～4層は人為堆積層で埋め戻し行為によると判断される。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から内傾気味に立ち上がり、胴部途中から傘まりながら立ち上がるプラスチック状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央に副穴がある。副穴の深さは5cmである。

〔遺物出土状況〕 土器6,072.8g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第142・143図、写真図版127・128) 土器(No.729～736)を掲載した。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代後期初頭に帰属する。

6 陥し穴 (SKT)

SKT01 (第93図、写真図版84)

〔位置〕 B区東側、VD k・p グリッドに位置する。

〔検出状況〕 II a層で黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部で2.49×1.33mの楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は140cmである。

〔埋土〕 5層に分層した。大部分は暗褐色シルトを主体とし、締めりや混入物で明確に分層できた。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦で、一列に4個の副穴がある。副穴の深さは最大で24cmで、どれも暗褐色シルト主体の埋土である。

〔遺物出土状況〕 土器102.0g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第143図、写真図版128) 土器(No.737・738)を掲載した。

〔時代・時期〕 遺構の形態から縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

SKT02 (第93図、写真図版84)

〔位置〕 B区東側のVD a グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 重機により3段階に分けて掘り下げた最終段階のV層上面で黒褐色シルトのプランで検出した。

〔重複〕 SKI02→SKT02。

〔規模〕 長軸2.74m、短軸0.61mの溝状の陥し穴である。

〔埋土〕 4層に分層した。中～下位は夾雑物の多い暗褐色～褐色シルトで埋まっており、人為堆積の可能性が想定される。その直上には壁の崩落土と考えられる黄褐色シルトが三角形に堆積し、暗褐色～褐色シルト、黒褐色シルトの順で埋没している。上部は自然堆積と考えられる。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕 土器202.0g他が出土している。特記事項として2層から土器片が出土。

〔掲載遺物〕 (第143図、写真図版128)土器(Na.739・740)を掲載した。

〔時代・時期〕 遺構の形態から縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

SKT03 (第93図、写真図版84)

〔位置〕 B区南側、VIC h グリッドに位置する。

〔検出状況〕 IV層で黒褐色シルトの円形の広がりとして検出した。II a層あたりから遺構があったと思われるがIV層まで下げて遺構を認知した。

〔重複〕 SKT03→SKT09→SI11→SI102。

〔規模〕 開口部で1.19×1.08mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は64cmである。

〔埋土〕 3層に分層した。大部分は黒褐色シルトを主体とするが、混入物などで明確に分層できた。最下層は暗褐色シルト主体でフラットに堆積している。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央に副穴がある。副穴の深さは22cmで、暗褐色シルト主体の埋土である。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 遺構の形態から縄文時代前期もしくはそれ以前と考えられる。

SKT04 (第93図、写真図版85)

〔位置〕 B区東側のIV D 1 グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕 調査区際で、IV層上面で黒褐色シルトのプランとして検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 一部しか確認していないため、詳細な規模は不明である。

〔埋土〕 5層に分層した。下位には褐色、暗褐色、暗褐色シルトの順で三角形に堆積しており、自然堆積と考えられる。中～上位は壁際には黄褐色シルト塊を含む暗褐色シルトが確認でき、中央付近には黒褐色シルトが広く堆積している。

〔壁・底の状況〕 壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。

〔付属施設〕 1個の副穴を検出した。

〔遺物出土状況〕 土器31.2gが出土している。

〔掲載遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 遺構の形態から縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

SKT05 (第94図、写真図版85)

〔位置〕 B区南西側、V B t グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面で検出したが、断面を見るとII a層下位で検出できたと思われる。

〔重複〕なし。

〔規模〕西側調査区境に位置するため全体の形状は不明だが、残存する範囲で推定すると楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は116cmである。

〔埋土〕4層に分層した。大部分は黒褐色シルトを主体とするが、3層の褐色シルト層が下部の方に介在する。

〔壁・底の状況〕壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕なし。

〔時代・時期〕遺構の形態から縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

SKT06 (第94図、写真図版85)

〔位置〕B区東側のIV C s グリッド付近に位置する。

〔検出状況〕重機により3段階に分けて掘り下げた最終段階のV層上面で黒褐色シルトのプランで検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕長軸3.38m、短軸0.93mの溝状の陥し穴である。

〔埋土〕5層に分層した。最下層には黒褐色シルトが薄く堆積し、その上部に褐色シルト、暗褐色シルト、黒褐色シルトの順で堆積している。上部の壁際にはV層起源の黄褐色シルトが堆積している。断面観察箇所では確認できなかったが、1層中にTo-Cuの塊が確認できる。

〔壁・底の状況〕壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器333.6gが出土している。

〔掲載遺物〕なし。

〔時代・時期〕遺構の形態から縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

SKT07 (第94図、写真図版85)

〔位置〕C区南東側、III D q グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層で黒褐色の楕円形の広がりで検出した。

〔重複〕SKT08→SKT07。

〔規模〕東側調査区境に位置するため全体の形状は不明だが、残存する範囲で推定すると楕円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は105cmである。

〔埋土〕6層に分層した。大きく上・中・下部に分けられる。上部は褐色ブロックと炭化物微量含む黒褐色シルトを主体とする。中間部は3層の壁崩落層を除いて暗褐色シルトを主体とする。下部は炭化物を微量含む褐色シルトを主体とし、上部と比べると締まりがない。

〔壁・底の状況〕壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。

〔遺物出土状況〕土器490.6g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第143・212図、写真図版128)土器(№741～745)、石器(№2323)を掲載した。

〔時代・時期〕遺構の形態から縄文時代中期後半～後期前半と考えられる。

SKT08 (第94図、写真図版85)

[位置] C区南東側、III D q グリッドに位置する。

[検出状況] IV層で検出した。

[重複] SKT08→SKT07。

[規模] 東側調査区境に位置するのとSKT07に切られているため全体の形状は不明だが、残存する範囲で推定すると、平面形は1.43×1.25mのほぼ円形を呈すると思われる。検出面から底面までの残存深度は137cmである。

[埋土] 埋土は、地山と同じ色をしているが、ボソボソと締まりがない様相であった。

[壁・底の状況] 壁は底面から直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で中央やや右側に副穴がある。副穴の深さは22cmで、褐色シルト主体の埋土である。

[遺物出土状況] 土器313.9g他が出土している。

[掲載遺物] (第143図、写真図版128)土器(Na745)を掲載した。

[時代・時期] 遺構の形態から縄文時代前期もしくはそれ以前と考えられる。

SKT09 (第95図、写真図版86)

[位置] B区南側のVI C h グリッド付近に位置する。

[検出状況] 調査区際で、IV層上面で黒褐色シルトのプランとして検出した。

[重複] SKT03→SKT09→SI11→SI02。

[規模] 推定(1.27)×(1.19)m。深度86cm。

[埋土] 3層に分層した。下位には褐色、暗褐色、暗褐色シルトの順で三角形状に堆積しており、自然堆積と考えられる。中～上位は壁際には黄褐色シルト塊を含む暗褐色シルトが確認でき、中央付近には黒褐色シルトが広く堆積している。

[壁・底の状況] 壁は底面から直線的に立ち上がり、中間から緩やかに外傾する。底面はほぼ平坦である。

[付属施設] 1個の副穴を検出した。

[遺物出土状況] 土器68.3g他が出土している。

[掲載遺物] (第143図、写真図版128)土器(Na746)を掲載した。

[時代・時期] 遺構の形態から縄文時代前期もしくはそれ以前と考えられるが、遺構同士の重複関係からは縄文時代後期もしくはそれ以降となる。ただし重複関係の把握を誤った可能性もある。

SKT10 (第95図、写真図版86)

[位置] B区東側のIV D k・p グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面で濁った褐色シルトのプランとして検出した。

[重複] なし。

[規模] 長軸1.84m、短軸1.82mの円形基調の土坑である。深度71cm。

[埋土] 4層に分層した。壁際には地山起源の黄褐色シルト層が三角形状に堆積している。中～下位は夾雑物の多い黒褐色～暗褐色シルト主体、上位は褐色シルト主体である。最下層は自然堆積の様相を呈し、その他は人為堆積の可能性が高い。

[壁・底の状況] 底面付近は皿状に窪み、壁は直立気味に立ち上がる。

[付属施設] 底面中央付近に比較的大きいPitがあり、その横にさらに小規模なPitが検出された。堆

積土はいずれも褐色シルトの単層である。

〔遺物出土状況〕 土器25.0g 他が出土している。

〔掲載遺物〕 (第143図、写真図版128)土器(№747・748)を掲載した。

〔時代・時期〕 形態的な特徴から縄文時代前期頃の陥し穴の可能性が高い。

SKT11 (第95図、写真図版86)

〔位置〕 IV B j グリッドに位置する。

〔検出状況〕 SI49精査時にそれを切る暗褐色シルトの不明瞭な広がりを確認。SI49精査後に再検出すると、楕円形のプランとして検出した。

〔重複〕 SI49→SKT11。

〔規模〕 開口部1.78×0.88mの楕円形を呈し、残存深度は42cmである。主軸方向は(北東-南西方向)である。

〔埋土・底の状況〕 2層に分類した。暗褐色シルトが埋土の主体である。壁や床面には地山起源の黄褐色シルトが堆積しており、壁の崩落土と考えられる。

〔壁・底の状況〕 底面は平坦で、壁は開口部にかけてやや外傾し緩やかに立ち上がる。底面に副穴等の施設は確認するに至らなかった。

〔遺物出土状況〕 土器80.7g 出土している。

〔掲載遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 出土遺物から縄文時代に帰属する。

7 焼土遺構・炉跡 (S L)

SL01 (第96図、写真図版87)

〔位置〕 VID 1 グリッドに位置している。

〔検出状況〕 SKI01検出時にIV層上面に赤変している範囲を検出した。

〔重複〕 SKI01→SL01。

〔規模〕 1.19×1.15mの不整形な形で赤変している。

〔埋土・焼土〕 掘り込みは認められない。被熱層の厚さは10cmである。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 遺構の掘り込み面も特定できないので、時期の特定には至らなかった。

SL02 (第96図、写真図版未掲載)

〔位置〕 IV C p グリッドに位置している。

〔検出状況〕 II a 層 (暗褐色シルト) 上面にて、赤変している不明瞭な範囲を検出した。

〔重複〕 SK43→SI19→SL02。

〔規模〕 0.56×0.54mの不整形な形で赤変している。

〔埋土・焼土〕 掘り込みは認められない。被熱層の厚さは12cmである。

〔出土遺物〕 なし。

〔時代・時期〕 遺構の掘り込み面も特定できないので、時期の特定には至らなかった。

SL03 (第96図、写真図版未掲載)

- [位置] IV C q グリッドに位置する。
- [検出状況] SL02より南側のII a層(暗褐色シルト)上面にて、赤変する不明瞭な範囲を検出した。
- [重複] なし。
- [規模] 0.47×0.44mの不整形円形に赤変している。
- [埋土・焼土] 掘り込みは認められない。被熱層の厚さは3～4cmである。
- [出土遺物] なし。
- [時代・時期] 遺構の掘り込み面も特定できないので、時期の特定には至らなかった。

SL04 (第96図、写真図版87)

- [位置] B区南側のVIC g グリッド付近に位置する。
- [検出状況] V層上面で不整形の赤褐色焼土層を検出した。
- [重複] SL04→SI02。
- [規模] 把握できる最大規模は35cmに焼土層が広がる。
- [埋土] 掘り込みはなく、地山層が赤褐色に赤変している。
- [出土遺物] なし。
- [時代・時期] 遺構同士の重複関係からは縄文時代後期より古いのが、詳細な時期は特定できなかった。

SL05 (第96図、写真図版87)

- [位置] B区東側のVIC m グリッド付近に位置する。
- [検出状況] V層上面で不整形の赤褐色焼土層を検出した。
- [重複] なし。
- [規模] 一部のみ検出であるが40cm程である。
- [埋土] 掘り込みはなく、地山層が赤褐色に赤変している。
- [掲載遺物] (第184図、写真図版161)石器(Na.2094)を掲載した。
- [時代・時期] 詳細な時期は特定できないが、Na.2094の石鏃の基部形態から縄文時代後期の可能性がある。

SL06 (第96図、写真図版87)

- [位置] C区西側II B q グリッドに位置する。
- [検出状況] IV層上面で検出した。
- [重複] SK34→SI37→SL06。
- [規模] 0.67×0.44mの不整形円形に赤変している。
- [埋土・焼土] 赤褐色の焼成土で、厚さは9cmである。
- [遺物出土状況] 土器69.4g出土している。
- [掲載遺物] なし。
- [時代・時期] 遺構同士の重複関係から弥生時代もしくはそれより新しい。

SL07 (第96図、写真図版87)

- [位置] B区南西側、V B s グリッドに位置する。

[検出状況] IV層上面で検出した。

[重複] なし。

[規模] 調査区境にあるため、全体の形状は不明である。

[埋土・焼土] 暗赤褐色の焼成土で、厚さは13cmである。

[出土遺物] なし。

[時代・時期] 詳細な時期は特定できないが、検出面からは縄文時代前期もしくはそれ以前である。

SL08 (第97図、写真図版88)

[位置] C区南西側、III B j グリッドに位置する。IV層上面で検出した。

[検出状況] IV層上面で検出した。

[重複] SKF11→SL08。

[規模] 0.30×0.28mのほぼ円形に赤変している。

[埋土・焼土] 暗赤褐色の焼成土で、厚さは4cmである。

[出土遺物] なし。

[時代・時期] 重複遺構との関係から縄文時代後期もしくはそれ以降。

SL09 (第97図、写真図版88)

[位置] B区、III B x グリッドに位置する。

[検出状況] SI16の直下より検出。

[重複] SI32→SL09→SI16。

[規模] 調査区境にあるため、全体の形状は不明である。

[埋土・焼土] 暗赤褐色の焼成土で、厚さは13cmである。

[出土遺物] なし。

[時代・時期] 詳細な時期は不明であるが、重複遺構との関係より弥生時代より古い。検出面からは縄文時代前期の可能性が窺える。

SL11 (第97図、写真図版88)

[位置] B区、III C u グリッドに位置する。

[検出状況] SI30の床面直下より検出。

[重複] SK37→SL11⇄SI29→SI30。

[規模] 0.77×0.45m。深度12cm。

[埋土・焼土] 暗赤褐色の焼成土で、厚さは13cmである。

[出土遺物] なし。

[時代・時期] 詳細な時期は不明であるが、重複遺構との関係より、縄文時代後期より古い。検出面からは縄文時代前期の可能性が窺える。

SL12 (第97図、写真図版88)

[位置] B区北側のIII C m グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面で不整形の赤褐色焼土層を検出した。

[重複] SI67→SI65→SI64→SK105→SL12。

[規模] 長軸0.32m、短軸0.24mである。

[埋土] 掘り込みはなく、地山層が赤褐色に赤変している。

[出土遺物] なし。

[時代・時期] 縄文時代に帰属する遺構ではあるが、詳細な時期を判断できる資料は出ていない。

SL15 (第97図、写真図版89)

[位置] IV B o グリッドに位置している。

[検出状況] SI17精査時にII a層(暗褐色シルト)が赤変している部分を確認。その周囲を再検出すると、SI17に切られている赤変範囲を検出した。

[重複] SK29≦SK21≦SL15→SI17。

[規模] 推定するに0.66×0.50mの楕円形に赤変していると考えられる。

[埋土・焼土] 掘り込みは認められない。被熱層の厚さは6～7cm。被熱層の下位より縄文土器の底部が正位で出土し、埋設土器が伴う炉である可能性がある。

[遺物出土状況] 土器595.0g他が出土している。

[掲載遺物] なし。

[時代・時期] 重複遺構との関係から弥生時代より古く、縄文時代後期より新しいか、もしくは同時期になる。

SL16 (第97図、写真図版89)

[位置] B区北側のIII C m グリッド付近に位置する。

[検出状況] V層上面で数個の籾に囲われた焼土層を確認した。

[重複] なし。

[規模] 石組部60cm前後、掘り方85cm前後である。焼土層は最大で8cmである。

[埋土] 内部の堆積土は暗褐色シルトの単層である。

[遺物出土状況] 土器8.2gが出土している。

[掲載遺物] なし。

[時代・時期] 縄文時代に帰属する遺構ではあるが、詳細な時期は判断できない。

SL18 (第97図、写真図版89)

[位置] B区北側のIII C p グリッドに位置する。

[検出状況] SI29床面から10cm程掘り下げた段階で不整形の明赤褐色焼土層と埋設土器を検出した。

[重複] SK42≦SL18→SI29→SI30。

[規模] 長軸0.71m、短軸0.64mである。

[埋土] 埋設土器の掘り方は褐色シルトを主体とする。

[遺物出土状況] 土器1,908.0g他が出土している。

[掲載遺物] (第144図、写真図版128)土器(Na.749)を掲載した。

[時代・時期] 埋設土器から縄文時代後期初頭に帰属する。

8 不明遺構 (SX)

SX01 (第98図、写真図版90)

〔位置〕VIC s グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面にて、暗褐色シルトの不明瞭な方形のプランを検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部2.66×1.78mの隅丸方形を呈し、残存深度は15cmである。

〔埋土〕II a層(暗褐色シルト)相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は北東側のものが残存しており、床面より開口部にむけてほぼ直立して立ち上がる。床面のほぼ中央に、深さ40cmのPitがあり、テントのような用途で使用した可能性を想定し精査を進めたが、明確な証拠は得られなかった。

〔遺物出土状況〕土器129.7g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第145図、写真図版129)土器(Na.763)を掲載した。

〔時代・時期〕時代の特定には至らなかった。

SX02 (第98図、写真図版90)

〔位置〕II B s グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面にて、暗褐色シルトの不明瞭な方形のプランを検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部2.66×1.78mの隅丸方形を呈し、残存深度は15cmである。

〔埋土〕II a層(暗褐色シルト)相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は直立気味して立ち上がる。

〔遺物出土状況〕土器3,027.8g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第145・212図、写真図版129・176)土器(Na.764～768)、石器(Na.2324)を掲載した。

〔時代・時期〕時代の特定には至らなかった。

SX04 (第98図、写真図版90)

〔位置〕III B h グリッドに位置する。

〔検出状況〕IV層上面にて、暗褐色シルトの不明瞭な方形のプランを検出した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部1.30×0.84mの隅丸方形を呈し、残存深度は18cmである。

〔埋土〕II a層(暗褐色シルト)相当の暗褐色シルトの単層で、開口部から床面まで一様である。

〔壁・床の状況〕床面は概ね平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

〔遺物出土状況〕土器158.9g他が出土している。

〔掲載遺物〕(第145・184図、写真図版129・161)土器(Na.769・770)、石器(Na.2097・2098)を掲載した。

〔時代・時期〕時代の特定には至らなかった。

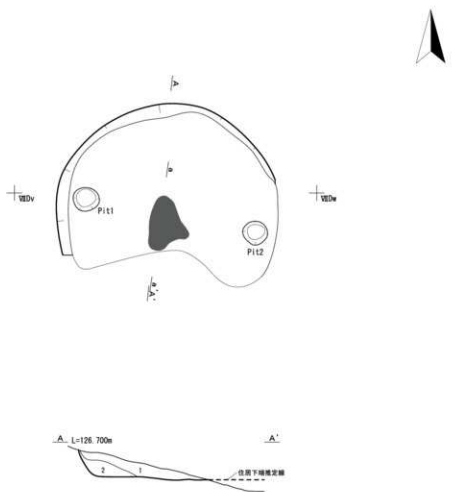
9 柱 穴

B区とC区合わせて117個を検出した(第99図)。ほとんどが、B区の遺構が集中している西側の平坦面からC区との境付近に位置する。土器がB区で4,113.8g、C区で1,2558.9g出土した。BP34(第144図、写真図版128)土器(Na.750)・BP53(第144図、写真図版128)土器(Na.751・752)・BP63(第144図、写真図版128)土器(Na.753)・BP68(第144図、写真図版128)土器(Na.754・755)・BP80(第144・176図、写真図版128・156)土器(Na.756)、土製品(Na.1242)・CP05(第144図、写真図版128)土器(Na.757)・CP08(第144図、写真図版128)土器(Na.758)・CP10(第184図、写真図版161)石器(Na.2095)・CP16(第144・184図、写真図版128・161)土器(Na.759・760)、石器(Na.2096)・CP17(第144図、写真図版128)土器(Na.761・762)を掲載した。

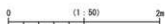
10 捨て場

調査区の北東側斜面で地形を利用して土器や土壌を廃棄した部分を検出し、捨て場と判断した。層序は3層に分層し、地山起源の黄褐色シルトブロックや炭化物粒・焼土ブロックを含む暗褐色シルト層(1層)、夾雑物のほとんどない暗褐色シルト層(1層下部)、褐色シルト主体の2層である。斜面上方に近い部分では1層に多量の土器が出土し、2層では少量であったが、斜面下方の北東側では2層でも遺物が出土する傾向が窺えた。土器239,786.9gが出土した。

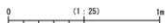
S101



- S101
 1. 10TR2/1 黒色シルト 粘性あり しまりやや稀 炭化物7%混入
 2. 10TR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりやや稀 小礫5%混入



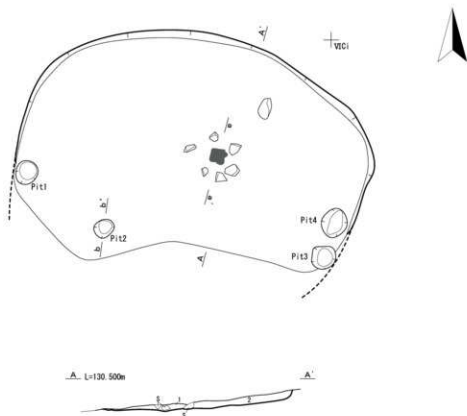
- S101 炉
 1. 5TR4/6 赤褐色シルト 粘性やや強 しまり中 黒褐色ブロック5%・炭化物1%混入 横土



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	35×32	51
Pit2	34×32	51

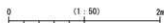
第8図 S101

S102



S102

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト10%・ ϕ 1~5mm炭化物3%・褐色焼土10%ブロック混入
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト5%・ ϕ 2mm程の炭化物1%・花崗岩粒少量混入



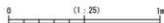
S102 炉

1. 7.5YR4/6 褐色シルト 粘性なし しまり密 暗褐色シルト5%・明暗褐色シルト5%混入
 2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト20%・ ϕ 2mm程炭化物2%混入



S102 Pit2

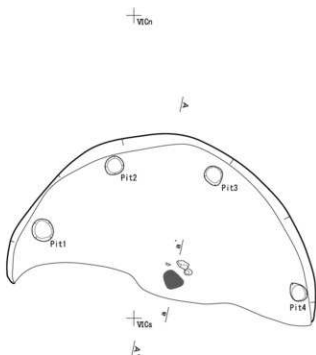
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
 暗褐色シルト10%・ ϕ 1~2mm炭化物1%・焼土粒少量・花崗岩粒少量混入



No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit1	32×29	30
Pit2	28×24	36
Pit3	34×33	48
Pit4	40×34	44

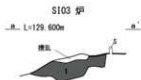
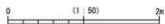
第9図 S102

S103



S103

1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト30%・ ϕ 1~3mm炭化物1% (赤褐色) 混入
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 ϕ 1~3mm炭化物 (2%) 混入

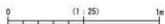


S103 B'

1. 7.5YR4/6 褐色シルト 粘性なし しまり密 赤褐色シルト10%・暗褐色シルト3%混入

S103 Pit1~4

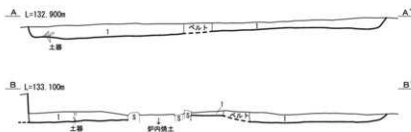
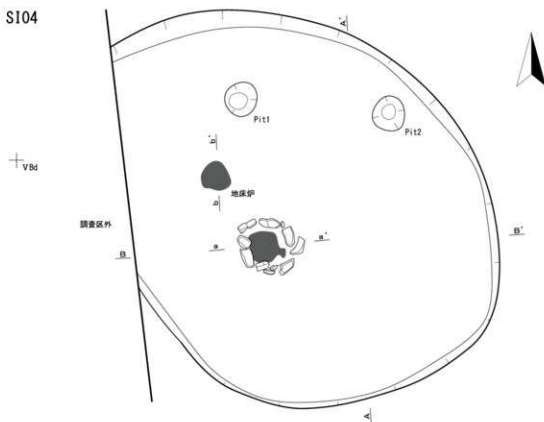
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 ϕ 2mm程度炭化物1%混入



No.	長×幅 (cm)	深さ (cm)
Pit1	31×28	22
Pit2	26×24	19
Pit3	27×24	15
Pit4	27×21	16

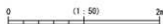
第10図 S103

S104



S104

1. 10YR3/2~3/3 黒褐色~暗褐色シルト 粘性弱 しまり織 炭化物粒微量混入



S104 穴

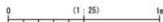
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強
しまりやや強 炉石混り方埋土 炭化物粒少量混入
2. 2. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり織 被熟層
顕著な硬化はみられない

S104地床跡



S104 地床跡

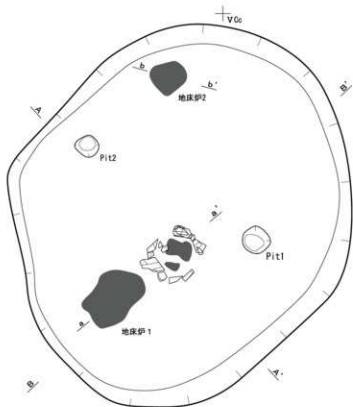
1. 2. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり織



No.	長×短 (cm)	厚さ (cm)
Pit1	66×43	31
Pit2	47×44	25

第11図 S104

S105

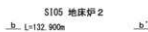


- S105
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 炭化物粒少量混入 根腐乱多い
 2. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 S105伊の地土の一部

0 (1:50) 2m



- S105 伊・地床伊1
 1. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 被熱層
 2. なし

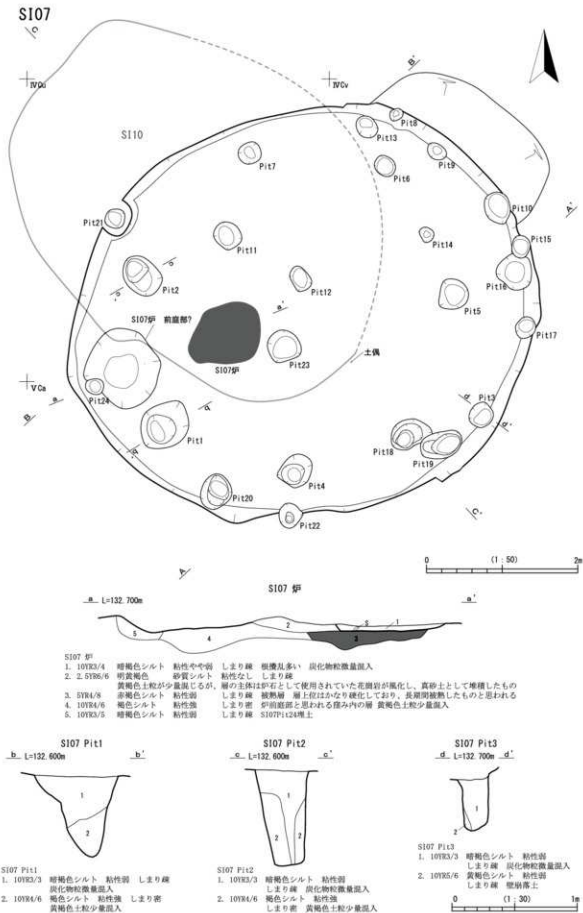


- S105 地床伊2
 1. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 被熱層 炭化物粒微量混入

0 (1:25) 1m

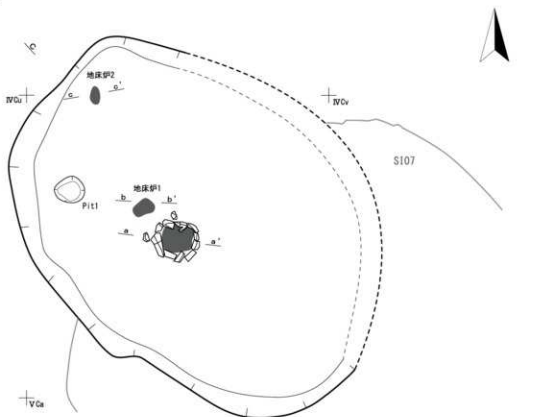
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	38×36	45
Pit2	32×29	48

第12図 S105



第14図 S107

S110



S110 炉

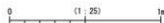
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり硬 炭化物粒微量混入 (炉内埋土)
 2. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり硬 被熱層
- 根燬瓦により焼土は分断、顕著な硬化は見られない

S110 地床炉1

1. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり硬 被熱層 顕著な硬化は見られない

S110 地床炉2

1. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり硬 被熱層 花崗岩粒少量混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
F11.1	40×35	15

第15図 S110

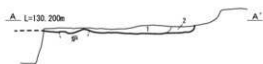
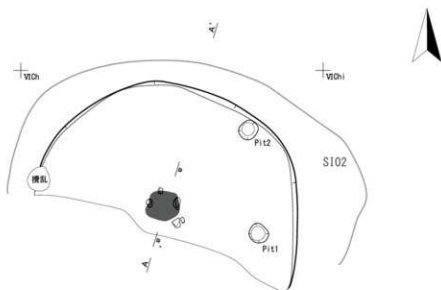


- S107・S110
1. 107E 3/2~3/3 黒褐色~暗褐色シルト、粘性や中強、しまり硬、炭化物少量混入
 2. 107E 3/2 暗褐色上粒層混入
 3. 107E 3/2 暗褐色シルト、粘性弱、しまり硬、炭化物少量混入
 4. 107E 4/4 暗褐色シルト、粘性や中強、しまりや硬、炭化物少量混入
 5. 107E 5/6 暗褐色シルト、粘性弱、しまり硬、褐色上ブロック状混入
 6. 107E 3/2 暗褐色シルト、粘性弱、しまり硬、褐色上粒層混入



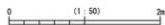
No.	長×幅(m)	深さ(m)
P111	71×60	72
P112	55×44	53
P113	34×32	49
P114	49×41	57
P115	43×41	65
P116	30×29	35
P117	31×30	76
P118	19×15	49
P119	27×20	23
P1110	44×37	51
P1111	38×35	42
P1112	34×24	36
P1113	21×27	26
P1114	21×18	58
P1115	30×20	71
P1116	49×47	34
P1117	30×28	40
P1118	39×38	36
P1119	17×36	62
P1120	45×40	37
P1121	29×27	67
P1122	34×32	47
P1123	46×44	31
P1124	25×22	20

S111



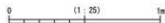
S111

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや密
φ1~3mm炭化物2%・褐色ブロック (3~8cm) 10%・砂質土はφ1~3mm炭化物が5%・焼土粒1%混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5%・φ1mm程度炭化物少量混入



S111 跡

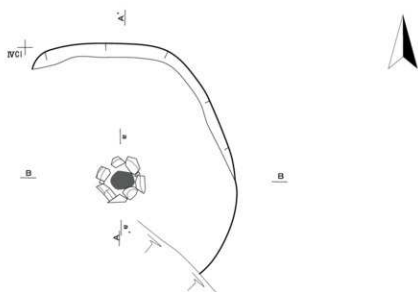
1. 6YR4/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 明赤褐色シルト5%・明褐色シルト5%混入



No.	長×短 (cm)	厚さ (cm)
Pit1	27×24	51
Pit2	27×25	24

第17図 S111

S112

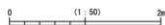


IVC1



S112

1. 101R3/3 球褐色シルト 粘性弱 しまり疎 微塵が多い 炭化物粒少量混入

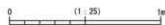


S112 跡



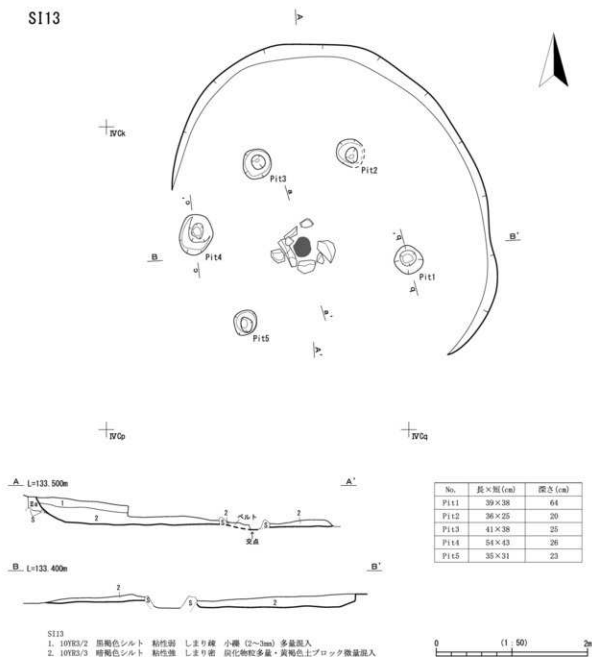
S112 跡

1. 53R4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 被熱層 顕著な硬化は見られない
 2. 101R2/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炉石廻り方理土 黄褐色土粒少量混入
 3. 101R4/4 褐色シルト 粘性やや弱 しまり疎 地山層

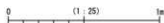
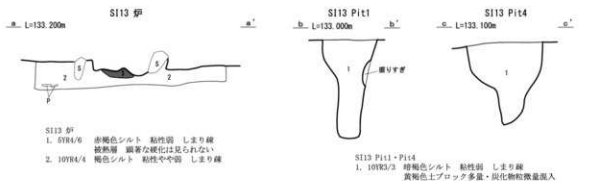
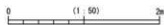


第18図 S112

S113

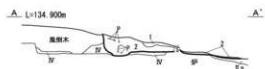
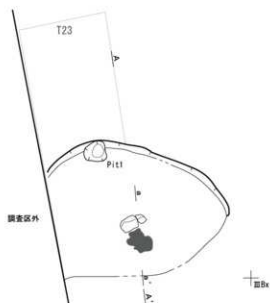


S113
 1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり硬 小礫 (2~3mm) 多量混入
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性強 しまり密 炭化物粒多量・黄褐色土ブロック微量混入



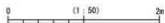
第19図 S113

S115



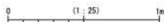
S115

- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黒褐色シルト5%・ ϕ 1mm程度炭化物2%・焼土粒(明褐色シルト)1%混入
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト10%・ ϕ 1~3mm炭化物2%混入



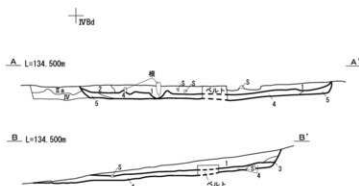
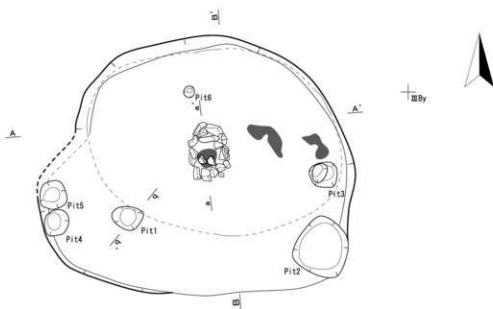
S115 炉

- 5YR5/8 明赤褐色シルト 粘性なし しまり密
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 無り方



No.	長×幅 (cm)	深さ (cm)
Pit1	32×29	26

S116

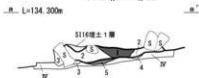


S116

- 10TR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト20%・ ϕ 1mm~2, 3mm炭化物5%混入・北東側は焼土塊(褐色20%)と大きい炭化材が入る
- 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黒褐色シルト20%・ ϕ 1mm~1cm炭化物3%混入
- 10TR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 暗褐色シルト10%・黄褐色シルト10%混入
- 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり密 褐色シルト5%・2cm程ブロック(まばら)に入る・ ϕ 1~5mm炭化物2%・伊原辺は焼土粒2%混入
- 10TR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 黄褐色シルト20%・暗褐色シルト10%(東側は20%)混入

0 (1:50) 2m

S116 伊1・伊2



0 (1:25) 1m

S116 伊1

- 7.5YR4/6 暗褐色シルト 粘性なし しまりやや密 暗褐色シルト10%・ ϕ 1mm炭化物少量混入
- 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト3%・ ϕ 1~5mm炭化物3%・暗褐色シルト10%混入

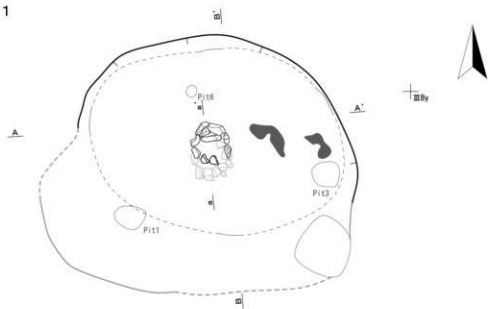
S116 伊2

- 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 ϕ 1~3mm炭化物2%混入
- 10TR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり密 抜き取り底か
- 暗褐色シルト10%・ ϕ 1~2mm炭化物2%・黄褐色シルト5%・花崗岩粒1%混入
- 5.5YR4/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 伊2焼土・褐色シルト20%混入

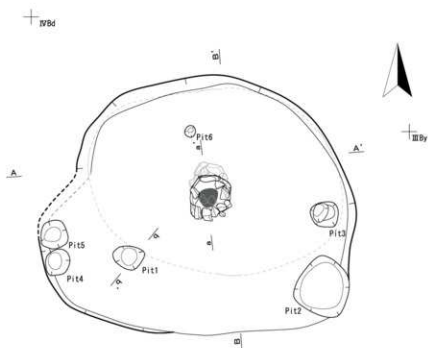
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	42×32	25
Pit2	83×76	28
Pit3	39×37	18
Pit4	39×32	29
Pit5	40×39	24
Pit6	16×14	30

第21図 S116 (1)

SI16 炉1



SI16 炉2



SI16 Pit1

b. L=134.100m



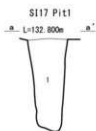
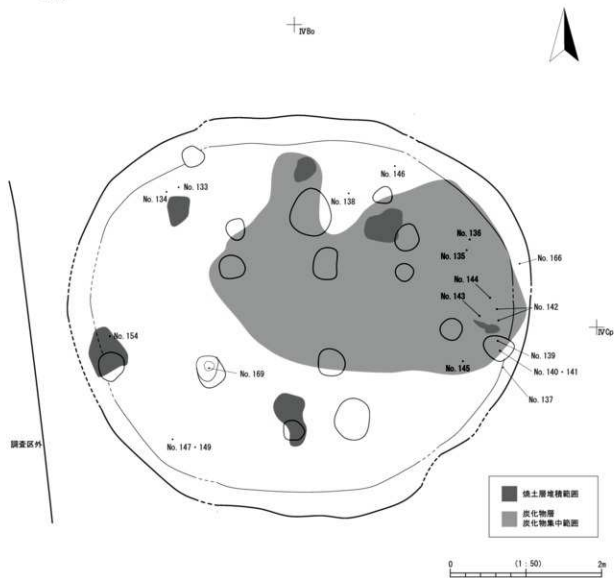
0 (1:25) 50cm

0 (1:50) 2m

SI16 Pit1
 1. 10YR4/4 褐色シルト・粘粒中 しまりやや密 にぶい黄褐色シルト10%
 φ1~3mm炭化物2%・堆山の炭屑約3~6cm (5~6個)・炭屑約2%混入 SI16P2に伴う

第22図 SI16 (2)

SI17



SI17 Pit1
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱
しまり礫 炭化物粒少量混入

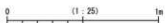
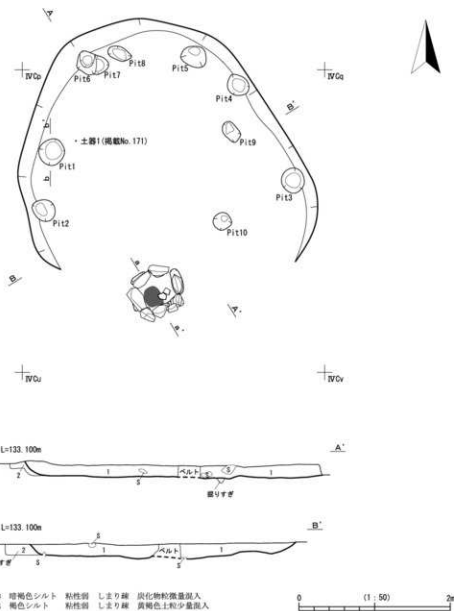


SI17 Pit2
1. 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト 粘性弱
しまり礫 中和田中敷火山灰がブロック状に堆積
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり礫
炭化物粒少量混入



第24図 SI17 (2)

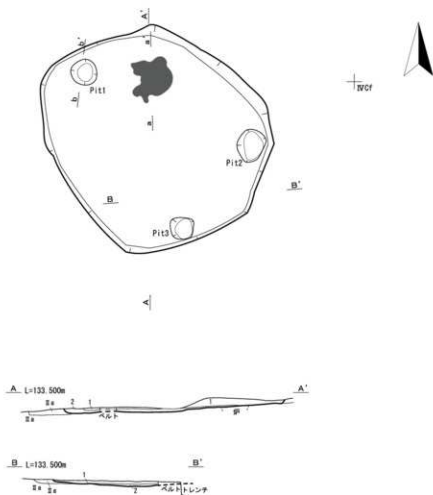
SI19



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit11	36×34	27
Pit12	32×28	32
Pit13	34×30	39
Pit14	31×27	36
Pit15	34×28	27
Pit16	34×31	32
Pit17	24×18	17
Pit18	32×18	23
Pit19	29×19	27
Pit10	25×24	42

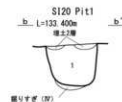
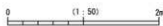
第25図 SI19

S120



S120

- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 黒褐色シルト10%・黄土粒(褐色シルト)1%混入
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黒褐色シルト10%・まだらに入る・φ1~2mm黄土粒1%・φ1~2mm炭化物1%混入

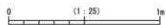


S120 Pit

- 7.5YR4/6 褐色シルト 粘性なし しまり密 赤褐色シルト5%混入

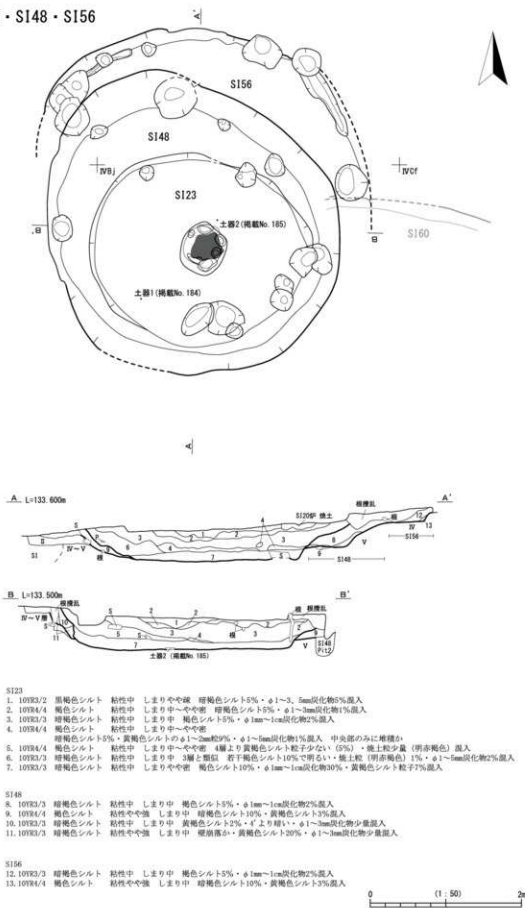
S120 Pit1

- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黒褐色シルト30%・黄土粒1%・炭化物少量混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	36×24	30
Pit2	44×36	17
Pit3	34×33	19

第26図 S120



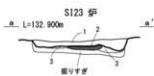
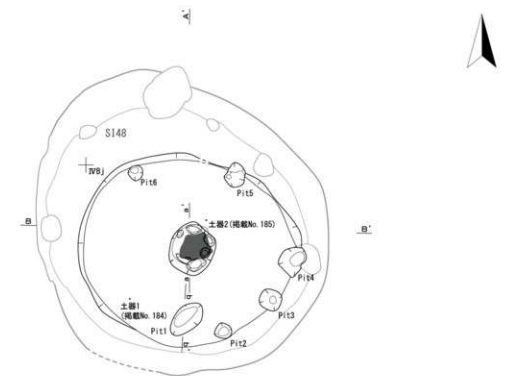
- S123
- 1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 暗褐色シルト5%・φ1~3.5mm炭化物5%混入
 - 2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中～やや密 暗褐色シルト5%・φ1~3mm炭化物1%混入
 - 3. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5%・φ1mm~1cm炭化物2%混入
 - 4. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中～やや密
 - 5. 10YR4/4 褐色シルト 暗褐色シルト5%・黄褐色シルトのφ1~3mm粒9%・φ1~5mm炭化物1%混入 中央部のみは塊積か
 - 6. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中～やや密 4層より黄褐色シルト粒子少ない(5%)・焼土粒少量(明赤褐色)混入
 - 7. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 3層と類似 若干褐色シルト10%で明るい・焼土粒(明赤褐色)1%・φ1~5mm炭化物2%混入
 - 8. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや密 褐色シルト10%・φ1mm~1cm炭化物30%・黄褐色シルト粒子7%混入

- S148
- 8. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5%・φ1mm~1cm炭化物2%混入
 - 9. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまり中 暗褐色シルト10%・黄褐色シルト3%混入
 - 10. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黄褐色シルト2%・φより細かい・φ1~3mm炭化物少量混入
 - 11. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性やや強 しまり中 硬積層か・黄褐色シルト20%・φ1~3mm炭化物少量混入

- S156
- 12. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5%・φ1mm~1cm炭化物2%混入
 - 13. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまり中 暗褐色シルト10%・黄褐色シルト3%混入

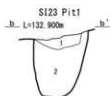
第27図 S123・48・56

S123



S123 Pit1

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや密 $\phi 1\sim 1\text{mm}$ 炭化物3%・黄土ブロック (赤褐色) 5%混入
2. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性中 しまり密 廻り方埋土内のV層が燃焼
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 黄褐色シルト10%・暗褐色シルト10%・ $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%混入



S123 Pit2

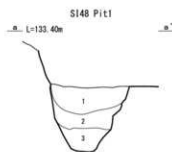
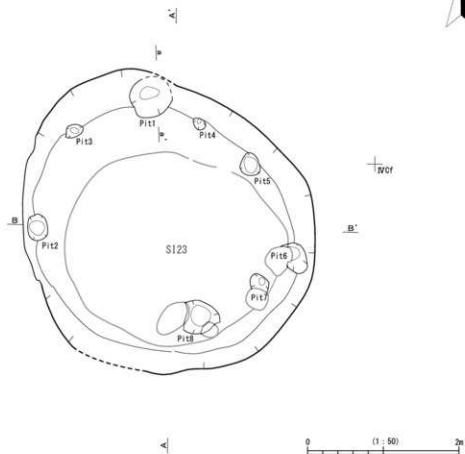
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや密 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物10%混入
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物1%・黄褐色シルト ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 5%混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	54×32	43
Pit2	23×21	18
Pit3	31×30	43
Pit4	41×32	63
Pit5	32×27	68
Pit6	20×19	28

第28図 S123

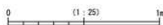
S148



S148 Pit1

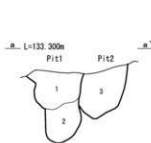
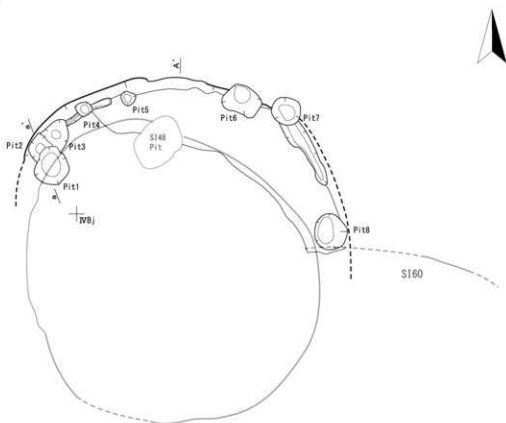
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 ϕ 1mm~1cm炭化物2%・褐色シルト5%混入
2. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性強 しまりやや密
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性強 しまり密 3cm程度のレイヤ10%混入

No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit1	75×54	70
Pit2	35×27	31
Pit3	26×17	21
Pit4	18×14	46
Pit5	31×26	27
Pit6	41×28	35
Pit7	29×24	47
Pit8	50×44	21



第29図 S148

S156



S156 Pit1・Pit2

- 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや密 褐色シルト5%・ ϕ 1mm~1cm炭化物2%・焼土粒1%混入
- 10TR4/6 褐色シルト 粘性やや強 しまり疎 褐色シルト10%・ ϕ 1~3mm炭化物少量混入
- 10TR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 暗褐色シルト10%・黄褐色シルト3%・ ϕ 1~3mm炭化物少量・焼土粒少量混入

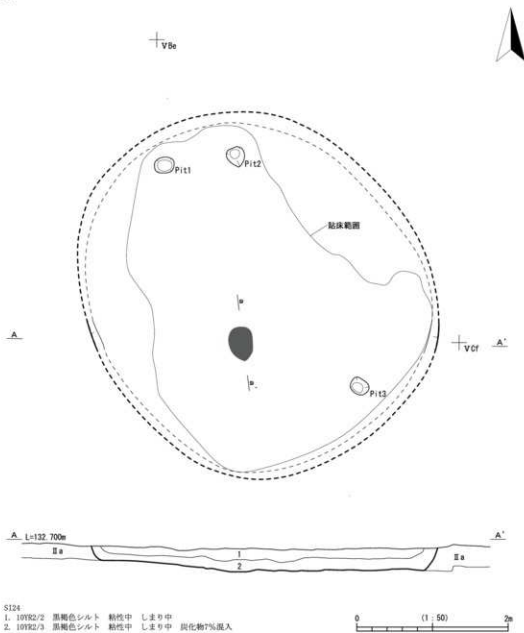
S156 周溝

- 10TR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまり密 黄褐色シルト10%・にぶい黄褐色シルト5%・ ϕ 1~3mm炭化物1%混入

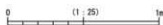
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	47×38	56
Pit2	38×20	36
Pit3	44×37	33
Pit4	23×20	25
Pit5	20×19	11
Pit6	53×34	47
Pit7	40×38	18
Pit8	48×43	60

第30図 S156

S124



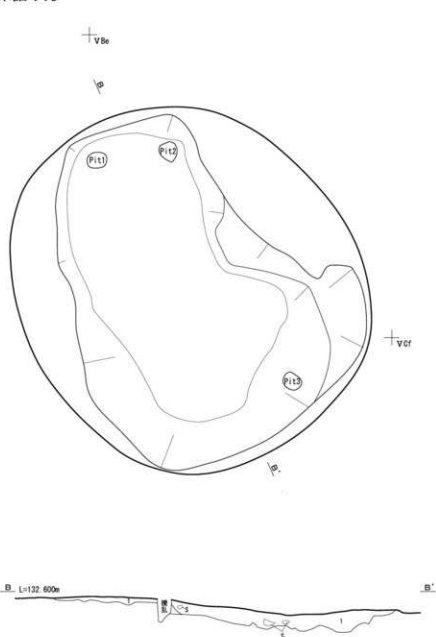
- S124 炉
 1. 5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性中 しまりやや密 褐色ブロック5%混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	27×22	33
Pit2	27×24	33
Pit3	25×21	34

第31図 S124 (1)

S124 貼床掘り方

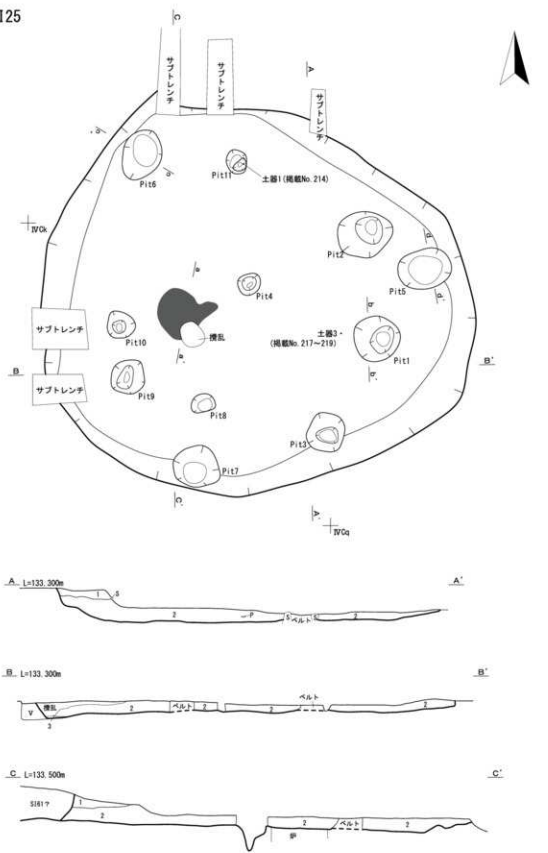


S124 貼床

1. 10YR6/8 黄褐色シルト 粘性中 しまり密 炭褐色土ブロック7%・炭化物3%・焼土ブロック1%混入。

0 (1:50) 2m

S125



S125

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり硬 炭化物粒微量混入
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 しまり硬 炭化物粒少量・層下段に黄褐色土ブロック多量混入
3. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 粘土粒微量混入 壁崩落土

0 (1:50) 2m

第33図 S125 (1)



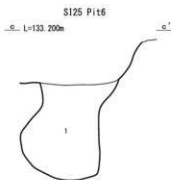
S125 Pit1

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや強 しまり密
炭化植物・焼土粒少量混入
2. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 被熱層
層上位は硬化が著しい



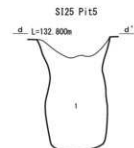
S125 Pit2

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや疎 黄褐色土粒少量混入



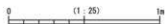
S125 Pit3

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや疎 黄褐色土粒少量混入



S125 Pit4

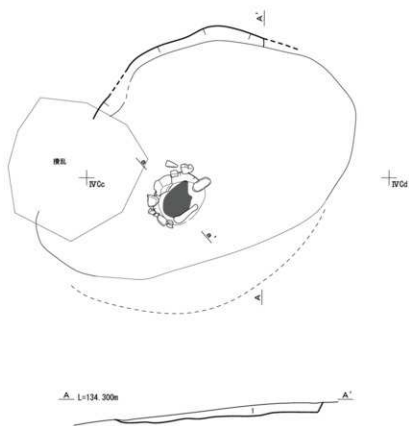
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや疎 黄褐色土粒少量混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	62×60	80
Pit2	75×63	56
Pit3	55×54	76
Pit4	32×29	75
Pit5	71×53	81
Pit6	70×52	68
Pit7	65×57	77
Pit8	32×24	41
Pit9	50×45	59
Pit10	39×38	38
Pit11	34×28	40

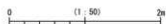
第34図 S125 (2)

S126



S126

1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし しまりやや硬 炭化物粒3~5%・焼土粒1~2%・明黄褐色土粒5~7%混入



S126 炉



IVCo
より51mE1m

S126 炉

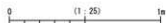


S126 炉

1. 7.5YR2/3 暗暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや硬 焼土粒1%混入
2. 2.5YR5/6 明赤褐色焼土 粘性なし しまり硬 焼土層
根の影響を受けており黒褐色土ブロック6~7%混入

S126 炉石抜き取り痕

10YR2/3 暗褐色シルト 粘性なし しまり硬 焼土粒1%混入

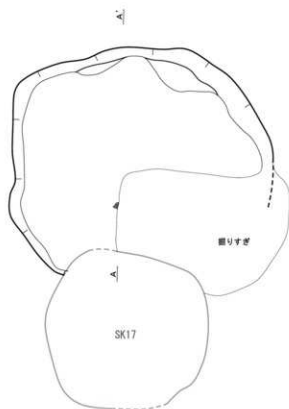


S127

+IVc



+IVc



+IVc

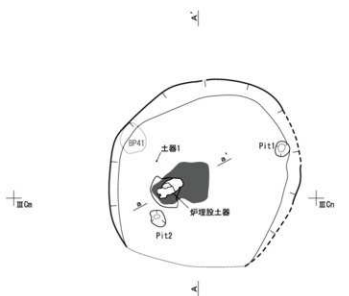
.A. L=133.500m



S127

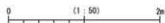
1. 10YR3/2 暗褐色シルト 粘性なし しまりやや硬 黄褐色シルトブロック10~15%・粘土粒1%・炭化物粒1%混入
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまり硬 暗褐色シルトブロック0~25%・明黄褐色シルトブロック10%混入
3. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや硬 黄褐色土ブロック15~20%混入

0 (1:50) 2m



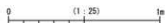
S128

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 炭化物粒2~3%・焼土粒1%混入
2. 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや硬 暗褐色シルトブロック15%・焼土ブロック混入
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 焼土粒1~2%・にぶい黄褐色シルトブロック7%混入
4. 7.5YR4/3 褐色シルト 粘性やや弱あり しまり中 焼土粒5%混入
5. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒1~2%・にぶい黄褐色土粒2~3%混入



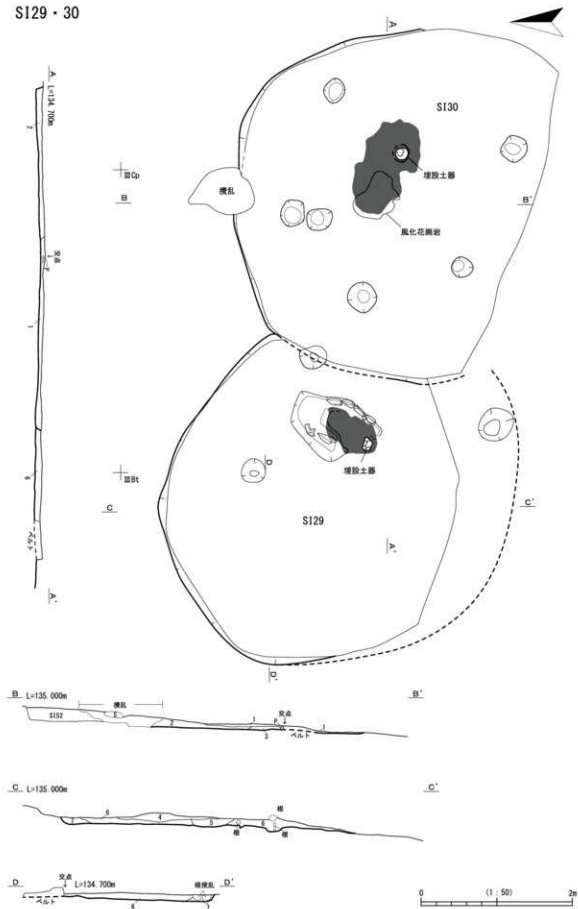
S128 伊

1. 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 焼土ブロック混入
2. 5YR4/4 にぶい赤褐色 粘性やや弱 しまり硬 焼土小ブロック5~7%・明黄褐色土小ブロック2~3%混入
3. 2.5YR4/6 赤褐色 粘性中 しまりやや密 焼土層



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	21×19	10
Pit2	26×19	15

S129・30



第38図 S129・30

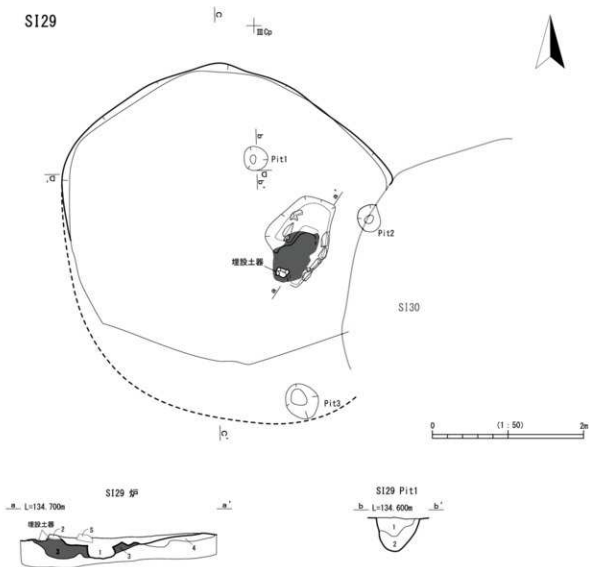
S130

1. 10YK3/2 赤褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト40%・ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 、1cm程度炭化物2%・焼土粒少量混入
2. 10YK3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト20%・暗褐色シルト5%・西周は暗褐色シルト多い・ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒少量混入
3. 10YK5/6 黄褐色シルト 粘性弱 しまり密 マサ土? 花崗岩粒10%・褐色シルト3%・明黄褐色シルト2%・褐色シルト $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 粒少量混入

S129

4. 10YK3/2 赤褐色シルト 粘性中 しまり中 $\phi 1\sim 1\text{cm}$ 炭化物3%・焼土粒? (花崗岩粒か)・黄褐色シルト粒2%・暗褐色シルト10%・褐色シルト5%混入
5. 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 微で塵乱 褐色シルト10%・赤褐色シルト7%混入
6. 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 程度炭化物3% 暗褐色シルト20%・焼土粒混入
7. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや中強 しまりやや密 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%・黄褐色シルト $\phi 3\text{mm}$ 程ブロック2%・暗褐色シルト7%混入

S129



S129 Pit1

1. 10YK3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト20%・褐色シルト10%・花崗岩粒1%・赤褐色シルトブロック7%混入
2. 7.5YR5/6 明褐色シルト (マサ土?) 粘性なし しまりやや密 褐色シルト10%・暗褐色シルト10%・花崗岩粒10%混入 埋設土器の上に堆積
3. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 赤褐色シルト 粘性中 しまりやや密 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%・花崗岩粒少量・焼土粒少量混入
4. 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや密

S129 Pit3

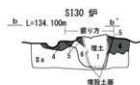
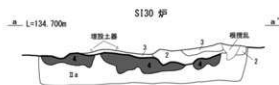
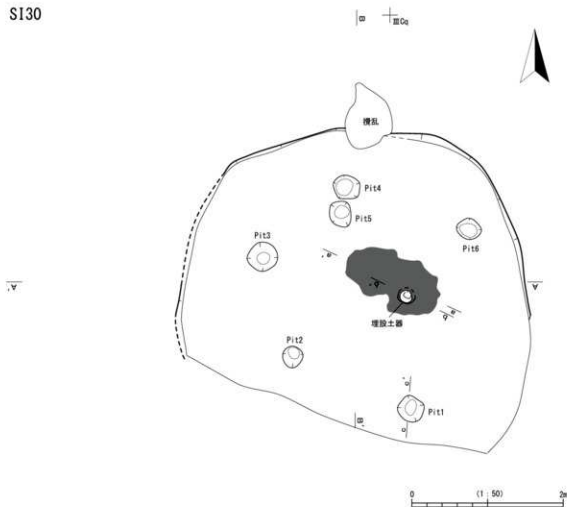
1. 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 赤褐色シルト10%・ $\phi 1\text{mm}$ 程度炭化物3%・焼土粒2%混入
2. 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色シルト20%・ $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物3%混入

0 (1:25) 1m

No.	長×幅 (m)	深さ (m)
Pit1	33×32	24
Pit2	34×29	26
Pit3	49×43	29

第39図 S129

S130



S130 炉

1. 10TR5/6 黄褐色マサ土 明黄褐色シルト10%・褐色シルト10%・ $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒2%混入
2. T.5TR4/4 褐色マサ土 (シルトも平くさい) 褐色シルト10%・褐色シルト10%・ $\phi 1\text{mm}$ 程度炭化物少量混入
3. T.5TR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト10% (やや赤みつよい) 混入
4. 5TR4/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 明赤褐色シルト20%混入
5. 注記なし
6. 注記なし

S130 Pit1

L=134.500m



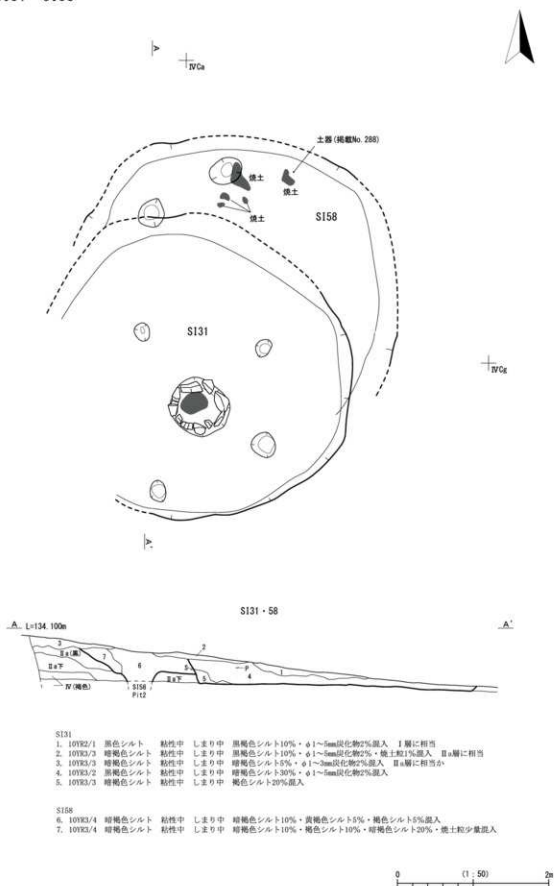
S130 Pit1

1. 10TR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト20%・暗褐色シルト5%・ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒少量混入



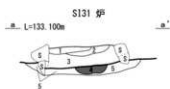
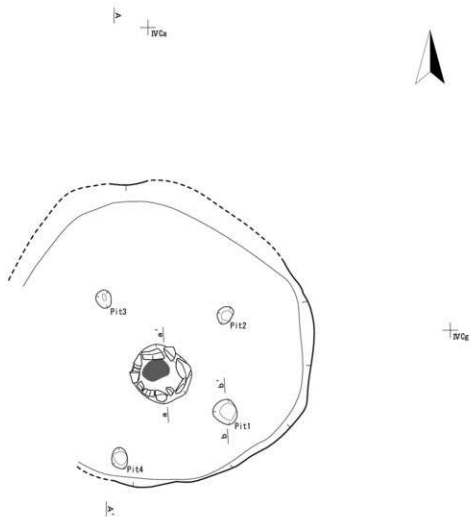
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	36×35	35
Pit2	29×27	29
Pit3	51×39	27
Pit4	37×33	26
Pit5	36×30	27
Pit6	33×28	24

第40図 S130



第41図 S131・58

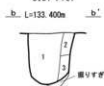
S131



S131 Pit1

- | | | | | |
|------------|-----------|-------|------|---|
| 1. 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黒褐色シルト10%・ $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%混入。I層に相当 |
| 2. 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性やや強 | しまり中 | 暗褐色シルト20%・黄褐色シルト30%・ $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%混入 |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黒褐色シルト10%・ $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒1%混入。II a層に相当 |
| 4. 5YR4/4 | にがい赤褐色シルト | 粘性中 | しまり密 | 暗赤褐色シルト10%・ $\phi 2\text{mm}$ 炭化物1%混入。鉄線部 |
| 5. 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性やや強 | しまり中 | 暗褐色シルト10%・黄褐色シルト20%・ $\phi 2\text{mm}$ 炭化物1%混入。面り方理上 |

S131 Pit1



S131 Pit1

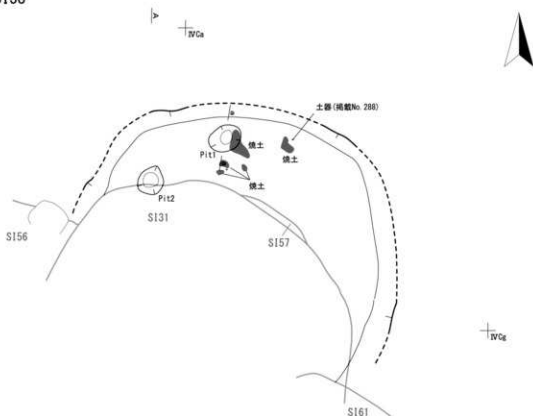
- | | | | | |
|------------|--------|-------|--------|--|
| 1. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黒褐色シルト10%・ $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒少量混入 |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | 黄褐色シルト5%・ $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 炭化物少量・焼土粒少量混入 |
| 3. 10YR5/6 | 黄褐色シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 暗褐色シルト20%・褐色シルト10%混入 |



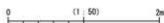
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	34×31	37
Pit2	25×19	22
Pit3	25×20	65
Pit4	29×21	22

第42図 S131

S158

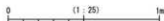


A.



S158 Pit1

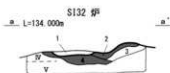
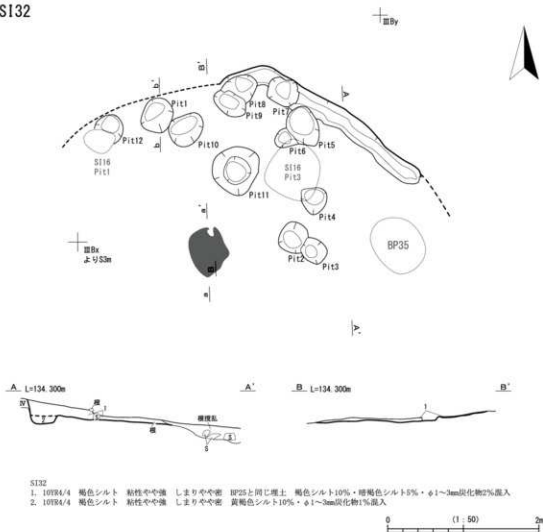
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト10%・ ϕ 1~3mm炭化物1%・焼土粒少量混入
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 Pit1掘り方 黄褐色シルト5%・暗褐色シルト10%混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	45×34	37
Pit2	40×33	32

第43図 S158

S132

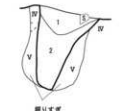


S132 pit

1. S132埋土1層
2. 5YR4/9 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 暗赤褐色シルト10%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黄褐色シルト5%混入
4. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性なし~中 しまりやや密 赤褐色シルト5%・明褐色シルト10%・褐色シルト10%混入

S132 Pit1

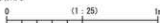
b. L=134.100m



S132 Pit1

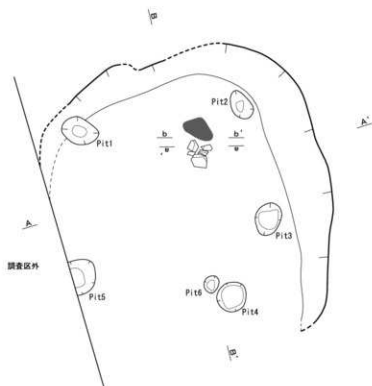
1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり密 に5%黄褐色シルト10%・褐色シルト2%・φ1~3mm炭化物2%混入
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり密 に5%黄褐色シルト10%・褐色シルト2%・黄褐色シルト7%・φ1~3mm炭化物2%混入 黄色炭素量増える

No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	45×41	59
Pit2	43×41	32
Pit3	37×32	35
Pit4	36×30	40
Pit5	56×40	53
Pit6	32×26	31
Pit7	45×38	52
Pit8	49×37	34
Pit9	47×28	37
Pit10	50×41	60
Pit11	66×63	51
Pit12	50×41	60

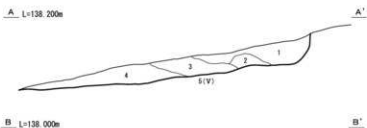


第44図 S132

S133

B
B'

A L=138.200m



B L=138.000m

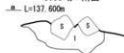
サフトレンテ

S133

1. 2.SY5/2 暗灰黄色シルト 粘性弱 しまり硬 炭化物1%混入 地山偽礫 人為堆積
2. 2.SY5/3 黄褐色シルト 粘性弱 しまり硬 地山偽礫 橋土偽礫 人為堆積
3. 2.SY4/2 暗灰黄色粘土質性シルト 粘性やや弱 しまり硬 地山偽礫 炭・橋土偽礫 人為堆積
4. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 粘性弱 しまり硬 地山偽礫 人為堆積
5. 10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土から粘土質シルト 粘性やや強 しまり密 地山層

0 (1:50) 2m

S133 伊 南面



S133 伊 南面

1. 10YR6/8 暗黄褐粘土質シルト 粘性中 しまり硬

S133 伊 北面



S133 伊 北面

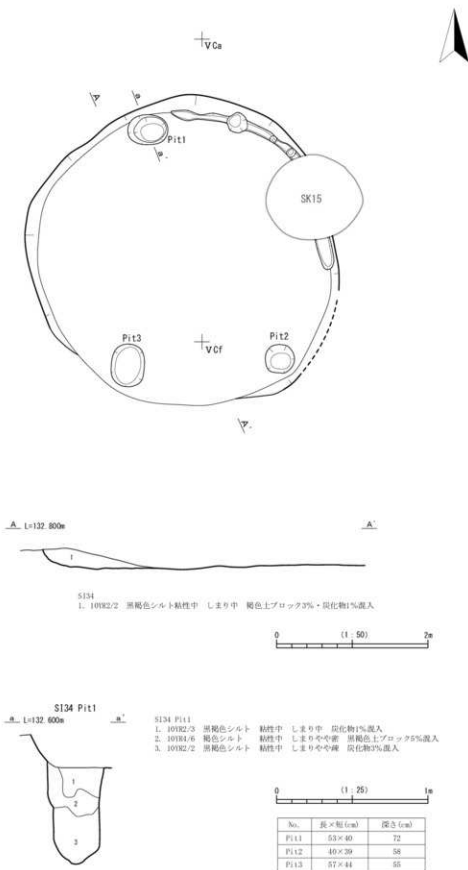
1. 7.SYR4/8 赤色シルト 粘性弱 しまり密

0 (1:25) 1m

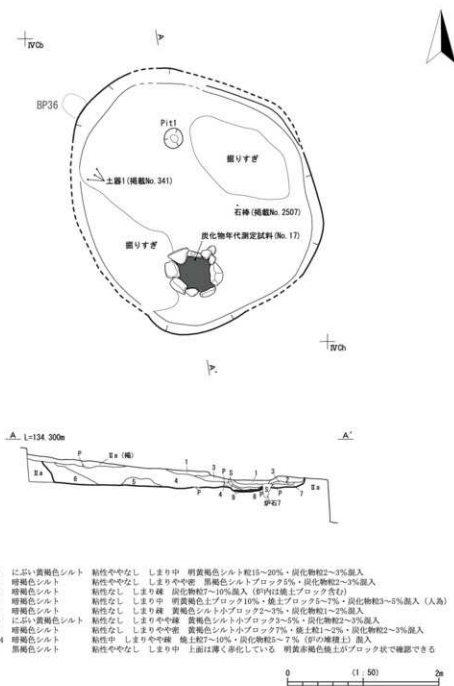
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	50×36	14
Pit2	40×26	15
Pit3	45×33	14
Pit4	41×39	12
Pit5	45×30	27
Pit6	24×19	12

第45図 S133

S134



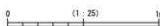
第46図 S134



S135

- | | | | | |
|-------------|-----------|--------|--------|---|
| 1. 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト | 粘性ややなし | しまり中 | 明黄褐色シルト粒15~20%・炭化物粒2~3%混入 |
| 2. 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性ややなし | しまりやや密 | 暗褐色シルトブロック5%・炭化物粒2~3%混入 |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性なし | しまり疎 | 炭化物粒7~10%混入 (伊内は焼土ブロック含む) |
| 4. 10YR3/2 | 暗褐色シルト | 粘性なし | しまり中 | 明黄褐色土ブロック10%・焼土ブロック5~7%・炭化物粒3~5%混入 (人高) |
| 5. 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性なし | しまり疎 | 黄褐色シルト小ブロック2~3%・炭化物粒1~2%混入 |
| 6. 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト | 粘性なし | しまりやや疎 | 黄褐色シルト小ブロック3~5%・炭化物粒2~3%混入 |
| 7. 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性なし | しまりやや密 | 黄褐色シルト小ブロック7%・焼土粒1~2%・炭化物粒2~3%混入 |
| 8. 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや疎 | 焼土粒7~10%・炭化物粒5~7% (伊の埴壇上) 混入 |
| 9. 5YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性ややなし | しまり中 | 上面は薄く酸化している 明黄赤褐色焼土がブロック状で確認できる |

S135 炉

IVCbより
S3mE3m

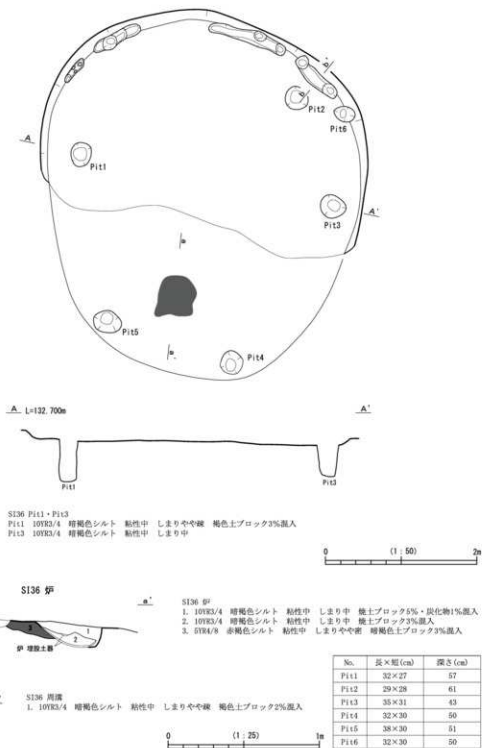
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	27×25	27

第47図 S135

S136

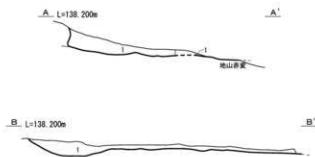
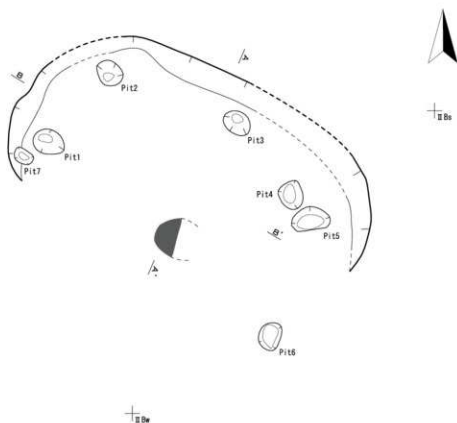
+Vch

+Vci



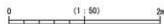
第48図 S136

S137

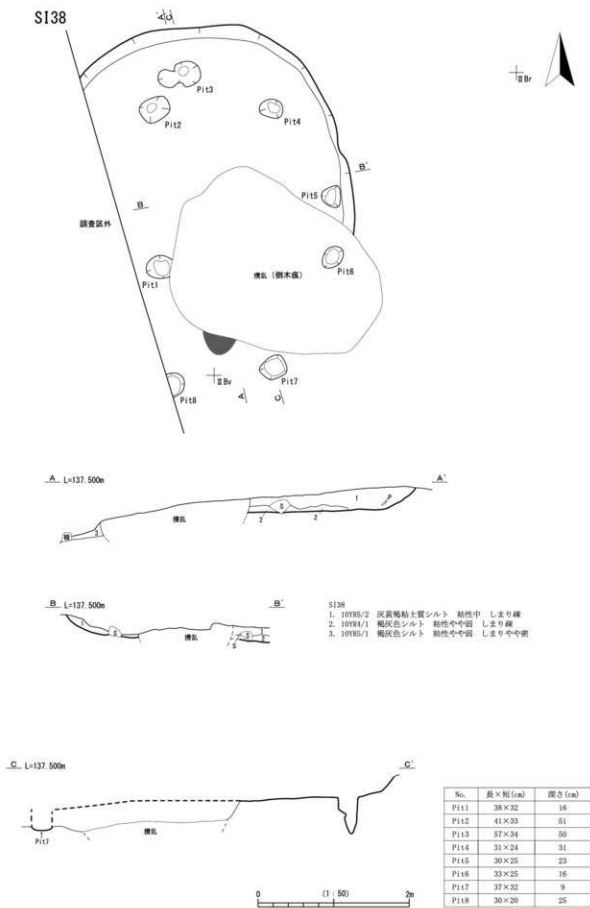


S137
1. 10YR5/3 にぶい黄緑シルト 粘性弱 しまり硬 炭化物混入 地山崩壊 人為堆積

No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	44×33	31
Pit2	38×32	34
Pit3	29×30	31
Pit4	39×33	17
Pit5	52×31	28
Pit6	38×29	9
Pit7	27×19	17

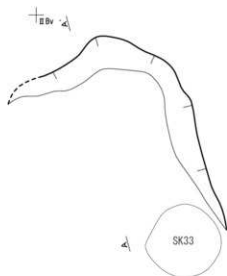


第49図 S137



第50図 S138

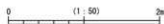
S139



B-B

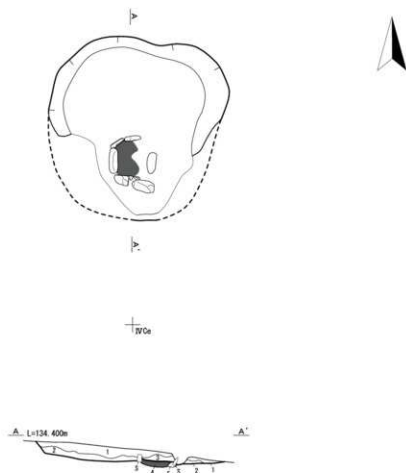


S139
1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性中 しまり中



第51図 S139

S140



S140

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや硬 明黄褐色シルトブロック7%・炭化物粒1~2%混入
2. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性ややあり しまり中 暗褐色シルトブロック10~15%・粘土粒1%・炭化物粒1~2%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまりやや硬 黄褐色シルトブロック7~10%・粘土粒5~7%・炭化物粒2~3% (伊内埴横土) 混入
4. 5YR4/4 にぶい赤褐色 粘性なし しまり中 暗褐色シルトブロック多量 (残存状態の悪い埴土層) 混入
5. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中 (伊内埴方)

0 (1:50) 2m

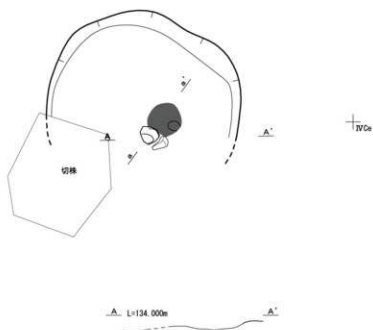
S140 炉



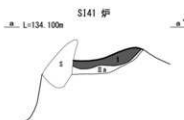
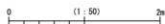
0 (1:25) 1m

第52図 S140

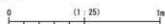
S141



S141
10YR2/3 黄褐色シルト 粘性なし しまりやや碎 黄褐色シルト粒2~3%・黄土粒・炭化物粒混入

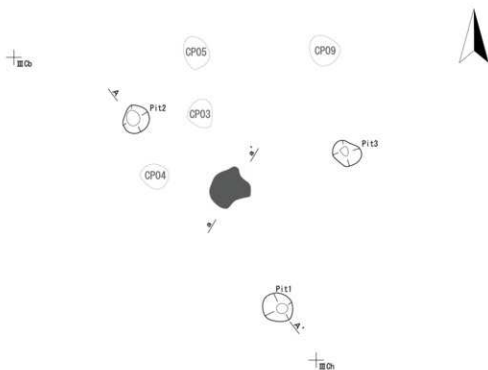


S141 甲
1. 2.5YR1/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 (黄土層)



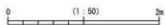
第53図 S141

S142



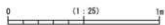
S142

7. S195/6 明褐色シルト 粘性中 しまりやや線 漆が周辺の埋蔵土



S142 跡

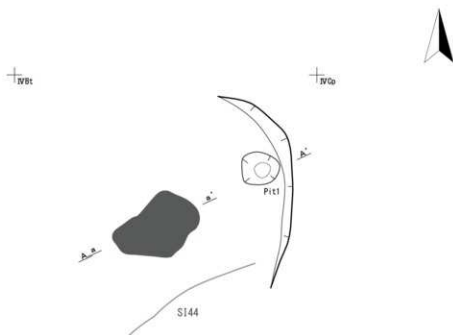
7. S194/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや線 粘土小ブロック3~5%混入
- 5195/6 褐色 粘性中 しまり中 粘土層 部分的に明赤褐色シルトを混入



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	43×39	37
Pit2	38×35	48
Pit3	39×31	50

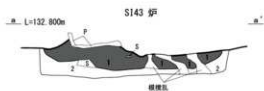
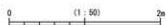
第54図 S142

S143



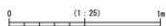
S143

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化物粒少量・焼土粒微量混入



S143 跡

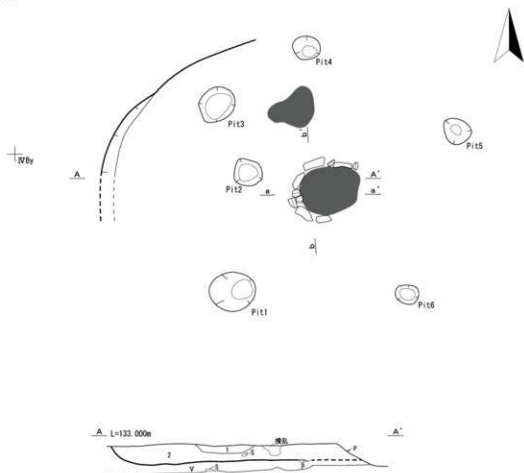
1. S143/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化物 縦断面により焼土は分析 暗褐色土粒少量混入
2. 10YR4/6 褐色シルト 粘性弱 しまりやや密



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	52×45	39

第55図 S143

S144

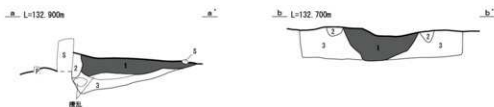


S144

- 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物粒微量混入
- 10TR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化物粒・検土粒微量混入

0 (1 : 50) 2m

S144 跡



S144 跡

- 10TR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり疎 雑草層 層上段は硬化がみられる
- 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化花崗岩屑(マサ土)多量混入
- 10TR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり疎 黄褐色土ブロック少量混入

No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit11	62×52	33
Pit12	40×37	34
Pit13	52×43	34
Pit14	38×32	42
Pit15	39×33	53
Pit16	31×26	68

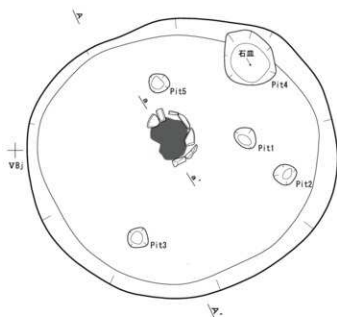
0 (1 : 25) 1m

第56図 S144

S145

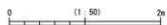
+Vbe

+Vca



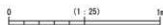
S145

- 10YR4/8 黄褐色シルト 粘性中 しまり密 黒褐色土ブロック7%・炭化物3%・焼土ブロック1%混入
- 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物5%混入



S145 SP

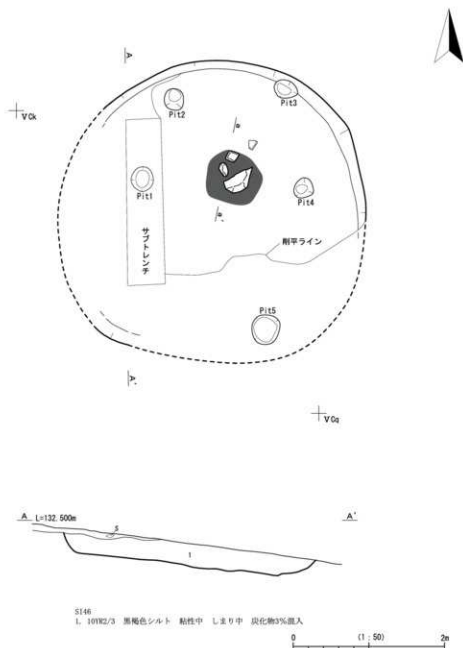
- 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性あり しまり密 黒褐色土ブロック3%混入



No.	長×短 (cm)	厚さ (cm)
Pit1	32×26	37
Pit2	31×28	46
Pit3	29×29	32
Pit4	84×68	33
Pit5	29×26	33

第57図 S145

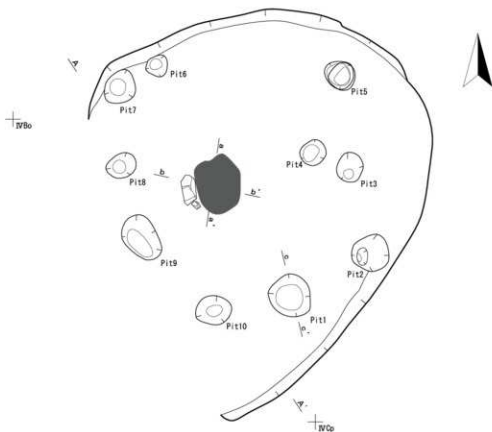
S146



No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	33×30	27
Pit2	30×27	27
Pit3	33×24	18
Pit4	28×26	18
Pit5	41×38	31

第58図 S146

S149

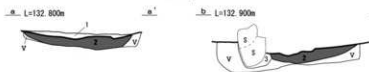


S149

1. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり締 熟熱層
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり締
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり締 IIa層
4. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり締 炭化物粒微量混入
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 黄褐色土粒微量混入 壁崩落土
6. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり締

0 (1:50) 2m

S149 5P



S149

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまりやや締 炭化物粒少量・焼土粒微量混入
2. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり締 熟熱層 層上位は緩化が著しい
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり締 砂り籠り方硬土

S149 Pit1



S149 Pit1

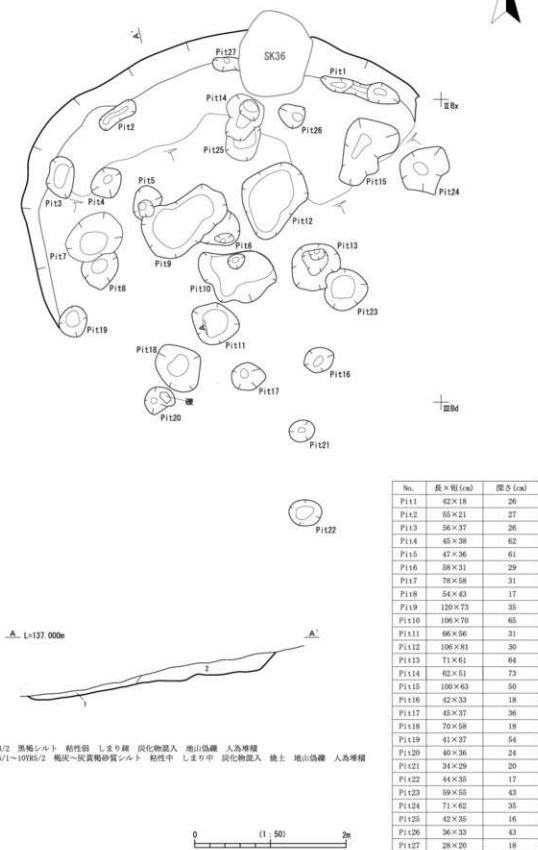
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまり締 炭化物粒微量混入
2. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性弱 しまり締 暗褐色土ブロック少量混入

0 (1:25) 50cm

No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit11	60×55	36
Pit12	51×49	68
Pit13	40×36	29
Pit14	35×32	27
Pit15	40×38	33
Pit16	31×28	26
Pit17	49×40	30
Pit18	41×32	21
Pit19	64×44	33
Pit10	49×40	21

第59図 S149

S151



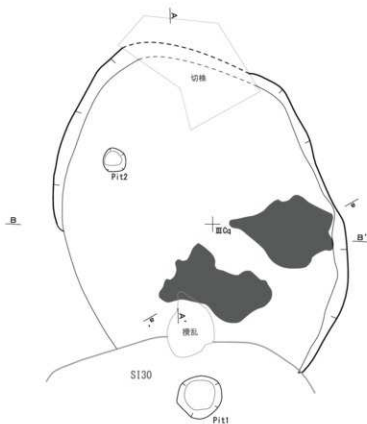
S151

- 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり強 炭化物混入 地山偽層 人為堆積
- 10YR5/1~10YR/2 褐色~灰黄褐色砂質シルト 粘性中 しまり中 炭化物混入 黄土 地山偽層 人為堆積

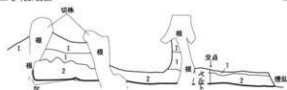
第60図 S151

S152

+ 田01



A. L=135, 800m

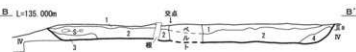


A'

S152

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト80%
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり密
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり密 暗褐色シルト10%混入
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや強 しまり中 褐色シルト20%混入

B. L=135, 000m



B'

0 (1:50) 2m

C. L=134, 900m

S152 伊

C'



S152 伊

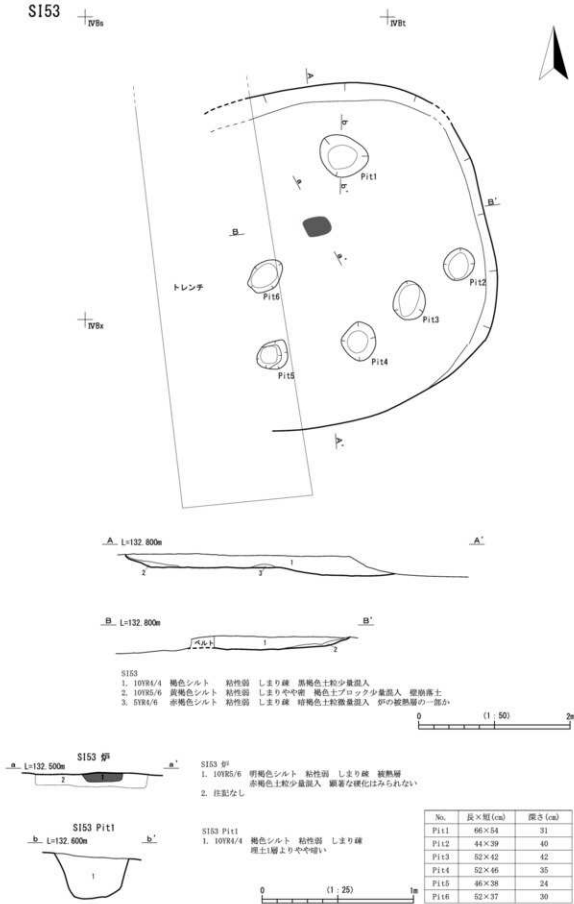
1. 10YR4/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 赤褐色シルト5%混入 南側の腰土部
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまり中 黄褐色シルト20%・ ϕ 1~3mm炭化物少量混入
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性なし しまり密 明黄褐色シルト20%・褐色シルト10%混入 東側の腰土部
4. 5YR4/4 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 明褐色シルト3%混入 東側の腰土部

0 (1:25) 50cm

No.	長×短(cm)	深さ(cm)
P111	61×56	31
P112	34×32	44

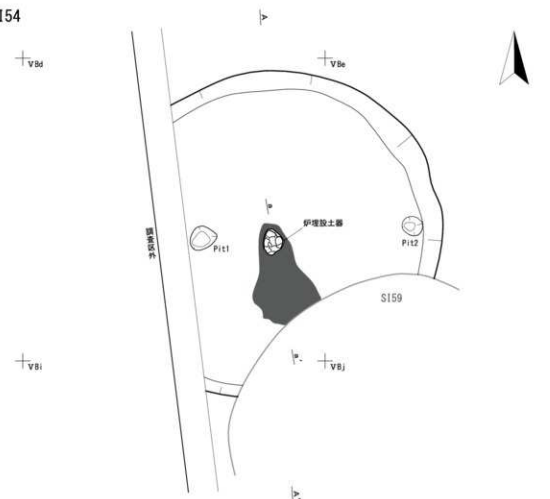
第61図 S152

S153



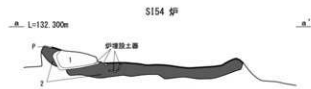
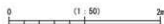
第62図 S153

S154



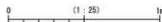
S154

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物3%・褐色土ブロック1%混入
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物7%・焼土ブロック3%混入
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまり弱 風化花崗岩が礫に入る 焼土ブロック2%・炭化物1%混入
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 焼土ブロック5%・炭化物3%混入



S154 B'

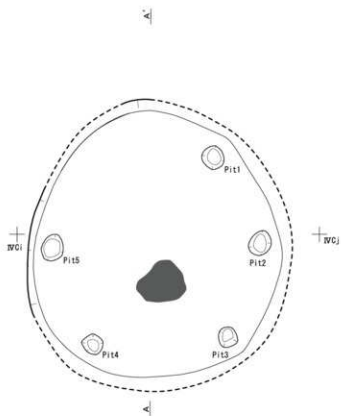
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや弱 焼土ブロック5%・炭化物3%混入
2. 5YR3/6 赤褐色シルト 粘性やや中あり しまりやや弱 暗褐色土ブロック3%混入



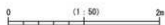
No.	長×幅 (cm)	深さ (cm)
Pit1	37×30	42
Pit2	27×25	50

第63図 S154

S155



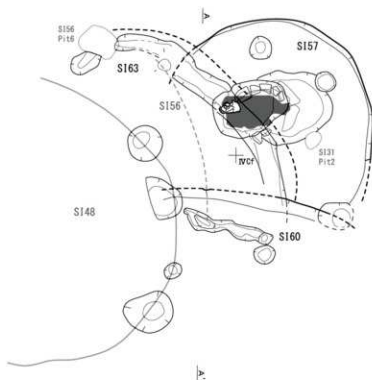
- S155
 1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 褐色土ブロック3%混入
 2. 5YR3/6 赤褐色シルト 粘性中 しまりやや密 鉄屑層



No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit1	32×30	24
Pit2	34×28	32
Pit3	28×27	29
Pit4	29×27	33
Pit5	37×30	33

第64図 S155

S157・S160・S163



Iwcr

Iwcr



S160

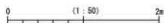
- | | | | | | |
|----|---------|--------|-------|--------|--|
| 1. | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黄褐色シルト10%・ ϕ 1~3mm炭化物2%・焼土粒少量混入 |
| 2. | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 黄褐色シルト20%混入 |
| 3. | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | ϕ 1~3mm炭化物2%・焼土粒少量混入 |
| 4. | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性やや強 | しまり中 | 黄褐色シルト10%・暗褐色シルト5%・ ϕ 1~3mm炭化物少量混入 |
| 5. | 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり密 | 黄褐色シルト5%・褐色シルト5%・ ϕ 2mm程度炭化物少量混入 同層埋土 |

S157

- | | | | | | |
|----|---------|--------|-----|--------|---|
| 6. | 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | 焼土粒1%・褐色シルト5%・黄褐色シルト3%・ ϕ 1~3mm炭化物2%混入 |
| 7. | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり密 | 黄褐色シルト10%混入 |

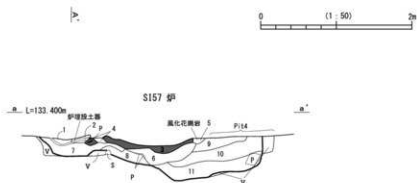
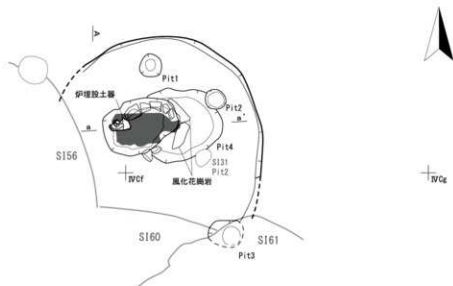
S163

- | | | | | | |
|----|---------|-------|-----|------|--------------------------------|
| 8. | 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黄褐色シルト10%・ ϕ 1~3mm炭化物1%混入 |
|----|---------|-------|-----|------|--------------------------------|



第65図 S157・60・63

S157



S157 跡・Pit

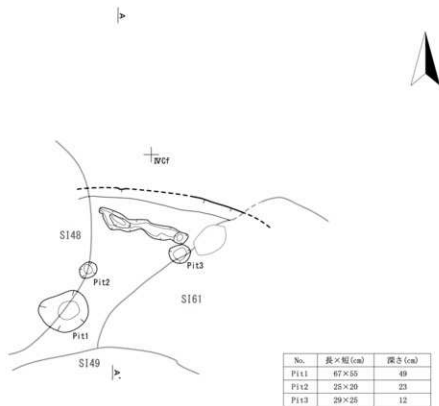
- | | | | | |
|-------------|--------|-------|--------|--|
| 1. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黄褐色シルト1cm程ブロック2%・暗褐色シルト10%・花崗岩粒1%混入 |
| 2. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | 粘性なし | しまりやや密 | 暗褐色シルト10%・花崗岩粒1%混入 |
| 3. 5YR4/6 | 赤褐色シルト | 粘性なし | しまり密 | 花崗岩粒が燃焼 |
| 4. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | 黄褐色シルト2%・ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒少量混入 |
| 5. 7.5YR6/6 | 棕色真砂土 | 粘性なし | しまり密 | 風化花崗岩 褐色シルト5%混入 |
| 6. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物2%混入 |
| 7. 7.5YR3/4 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 暗褐色シルト20%・黄褐色シルト5%・ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物少量混入 |
| 8. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物少量・焼土粒少量混入 |
| 9. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | $\phi 1\text{mm}\sim 1\text{cm}$ 炭化物7%混入 Pit14埋土 |
| 10. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物2%・焼土粒1%・花崗岩粒少量混入 Pit14埋土 |
| 11. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 粘性やや強 | しまり中 | 黄褐色シルト10%・ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ 炭化物1%混入 Pit14埋土 |

0 (1:25) 1m

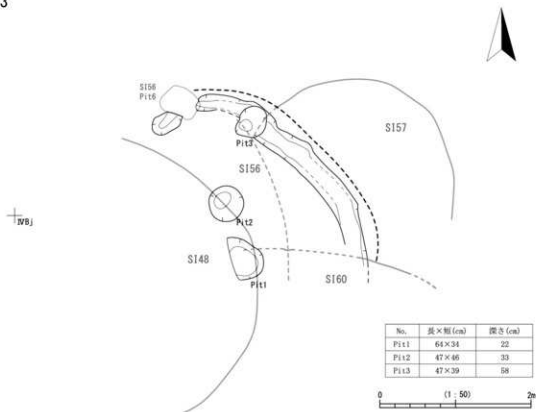
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	32×31	23
Pit2	29×27	24
Pit3	45×36	52

第66図 S157

S160

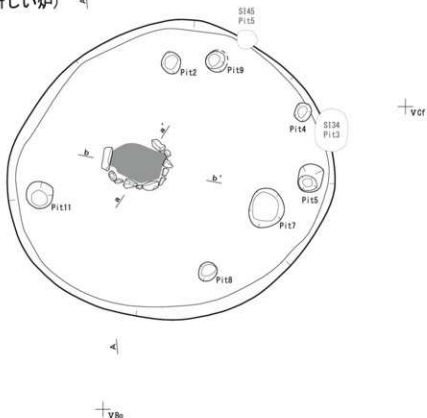


S163



第67図 S160・63

S159 (新しい炉)



-A- L=132.600m



-A'

S159

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物5%混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物5%・褐色土ブロック2%混入

0 (1 : 50) 2m

S159 炉P1



-b- L=132.100m



-b'

S159 炉P1

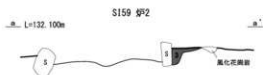
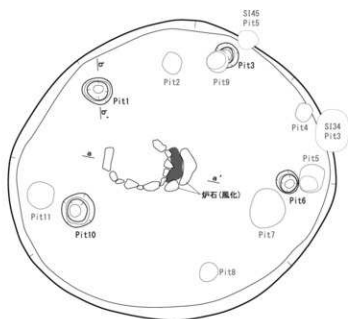
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物5%混入
2. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性あり しまりやや密

0 (1 : 25) 1m

No.	長×短(m)	深さ(m)
Pit11	41×37	55
Pit12	30×27	26
Pit13	34×20	47
Pit14	25×22	24
Pit15	40×36	31
Pit16	32×29	42
Pit17	54×49	43
Pit18	27×24	29
Pit19	29×28	55
Pit110	47×45	64
Pit111	36×35	48

第68図 S159 (1)

S159 (古い炉の段階)



S159 Pit2
3. 5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性あり しまりやや密

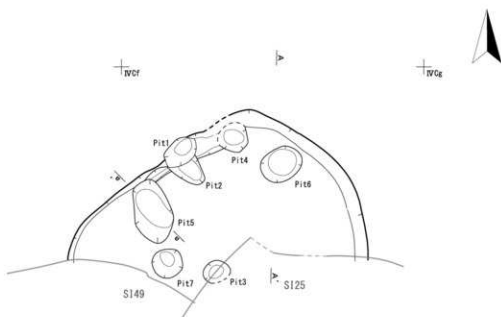


S159 Pit1
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや疎
褐色土ブロック0%・炭化物0%混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色土ブロック7%混入



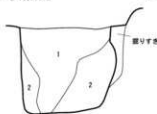
第69図 S159 (2)

S161



- S161
- | | | | |
|-------------------|-----|--------|--|
| 1. 10YR3/3 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 黒褐色シルト10%・φ1mm~1cm炭化物9%・褐色シルトφ2cm程ブロック1%混入 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 褐色シルト20%・黄褐色シルト1~5mmブロック10%・φ1~3mm炭化物1%混入 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | 黄土粒(褐色シルト)2%・φ1mm~1cm炭化物2%混入 |
| 4. 10YR3/3 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | 褐色シルト20%・φ1~2mm炭化物2%・黄土粒1%混入 |

0 (1:50) 2m

S161 Pit1
断面 L=133.100m

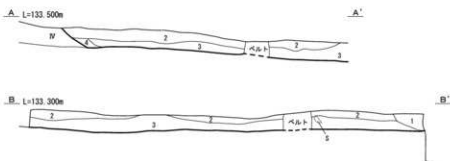
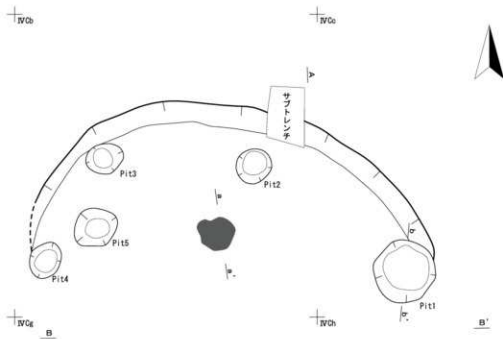
- S161 Pit1・2・4
- | | | | |
|-------------------|-----|--------|------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色シルト | 粘性中 | しまりやや密 | 褐色シルト20%・φ1~2mm炭化物2%・黄土粒1%混入 |
| 2. 未記なし | | | |

0 (1:25) 1m

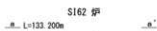
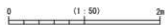
No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit1	48×30	45
Pit2	53×37	23
Pit3	37×25	16
Pit4	40×37	58
Pit5	86×52	65
Pit6	57×44	88
Pit7	41×40	53

第70図 S161

S162



- S162
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり礫 十和田中微火山灰ブロック多量混入
 2. 10YR2/1 暗褐色シルト 粘性弱 しまり礫 1層同様に十和田中微火山灰ブロックが層上位に少量混入
 3. 10YR4/1 褐色シルト 粘性やや弱 しまり砂や礫 暗褐色土ブロック少量混入
 4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性弱 しまり礫 暗褐色土ブロック少量混入、硬弱落土



- S162 卵
1. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性弱 しまり礫 炭粉層 暗褐色土粒微量混入



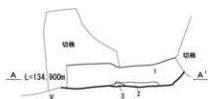
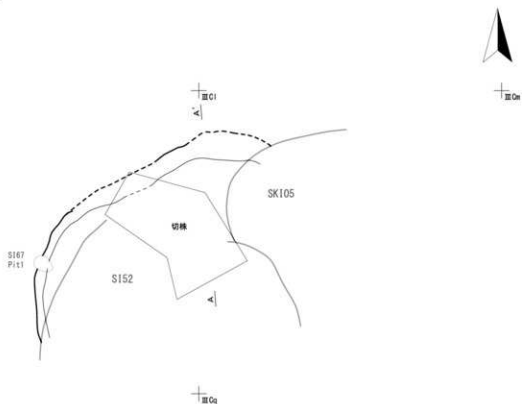
- S162 Pit1
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり礫 炭化物粒微量混入



No.	長×幅 (cm)	深さ (cm)
Pit1	84×84	37
Pit2	48×44	36
Pit3	51×41	33
Pit4	51×41	32
Pit5	62×54	18

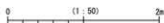
第71図 S162

S164



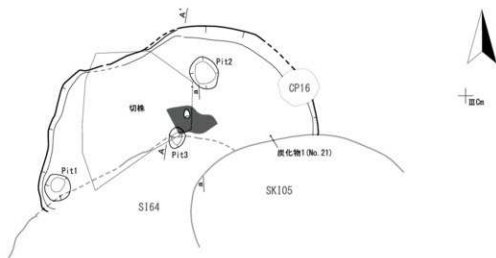
S164

- | | | | | |
|------------|----------|-------|--------|------------------|
| 1. 10YR4/4 | 褐色シルト | 粘性中 | しまり中 | 炭化物粒2~3%・焼土粒1%混入 |
| 2. 10YR4/6 | 褐色砂質シルト | 粘性なし | しまり中 | 炭化物混入 |
| 3. 10YR5/8 | 黄褐色砂質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 褐色シルトブロック混入 |



第72図 S164

S165

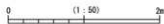


+



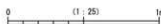
S165

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり硬 炭化物ブロック2%・焼土ブロック3~5%・地山ブロック2%混入
2. 5YR5/8 明赤褐色シルト 粘性なし しまりやや硬 炭化物和2~3%・地山ブロック5%混入



S165 B'

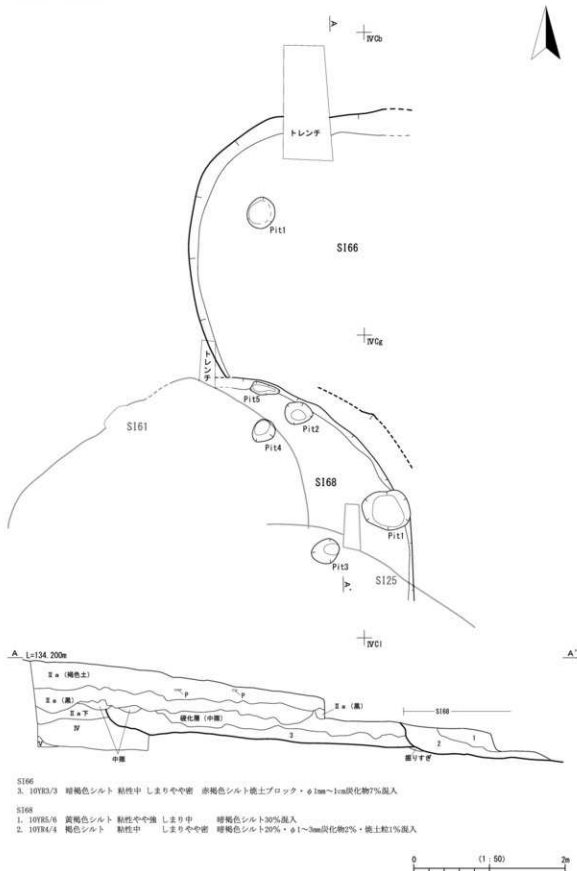
1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまりやや密 黄褐色シルトブロック7~10%・炭化物和3~5%・焼土和1%混入
2. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性なし しまり中 炭化物和2~3%・褐色シルト小ブロック2~3%混入 (原形薄土か)



No.	長×幅 (cm)	深さ (cm)
P1t1	36×35	44
P1t2	45×36	15
P1t3	28×21	15

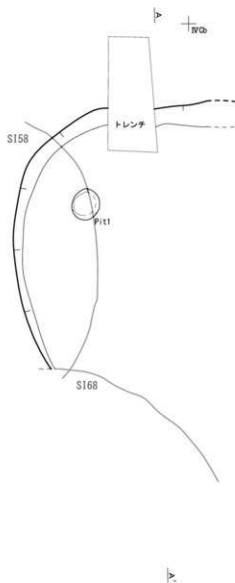
第73図 S165

S166・S168

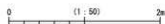


第74図 S166・68

S166

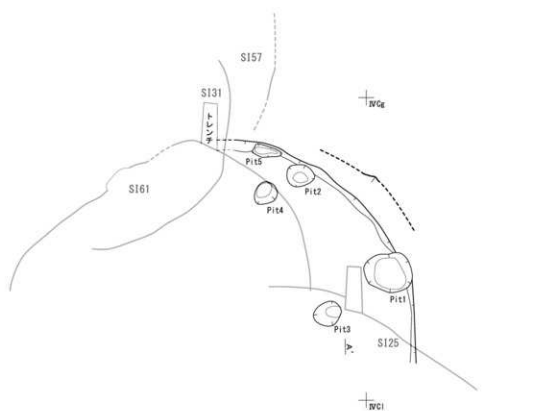


No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	42×37	16

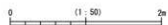


第75図 S166

S168

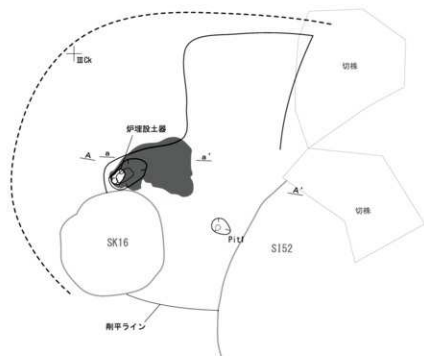


No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	66×54	73
Pit2	37×30	46
Pit3	28×22	69
Pit4	33×29	56
Pit5	40×18	28

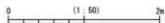


第76図 S168

S167

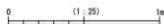


S167
10T23/3 軽褐色シルト 粘性中 しまり密 褐色シルト10%・φ1~3mm炭化物2%混入



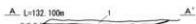
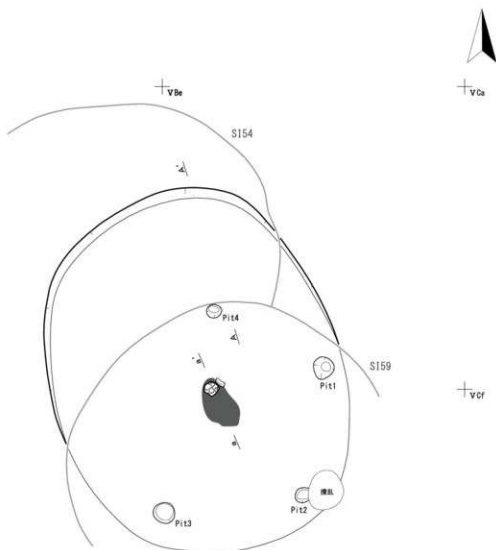
S167 SP
1. 5X14/8 赤褐色シルト 粘性なし しまり密 φ1~3mm炭化物少量混入
2. 7.5X14/6 褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 赤褐色シルト10%・φ1~2mm炭化物少量混入

No.	長×短(cm)	深さ(cm)
Pit1	27×20	34

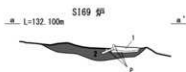
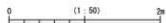


第77図 S167

S169

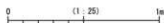


S169
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中



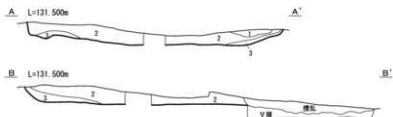
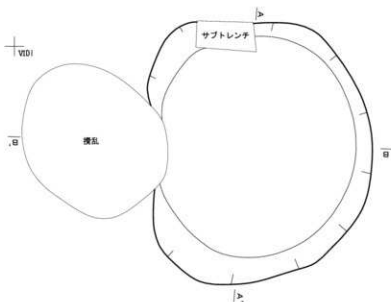
S169 跡
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 黄土ブロック3%・炭化物2%混入
2. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性中 しまり密

No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	30×28	31
Pit2	21×18	24
Pit3	23×20	24
Pit4	29×28	29



第78図 S169

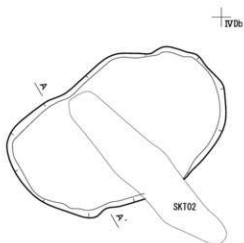
SK101



SK101

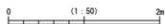
1. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり強 炭灰層 (SL01)
2. 10YR4/6 褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 炭化物和微量混入
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 壁崩落土

SK102



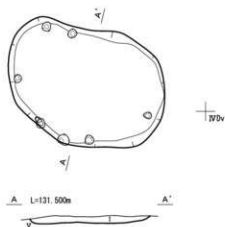
SK102

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまり中 黄褐色シルト小ブロック5~7%混入
2. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性ややなし しまり中 褐色シルト小ブロック2~3%混入



第79図 SK101・02

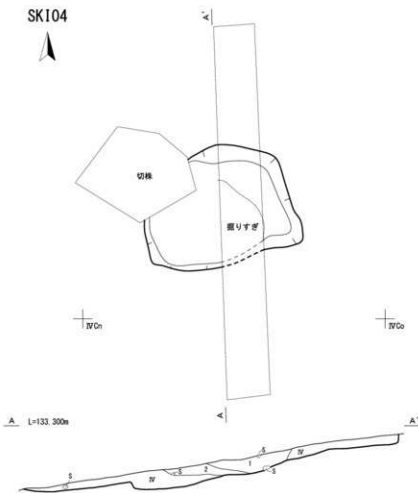
SK103



SK103

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまり中 明黄褐色シルトブロック10%混入

SK104



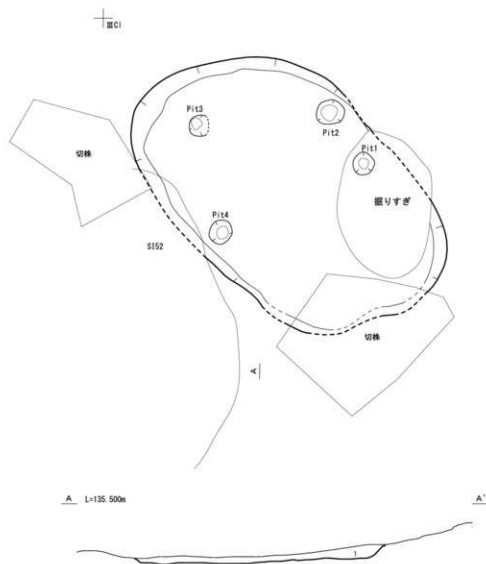
SK104

1. 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性なし しまり中 黄褐色シルト小ブロック3%・黒褐色シルトブロック10%・炭化物粒2~3%混入
 2. 10YR4/3 黄褐色シルト 粘性中 しまりやや密 黄褐色シルト粒2~3%・暗褐色シルトブロック8~7%・炭化物粒1%混入



第80図 SK103・04

SK105



A L=135.500m

A'

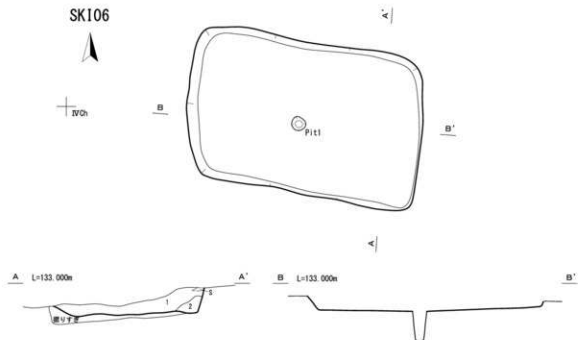
SK105

1. 10134/4 褐色シルト 粘性ややなし しまり疎 明黄褐色砂質シルトブロック3~5%・炭化物粒1~2%混入

No.	長×短 (cm)	高さ (cm)
Pit11	30×29	53
Pit12	38×31	34
Pit13	29×28	32
Pit14	32×29	28

0 (1:50) 2m

第81図 SK105

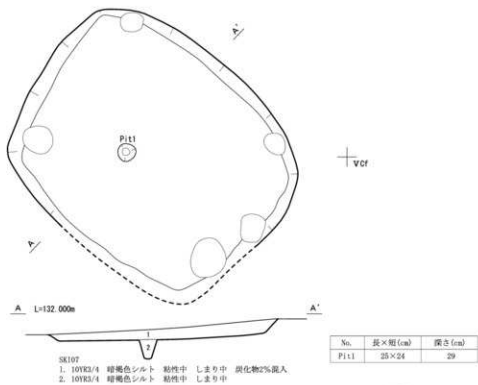


SK106

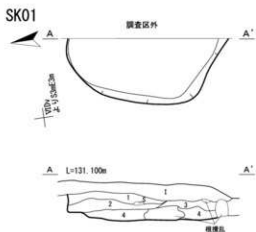
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
 2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色ブロック5%混入

No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	19×17	43

SK107

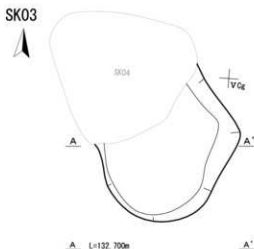


第82図 SK106・07



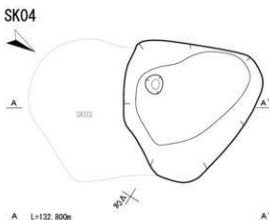
SK01

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性弱 しまり硬 黄褐色土ブロック少量混入
2. 10YR3/3 暗褐色土砂質シルト 粘性弱 しまり硬 炭化物ブロック少量混入
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性弱 しまり硬 粘土少量混入
4. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまり硬 炭化物粒微量混入



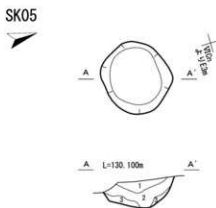
SK03

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性強 しまり硬 粘土ブロック少量混入



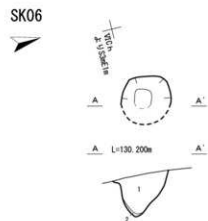
SK04

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物粒微量混入



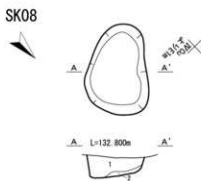
SK05

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
φ1~3mm程度炭化物2・焼土粒少量混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
褐色シルト10%・暗褐色シルト10%・褐色シルト3%・φ1~3mmの炭化物1%混入
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 褐色シルト10%・炭屑粒2%混入



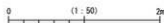
SK06

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
φ2~1cm程度の炭化物3%・褐色シルト焼土粒1%・黒褐色シルト30%混入
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱 しまり硬



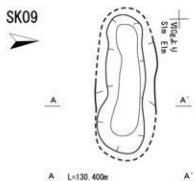
SK08

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり硬 炭化物粒微量混入
2. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密
暗褐色土粒少量混入・炭屑落土



第83図 SK01・03~06・08

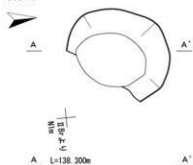
SK09



SK09

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
右側のみ褐色シルト10%まだらに入る・ ϕ 1~3mm炭化物粒1%混入
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
原褐色シルト20%・褐色シルト5%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5%混入
4. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや強 しまり中
5. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや強 しまり中
褐色シルト20%・暗褐色シルト5%混入

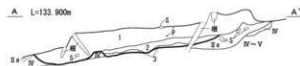
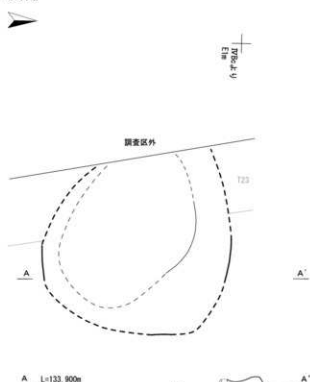
SK10



SK10

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 褐色ブロック3%混入

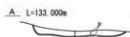
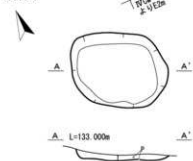
SK12



SK12

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 しまりやや強
2. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや弱 しまり中 黄褐色シルト ϕ 2mmブロック10%混入
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 黄褐色シルト10%混入

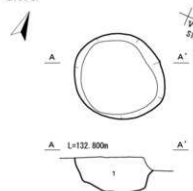
SK14



SK14

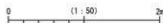
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性なし しまり中
明黄褐色ブロック5~7%・炭化物粒3~5%

SK15

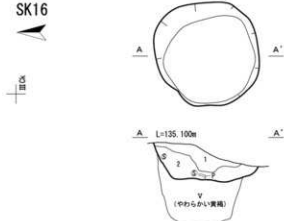


SK15

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性中 しまりやや強



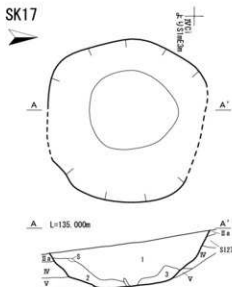
SK16



SK16

- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物2%混入
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや強 しまり中 褐色シルト30%・炭化物2%混入

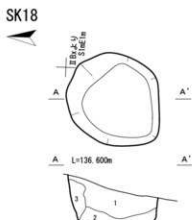
SK17



SK17

- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりやや疎 炭化物約2%・褐色粒1~2%混入 土層厚多く含む
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまり中 V層ブロック10~15%混入
- 10YR6/8 明黄褐色シルト 粘性中 しまりやや疎 黒褐色シルトブロック7~10% (堆山崩落) 混入

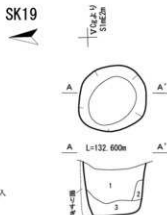
SK18



SK18

- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物7%混入
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色ブロック5%・炭化物2%混入
- 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまり中 暗褐色ブロック7%・5YR4/8(赤褐色)5%混入

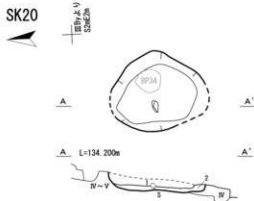
SK19



SK19

- 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまりやや疎 暗褐色ブロック5%・炭化物2%混入
- 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや疎
- 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり疎

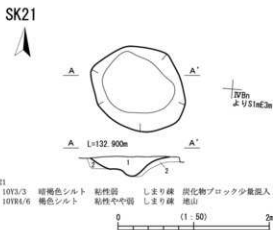
SK20



SK20

- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 1層と同じ?
- 暗褐色シルト10%・黒褐色シルト10%・φ1~3mm炭化物1%混入
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5%・黄褐色シルト10%・φ1~3mm炭化物2%混入

SK21

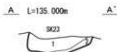
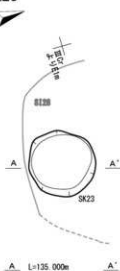


SK21

- 10Y3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化物ブロック少量混入
- 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや弱 しまり疎 堆山

0 (1:50) 2m

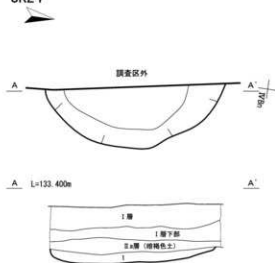
SK23



SK22



SK24



SK24

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 しまり疎
黄褐色土ブロック少量混入

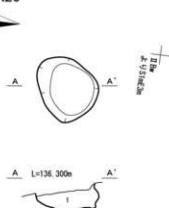
SK22

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性中 しまりやや疎
黄褐色砂質シルト粘3~5%・炭化物粒1~2%混入
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややなし しまり中
炭化物粒1%・黄褐色砂質シルト粘5%混入
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性ややなし しまり中
にぶい黄褐色シルト層状にみられる

SK23

1. 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性ややあり しまりやや疎
明黄褐色砂質シルトブロック7~10%・炭化物粒2~3%混入
2. 10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまりやや疎
褐色シルトブロック5%・炭化物粒1~2%混入

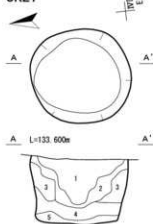
SK25



SK25

1. 10YR5/1 暗灰色砂質シルト 粘性中 しまりやや密 炭化物1%以下 焼土

SK27

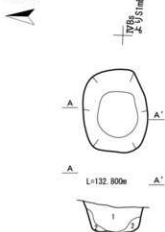


SK27

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり中
褐色ブロック5%・炭化物1%混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや疎
褐色ブロック7%・黒褐色ブロック3%混入
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや疎
暗褐色ブロック5%混入 炭化物混入
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまり疎
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり疎
炭化物1%混入

0 (1:50) 2m

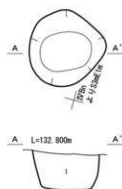
SK28



SK28

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化物粒微量混入
2. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり疎 風化花崗岩塊（マゼ土）少量（4~5mm）混入

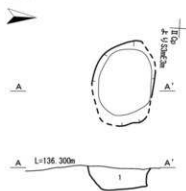
SK29



SK29

1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり疎 炭化物粒微量混入

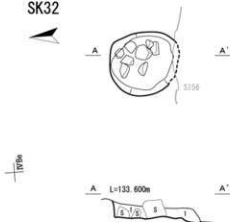
SK30



SK30

1. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 粘性なし しまり疎 明黄褐色砂質シルトブロック8~7%混入

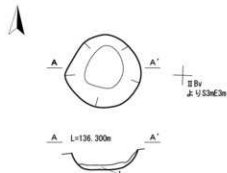
SK32



SK32

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 炭化物2%・黄褐色シルト3%混入 10~20cm大の角レキがまぎらって入る

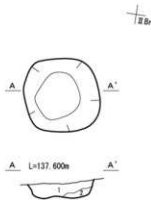
SK33



SK33

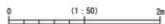
1. 10YR5/1 黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり中 炭化物混入

SK34

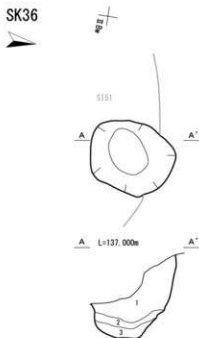


SK34

1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性弱 しまり疎 人為堆積?
2. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 粘性中 しまり中 人為堆積?

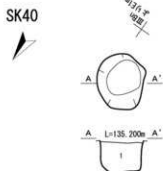


SK36



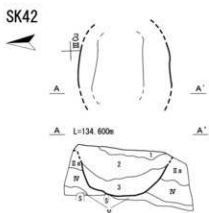
- SK36
 1. 2. 5YR6/4 にぶい黄褐色シルト 人為堆積
 2. 10YR3/1 黒褐色シルト 自然流入
 3. 2. 5YR5/4 黄褐色粘土質シルト 機能時形成層

SK40



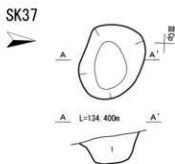
- SK40
 1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱 しまり練 人為堆積

SK42



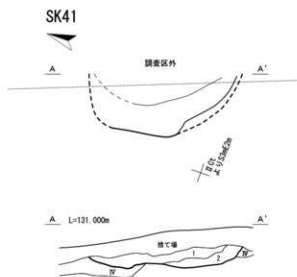
- SK42
 1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 程度炭化物1%・花崗岩粒少量混入
 2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 程度炭化物2%・粘土粒1%混入
 3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
 褐色シルト10%・ $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 程度炭化物2%・粘土粒少量混入

SK37



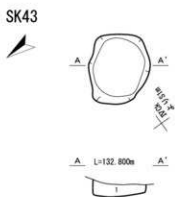
- SK37
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり練
 壁際に黄褐色ブロック微量混入

SK41



- SK41
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまり中
 にぶい黄褐色シルト小ブロック3~5%・炭化物粒1~2%混入
 2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性ややなし しまり中
 黄褐色シルト小ブロック2~3%・炭化物粒1%・棕色粒1%混入

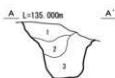
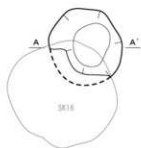
SK43



- SK43
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり練 黄褐色土ブロック少量混入

0 (1:50) 2m

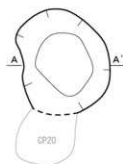
SK44



SK44

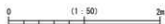
1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性強 しまりやや密
φ1~3mm炭化物2%混入
2. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性強 しまりやや密
褐色シルト10%・φ1~3mm炭化物少量混入
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性強 しまり中
褐色シルト20%・φ1~3mm焼土粒少量混入

SK45

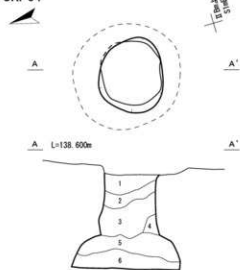


SK45

1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまり密
φ1~3mm炭化物1%・焼土粒1%混入
2. 7.5YR6/6 黄褐色シルト (マサ土)
3. 10YR4/4 褐色シルト10%・褐色シルト10%・風化花崗岩?混入
褐色シルト 粘性やや強 しまり中 φ1~3mm炭化物1%混入
4. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
暗褐色シルト30%・φ1~3mm炭化物7%・焼土粒2%・歪角レキ花崗岩混入



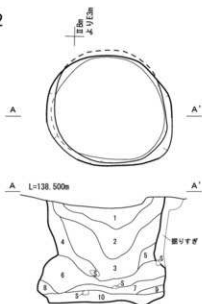
SKF01



SKF01

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物5%混入
3. 10YR2/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり硬 黄褐色ブロック7%混入
5. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり硬
6. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性ややあり しまり硬 暗褐色ブロック3%混入

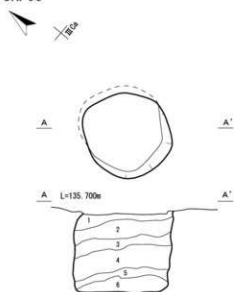
SKF02



SKF02

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
2. 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物5%混入
3. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物7%混入
4. 10YR4/6 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬
5. 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬
6. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬 暗色ブロック7%混入、ガラスの片散在
7. 10YR2/3 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり硬 炭化物3%混入
8. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり硬 5YR4/8(赤褐色)5%混入
9. 10YR4/6 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり硬
10. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり硬

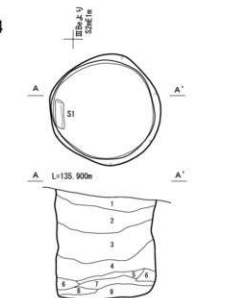
SKF03



SKF03

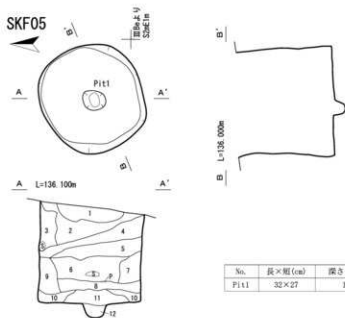
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬 炭化物1%混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬 5YR4/8(赤褐色)7%・炭化物3%混入
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物7%混入
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物10%混入
6. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中

SKF04



SKF04

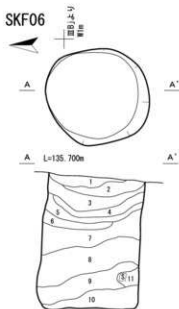
1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物1%混入 人海獣種の可能性が高い
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物3%・5YR4/8(赤褐色)1%混入
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 炭化物7%・5YR4/8(赤褐色)3%混入
5. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり硬 炭化物10%混入
6. 10YR4/6 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 黄褐色ブロック7%・暗褐色ブロック3%混入 壁崩落土か
7. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり硬
8. 5YR3/6 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬
9. 7. 5YR4/6 暗褐色シルト 粘性中 しまり中



SKF05

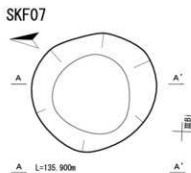
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり中
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
炭化物1%混入 人為堆積か
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性ややあり しまり中
暗褐色ブロック5%混入 人為堆積か
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
5YR4/8(赤褐色)7%・炭化物1%混入 人為堆積か
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物3%混入 人為堆積か
6. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物5%混入 人為堆積か

7. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまり中
5YR4/8(赤褐色)1%・炭化物1%混入 人為堆積か
8. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬
炭化物10%混入 炭化物層 土器片も多い・人為堆積か
9. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまり中
暗褐色ブロック7%・炭化物1%混入 人為堆積か
10. 5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性中 しまり中
暗褐色ブロック3%・炭化物2%混入
11. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや硬
12. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬



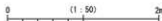
SKF06

1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり中 人為堆積か
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
褐色ブロック5%混入 人為堆積か
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物2%混入 人為堆積か
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
5YR4/8(赤褐色)7%混入 人為堆積か
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物5%混入 人為堆積か
6. 10YR4/6 褐色シルト 粘性ややあり しまり中
5YR4/8(赤褐色)3%混入 人為堆積か
7. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物1%混入 人為堆積か
8. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
5YR4/8(赤褐色)5%・炭化物2%混入 人為堆積か
9. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
5YR4/8(赤褐色)10%混入 人為堆積か
10. 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性ややあり しまりやや密 人為堆積か
11. 庄記なし



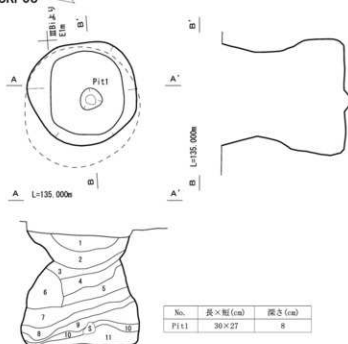
SKF07

1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり中
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
褐色ブロック5%混入 人為堆積か
3. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物2%混入
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 5YR4/8(赤褐色)7%混入
5. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物5%混入
6. 10YR4/6 褐色シルト 粘性ややあり しまり中 5YR4/8(赤褐色)3%混入
7. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 炭化物1%混入
8. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中
赤土(5YR4/8 赤褐色)5%・炭化物2%混入
9. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまり中 5YR4/8(赤褐色)10%混入



第91図 SKF05~07

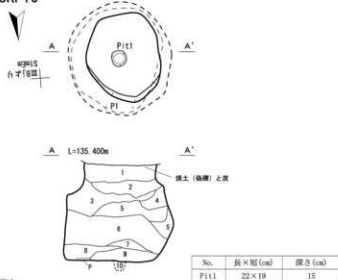
SKF08



SKF08

- 10YK2/3 黒褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物1%混入
- 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 炭化物2%混入
- 10YK3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 炭化物5%混入
- 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 炭化物5%混入
- 10YK3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 炭化物5%混入
- 10YK3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 褐色ブロック7%・炭化物3%混入 埋藏層土
- 10YK3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 花崗岩7%・炭化物1%混入
- 10YK2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 炭化物7%混入
- 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 暗褐色ブロック5%混入
- 10YK2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 炭化物10%混入
- 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 暗褐色ブロック7%混入

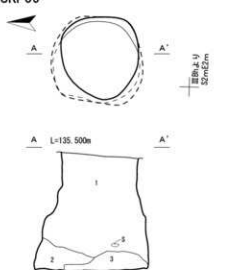
SKF10



SKF10

- 10YK5/2 灰黄褐色シルト 自然堆積か?
- 10YK6/6 明黄褐色シルト (地山偽礫混) 埋めたり?
- 10YK5/1 褐色粘土質シルト (地山偽礫混) 東からの崩落
- 10YK6/6 明黄褐色～褐色シルト (地山偽礫混) 西からの崩落
- 10YK3/1 黒褐色シルト 西からの崩落か?
- 10YK6/6 明黄褐色～褐色粘土質シルト (地山偽礫混) 崩落か?
- 5YK2/1 黒色シルト 粘性なし しまり硬 地山ブロック混入
- 5YR4/8 赤褐色シルト 粘性なし しまりやや硬 黄土層 (埋藏) 地山との互層
- 5YK5/8 明褐色砂質シルト 粘性なし しまりやや硬 炭化物粘土粒混入 (埋藏層土)
- 5YK5/6 明褐色シルト主体 Pit1埋土

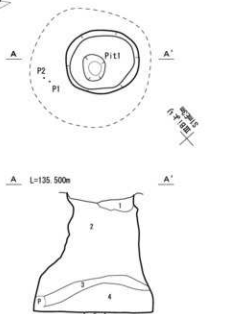
SKF09



SKF09

- 10YK5/2 灰黄褐色砂質シルト 粘性中 しまり密 人為堆積
- 10YK4/1 褐色砂質シルト 粘性弱 しまり密 埋藏層土か?
- 10YK5/6 黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや硬 崩落土 地山偽礫混

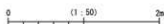
SKF11

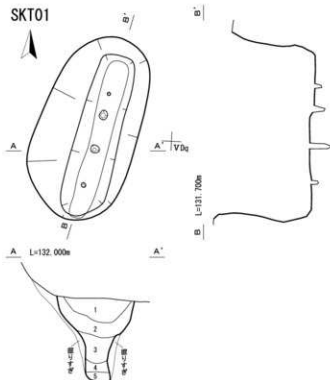


SKF11

- 5YK6/8 褐色シルト 投入された埋土偽層
- 10YK5/2 灰黄褐色シルト (灰・地山偽礫を含む埋藏し土)
- 10YK4/3 赤褐色シルト 粘性なし しまりやや硬 炭化物多量混入
- 5YK4/6 褐色シルト 粘性なし しまり中 地山ブロック 炭化物・粘土ブロック混入 (埋藏し土か?)
- 暗褐色シルト主体

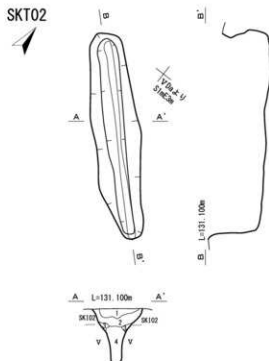
No.	長×短 (cm)	深さ (cm)
Pit1	35×28	9





SKT01

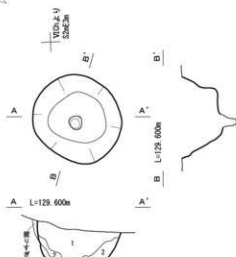
- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり中
暗褐色ブロック5%・炭化物2%混入
- 10Y3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまり中 褐色ブロック7%混入
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 褐色ブロック5%混入
- 10YR4/4 褐色シルト 粘性あり しまりやや硬
- 10YR5/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりやや硬



SKT02

- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりやや硬
褐色シルトブロック10%・炭化物粒1%・粘土粒1%混入
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややなし しまりやや硬
黄褐色81%混入(土器片出土)
- 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中 しまりやや硬(硬結核土層)
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややなし しまりやや硬
黄褐色ブロック6~7%・黒褐色小ブロック7%・レキ混入

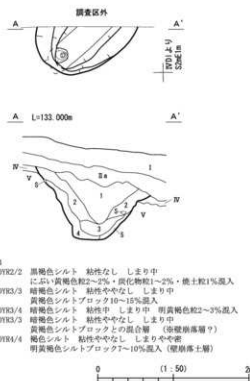
SKT03



SKT03

- 10Y2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりやや硬
- 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりやや硬 褐色ブロック5%混入
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性あり しまりやや硬

SKT04

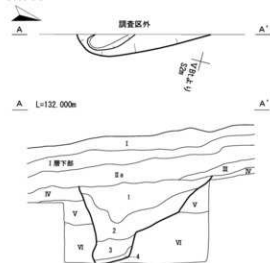


SKT04

- 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし しまり中
に、黄褐色粒2~3%・炭化物粒1~2%・粘土粒1%混入
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややなし しまり中
黄褐色シルトブロック10~15%混入
- 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 明黄褐色粒2~3%混入
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性ややなし しまり中
黄褐色シルトブロックとの混入層(赤褐色層?)
- 10YR4/4 褐色シルト 粘性ややなし しまりやや硬
明黄褐色シルトブロック7~10%混入(硬結核土層)

第93図 SKT01~04

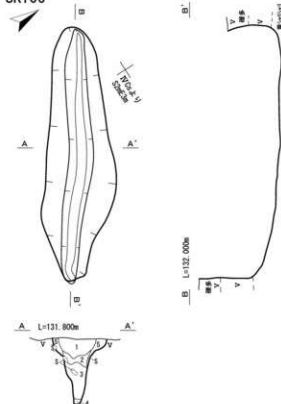
SKT05



SKT05

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり しまり中
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性あり しまり中
褐色ブロック7%・暗褐色ブロック5%混入
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性あり しまりやや硬
4. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性あり しまりやや硬

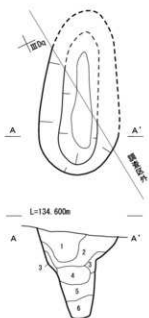
SKT06



SKT06

1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性ややなし しまり中 黄褐色シルト小ブロック15%混入
根の影響を受ける ※断面図作成部分にはないが最上部にFe-Oxのブロックあり
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまりやや硬
褐色シルト小ブロック7%・炭化物粒1~2%混入
3. 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまり硬
黒褐色シルト小ブロック10%・暗褐色シルト小ブロック6~7%混入
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややなし しまり中 褐色シルトブロック10%混入
5. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性ややなし しまり中
に5%黄褐色シルトブロック15~20%混入 (V層起掘)

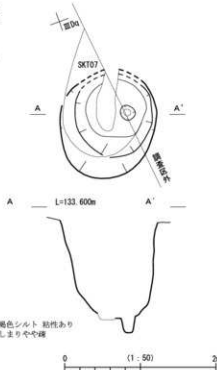
SKT07



SKT07

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり しまり中
褐色ブロック3%・炭化物1%混入
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬 褐色ブロック1%混入
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 硬弱赤土
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりやや硬 褐色ブロック6%混入
5. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや硬
6. 10YR4/6 褐色シルト 粘性中 しまりやや硬 炭化物3%混入

SKT08

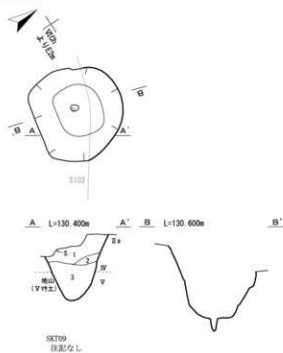


SKT08

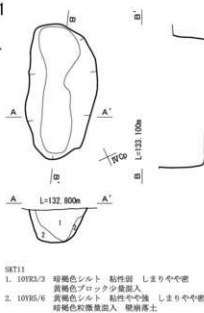
- 10YR4/6 褐色シルト 粘性あり
しまりやや硬

第94図 SKT05~08

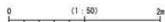
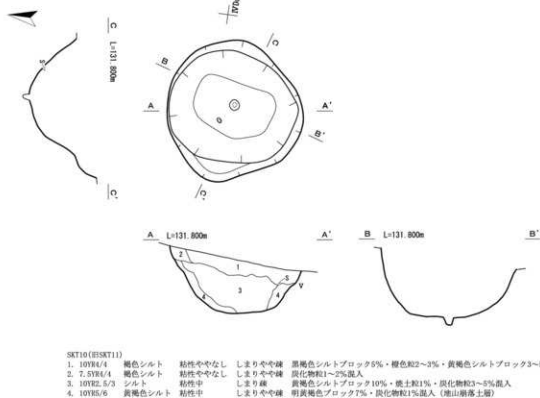
SKT09



SKT11

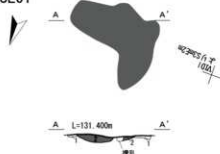


SKT10



第95図 SKT09~11

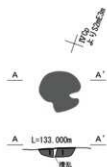
SL01



SL01

- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまりやや密 炭化物粒少量混入
- 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性強 しまりやや密 炭熟層

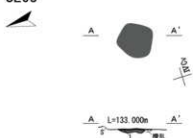
SL02



SL02

- 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性強 しまりやや密 炭熟層

SL03



SL03

- 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性強 しまりやや密 炭熟層

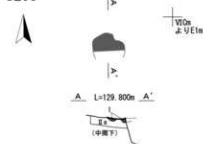
SL04



SL04

- 7.5YR4/6 褐色シルト 粘性なし しまり密 赤褐色シルト10%混入
- 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中 褐色シルト5% (粒子) - φ2mm粒炭化物1%混入

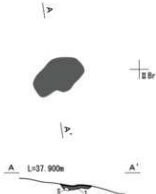
SL05



SL05

- 注記なし

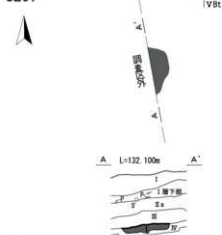
SL06



SL06

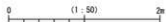
- 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性ややあり しまりやや疎

SL07

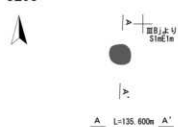


SL07

- 5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性あり しまりやや疎 暗褐色ブロック5%混入

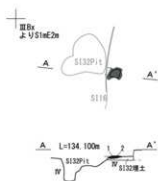


SL08



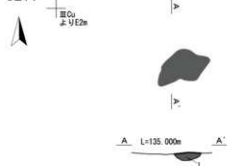
- SL08
1. 5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性中 しまりやや密 暗褐色ブロック2%混入

SL09



- SL09
1. 7.5YR2/1 黒色シルト 粘性なし しまり密 (強い)硬化)
暗赤褐色シルト5%・暗褐色シルト5%混入
2. 5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性なし しまり密

SL11



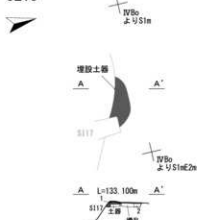
- SL11
1. 7.5YR5/6 明褐色シルト 粘性中 しまりやや密
黄褐色シルト20%・褐色シルト10%・炭化物少量混入

SL12



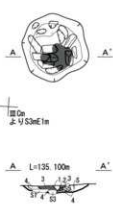
- SL12
1. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性なし しまり中

SL15



- SL15
1. 5YR4/6 赤褐色シルト 粘性弱 しまり稀 炭化物粒微量混入
2. 5YR3/3 暗褐色シルト 粘性弱 しまり稀 炭化物粒微量混入

SL16

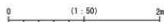


- SL16
1. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性中 しまり中 粘土ブロック5%混入
2. 7.5YR3/3 暗褐色シルト 粘性なし しまりやや密
3. 2.5YR4/6 赤褐色シルト 粘性中 しまりやや密 埋設土層
4. 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性ややあり しまりやや密 (掘り方?)

SL18

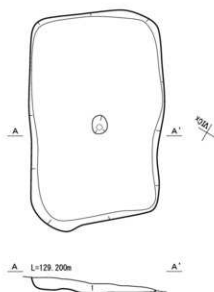


- SL18
1. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまり中 1cm程度の埋設土層明赤褐色5%混入
2. 10YR4/3 赤褐色シルト 粘性中 しまり中 埋設土層2%・褐色シルト10%・φ1~6mm炭化物5%混入
3. 5YR5/8 明赤褐色シルト 粘性中 しまり密 漆喰面
4. 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまり中 明赤褐色シルト3%・φ1mm炭化物1%混入 漆喰の弱い埋設土層
5. 7.5YR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや密 炭化物微量混入 埋設土層掘り方の埋設土層
6. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量混入 埋設土層掘り方



第97図 SL08・09・11・12・15・16・18

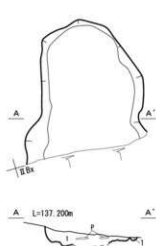
SX01



SX01

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや稀 炭化物微量・花崗岩片（4～5mm）少量混入

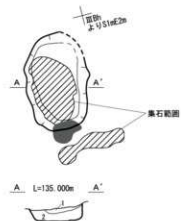
SX02



SX02

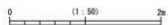
1. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 粘性弱 しまり弱

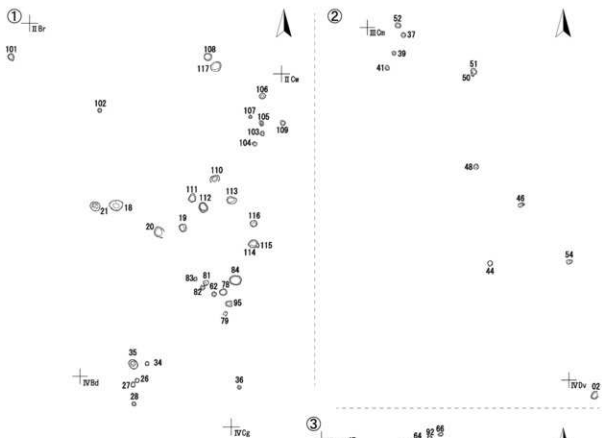
SX04

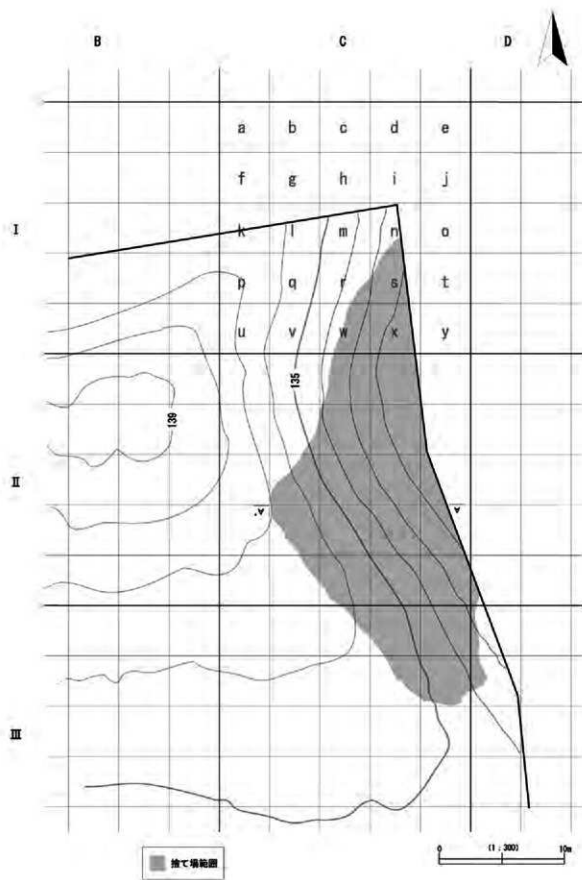


SX04

1. 10YR3/1 黒褐色シルト 自然堆積
2. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 地山層位確認著 人為堆積







第100図 捨て場 (C区遺物包含層) (1)

V 出土遺物

乙部野Ⅱ遺跡では、遺物が大コンテナ（42×32×30cm）で約144箱分出土した。そのうち、縄文土器・弥生土器が大コンテナ92箱（1,359,794kg）、土製品134点、石器が剥片950点、礫2,041点、石製品22点、陶磁器2点が出土した。

本章では遺構内と遺構外を一括して扱い記載する。

1 縄文・弥生土器

【概要・掲載】 縄文土器・弥生土器は遺構内から340,922kg、遺構外では1,018,872kg出土した。

掲載土器は、遺構の時期判断に欠かせないものや、文様・特徴が明確な資料を優先して抽出した。加えて、本遺跡の組成を反映するように、出土した各時期の土器の掲載に努めた。第2分冊に収録した遺物観察表について、記載に際しては文様、調整の欄の「→」は施文や調整順の分かる場合に用いた。

【土器の分類】 出土した土器は以下の5群に大別される。各遺物の分類は観察表に表記した。

- 第Ⅰ群 縄文時代早期
- 第Ⅱ群 縄文時代前期
- 第Ⅲ群 縄文時代後期
- 第Ⅳ群 弥生時代
- 第Ⅴ群 時期不明

(1) 第Ⅰ群 縄文時代早期

縄文時代早期は前葉から中葉まで出土が認められる。該期の土器の抽出に際しては盛岡市遺跡の学び館(2009)を参考にした。早期の土器は出土数が少なく13点で、すべて掲載した。(そのうち遺構内としてはNa243・610が挙げられる)。ただ、後述する早期前葉押型文土器の時期は、地文縄文に沈線を施文する土器が共伴する傾向があるらしく、また無文土器など詳細な時期特定ができなかったものもあり、不掲載とした中に当該期の土器が含まれている可能性も否定できない。

【早期前葉】 Na610・850・855・856はX字状の押型文が、Na849・852は横線とV字状の押型文が施文される。Na849は、横線と縦線が重なり格子状になっている。いずれも早期前葉の日計式期(本県では大新町Ⅰa式)に相当する。

【早期中葉】 Na851・858・857は貝殻文をもつ土器片である。Na851は、サルボウガイやハイガイなど殻表に凹凸を持つ貝の殻縁部を垂直に刺突した貝殻縁文が縦位に施文される。Na858は貝殻縁文が横位に施文され、その間に浅い条痕が1条平行している。Na857は口縁片で口唇の外末端に三日月状の刻みが入り、口縁に横位の貝殻縁文が4条施文される。Na848・853・854は条痕が施文される土器片である。Na848は横位の並行沈線に斜位の沈線が入る。Na853・854はどちらも一方向の条痕である。Na853は条の幅が1.5mm程、Na854は1mm程で、条の幅には差異が看取される。貝殻文と条痕文をもつ土器は、いずれも早期中葉の鳥木沢式期に相当する。

(2) 第Ⅱ群 縄文時代前期

縄文時代前期の土器をⅡ群とした。土器の胎土に繊維を含むものがほとんどである。観察所見として、前期初頭上川名2式や前期中葉大木3式は認めがたいことから、前期前葉大木1～2b式の範疇に収まる土器群と推定され、主体は大木2a式と判断される。

以下には土器型式もしくは時期毎に特記事項の抽出を主眼に記載してみる。

【大木1式】 大木1式と判断したものは一定量散見される（掲載した土器ではNo.430・457・488・531・747・878・892など）。これらは全て破片資料であるものの、口縁部片や胴部片を見る限り、口縁形状は平縁を主体とし、口縁部文様帯は形成しない様子である。後時期の大木2a式と比較した場合、口唇形状は同様に平滑なものを主体とする様相で、胎土は硬質で土器の厚みは薄いものが多い。内面調整は、丁寧なナデやミガキが施されるものが顕著にあり、大木2a式より丁寧に仕上げられている感がある。

大木1式の最大の特徴として、原体の末端を折り曲げ押圧しながら回転施文するいわゆる環付末端ループが知られているが、今回の調査では出土数が少なく、3点の確認に留まる（No.861・914・915）。また、非結束羽状縄文を施文するものの中で0段多条の原体を用いるものについても、断定はできないが大木1式に多いと推定しておきたい。

組縄縄文（※本県ではいわゆるビッチリ縄文と呼ばれる類、高橋：1992）を施文する土器について、口縁部～胴部まで地文以外の施文が認められない様子である（※口縁部文様帯の形成が認められない）。所見的ではあるが、これら組縄縄文も大木1式（若しくは大木2a式の古い段階）に伴う可能性が高い。理由として、不整燃糸文を施文するものなどに組縄縄文が伴わないことから、明らかに大木2a式と特定できるものには認めがたいことにある。

【大木2a式】 Ⅱ群とした前期の土器群の中で圧倒的な主体を占める。出土地・層位にまとまりがあるのがSI62で、ほぼ一括資料と捉えられる。口縁部文様帯の形成は、本型式からと捉えられるものの、典型的な大木2a式はけって多くない。ただ、口縁部に不整燃糸文や葎瓦状燃糸文を施文する一群とのセット関係から、大木2a式と推定されるものが多い様相である。

口縁形状は平縁が主体で、口唇部は面取りされ平滑なものが多い。特に、口唇が平滑なものは、大木1式にも認められる属性ではあるが、より顕著なのは本型式からで、特徴の一つとして看取される。

胴部地文は、①縄文原体を横回転に施文するもの、②2種類の原体により羽状縄文を構成するもので結束と非結束がある（7対3くらいの割合で結束が多い）。また、①、②を問わず複節の縄文原体も認められる（単節との割合としては、複節の出現率は8%程である※今回の調査で複節は大木1式に認めがたい）。また、RLRのほうがLRより採用率が高いことから、0段の段階は左磨りが多いと捉えられようか。ただ、単節では、LRの採用率がやや高く（8対6くらいの割合でLRがやや多い）、突的に多いわけではない。

【大木2b式】 S字状連鎖沈文を施文するものを大木2b式と捉えると、No.922が該当するものの、全体的にみて非常に少ない。また、大木2b式もしくは大木2a式との過渡期の可能性が窺えるものとして、No.469・521・525を挙げておきたい。これらは、胎土中の繊維が微量、もしくは認めがたく、地文施文後に結節回転文が施される。

【早稲田6類】 早稲田6類もしくはその影響を受ける土器と推定されるものとして、No.479・480・561・884・889などが挙げられる。全体的には非常に少ない出土数である。上記したものは、大木1式もしくは大木2a式としたものと比べて、胎土中の繊維量には差異を認めがたいものの、文様の施文

手法や土器の器厚などに違いが窺われる。

また、若干消去法的であるが、上述のとおり本遺跡資料に前期初頭土器（上川名2式や長七谷地Ⅲ群など）が認めたい状況から、前期前葉大木1～2a式との平行関係が示唆される。

周知されている早稲田6類の分類に比定させると、本遺跡資料は早稲田6類aと早稲田6類bに分けられようか。早稲田6類aと推定されるのが、No.561・884・889などの地文を施文後に横位の平行沈線が伴う土器である。No.884と889は同一個体で底部尖底を呈する。早稲田6類bと推定されるのが、No.479・480などで、口縁端部に複数段の刺突列を持つ。No.489の口唇形状は角状（平滑）を呈するが、この様相は大木2a式と類似する。

〔その他〕 時期の特定に躊躇するものを以下に挙げておく。

表裏に縄文を施文するものが1点（No.847）出土した。時期は特定できない。胎土や土器の厚さなどは組縄文を施文する土器と遜色なく、前期前葉の可能性もある。ただ、表裏縄文という属性からは、縄文早期末葉赤御堂式の可能性も否定できない。

No.275・427・570・712・900（未接合の同一個体片をNo.900aとNo.900bに分けて掲載）などは、前期の可能性もあるが、大木諸型式への比定が難しい。縄文前期初頭～前葉と時期幅を広げて提示しておきたい。

（3）第Ⅲ群 縄文時代後期初頭～後期前葉

当該期の土器は今回の調査で最も出土量が多く、特に後期初頭の土器は今回調査全体でみても主体となる。また、中期や後期中葉など、前後時期の土器は出土していないことから、後期初頭～前葉に限定される時期の土器群と判断されよう。しかし、本地域は北と南の土器文化が接触する地域であり、大半は土器型式への比定が難しい様相にあり、後期初頭あるいは後期初頭～前葉などの記載に留めたものが多い（※ある程度土器型式名が推定できそうなものについては観察表の備考の項に記載）。当該地の当該期の土器型式は未だ整理・研究が十分とは捉えられない現状と判断される（※土器型式名での言及が難しい状況である）。ただ、観察所見から、文様の描出方法に基づく分類が可能と思われる属性もあった。それらを元にⅢ群としたものをさらにA～Fに細分した。それらの中には、既往の当該期土器型式への対応を試みたものもある。

補足として、縄文時代中期末葉や後期前葉の土器と特徴が類似するものが少量あるものの、それらの明確な時期特定はできなかったため、本群（Ⅲ群）に含めた。

〔Ⅲ群土器の分類〕 当該期の土器は地文以外の文様の描出を対象に、隆帯、沈線、原体丘痕、刺突列、微隆起線を施文するものに大別を試みた。さらに無文（無文帯）に文様を施文するか、地文の上に施文するかの要素から以下に細別した。

当該期は文様区画が型式に関わる要素となってくるが、それらは複雑な様相を呈する。本報告では施文の方法での分類にとどめ、文様帯の位置や器形との対応については傾向が把握できたものに限定し土器型式を記載する。また、Ⅲ群F類に含めた無文は、口縁部無文帯と胴部地文縄文を区画するような文様についても含めたことを述べておく。

ⅢA 隆帯を施文する土器

- 1類-a 地文→隆帯
- 1類-b 地文→隆帯+刺突・横刺突・沈線
- 1類-c 地文→隆帯+縄文

- 2類-a 無文→隆帯
 2類-b 無文→隆帯+刺突・横刺突・沈線
 2類-c 無文→隆帯+縄文
 3類 無文→隆帯・充填縄文
 III B 沈線を施文する土器
 1類 地文→沈線
 2類 地文→沈線・磨消
 3類 無文→沈線
 4類 無文→沈線・充填縄文
 III C 原体圧痕を施文する土器
 1類 無文→原体圧痕
 III D 刺突を施文する土器
 1類 無文→刺突列・刺突充填
 III E 微隆沈線を施文するもの
 1類 無文→微隆沈線
 2類 無文→微隆沈線→充填縄文
 III F 無文または地文縄文のみを施文するもの

※注意 口～頸部を対象に上記の分類を適用したが、口頸部の属性以外に胴部に地文を持つものについては口頸部の属性を優先した（※III F以外に分群した）。

〔A類〕隆帯の施文位置は、口縁～胴上部と胴下部を区画する横位の隆帯と、そこから口縁に向かう縦位隆帯で方形に区画されるものと、縦位隆帯はなく鱗状貼付のような「ノ」または「コ」の字隆帯が付くものが多くみられる。縦の区画より胴を分断する横位の区画が明瞭である。波状口縁の場合は縦位隆帯や「ノ」の字等の隆帯が波状の突部と対応しているものが多い。縦区画は1本のものと2本の隆帯がつくものがある。口縁～胴上部に隆帯を施文するほか、胴下部の地文縄文にも隆帯を施文するものがある（No.1009）。隆帯の断面が三角で後期初頭でも古手の上村・葦窪式期に相当するものと考えられる。隆帯上に沈線が施文されるものは鎖状に短沈線が連鎖したものと途切れない沈線がひかれるものがあり、どちらもボタン状貼付と併用されるものがみられるため門前式相当の土器が考えられる。隆帯に縄文を施文するものは、地文に縄文を施文してから隆帯を貼るのではなく、隆帯を張り付けて、隆帯とその他の無文部に縄文を施文しているものがみられる（No.820）。

〔B類〕沈線を施文する土器である。地文の縄文の上から沈線で文様を施文しているものをB1類、その沈線文様に磨消を施すものをB2類、縄文ではなく無文部に沈線で文様を施すものをB3類、その沈線文様に縄文を施文（充填）するものをB4類とした。地文縄文に沈線を施文するものは白色の砂粒と片岩が混入するものが多い。白色砂粒も当該期では粒径がまばらなものも多いがこの種は1mm以下で均一なものが混入し焼きが硬質なものが多い傾向にある。地文縄文の上に沈線を引くものは一定量あり、蛭沢式に相当するものと考えられる。無文に沈線を施して充填するものは後期初頭を通してありそうだが、比較的古めの時期のものではないかと思われる。

〔A・B類〕隆帯区画の間に沈線で文様を施文し一部に縄文を充填するものがある（No.819）。

〔C類〕縄文原体の圧痕で文様を施すものをC類とした。無文帯と胴部地文の境に施されるものが多いが、隆帯によって区画された無文部の間に施されるものも見られる。文様は横に水平施文される

ほか、斜めに鋸歯状に施され、当該期に多い三角区画になるものもある。

【D類】刺突列で文様を施すものをD類とした。無文帯に施すものが大半で、刺突列や一部を刺突で充填するものがみられる。沈線と併用しているものもあり、2本の沈線間に刺突列あるいは多数の刺突が充填される。口縁の縁に2・3点の刺突を施すものがみられたが、それは本類とせず3点以上の複数の刺突(列)を施すものをD類としてあつかった。

また、本類?としたNa1067・1174～1176は、無文地に爪形状の刺突列が施される。北信越地方の三十稲葉式の影響を受ける土器である可能性が示唆される。

【E類】隆沈線で文様を施すものをE類とした。隆沈線は、太く丸みのある沈線・微隆起線のもの、隆帯の脇を細めの沈線でなぞったものがある。前者が中期末葉の大木10式などに、後者は後期前葉の十腰内I式などにみられるが、本遺跡では層位的な新旧関係を認めがたい。また、B類で多用されるような沈線と同じ様相のものもあり、後期前葉に近い時期のものも含まれると推定される。

【F類】無文または地文縄文のみを施文するものをF類とした。口縁端部からすべて地文を施文するものと、口縁に無文帯を持ちその下から地文が施文されるものに分けられる。縄文原体の施文方向の傾向としては、器体上端は横回転で、下端は縦回転のものが一定量見受けられる。上端の横回転は原体の末端(直前段の折り返し側)まで施文することで無文帯との境が明瞭に見え、粗製土器ではきれいに施されている印象を受ける。当該期の胎土の特徴として、白色の砂粒子が多量に混入し、片岩と思われる微粒子の光沢物も混入するものが多い傾向が窺われる。

(4) 第四群 弥生時代

弥生時代の土器は、今回の調査では縄文後期(第Ⅲ群土器)に次いで多く出土している。特にSI17は完形に近い状態の土器が一括で出土しており、良好資料を提供した。

掲載に際しては、文様や特徴の分かるものを大きさに関わらず選択した。前期が圧倒的に多い。

遺構内出土は、弥生時代の竈穴住居跡のほか異時期の遺構(縄文時代後期の竈穴住居主体)に多く、また土坑敷基からも出土している。良好な出土状況としてはSI13、SI17が挙げられる。中でも焼失住居のSI17出土土器は完形、略完形が多い。遺構外は主にI層下部～IIa層から出土している。タール状の付着物が多いが、浅鉢、高杯の内面にリング状に付着しているものがある。

器種は、高杯、浅鉢、壺、鉢、深鉢・甕、粗製深鉢のほか、甕形土器が1点ある。蓋の可能性のある破片も1点ある。

【高杯】器形の分かるものは11点で、全て脚部が大型で平縁である。杯部は口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がり、杯身が浅いものとやや深いもの、杯身が深く内湾して立ち上がり口縁部で外側に開くものがある。

文様は、3本単位の水平沈線が2段のもの、水平沈線に影り去りをして2個一対の粘土粒を付したものの、粘土粒のない流水型変形工字文などがある。粘土粒の貼り付けは、3箇所もしくは6箇所、2段に及ぶ。脚部の文様は重沈線、波状文がある。

胎土は、白っぽいものが4点、赤みを帯びたものが6点で、他の器種に比し金雲母が混入する率が多い。なお、赤彩の痕跡が11点中8点に認められた。

破片では平縁のほかにボタン状の円形の突起がつくもの、山形状口縁のものもある。文様は平縁のものと同様であるが、沈線が斜めに展開する粘土粒を持つ変形工字文が加わる。

【浅鉢】浅鉢には平縁のものと同突起をもつものがある。

平縁のものは、2種認められ、高杯の杯部とよく似た形状で、高杯よりやや器高の高いものが多い。

文様は変形工字文、流水型変形工字文、多重沈線である。底部から外反気味に立ち上がり、直線的に開く器形で、底部内面及び口唇部にも縄文が施される(No.1125)は特殊な例か、もしくは他時期か。No.1142は口縁部に刺突のある隆帯が貼り付けられる。

突起をもつ浅鉢は、二又突起の口唇部に刻みまたは沈線が施され、体部文様は流水型変形工字文である。

〔壺〕 大型と小型の壺がある。口縁に沈線文様があるほかは、全体にミガキが施されるもの、胴部上半に文様があるもの、全体に縄文が施されるもの、の3種ある。口縁部の文様は、水平沈線、沈線内に小さな粘土粒貼り付け、隆帯貼り付けが施される。胴部上半の文様は変形工字文、流水型変形工字文である。No.314・1124はこれによらない文様で、時期の異なるもの可能性がある。No.1124は口縁部無文帯、器形、J字状の文様モチーフなど縄文時代中期末の土器に類似する可能性があるが、細かい縄文などから弥生後期の可能性もあるか。

〔壺形土器〕 No.1077は他の壺と形状は異なり、最大径は体部中ほどである。なで肩で口が狭い。

〔蓋〕 1点のみの出土である(No.645)。蓋の端部か。

〔鉢〕 平縁で多重沈線を持ち、底部から内湾して立ち上がり口縁部で屈曲して外反する器形と、それ以外に、突起を持ち、流水型変形工字文か多重沈線及び多重沈線に粘土粒を貼り付けたものが少数ある。

〔深鉢・甕〕 口縁形状は、突起を持つもの、波状口縁のもの、平縁のものがある。頸部は沈線が施されるものとなないものがある。体部破片で、撫糸文、沈線と交互刺突文のものがあり、後期の破片と思われる。粗製深鉢は口縁部無文で外反する器形である。

〔瓢型土器〕 波状口縁で口縁は外反気味に立ち上がる。口縁部は無文で、胴部は縄文(LR斜・横位)が施される。県内の事例としては、二戸市中曾根Ⅱ遺跡の107号址から出土しているが、器形、文様の有無など相違点が多い。

(5) 第V群 時期不明

大別したⅠ～Ⅳ群への比定・分類が困難なもの(できなかつたもの)をV群として一括した。掲載した22点は、概ね縄文後期か弥生の、両者どちらかに帰属すると推定されるものを中心に選択したものである。

2 土製品

土製品は134点出土した。内訳は、ミニチュア土器58点、土偶17点、動物形土製品1点、土製耳飾り1点、有孔土製品2点、土玉3点、円盤状土製品37点、その他土製品15点出土である。出土点数をみるとミニチュア土器、円盤状土製品の順に多い。

〔ミニチュア土器〕 遺構内から25点、遺構外から33点の計58点出土し、41点を掲載した。器形は底部からまっすぐ開いて立ち上がるバケツ状のものと、垂直もしくは少し内傾に立ち上がってから胴部が外に開く、ややくびれをもつものが多い。

No.1209は台が付き、器部は浅く、高坏のような形状を呈する。No.1233・1238は壺形である。内面底が平らなものとするものがある。胴部文様は無文のものがほとんどであるが、沈線や刺突の入るものもある。No.1260は、唯一変形工字文が施文された弥生前期のもので同様の大きさの鉢はなく小形土器と分類した。底部形状は平らなもの、やや中央がくぼむものが多く、またNo.1245は内面底から上部に

貫通する穿孔がある。Na1232・1216などは底から胴にかけて湾曲する器形である。底部は基本的に無文だが、Na1218・1265には木葉痕が認められる。胎土は後期初頭の土器と同様に白色砂粒を多量に包含しややもろいものが多い。その中であってNa1209・1216・1219・1221・1237は砂粒が少なく硬質で焼成も良好である。

【土偶】 遺構内から6点、遺構外から11点の計17点出土し、16点を掲載した。遺構外ではIVCグリッドからの出土が多いことが特筆される。ここでは遺構内出土の遺存の良いものを対象に文章記載する（他は実測図や観察表を参照いただきたい）。

Na1204は板状土偶である。Na1205は首が立体的で丸く板状より厚みと丸みのある、有脚の土偶の頭部ではないかと考えられる。胴部と頭部で比較が難しいが、Na1204の板状土偶は首が前に出て仮面のような平たい頭部がつくものと推定される。Na1205は頭部まで首が直立しており、頭頂部は前後に延びる突起部が左右についているが、耳が表現され、首も丸くやや写実的である。刺突の列点文が施される土偶であるNa1204・1205の時期は、後期初頭と推定される。

Na1210は肩パットをもつ中空の刺突文土偶と考えられる。肩部分は欠損しているが左胸の横に沈線と隆起する部位があり、肩パッド表現の一部と考えられる。部分的であるが赤彩が確認でき刺突の中にも顔料が残っている。正面は左右の胸の間に正中線が引かれ下端に内面に貫通する臍が表現される。背面は沈線で変形工字状の文様と中心に円が描かれる。区画内や脇にも刺突が施される。刺突は1mm程の工具を横から刺突もしくは2～3mmにやや引き伸ばしており、正面は左半身が横に伸びる刺突で右半身が縦に伸びる刺突となっている。脇および背面はまっすぐ刺したのみ、または横から刺して刺突が施される。内面は粗くなられている。

Na1224は表面全体に刺突の施される中空の土偶である。内面外面はなでられ、外面の刺突は細い工具を刺したものと刺突孔が三角にあくものがみられる（向きの違い・もしくはやや削りとなっているのか）。胎土に雲母を多く含む。Na1235は板状土偶の胴部であり、正・背・横面に縦の刺突列が施文される。

【動物形土製品】 頭部と右後脚部を欠損したNa1278の1点がIVCfグリッドIIa層から出土した。胴部の横に貫通孔が2か所あけられている。穴の1つは前脚の上にほぼ左右対称で貫通するが、もう1つは左胴部の脇腹あたりから右前脚と背の間あたりに貫通し、貫通孔が胴部で交差する状態である。

【土製耳飾り】 Na1279の1点がIVCdグリッドIIa層から出土した。欠損品であり、中央に貫通孔があり、孔に向かって両面が椀状に凹む形状である。無文で外面は丁寧に磨かれ光沢がある。

【有孔土製品】 遺構内から1点、遺構外から1点出土し全て掲載した。Na1231はSI43の炉内から出土した。形状は縦長で、長軸に孔が通る。外面には握ったような指頭圧痕が3つ並ぶ。Na1280はIVCfグリッドIIa層出土で、円形の玉に貫通孔があげられ、土玉に類似する。

【土玉】 遺構内から1点、遺構外から2点出土し全て掲載した。球状に丸められた土製品で、Na1281は欠損している。

【円盤状土製品】 遺構内から17点、遺構外から20点の計37点出土した（※その中には底部片?が3点、加工しているのか怪しいものが2点含まれる）。その内、32点を掲載した。遺構内は埋土から出土したものが多いなど時期の特定には欠ける。出土する土器から、胎土に片岩を多量に包含するものは後期初頭の土器片転用と考えられる。Na1234は焼成が良く硬質で、胎土も砂粒が少なく、後期初頭より古い時期の土器片の可能性もある。Na1222は打ち欠かれた土器の底部の一部とも見て取れるが、破損した底部片ではなく意図的に作り出したものである可能性もある。その他として、表面が摩滅しているが、断面に角がなく整えられているものや、わずかな湾曲と裏面に内面調整の筋が残るため土器片

の転用と認識したものなどがある。

【その他土製品】 上記に分類しがたい土製品をその他の土製品として一括した。5点を掲載している。Na1223はSI29の床面出土の不明としたものであるが、土偶の頭部の可能性がある。胎土は本遺跡の後期初頭土器のものに類似して白色の砂粒を多く含み、もろく剥落が激しい。正面右側は横に張り出し、斜め上からの穿孔がある。正面左側は欠損しているものの同様の穿孔が確認できる。左右の張り出しは後ろにつづき、後頭部が後側に張り出す形状が想定される。顔面？下部には円形の刺突が複数点、列ともみえるように施される。焼成粘土塊であるNa1226はSI31から出土した。摩滅面も多いが不整形と思われ、平らな粘土を握ったような形状である。Na1300は土器の把手の可能性も考えられる。Na1301は突起のような欠損品で、欠損面には手づくね痕があり、突起の先端に刻みがある。動物形土製品の頭部の可能性が考えられる。

3 石 器

(1) 剥 片 石 器

剥片石器は950点出土した。内訳は石鏃149点、石槍14点、石匙36点、石錐29点、石筥1点、スクレイパー125点、楔形石器38点、異形石器2点、RF86点、石核23点、UF35点、その他の剥片412点である。

出土点数をみると、石鏃、スクレイパー、RF、楔形石器の順に多く、逆に希少な器種として石筥が挙げられる。

石材の傾向としては、剥片石器全体の80%以上を頁岩が占める。頁岩以外では、赤色頁岩、メノウ、玉髄、黒曜石、凝灰岩などの石材が少数認められる。黒曜石は、7点出土し（不掲載含む）、その内4点について産地同定の分析を実施した結果、北上エリア産（北上折居1・2）と判明した。メノウや玉髄は、一つの器種に数点の割合で出現する様相にあり、本遺跡の特徴の一つと考えられる。なお、メノウや玉髄は、フレーク・チップにも一定量認められることも付記しておきたい。

【石鏃】 149点出土し、82点掲載した。基部形態が把握できる資料をみると、①深い抉りを持つもの、②抉りが比較的浅いもの、③抉りが浅くほぼ平基に近いもの、④平基、⑤有茎、⑥その他の6種類に大別される。加えて、未成品段階と捉えられるものも一定量以上ある。傾向として出土点数が多いのが深い抉りを呈するもので、次いで浅い抉りを呈するもの、有茎のもの順となる。抉りの深いものや有茎は全体の形状が二等辺三角形を呈するものが多く、抉りの浅いものに正三角形を呈するものが多い傾向が窺える。特殊性の高いものとしてNa2109を挙げておきたい。先端部の平面形状が弧状気味で（※鋭利でなく）、身部の中央よりやや基部寄りに抉りを持つ特殊な形態で、あるいはアメリカ式石鏃の未成品段階の可能性もある。

規模は、長辺の平均値約2.3cm、平均重量1.5gである。用いられる石材は頁岩が圧倒的に多く、メノウ、赤色頁岩、玉髄、黒曜石が少数認められる。

【石槍】 14点出土し、9点掲載した。Na2014・2030・2122・2135・2169などを見る限り、長さに対して幅のある形状のものが多く、加えて先端部が鋭く尖るものは少ない。また、側縁の剥離の状況からは、粗い加工のものが多く、なお、Na2169は先端部の加工の様子から、未成品の可能性が窺える（強く断定するものではない）。

規模は、長辺の平均値約4.7cm、最大幅の平均値2.3cm、平均重量11gである。石材は全て頁岩である。

【石匙】 36点出土し、23点掲載した。握みを上にした場合、主要な刃部と想定される辺が、縦（縦

型)、横(横型)、斜(斜型)の、大きくは3種類が認められる。縦型が主体で、横型が少ない。刃部加工は、表裏両面に調整剥離が施されるものが主体にあるが、No2082・2086など片面(一面※表面として図化)にのみ二次剥離が施されるものもみられる。上述の2点は何れも前期前葉の堅穴住居跡出土である。縄文前期と後期と弥生前期の複合集落である本遺跡資料は、異時期の流れ込みも当然の如く想定されるが、いわゆる片刃で丁重な調整剥離が施される類の石匙は前期前葉の産物の可能性も示唆される。石材は頁岩が主体を占め、玉髄、凝灰岩がわずかに認められる。

【石鏃】 29点出土し19点を掲載した。摘みがつくもの、摘みが不明瞭なもの、棒状を呈するものの、3種類に大別される。鏃部の長さは長短様々な様相にあるが、明瞭な摘みを持つもの(No2022・2163・2164)は鏃部が長い傾向で捉えられる。石材はメノウ1点を除き全て頁岩である。

【石筥】 No2038の1点出土・掲載した。表面にのみ二次剥離が施される。裏面の縁辺部に使用に伴う痕跡と想定される微細剥離が認められる。石材は頁岩である。

【スクレイパー】 形状は全般に規格性が認め難く(弱く)不定形を呈し、刃部の加工具合や微細剥離の様子から削搔器と推定されるものを一括してスクレイパーの名称を用いた。125点出土し、41点掲載した。刃部の二次剥離の様子からは、側縁部の刃部が1辺のものや2辺のもの、片面にのみ剥離調整が施されるものなど、多様である。石材は頁岩が圧倒的に多く、赤色頁岩、玉髄が少数認められる。

【楔形石器】 両極打法が用いられ、いわゆる楔形若しくはそれに類するものを楔形石器として扱う。38点出土し、4点掲載した。石材は頁岩主体で、少数赤色頁岩がある。また、不掲載とした中に、円礫を分割し、片面自然面を残し切断面の上下端部に両極打法を用いている石器が数点ある。

【石核】 剥片剥離の残核と捉えたものである。23点出土し、4点掲載した。掲載したものは黒曜石やメノウを優先したが、それらは総じて小形破片で遺存する。

【異形石器】 上記してきた器種に比定するのに躊躇する特異な形状に加工されているものについて、一括して異形石器とした。2点出土し掲載した。No2186は、下端部に抉りが施され、上端部は弧状に仕上げられている。主要刃部の推定は難しいが、何らかの目的で制作された成品と捉えられる。No2187は、石筥状の形状で、エンドと右辺には表裏両面に二次剥離が施され、摘み的にもとれる上端は弧状に仕上げられ両面に調整剥離が入る。主要な刃部と捉えられる下端部の刃部観察からは、搔器的な用途が想起される。石材は2点とも頁岩である。

【その他】 上記以外として、二次加工ある剥片、ユーティライズドフレイク(UF)、リタッチドフレイク(RF)などが、533点出土した。

(2) 礫石器

礫石器は2041点出土した。内訳は磨製石斧273点、敲磨器1068点、凹石27点、砥石7点、石鏃37点、石皿151点、台石90点、棒状礫47点、礫器148点、軽石3点、その他190点である。出土点数について敲磨器、磨製石斧、石皿、礫器の順に多い。

【磨製石斧】 273点出土し、そのうち51点を掲載した。形状は、薄く扁平で断面がやや四角く、基部から刃部に向けて台形を呈するものと、厚みがあり断面が楕円基調で、基部から刃部に向けてずん胴気味に伸びるものに大きく分けられ、扁平なものが主体である。前者は大きさが大小様々だが、後者で小形のものは出土していない。

No2217・2218・2279・2293・2343・2344・2345・2355は小形の磨製石斧である。No2227は弥生時代に特徴的である太形蛤刃石斧と考えられる。刃部のみが磨かれており、その他は敲打痕を残す。未成品は剥離後に敲打で形を整えている段階のものと、その後研磨調整を加えている段階のものがみら

れた。製作方法は擦切技法による未成品の欠損品 (No.2262・2362) と擦切痕を残す小形の完形品 (No.2343) が出土していることから、礫を打ち欠き、敲打と磨りで形を作り出す方法と、擦切技法による二つの方法が確認できる。

規模は、長辺の平均値約7.6cm、最大幅の平均値3.6cm、平均重量125.2gである。石材は蛇紋岩(10点)、頁岩(8点)、細粒花崗閃緑岩(6点)、細粒閃緑岩(5点)、ヒン岩(5点)、砂岩(4点)、花崗斑岩(2点)、凝灰岩(2点)、アブライト(1点)、安山岩(1点)、細粒はんれい岩(1点)、閃緑岩(1点)、ホルンフェルス(1点)、不明(4点)である。

【敲磨器】本遺跡では敲き痕、磨り痕があり、磨石や敲石に該当すると思われる礫石器を一括して敲磨器として報告する。1068点出土し、掲載したのは104点である。No.2301・2311のように敲磨器のなかでも礫の長軸上1側面に磨り面を持つものは特殊磨石として分類した。礫は縦長で短軸の断面がやや三角を呈するような角を3辺もつ礫が使われている。

特殊磨石と同様と捉えられるものとしては、磨り面のほかに上下端部や側面に敲打痕もつもの (No.2272・2288・2297・2379など) がみられ、上下につくものが多い。No.2399は磨り面のほかに平坦面に凹み痕をもち、凹石に類似する。No.2292は3辺に磨り面をもち、磨り面の位置や短軸の断面が三角になる礫を使用している点で特殊磨石に類似する。

その他に、磨り痕のみの磨石、敲打痕のみの敲石、また磨り痕と敲打痕の両方をもつ敲磨器が出土している。No.2214・2242・2383・2392・2397はほぼ全周に敲き磨ったような使用痕を持ち、球体や多面体を呈する敲磨器である。No.2310・2371・2390・2391は磨製石斧の欠損品を転用したものと想定される。平均の重量は500.3gである。石材は砂岩(31点)、石英斑岩(16点)が多く、次いで花崗岩(10点)、花崗斑岩(8点)、細粒花崗閃緑岩(8点)、花崗閃緑岩(6点)、凝灰岩(5点)、ヒン岩(5点)、頁岩(4点)、安山岩(3点)、デイサイト(3点)、細粒閃緑岩(2点)、閃緑岩(2点)、はんれい岩(1点)である。

【凹石】27点出土し、13点掲載した。また、凹痕のほかに敲磨痕をもつものは敲磨器として分類した。1面に凹痕があるものと、裏表の2面に凹痕があるものがみられる。

No.2224・2297・2372・2393・2389・2399は敲磨器に一括したが凹痕があり凹石としても使用した可能性が考えられる。規模は、長辺の平均値約11.9cm、最大幅の平均値7.5cm、平均重量446.5gである。石材は砂岩(7点)、花崗岩(2点)、花崗斑岩(2点)、閃緑岩(1点)、はんれい岩(1点)である。

【砥石】7点出土し、1点を掲載した。No.2295は縁を作り出した石皿の欠損品を転用しており、欠損した側面にも砥いだ痕跡がのこる。規模は、長辺10.5cm、最大幅7.5cm、重量322.2gで、石材は砂岩である。

【石錘】37点出土し、9点を掲載した。扁平な礫の短軸または長軸上の側縁を打ち欠いたものを原則として石錘に分類した。ただ、打ち欠きが短軸と長軸の両方あるものについても石錘としたものが含まれる。No.2408は長軸上の両端2カ所を打ち欠いている。規模は、長辺の平均値約8.6cm、最大幅の平均値7.2cm、平均重量247.4gである。石材は砂岩(3点)、花崗岩(1点)、花崗斑岩(1点)、頁岩(1点)、細粒花崗閃緑岩(1点)、細粒閃緑岩(1点)、不明(1点)である。

【石皿】151点出土し、20点掲載した。No.2204・2417はほぼ完形品で、他はすべて欠損していた。扁平な大形の礫を剥離と敲打で成形して使用しているものが多い。

No.2202・2302・2309・2324・2414はその後に磨って形を整えている。No.2309は磨りで整形された石皿の欠損品であり、表と裏に凹痕があるため凹石として転用した可能性がある。No.2324は脚部が対に付く石皿で使用面には縁も作り出されている。規模は、長辺の平均値約20.47cm、最大幅の平均値

15.86cm、平均重量3,483.2gである。石材は砂岩(11点)、凝灰岩(3点)、花崗閃緑岩(2点)、はんれい岩(2点)、閃緑岩(1点)、チャート(1点)である。

【台石】90点出土し、2点掲載した。一定範囲の平坦面をもつ大型の礫を台石として分類した。どれも欠損品である。Na2204は石皿としたが、磨り面が平坦であり台石の可能性も考えられる。規模は、長辺の平均値約12.8cm、最大幅の平均値14.3cm、平均重量1,584.8gである。石材は砂岩(1点)、はんれい岩(1点)である。

【礫器】礫の一部を剥離して刃部を作出したもの、また片面に礫面を残した打製石斧未成品と思われるものなど、形を作る途中で制作放棄した可能性があるものも含めて礫器とした。148点出土し、23点掲載した。礫器または磨製石斧の未成品と考えられる自然面を残すものと全面に剥離をほどこす打製石斧に類似するものがみられる。Na2419は片面に自然面を残して剥離を施しており厚みがある。Na2302・2418・2271・2426・2428も厚みはないが微細な剥離以外ほぼ片面は自然面が残る。

規模は、長辺の平均値約8.3cm、最大幅の平均値5.9cm、平均重量196.4gである。石材は頁岩(5点)、砂岩(5点)、花崗斑岩(3点)、ヒン岩(2点)、細粒花崗閃緑岩(1点)、細粒閃緑岩(1点)、細粒はんれい岩(1点)、蛇紋岩(1点)、デイスイト(1点)、不明(3点)である。

【軽石】3点出土しNa2291の1点掲載した。Na2291は全体の形が球状で、磨り痕を観察できる。また、中央に僅かに細い溝状の痕跡が認められるが、糸を巡らせた痕跡にも見てとれる。浮子のな用途であろうか。

【その他(の礫)】何らかの使用痕が観察できるものや形状的に見て意図的な加工が成されたと判断される礫をその他として一括して登録した。190点出土となる。その中から、特徴的なものを7点を掲載した(Na2211・2216・2287・2289・2319・2342・2369)。

4 石製品

石製品は22点出土した。内訳は、石刀1点、石棒4点、円盤状石製品7点、耳飾り1点、有孔石製品2点、その他石製品7点である。

【石刀】遺構外から欠損品が1点出土している(Na2513)。全体的に扁平で全面が磨かれている。先端部は装飾がほどこされ、溝や穴が彫られる。刃部は明瞭ではないが、側面は断面が丸いのにに対し、片側は鋭角に側面が作り出されているため刃部と認識して石刀に分類した。

規模は、長辺の平均値約16.4cm、最大幅の平均値3.1cm、平均重量78.4gである。石材は粘板岩(1点)である。

【石棒】4点出土し、すべて掲載した。全体を加工して形を作り出しているものはNa2507の欠損品のみである。他は使用痕が一部にみられる棒状の礫であり、石棒に類似するものとして一括した。Na2507は石棒の先端部の欠損品で、横に1条の溝がめぐり、先端部にも十字のような溝が入る。先端は敲打痕がみられる。棒状礫は礫の末端部に敲打痕がつくものや、全面もしくは一部に磨り痕がみられる。

規模は、長辺の平均値約11.1cm、最大幅の平均値4.6cm、平均重量211.3gである。石材は砂岩(2点)、細粒花崗閃緑岩(1点)である。

【円盤状石製品】7点出土し、7点を掲載した。側面を打ち欠いて円盤状に造り出しているものを円盤状石器とした。打ち欠いたのみのものと、磨り痕をもつものがみられる。1cm前後の薄い礫を使用しているものが大半の中にあつて、Na2516は3cm程の厚さで厚みを持つ。

規模は、長辺の平均値約5.8cm、最大幅の平均値5.6cm、平均重量85.5gである。石材は砂岩(4点)、花崗閃緑岩(1点)、玄武岩(1点)、石英斑岩(1点)である。

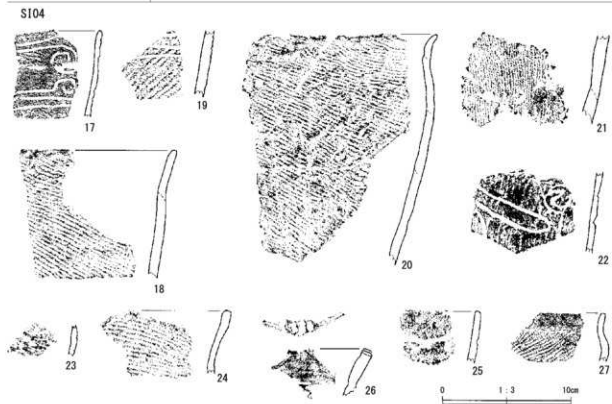
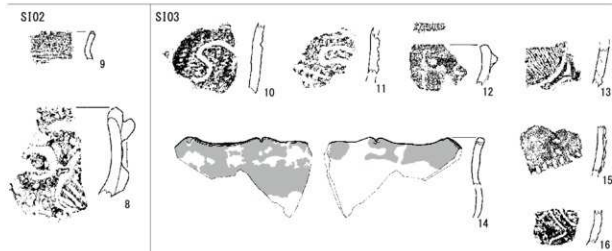
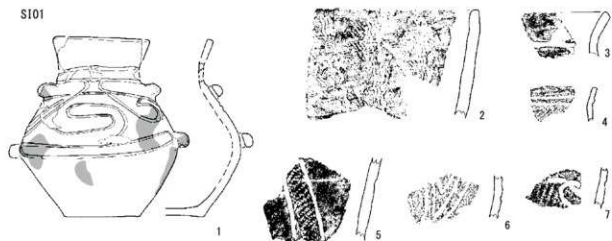
【耳飾り】遺構外からNa2517が1点出土した。側面に刻みのある耳飾りの欠損品である。石材は蛇紋岩である。

【有孔石製品】2点出土し、2点掲載した。Na2518は垂飾りと考えられる。滑らかに磨かれ、貫通孔が一つあけられている。Na2519は不定形な小石に孔があけられている。石材はNa2518が蛇紋岩、Na2519が凝灰岩である。

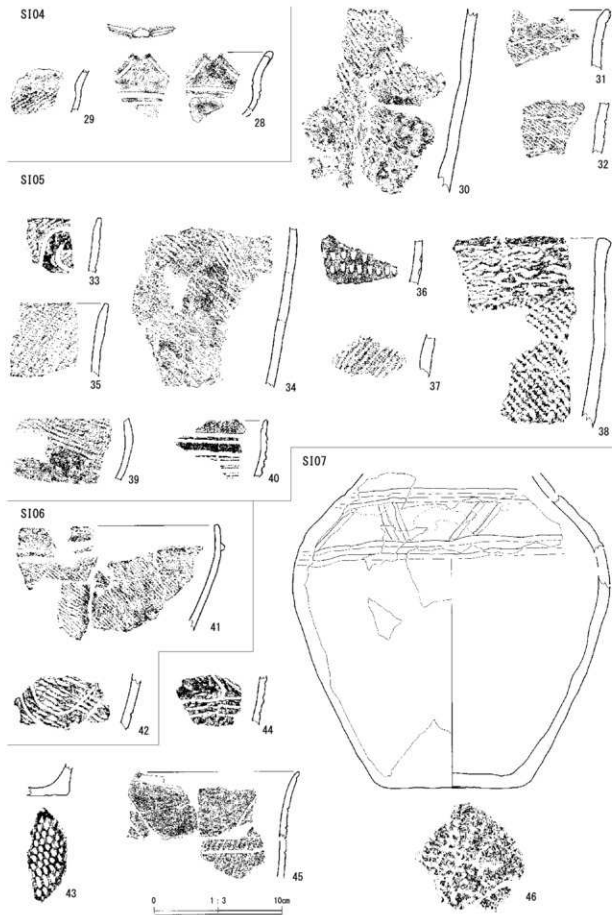
【その他石製品】7点出土し、6点掲載した。石器のような使用痕はないが加工がみられ、上記の石製品に分類しがたいものをその他の石製品とした。Na2512は複数の穿孔途中の未貫通孔をもつ小礫である。全体的に赤色化して微細なヒビが入り、被熱を受けている可能性がある(花崗岩研究所の石質鑑定より)。石材は玉髄である。Na2520は不整形な形状の礫である。光沢があるが磨面なのか整形しているのか不明である。石材は石英斑岩である。

5 陶磁器

陶磁器は遺構外から2点出土した(第179図No.3001・3002)。どちらも19世紀の磁器で、Na3001は染付の皿の底部、Na3002は染付碗の口縁である。



第102図 遺構内土器 1

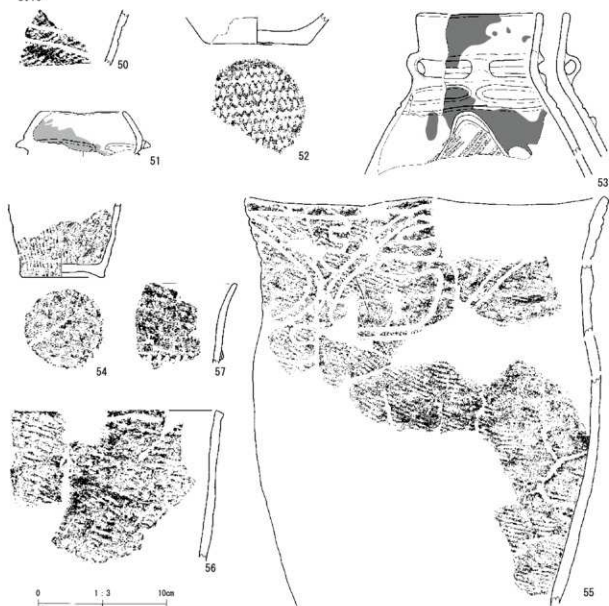


第103図 遺構内土器2

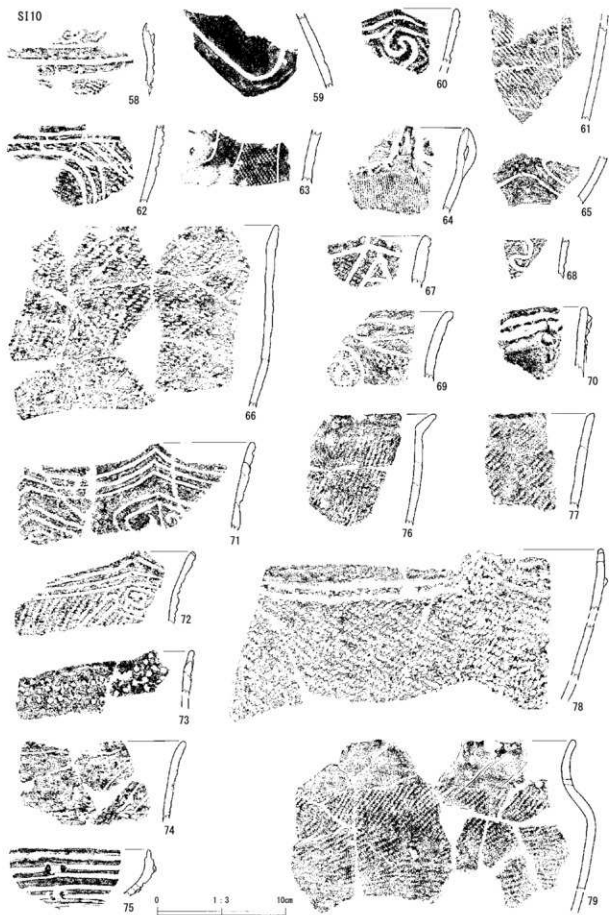
SI07



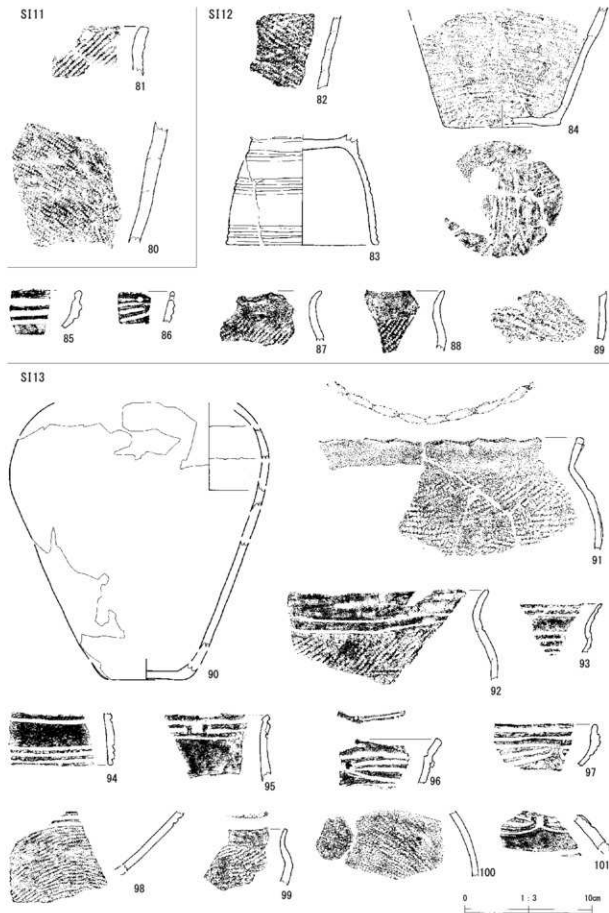
SI10



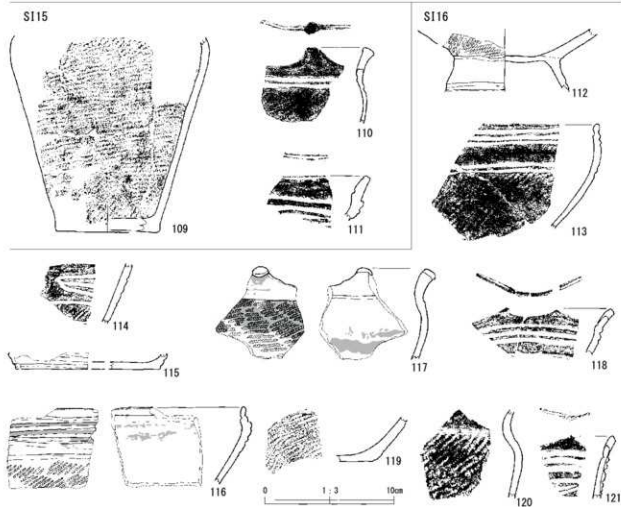
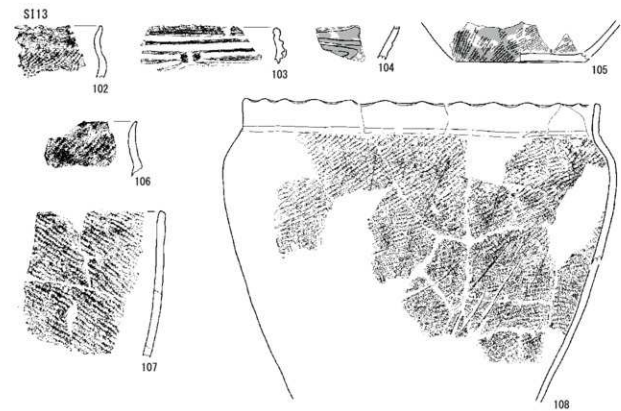
第104図 遺構内土器3



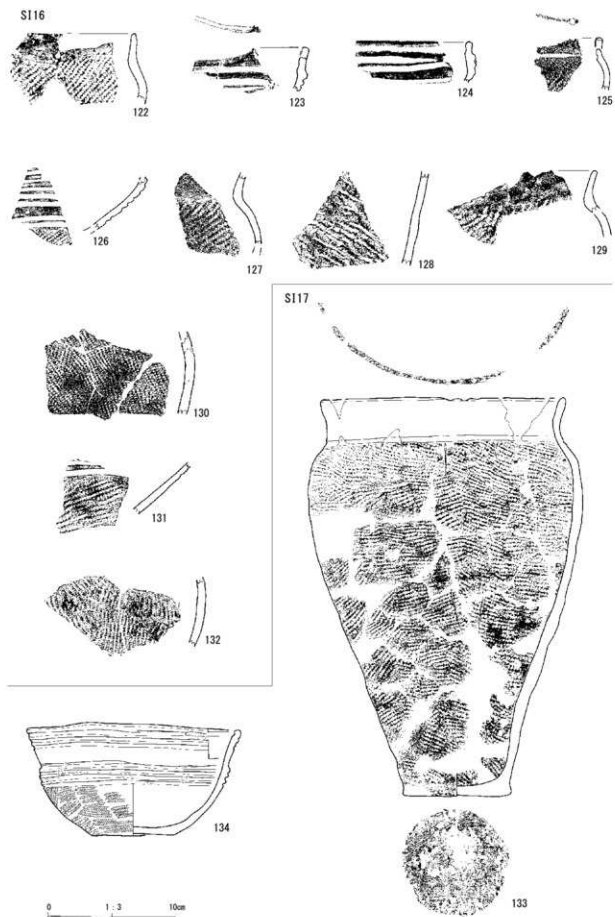
第105図 遺構内土器4



第106図 遺構内土器5

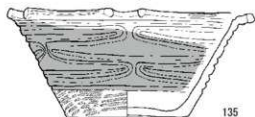
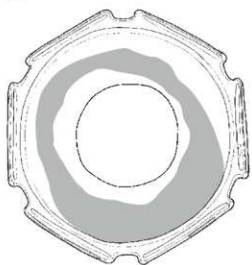


第107図 遺構内土器6

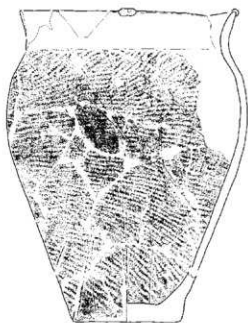


第108図 遺構内土器7

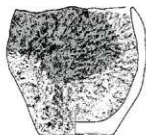
SI17



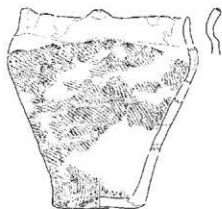
135



137



136



139

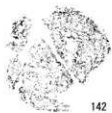
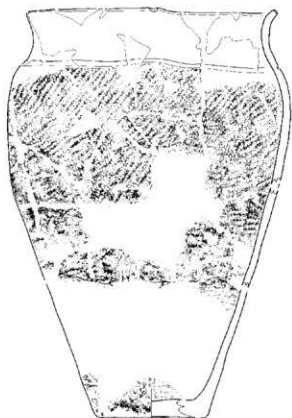


138

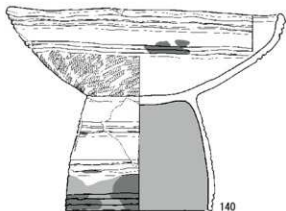
0 1:3 10cm

第109図 遺構内土器8

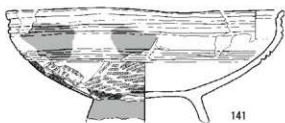
SI17



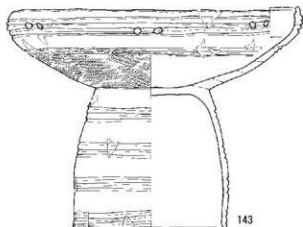
142



140



141



143



144



145

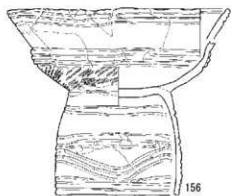
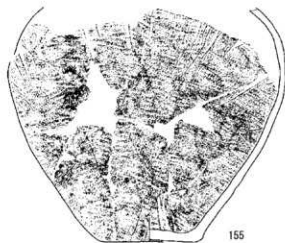
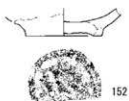
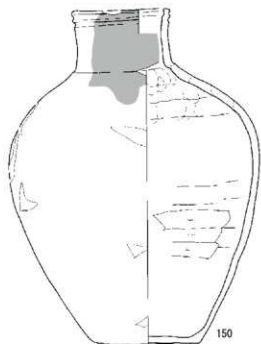
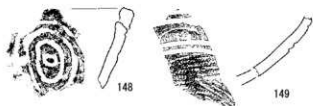
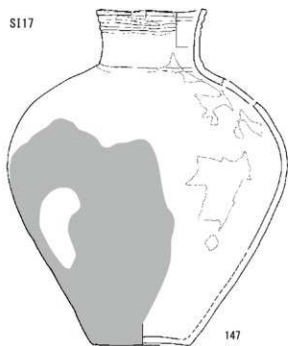


146



第110図 遺構内土器9

S117



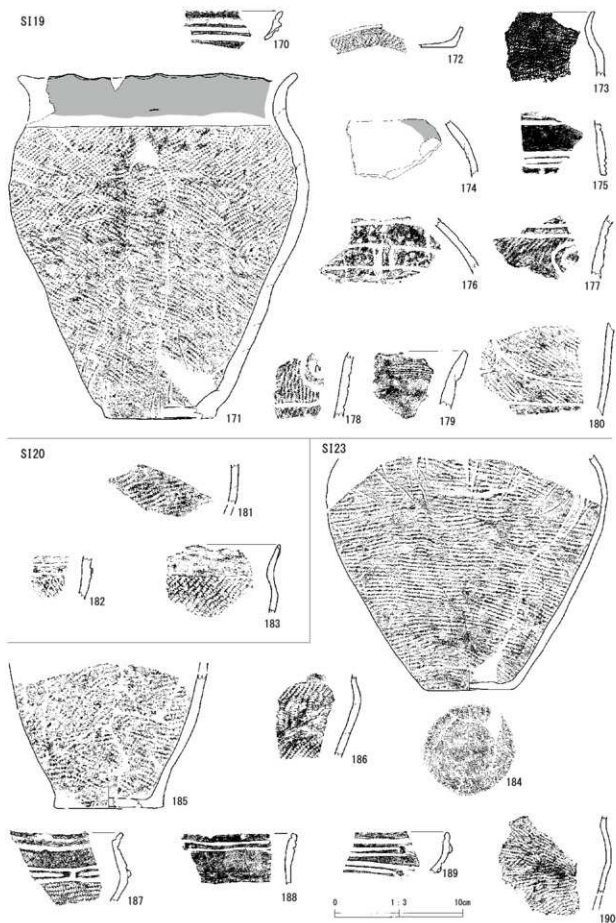
0 1:3 10cm

第111図 遺構内土器10

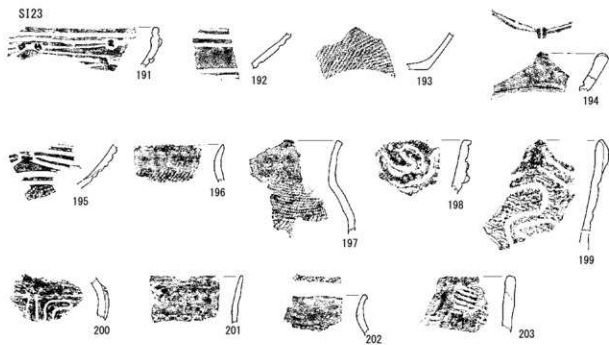
SI17



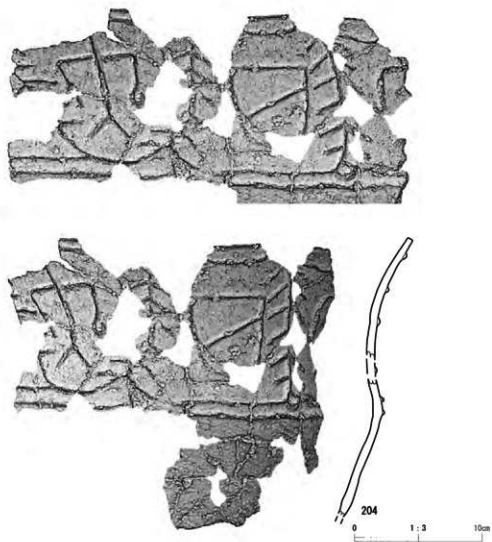
第112図 遺構内土器11



第113図 遺構内土器12

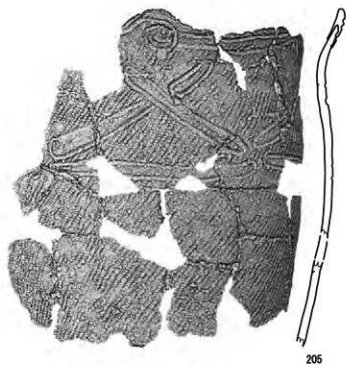


S124



第114図 遺構内土器13

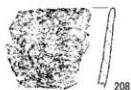
S124



205



207



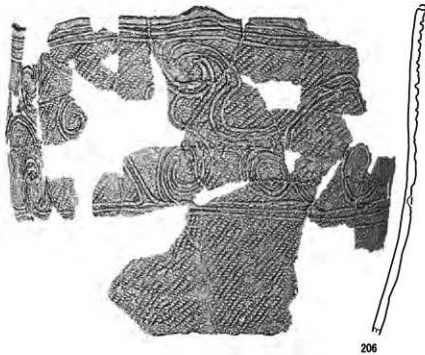
208



209



210



206



211



212

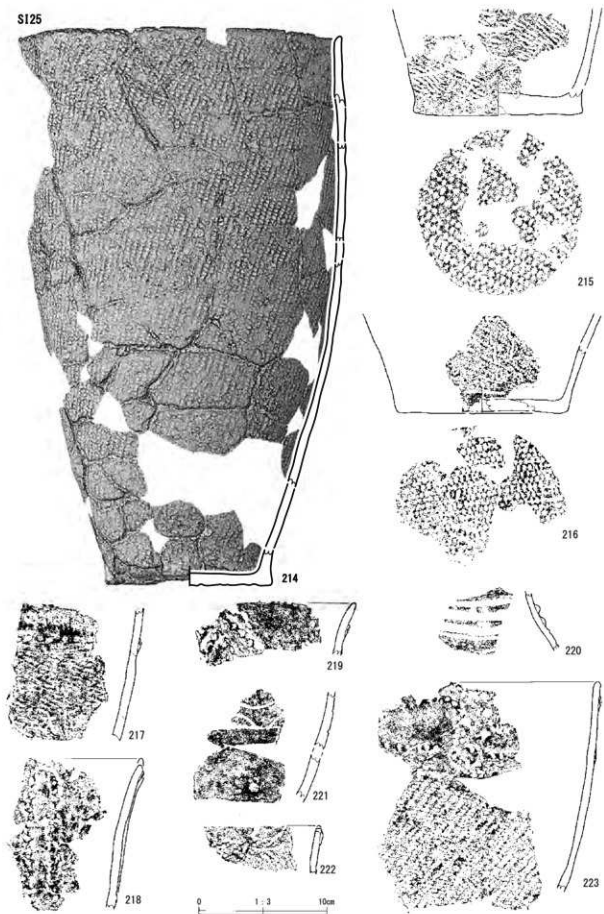


213

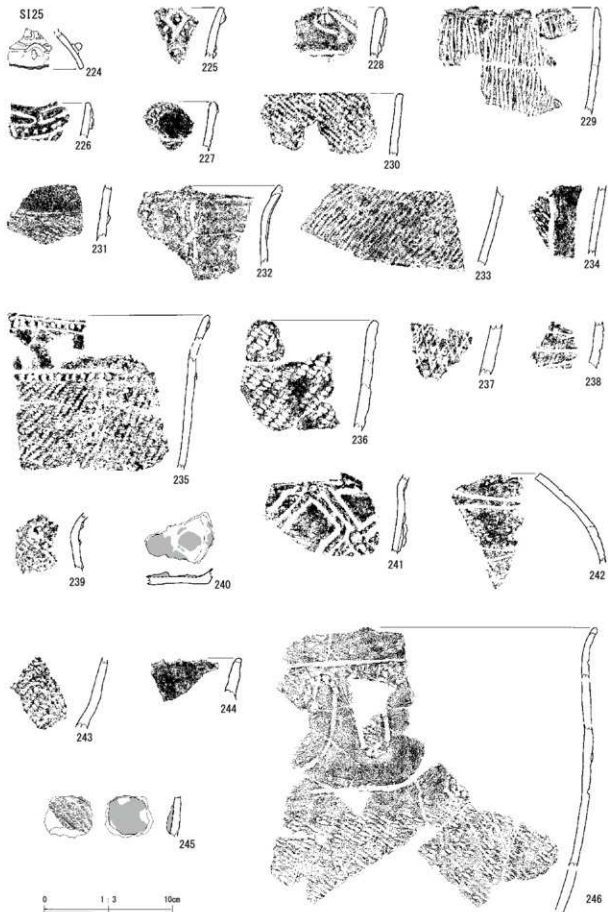


第115図 遺構内土器14

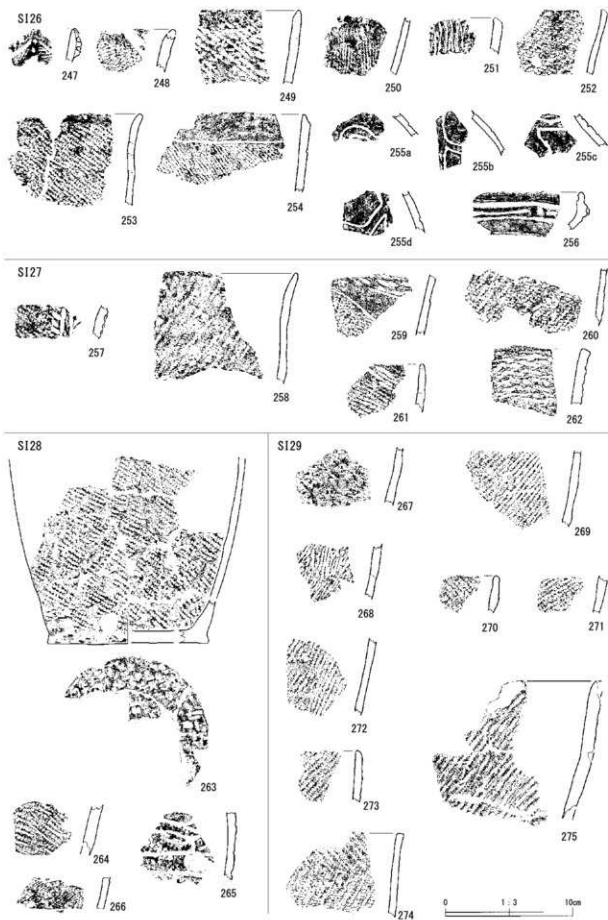
S125



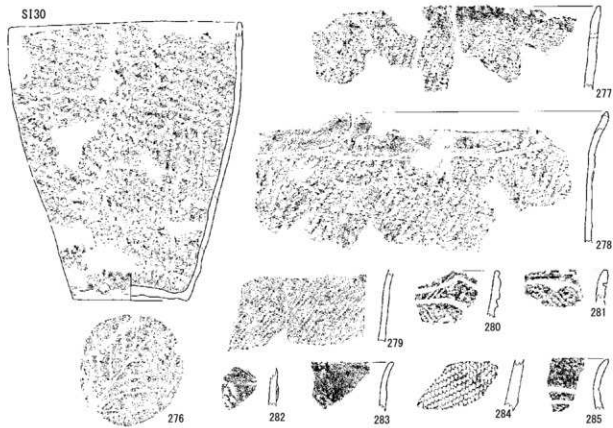
第116圖 遺構内土器15



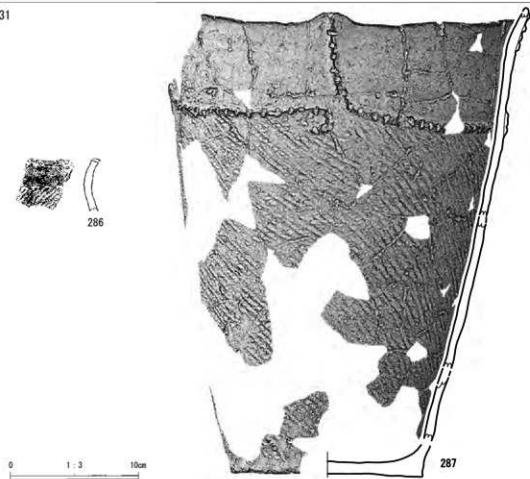
第117图 遺構内土器16



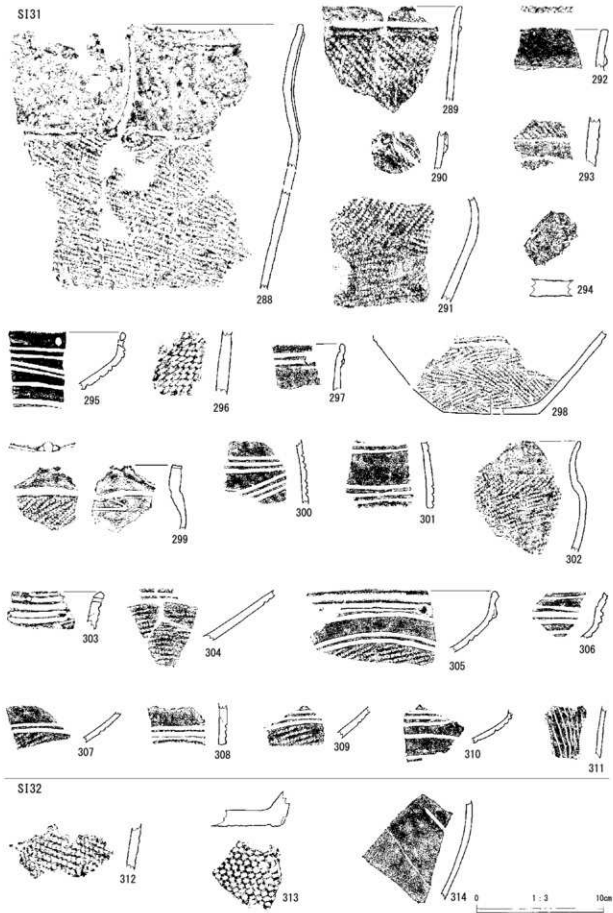
第118図 遺構内土器17



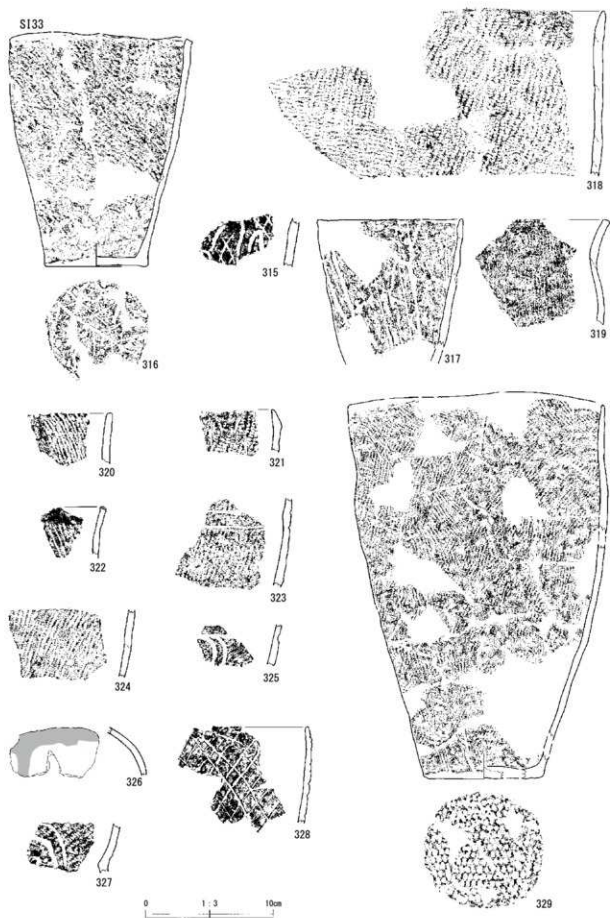
S131



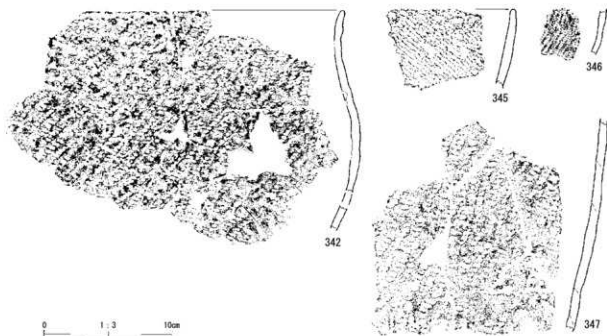
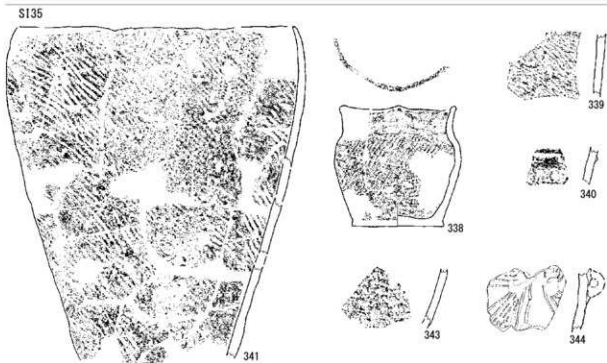
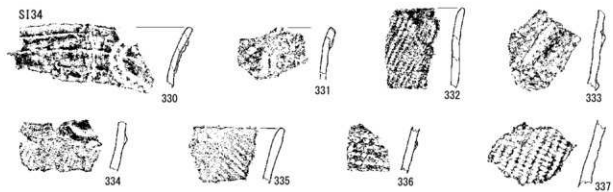
第119図 遺構内土器18



第120圖 遺構内土器19



第121圖 遺構内土器20



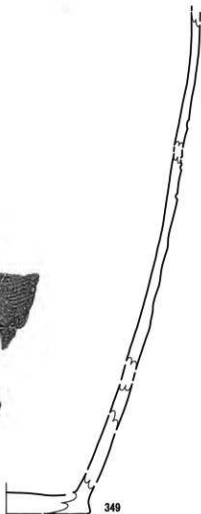
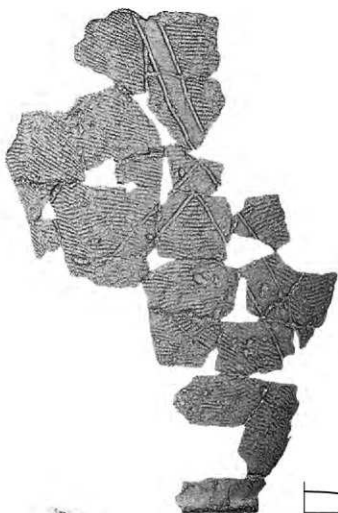
0 1:3 10cm

第122図 遺構内土器21

S135



348



349



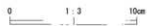
349底面



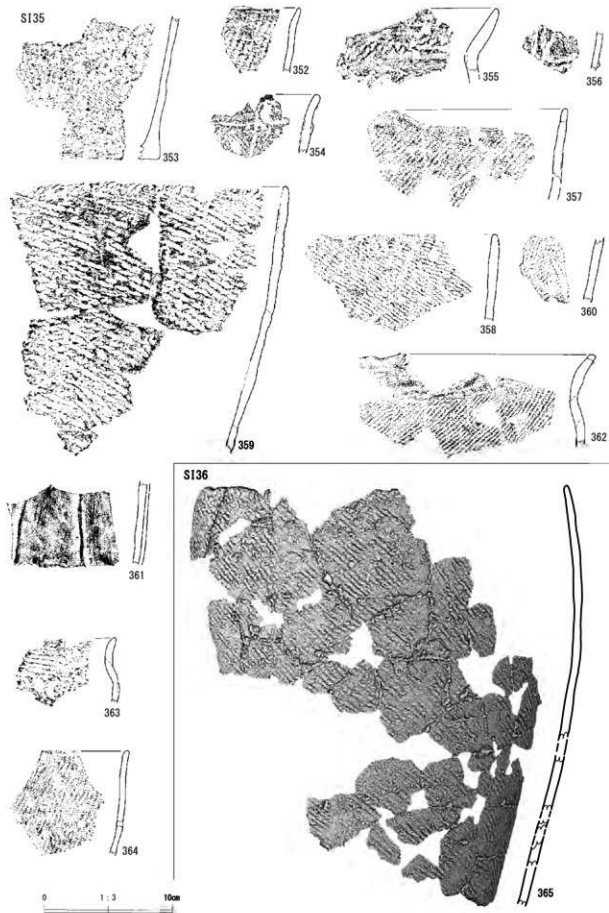
350



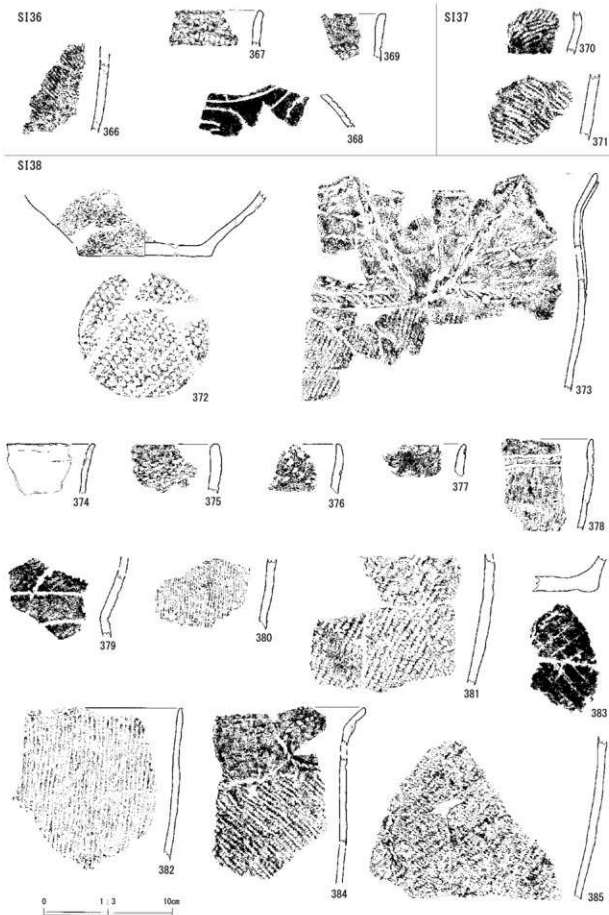
351



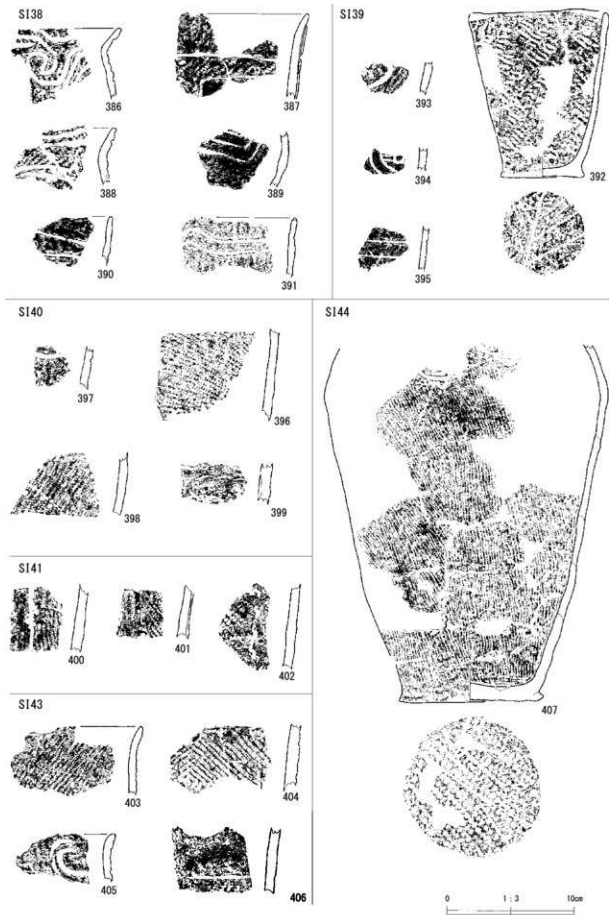
第123図 遺構内土器22



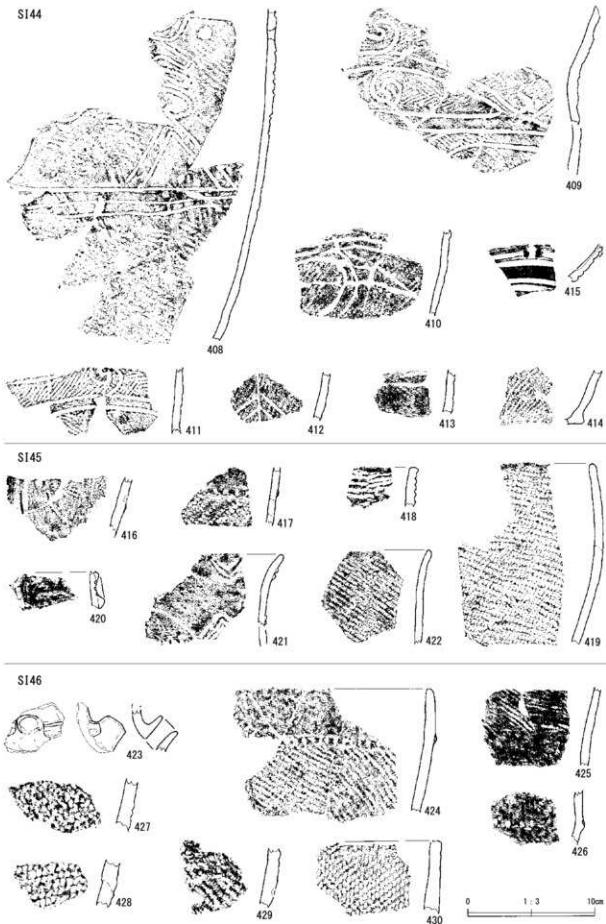
第124図 遺構内土器23



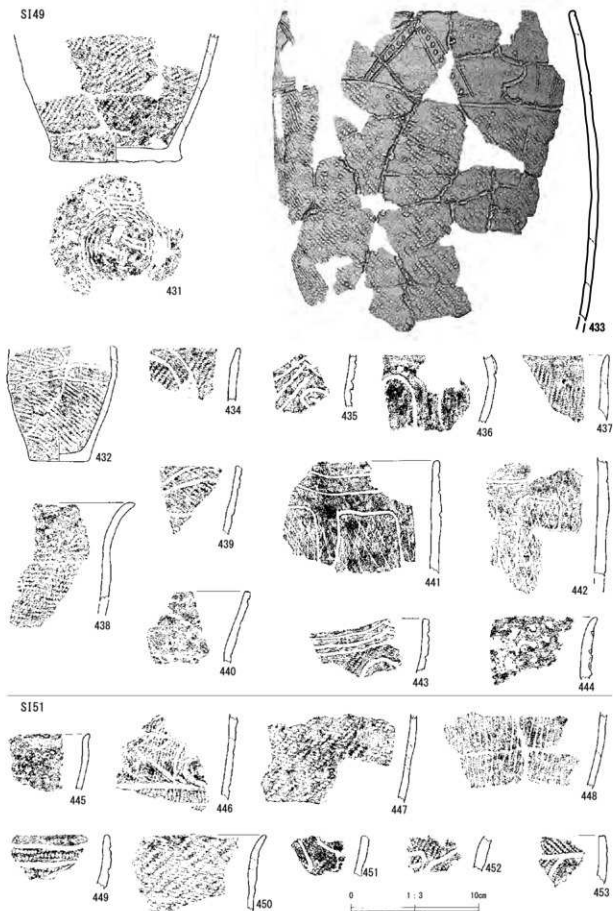
第125図 遺構内土器24



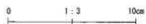
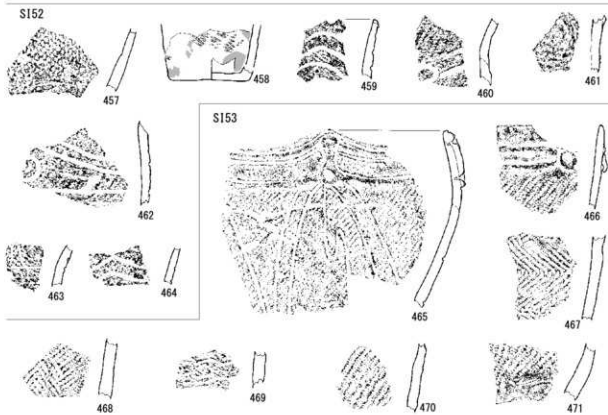
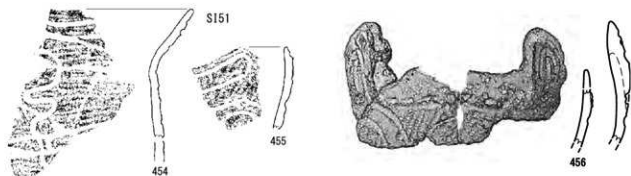
第126図 遺構内土器25



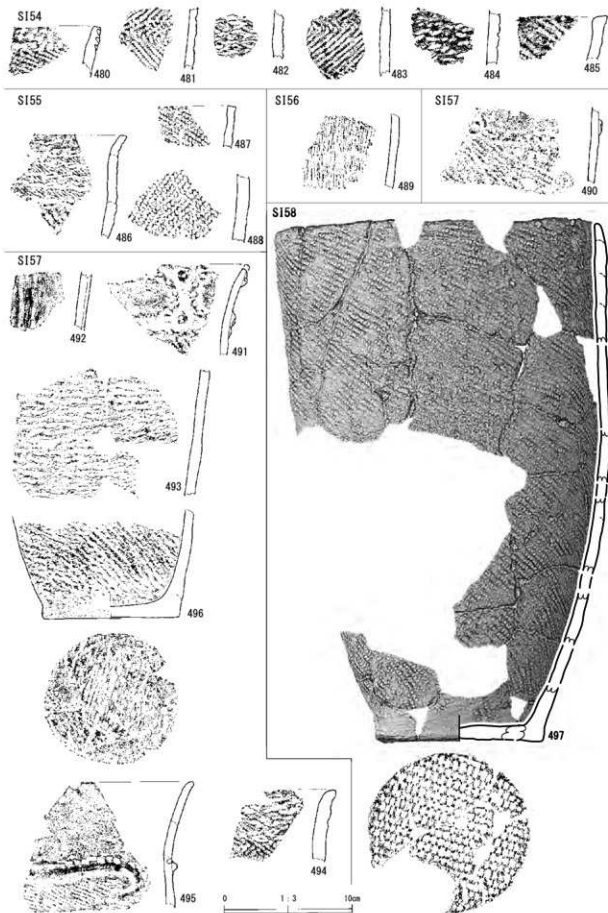
第127図 遺構内土器26



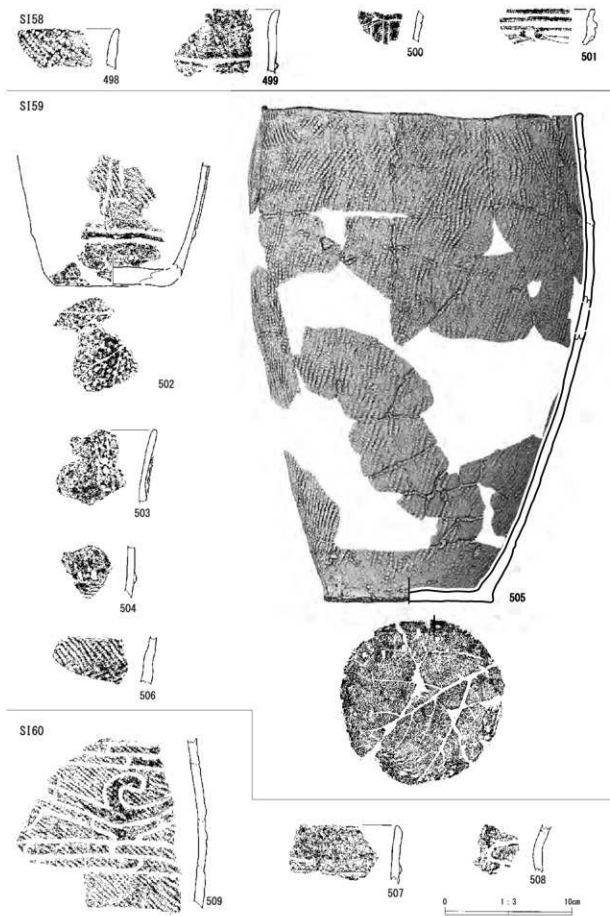
第128図 遺構内土器27



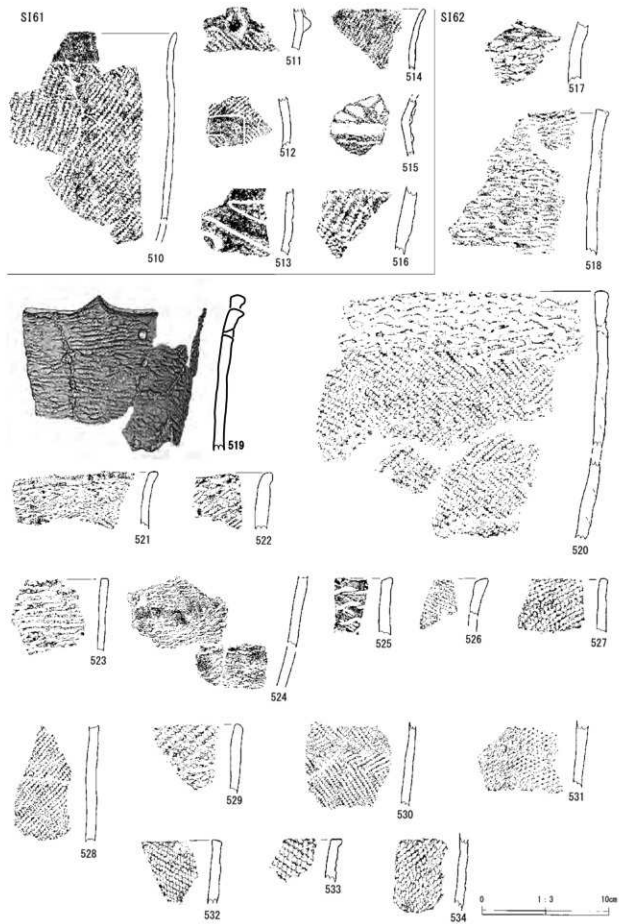
第129図 遺構内土器28



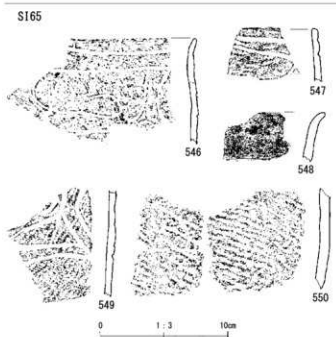
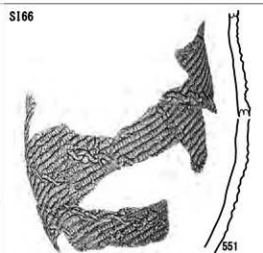
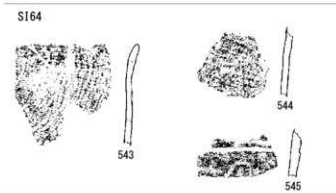
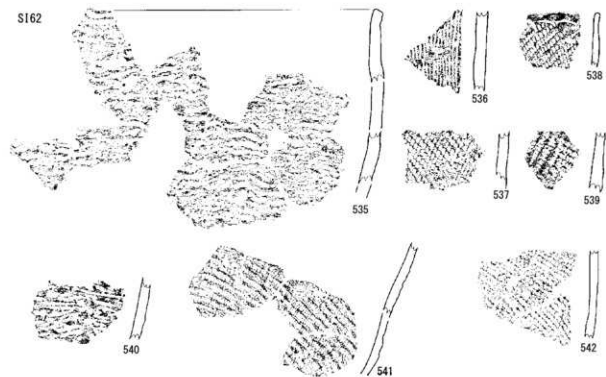
第130圖 遺構内土器29



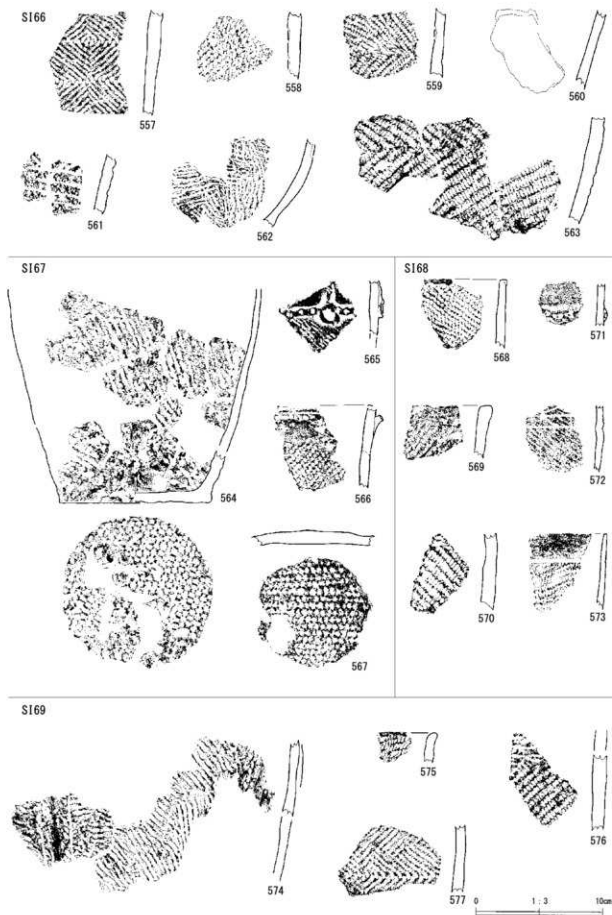
第131図 遺構内土器30



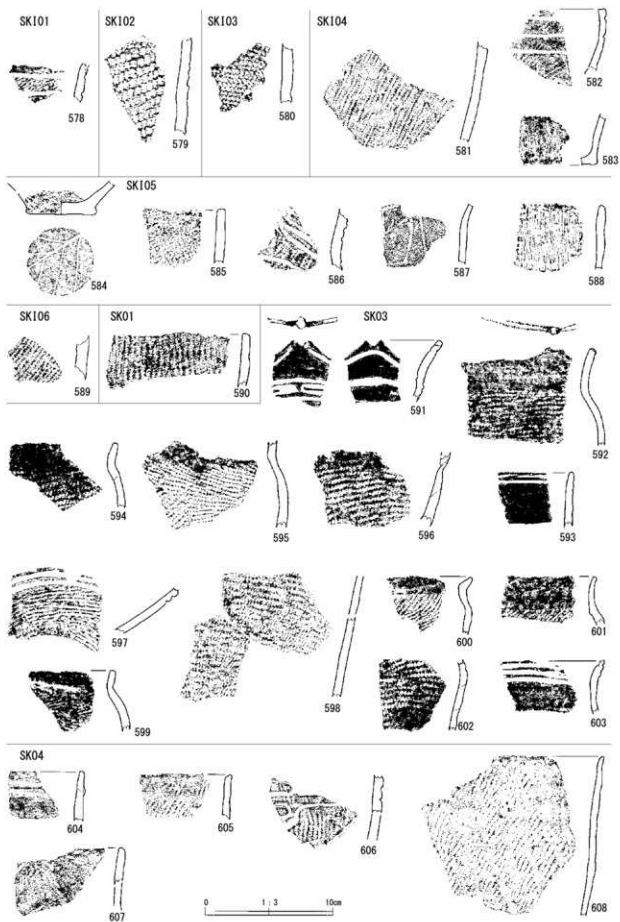
第132図 遺構内土器31



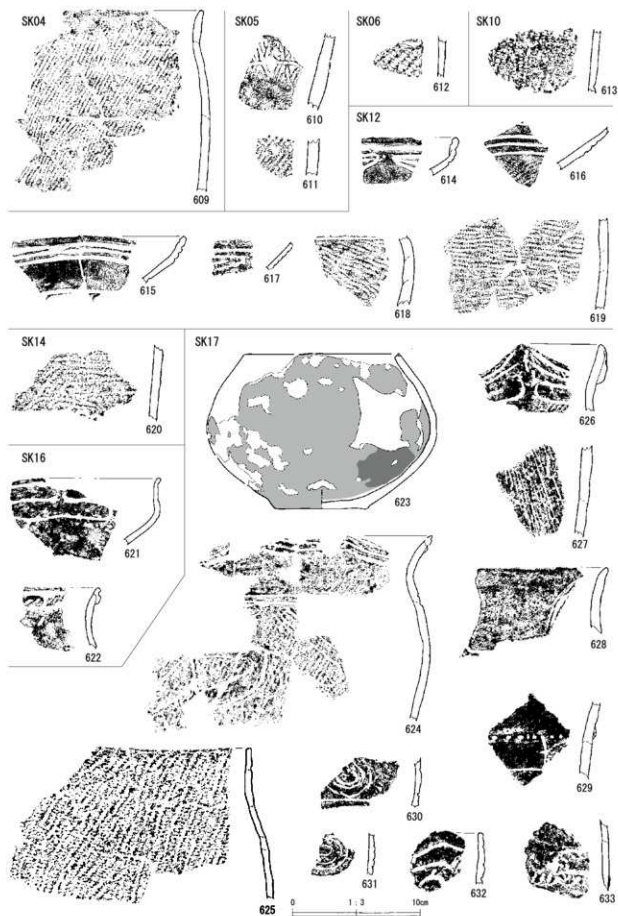
第133圖 遺構内土器32



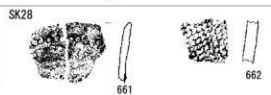
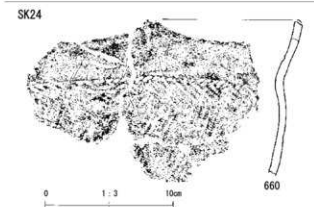
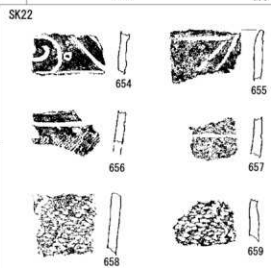
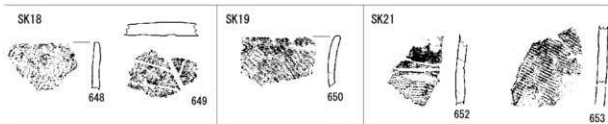
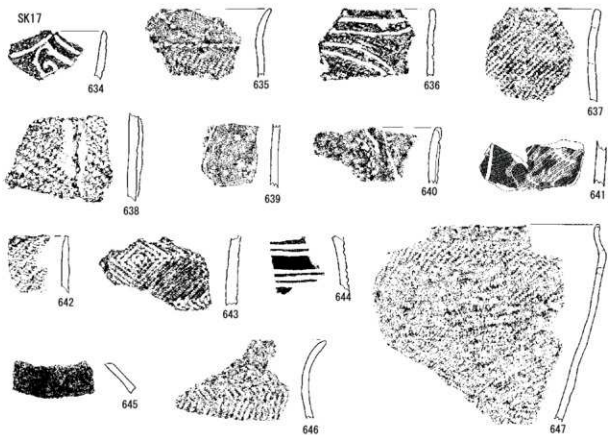
第134図 遺構内土器33



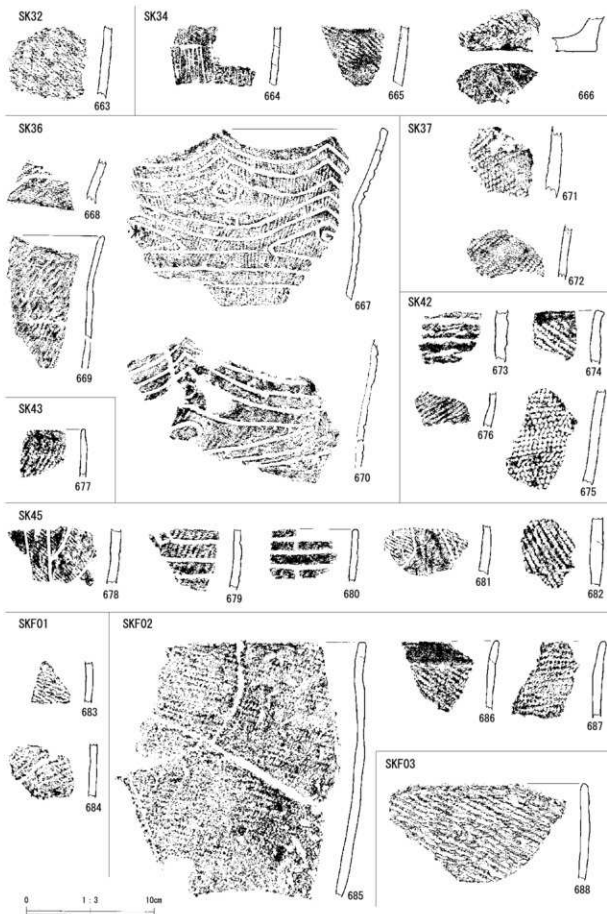
第135図 遺構内土器34



第136圖 遺構内土器35



第137図 遺構内土器36

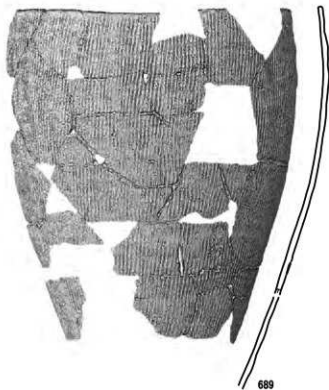


第138図 遺構内土器37

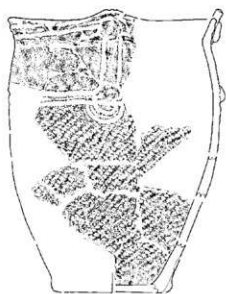
SKF04



691



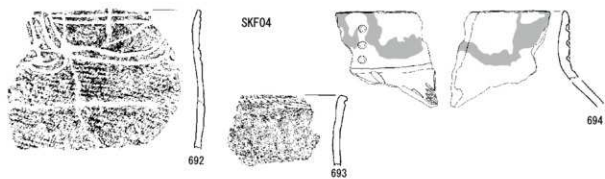
689



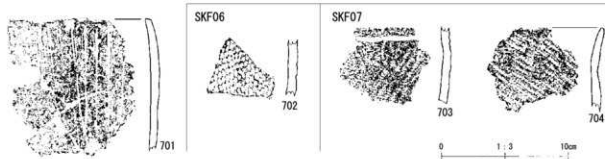
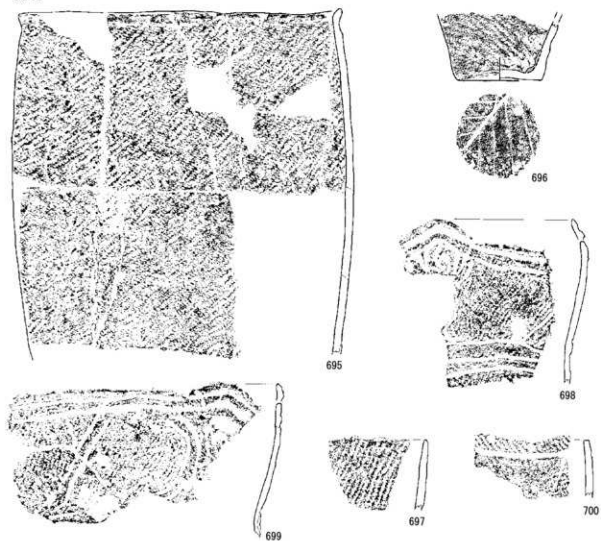
690

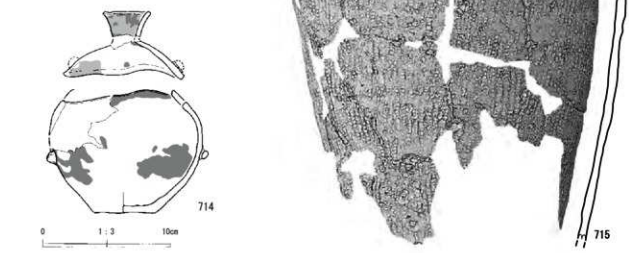
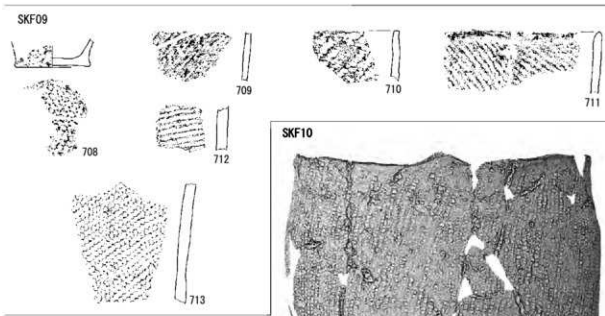
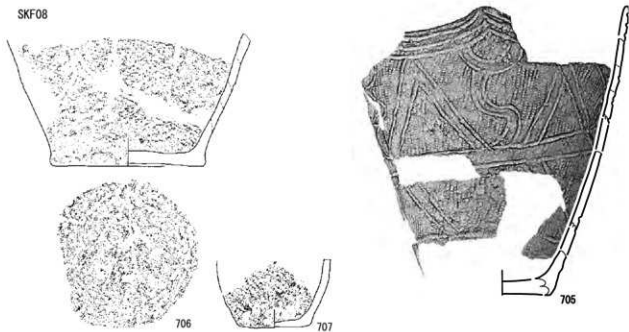


第139図 遺構内土器38

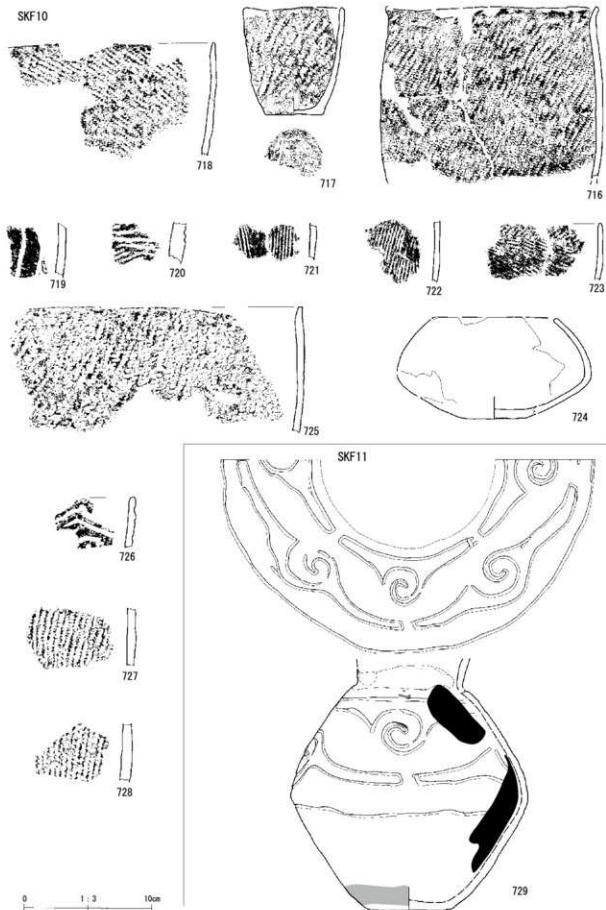


SKF05

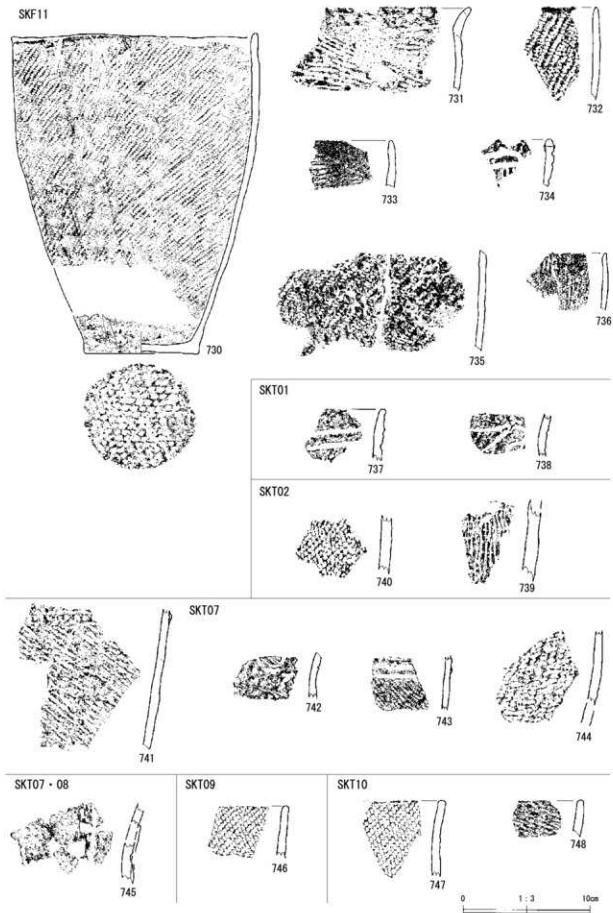




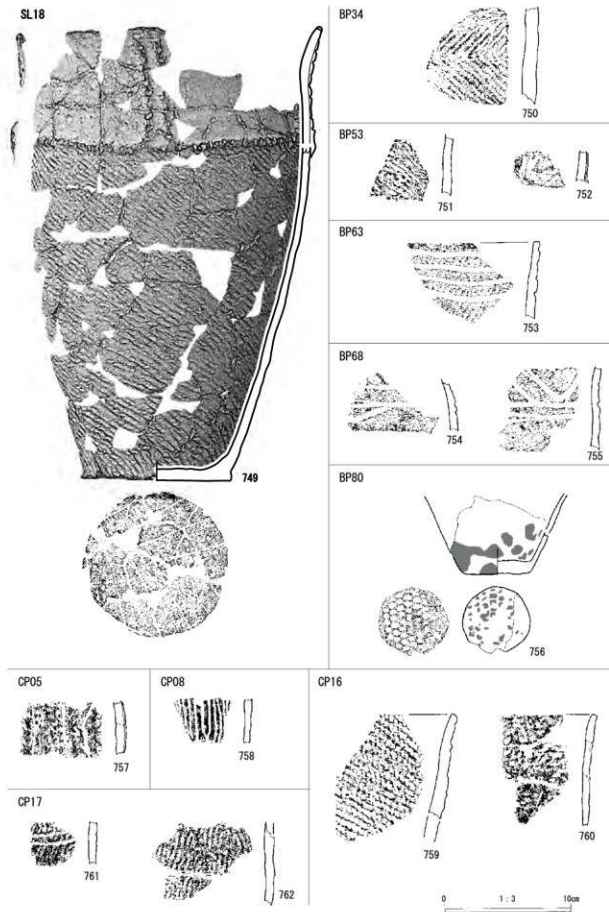
第141図 遺構内土器40



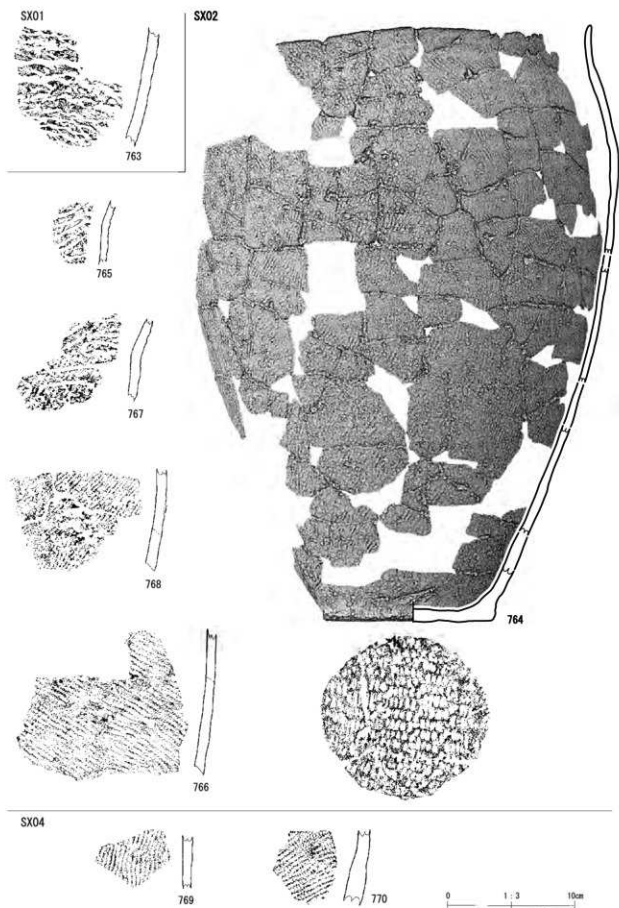
第142図 遺構内土器41



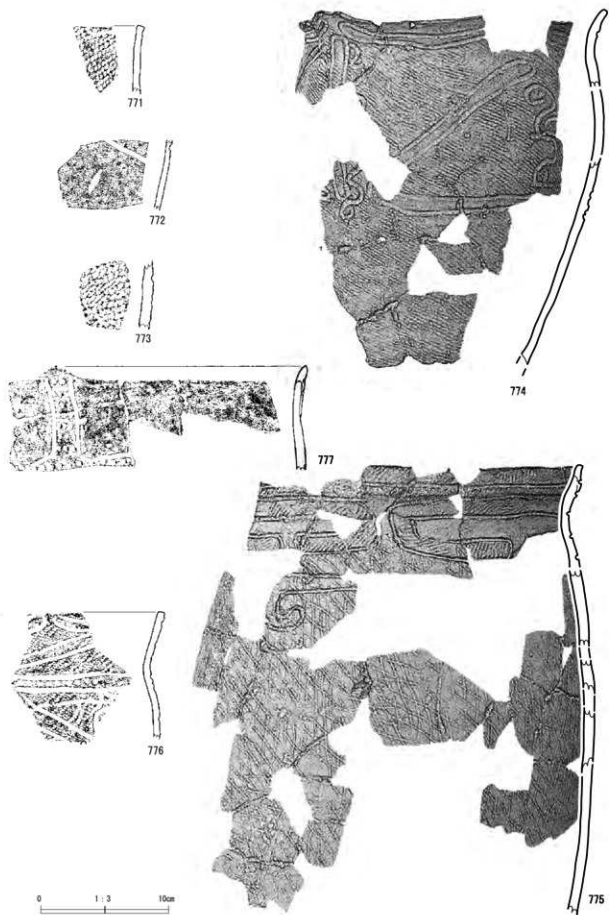
第143図 遺構内土器42



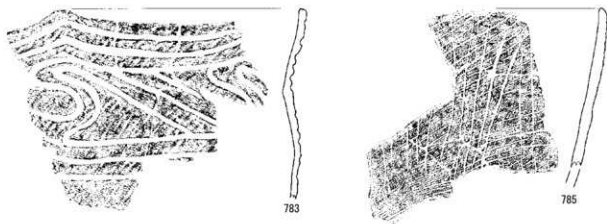
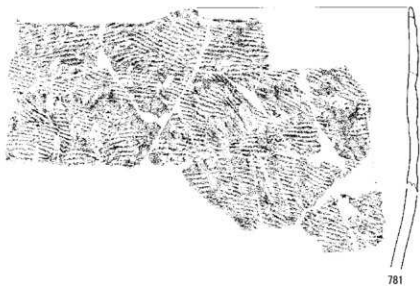
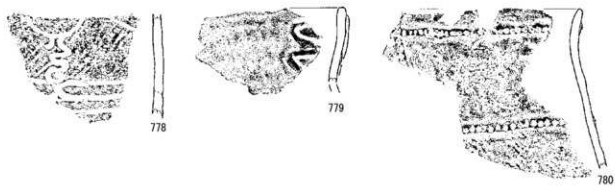
第144図 遺構内土器43



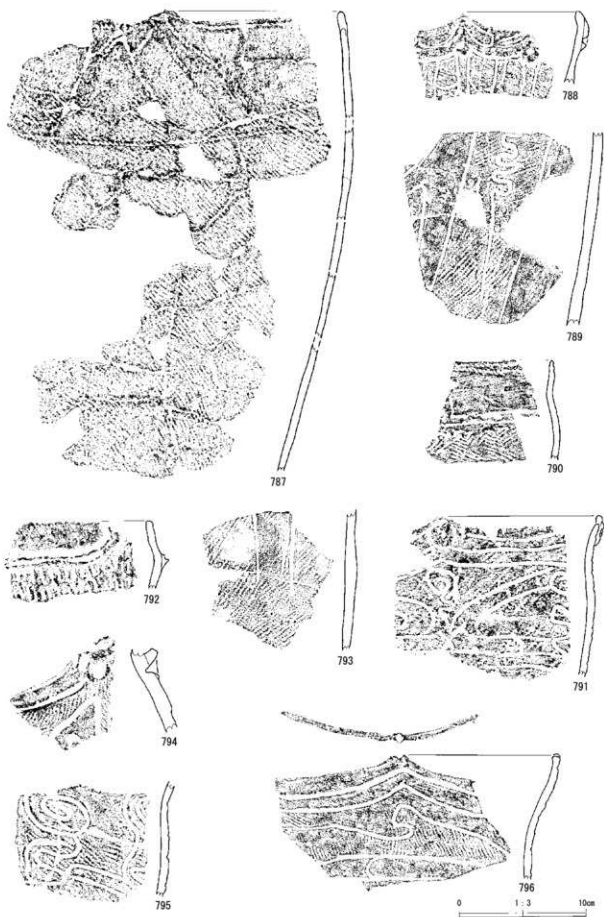
第145図 遺構内土器44



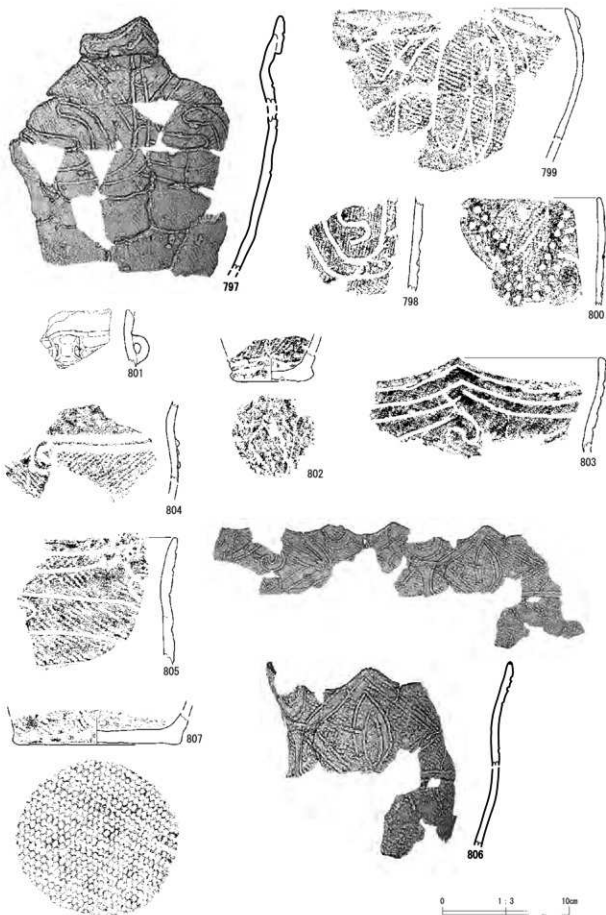
第146図 遺構外土器1



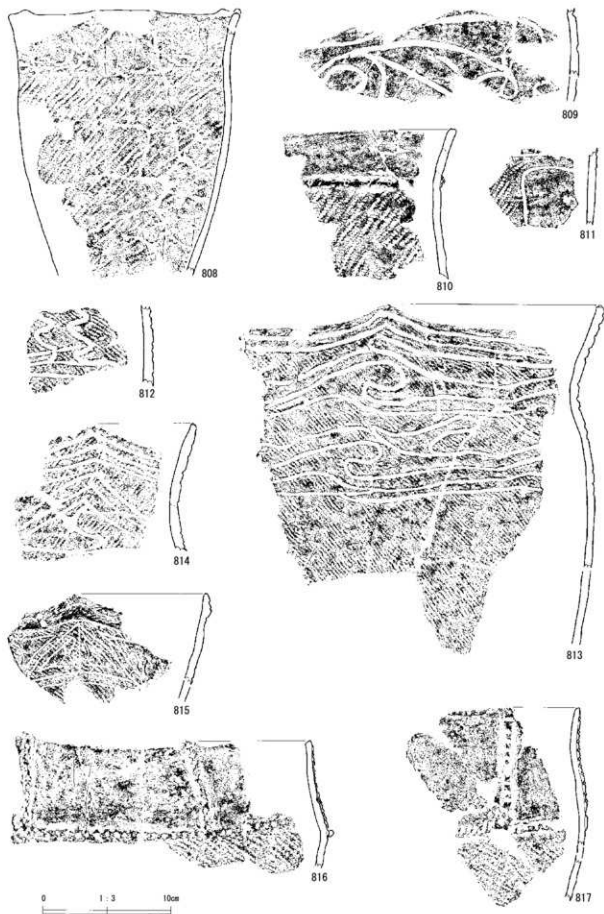
第147图 遺構外土器2



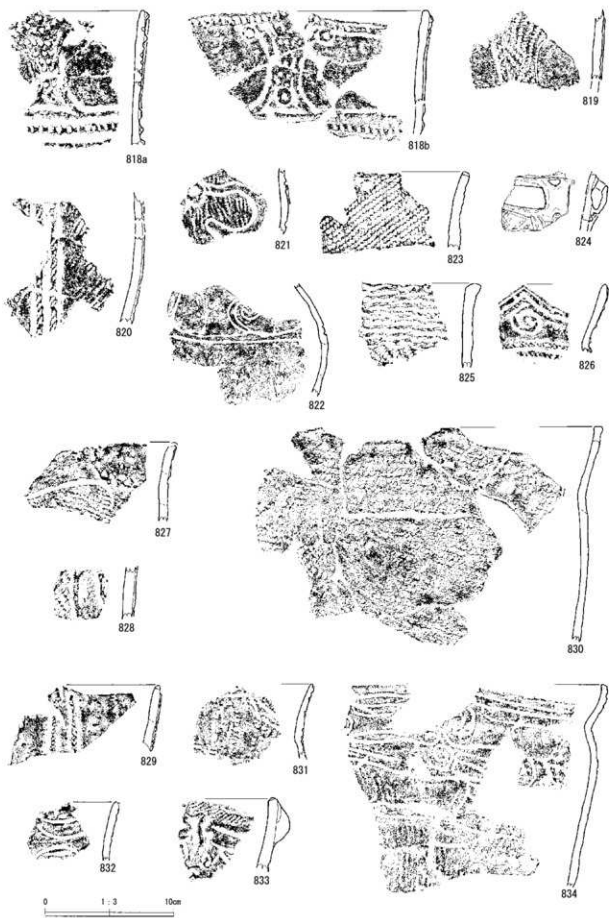
第148図 遺構外土器3



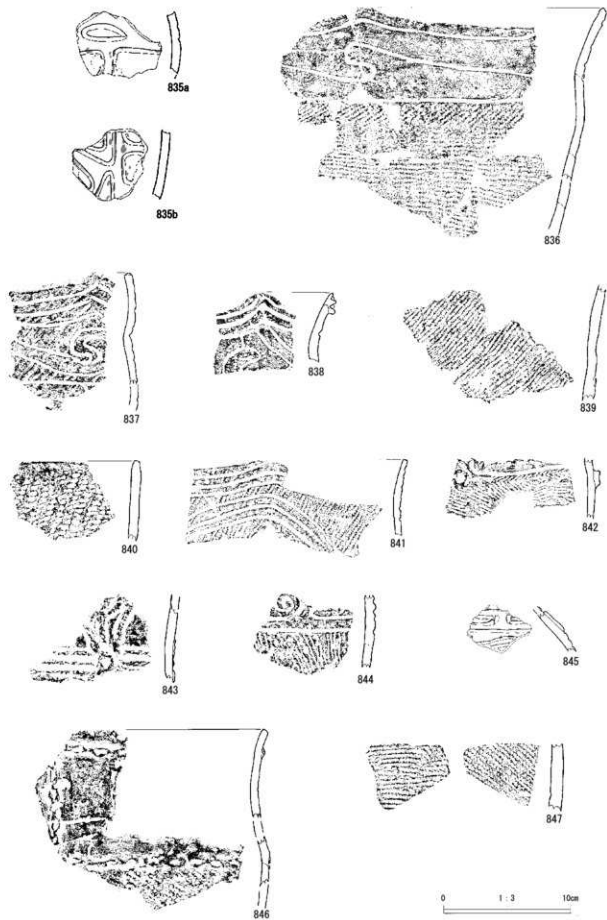
第149図 遺構外土器4



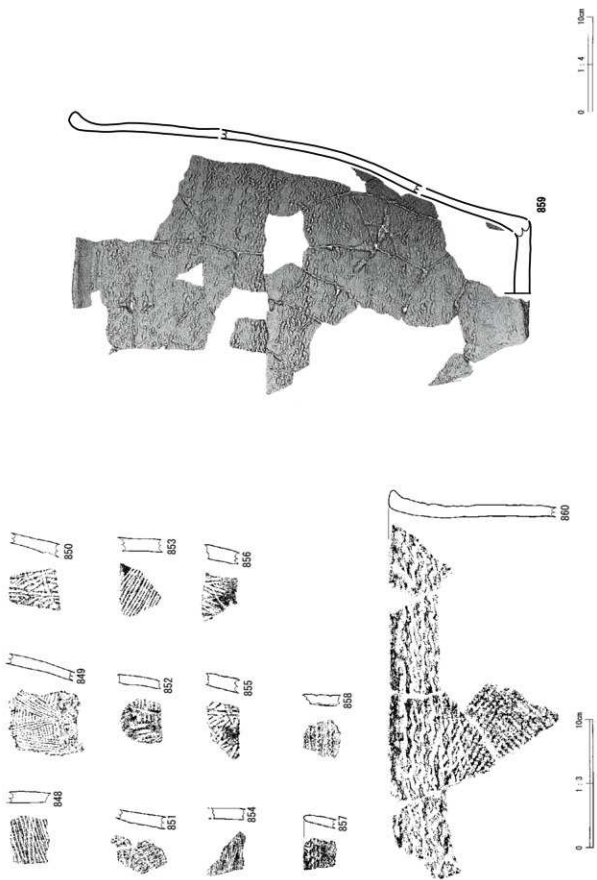
第150図 遺構外土器5



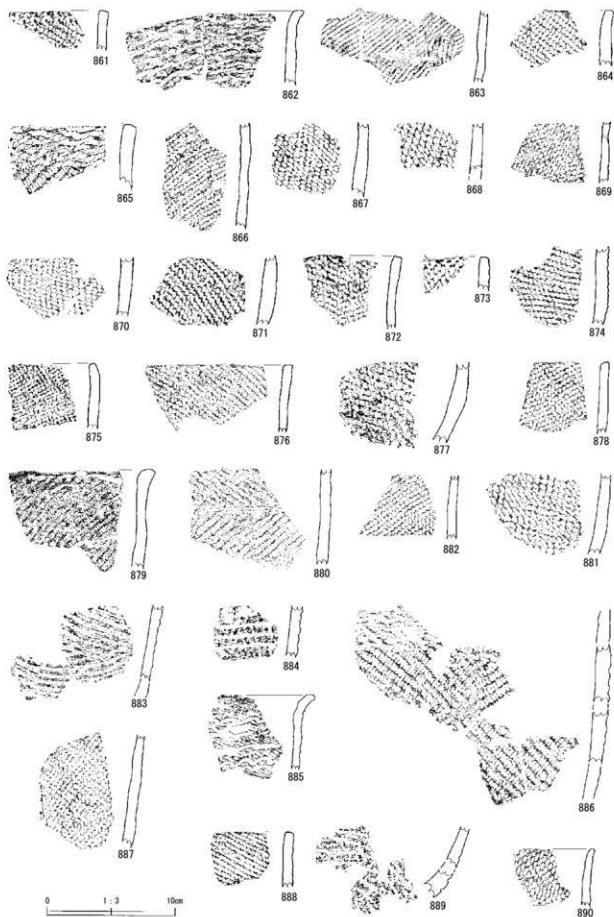
第151図 遺構外土器6



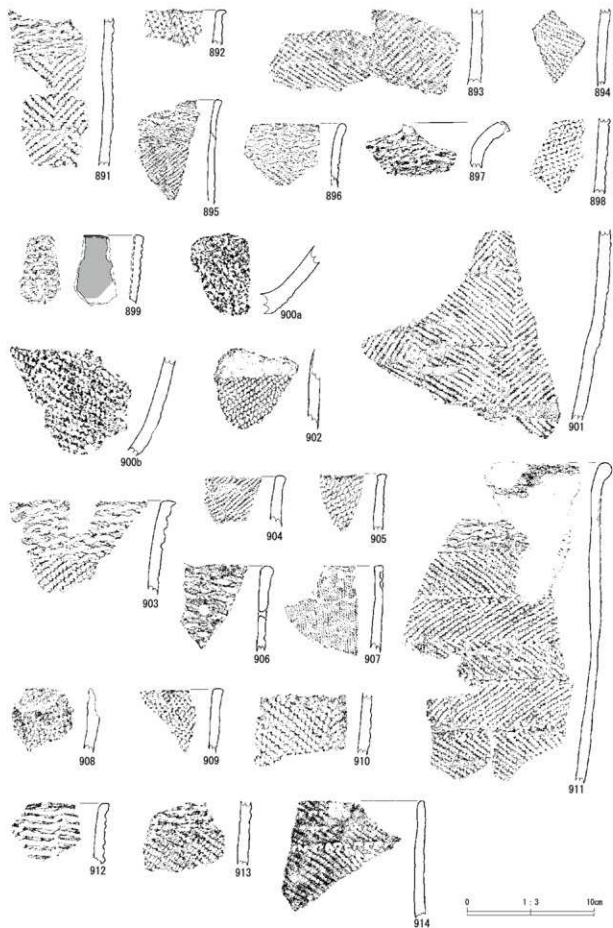
第152図 遺構外土器7



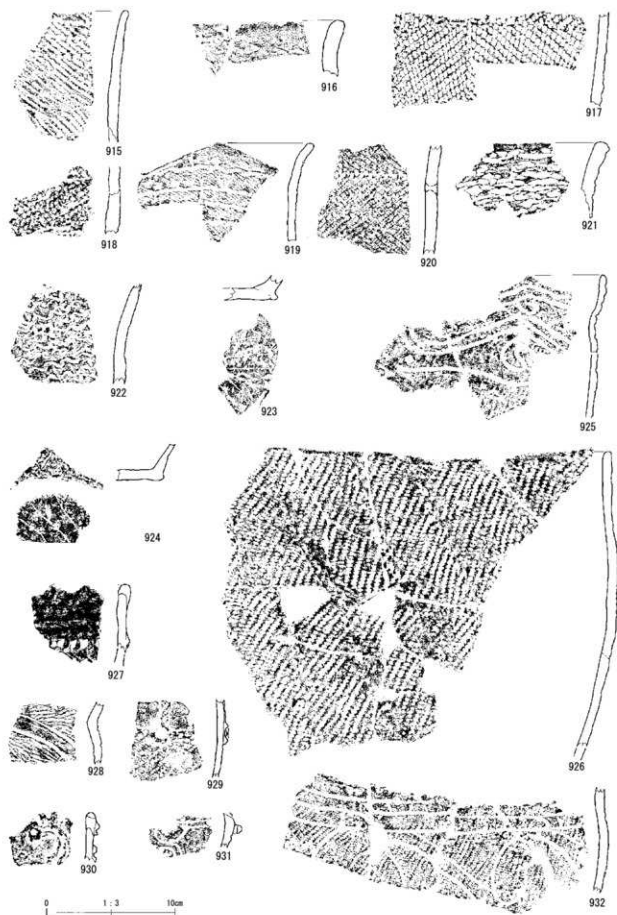
第153図 遺構外土器8



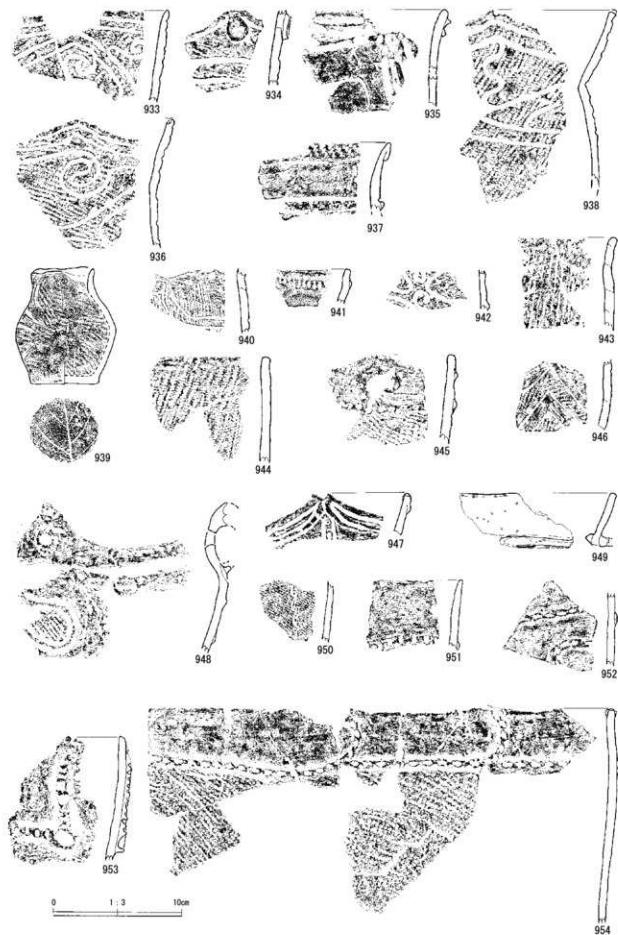
第154図 遺構外土器9



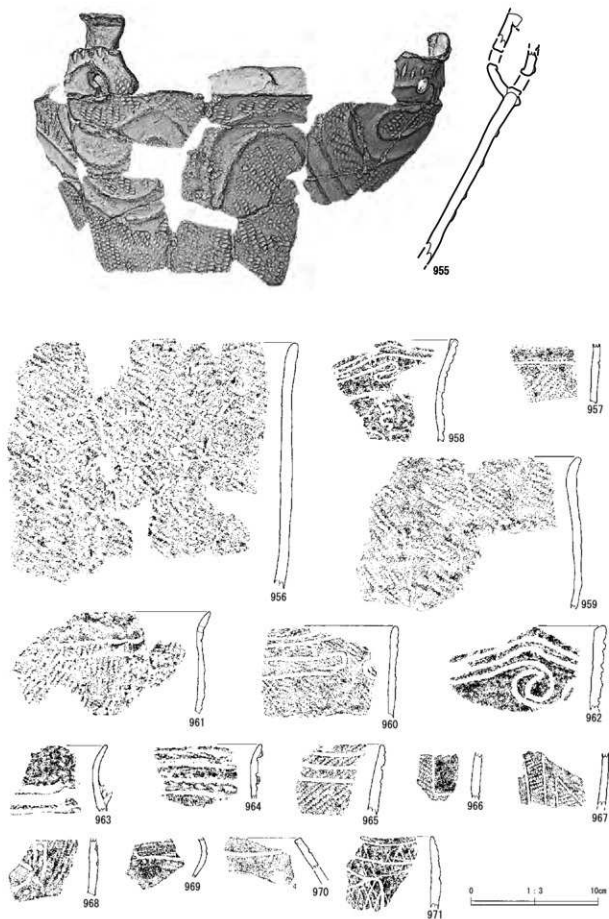
第155图 遺構外土器10



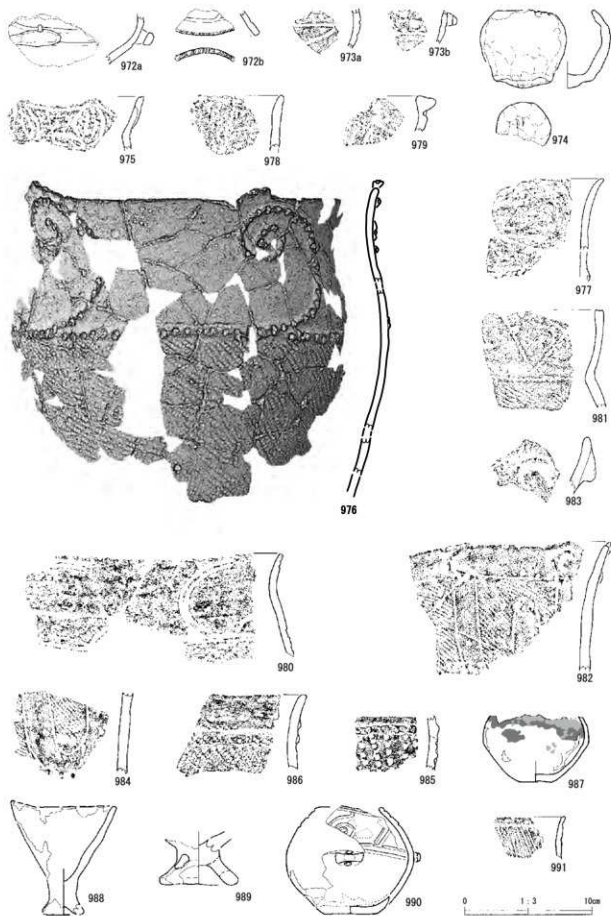
第156図 遺構外土器11



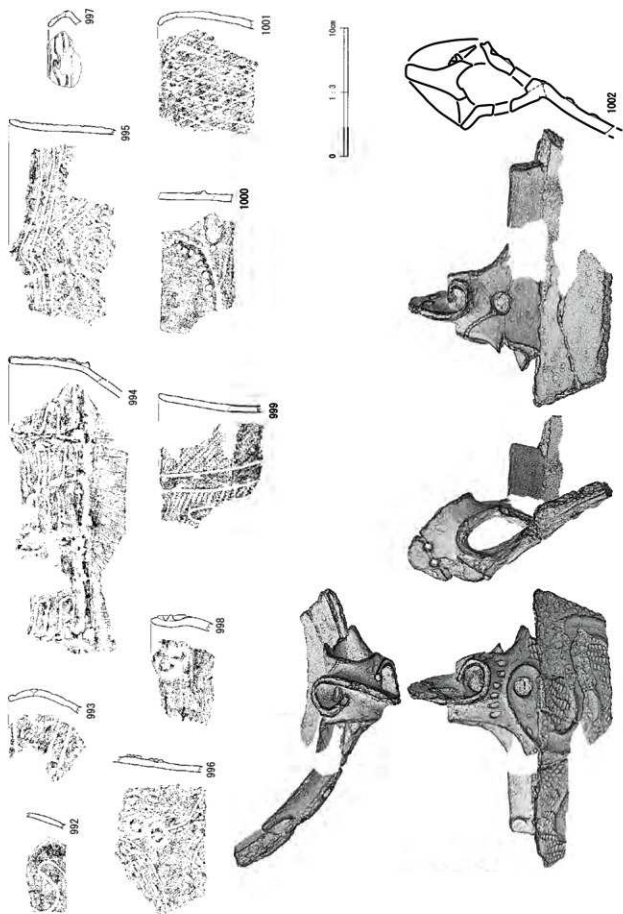
第157図 遺構外土器12



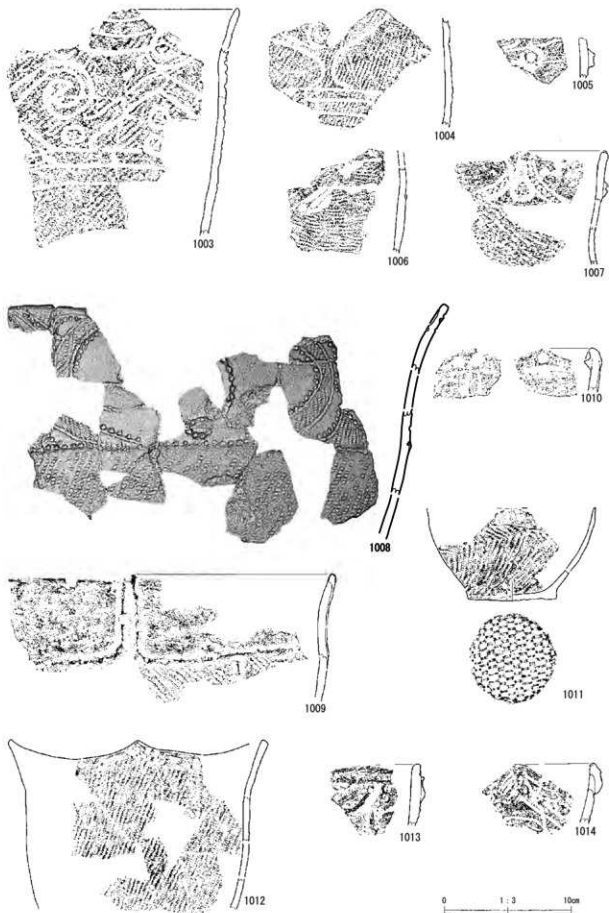
第158図 遺構外土器13



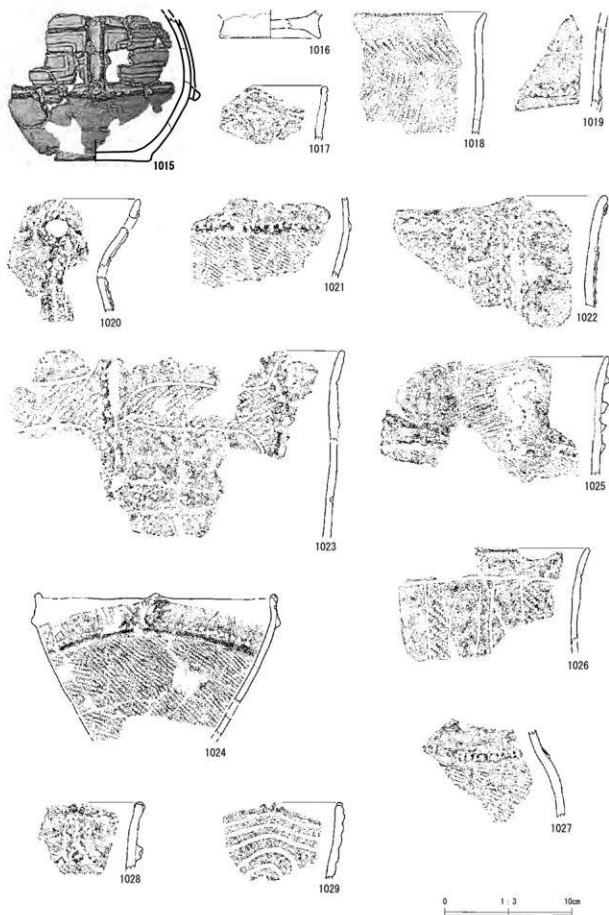
第159図 遺構外土器14



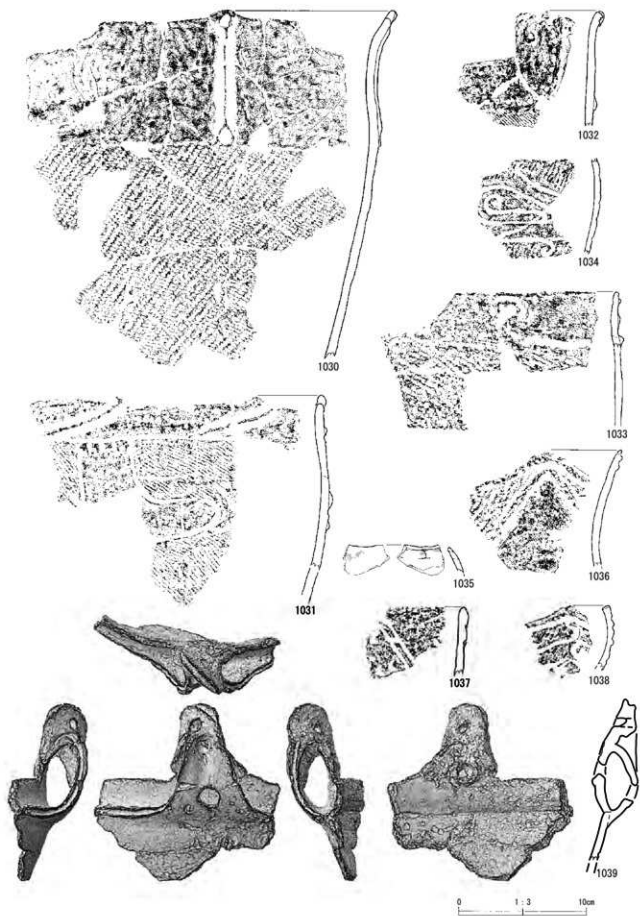
第160図 遺構外土器15



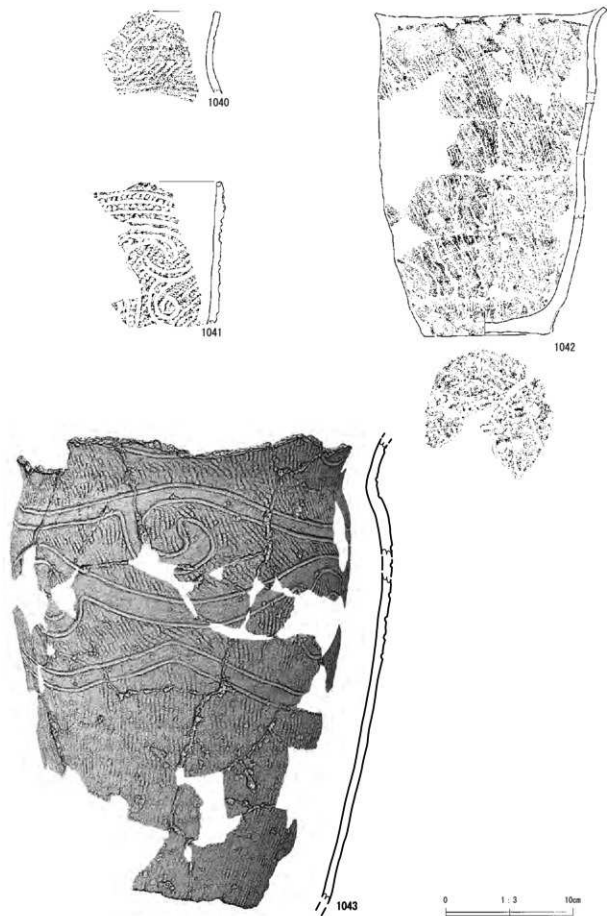
第161図 遺構外土器16



第162図 遺構外土器17



第163図 遺構外土器18



第164図 遺構外土器19



1044



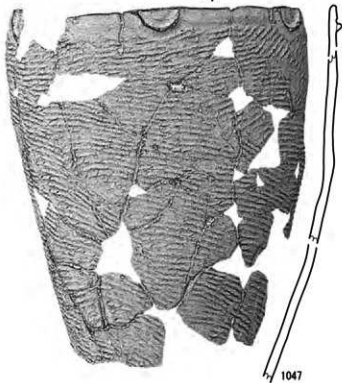
1045



1046a



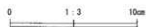
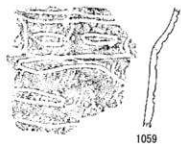
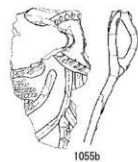
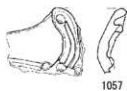
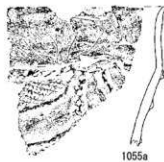
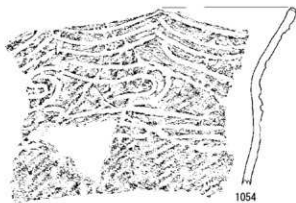
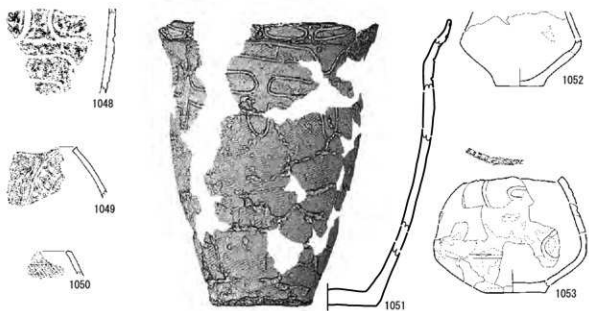
1046b



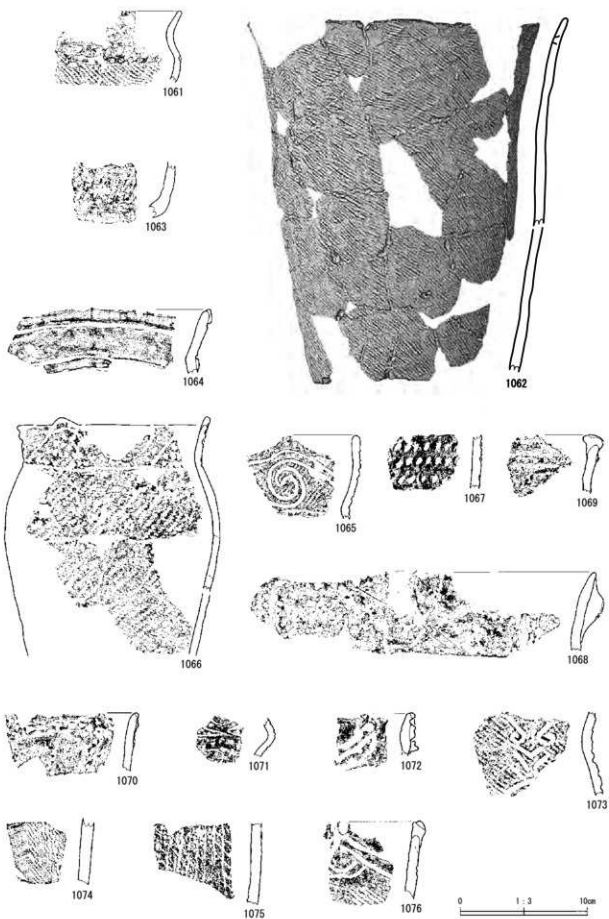
1047



第165図 遺構外土器20



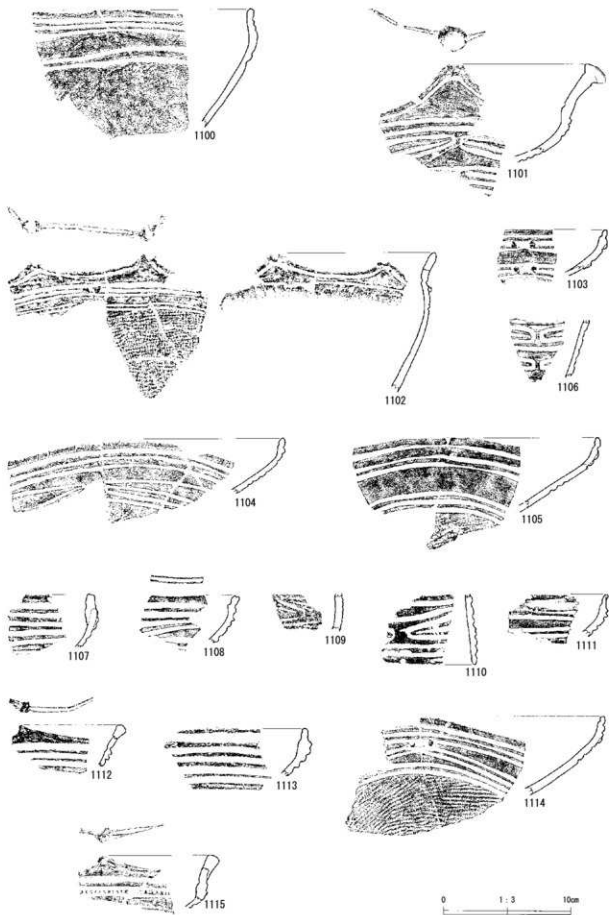
第166図 遺構外土器21



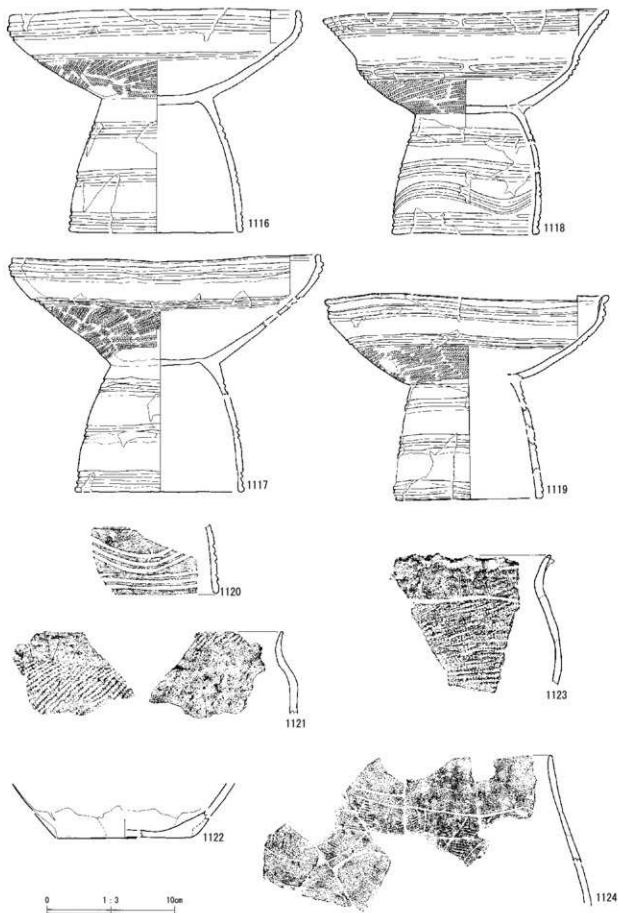
第167图 遺構外土器22



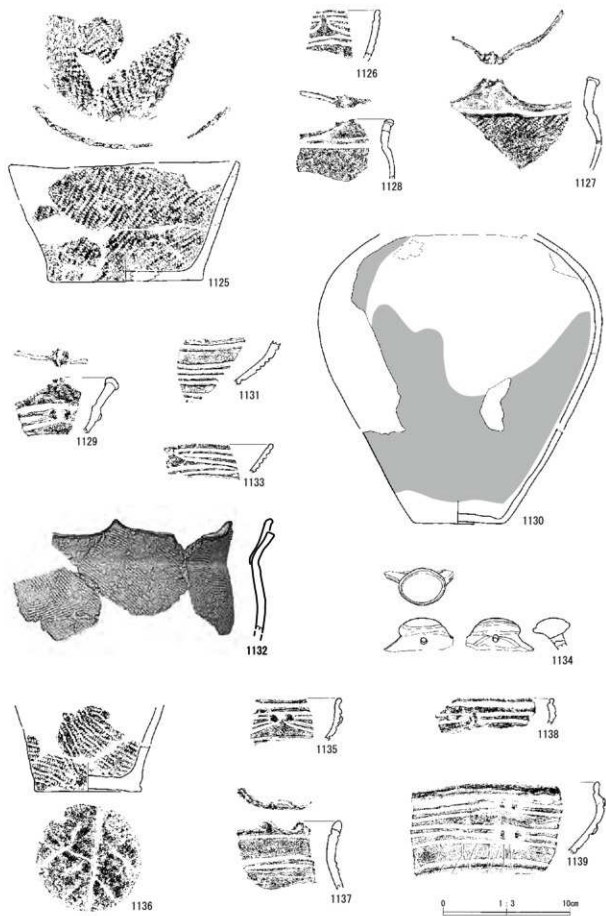
第168図 遺構外土器23



第169図 遺構外土器24



第170図 遺構外土器25



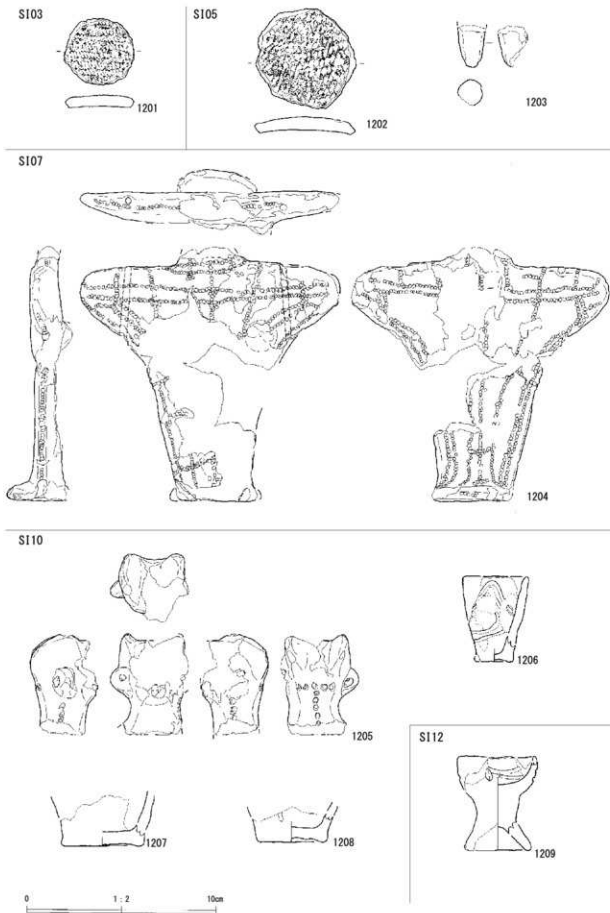
第171图 遺構外土器26



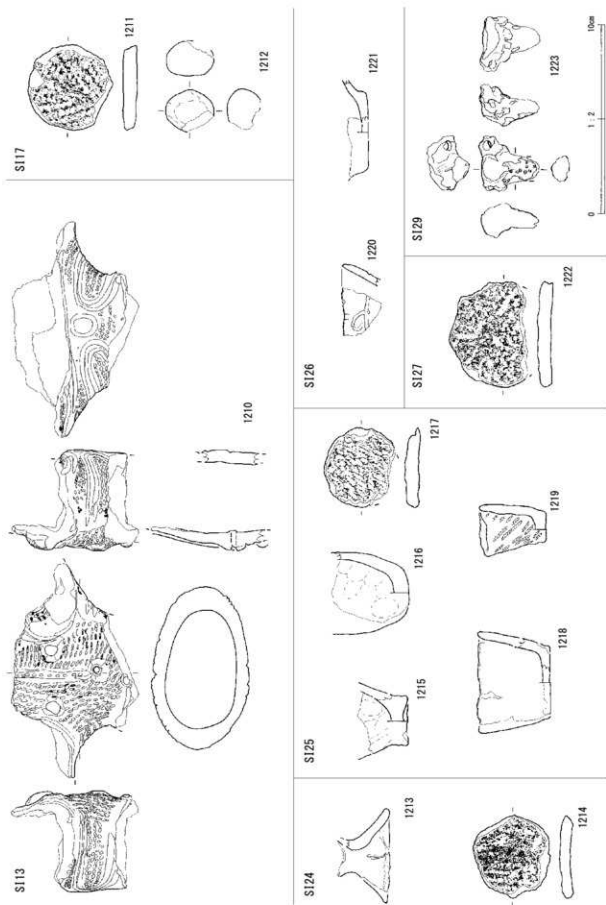
第172図 遺構外土器27



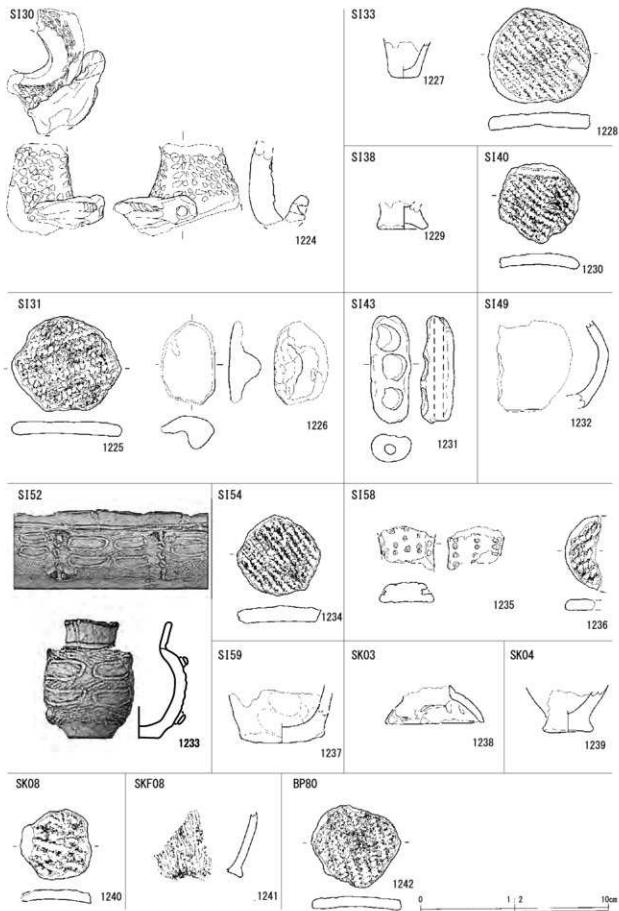
第173图 遺構外土器28



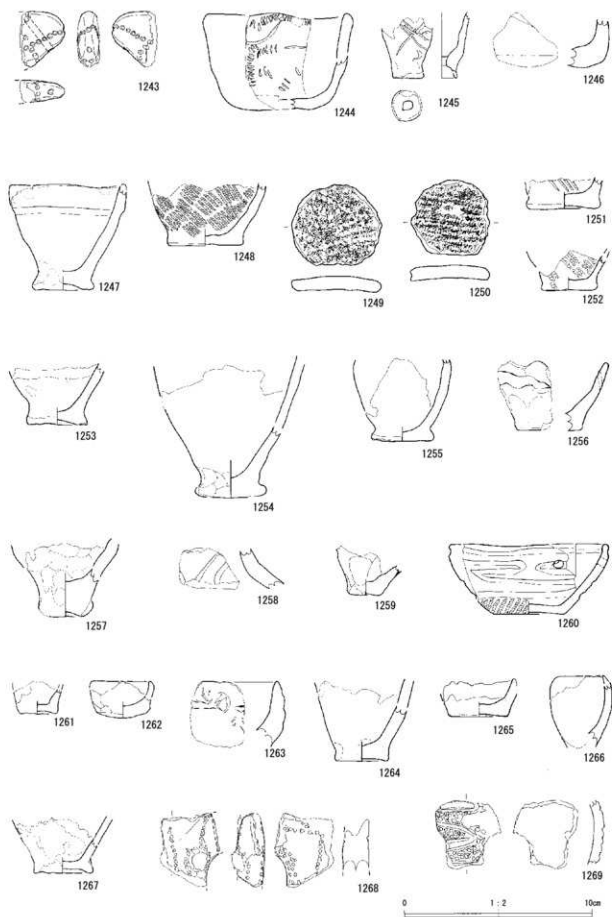
第174図 遺構内土製品 1



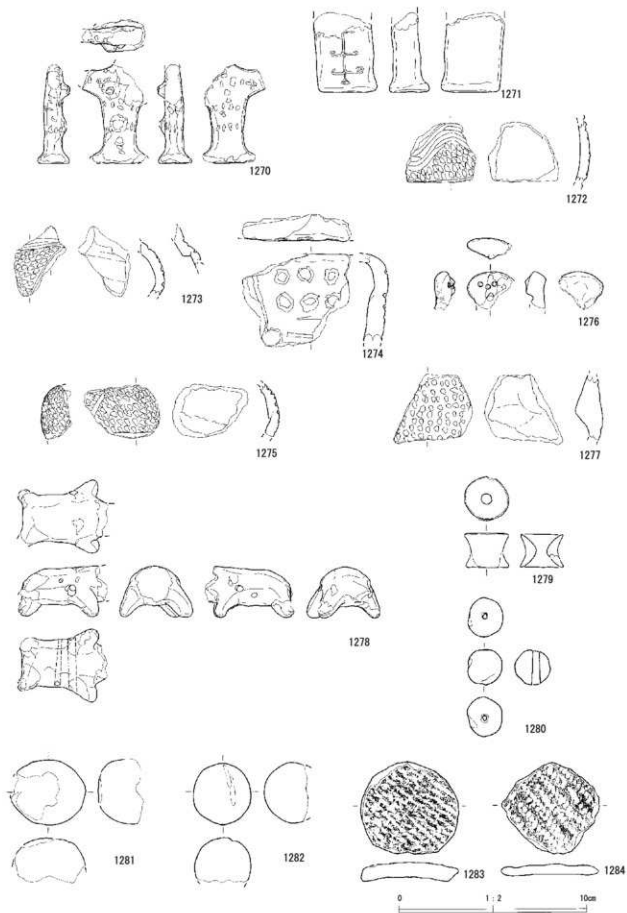
第175図 遺構内土製品2



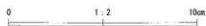
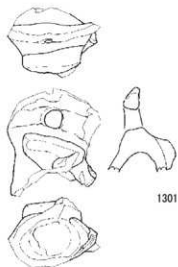
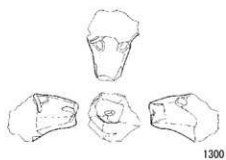
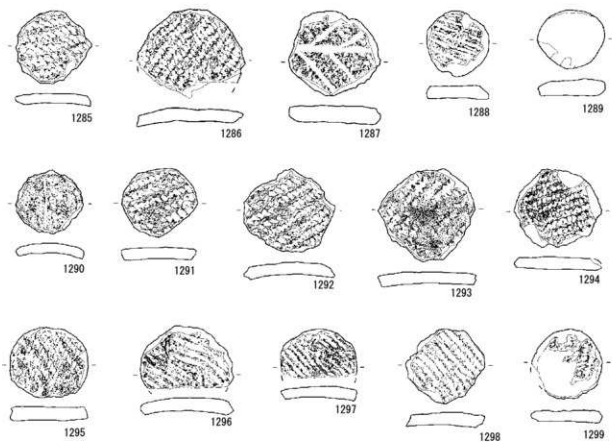
第176図 遺構内土製品3



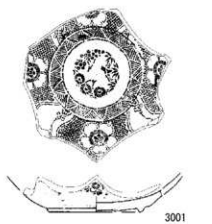
第177図 遺構外土製品 1



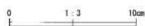
第178図 遺構外土製品2



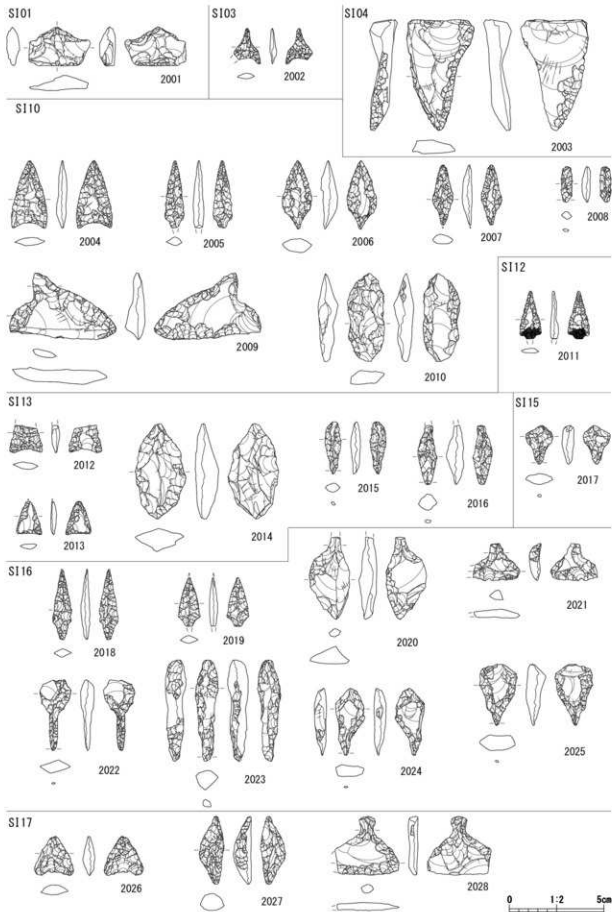
陶磁器



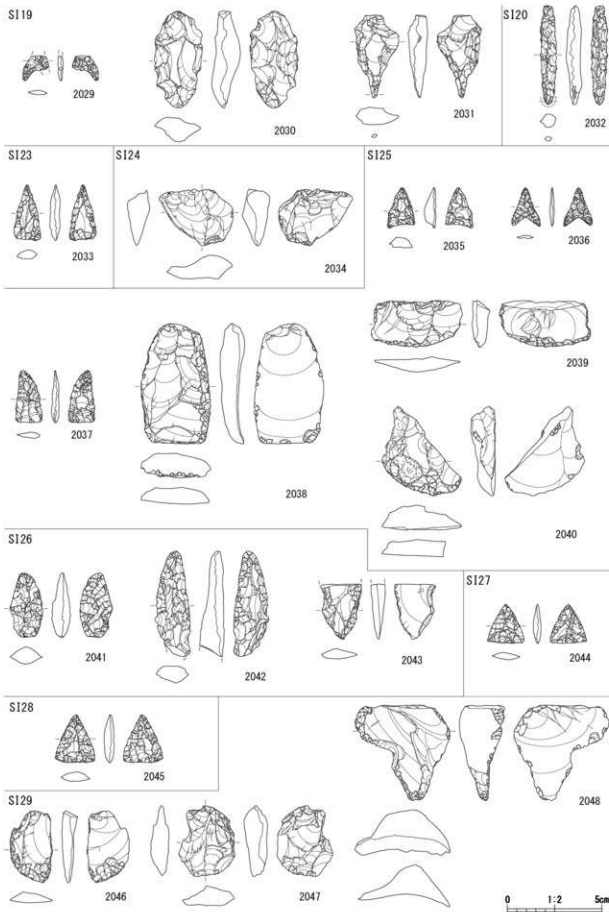
* 3001・3002



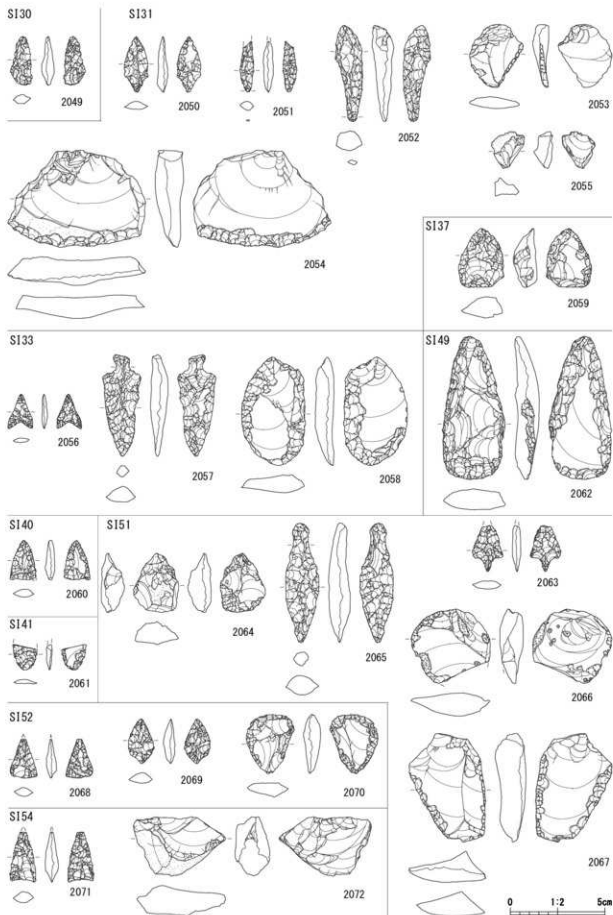
第179図 遺構外土製品3、陶磁器



第180図 遺構内剥片石器 1



第181圖 遺構内剥片石器2

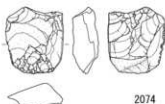


第182図 遺構内剥片石器3

S157



2073

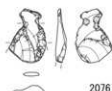


2074

S158



2075



2076

S161

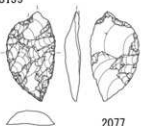


2079

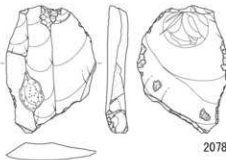


2080

S159

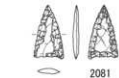


2077

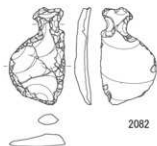


2078

S162



2081

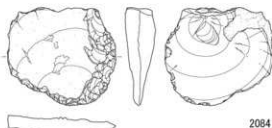


2082

S164

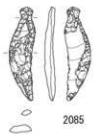


2083

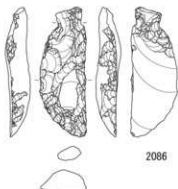


2084

S166



2085

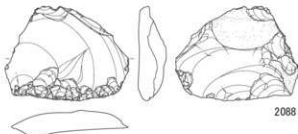


2086

S168



2087



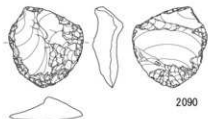
2088

SK104



2089

SK105

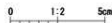


2090

SK36



2091



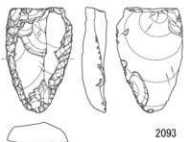
第183図 遺構内剥片石器4

SK42



2092

SKF08



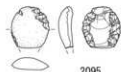
2093

SL05



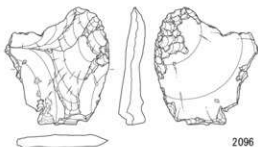
2094

CP10



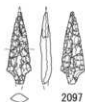
2095

CP16



2096

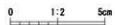
SX04



2097

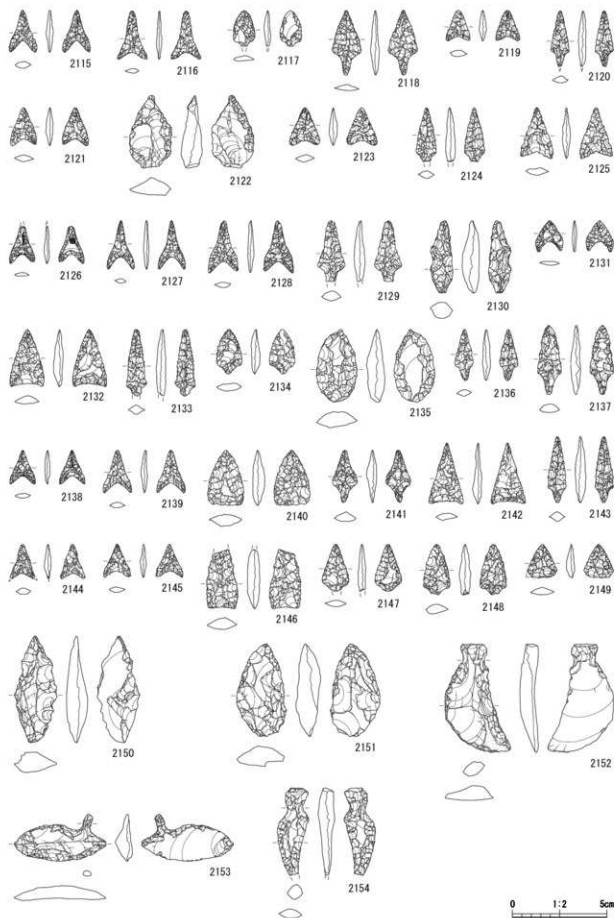


2098

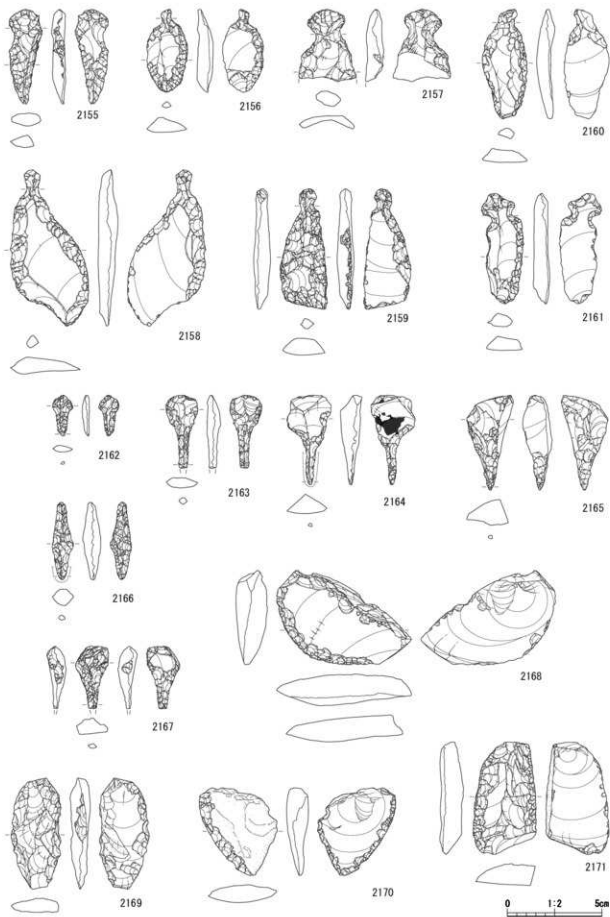




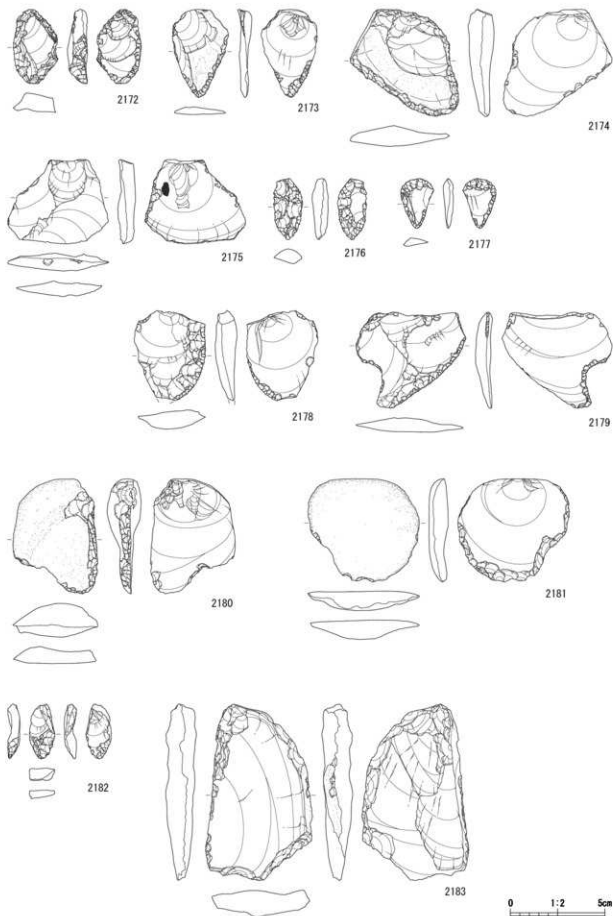
第185図 遺構外剥片石器 1



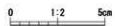
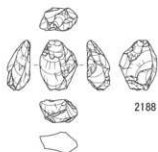
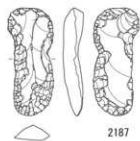
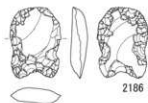
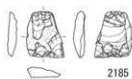
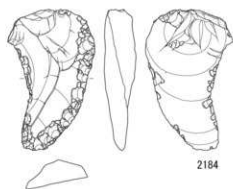
第186図 遺構外剥片石器2



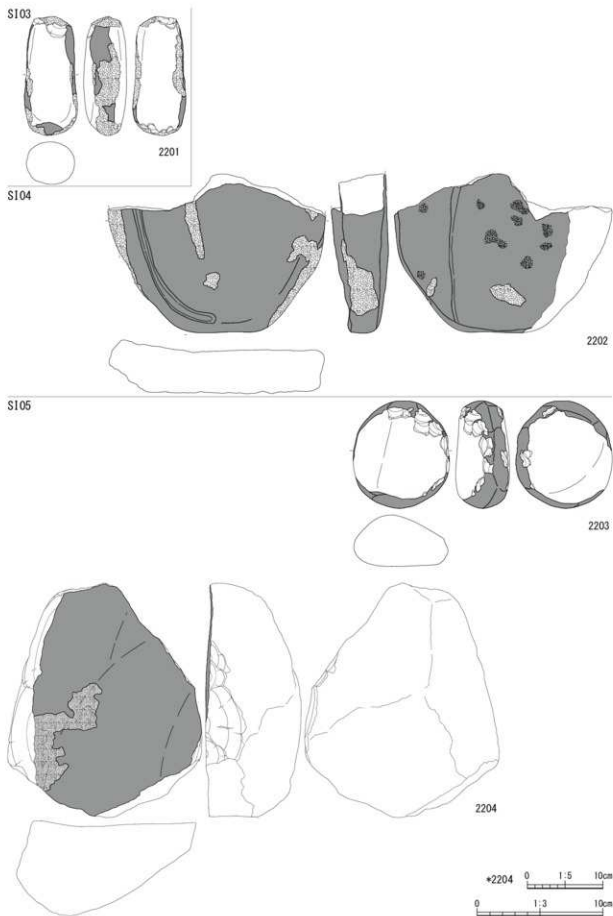
第187圖 遺構外剥片石器3



第188図 遺構外剥片石器4



第189図 遺構外剥片石器5



第190図 遺構内硬石器 1

S106



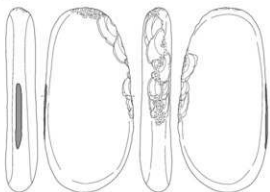
2205



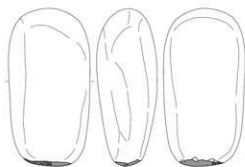
2206



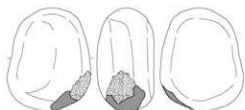
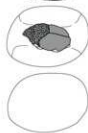
S107



2207



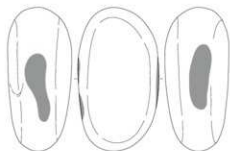
2208



2209



2211

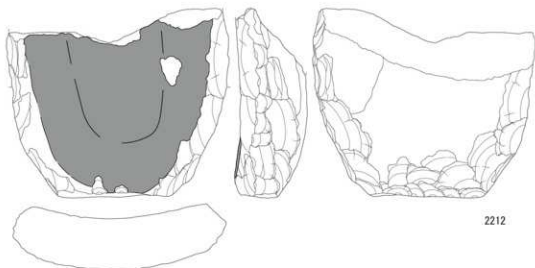


2210

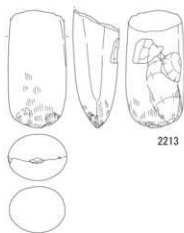


第191図 遺構内硬石器 2

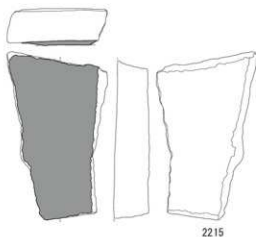
S110



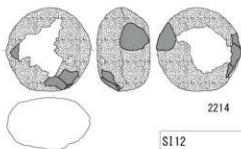
2212



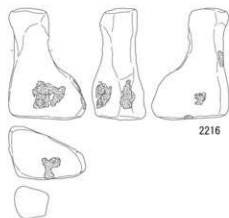
2213



2215



2214



2216

S112

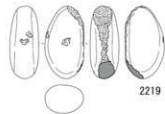


2217

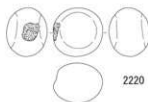
S113



2218



2219



2220

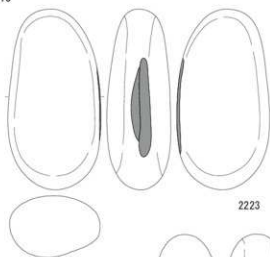


2221

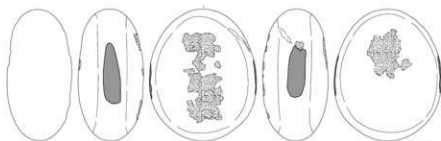


第192図 遺構内硬石器 3

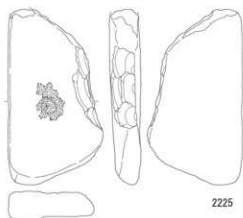
S116



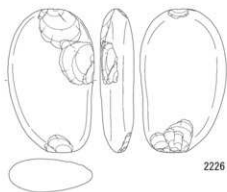
2223



2224

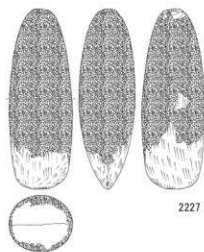


2225

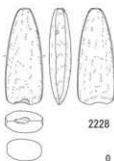


2226

S117



2227

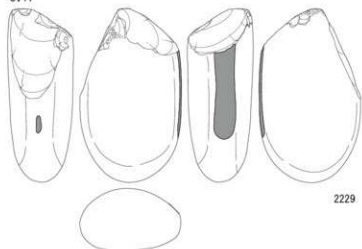


2228

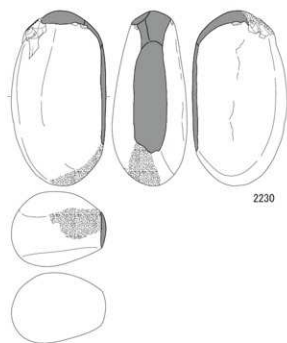


第193図 遺構内硬石器4

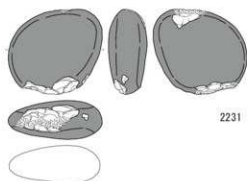
SI17



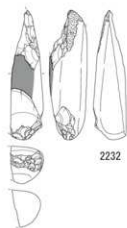
2229



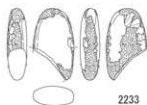
2230



2231



2232



2233

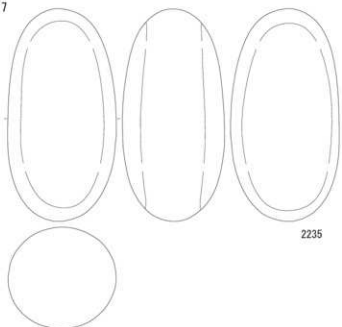


2234

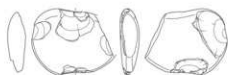


第194図 遺構内硬石器 5

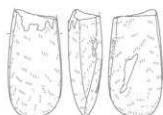
S117



2235



2236



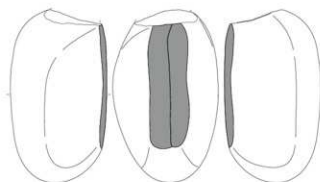
2237



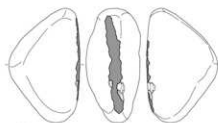
S119



2238



2239



2240



2241

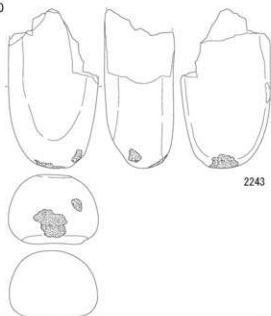


2242



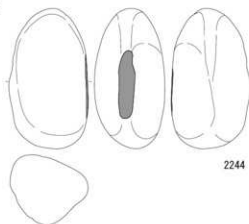
第195図 遺構内硬石器 6

S120



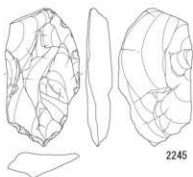
2243

S121



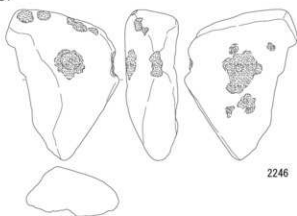
2244

S123



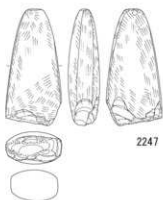
2245

S124

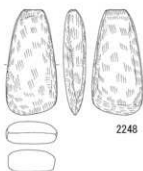


2246

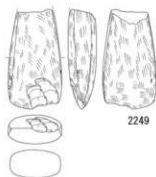
S125



2247



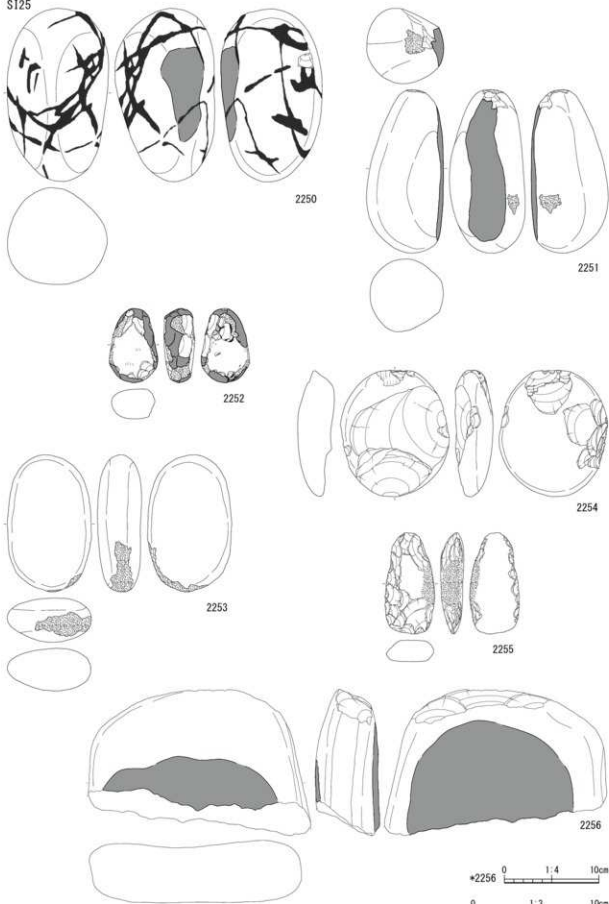
2248



2249

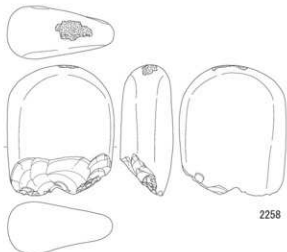


S125



第197図 遺構内硬石器 8

S126



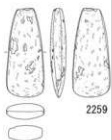
2258

S130

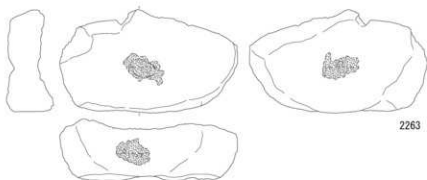


2262

S128

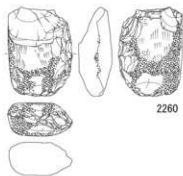


2259



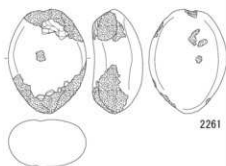
2263

S133

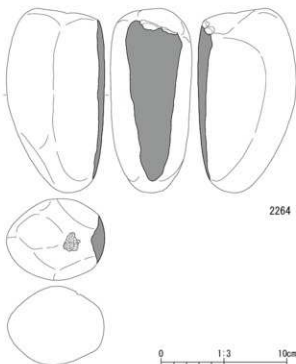


2260

S129



2261

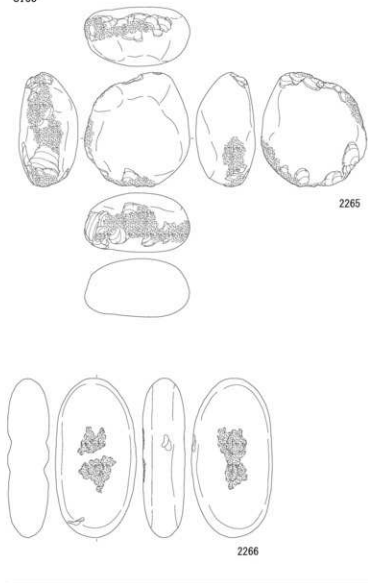


2264

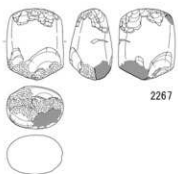
0 1:3 10cm

第198図 遺構内硬石器 9

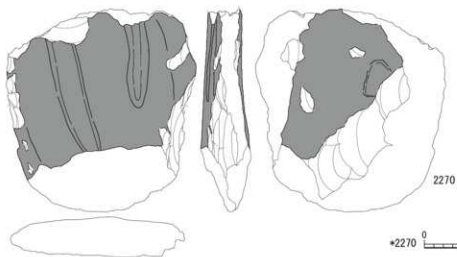
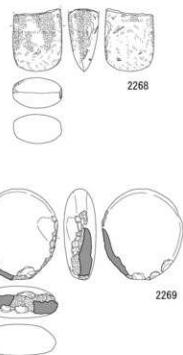
S133



S134

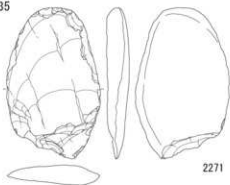


S135



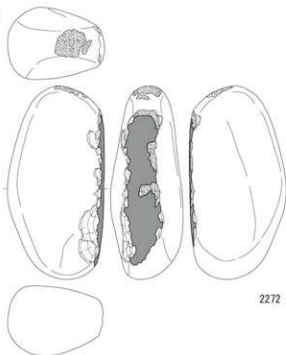
第199図 遺構内硬石器10

S135

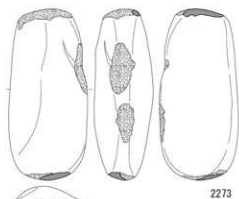


2271

S136

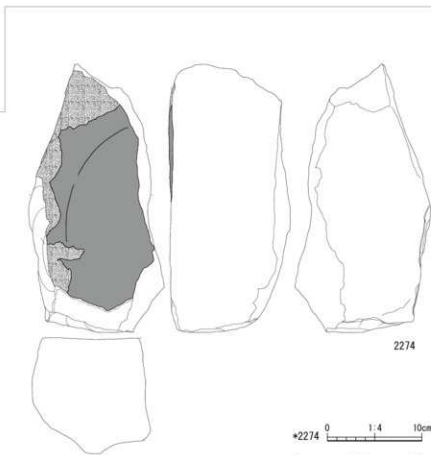


2272



2273

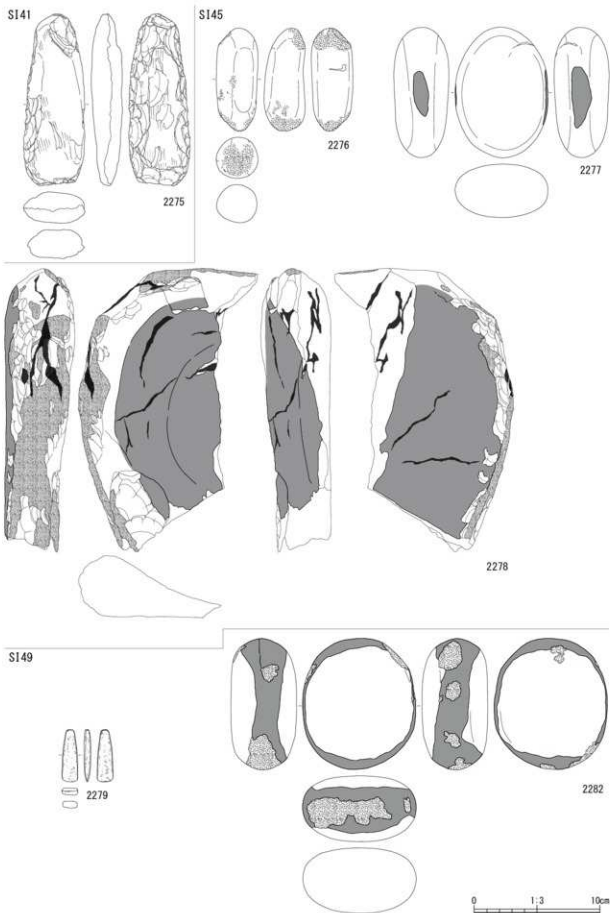
S140



2274

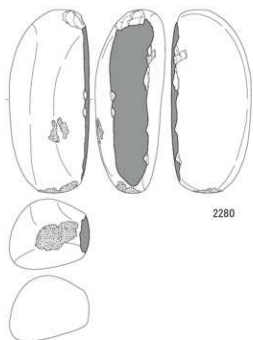
2274 0 1:4 10cm

0 1:2 10cm

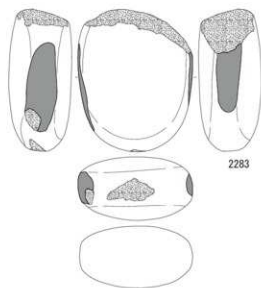


第201図 遺構内硬石器12

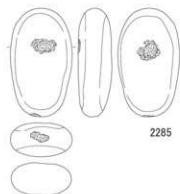
S149



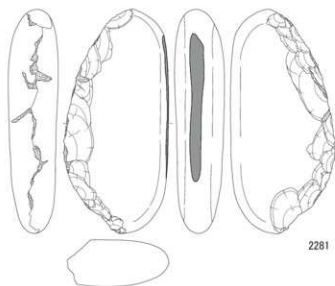
2280



2283

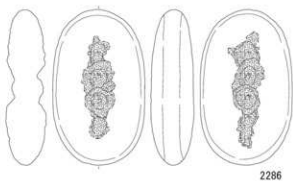


2285



2281

2284

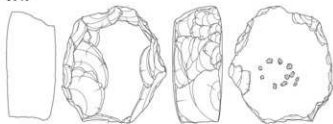


2286



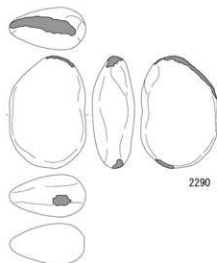
第202図 遺構内硬石器13

S149



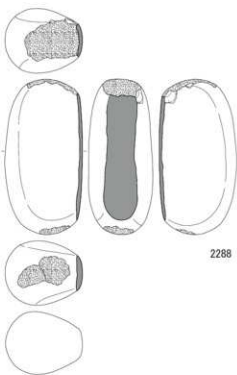
2287

S152



2290

S151

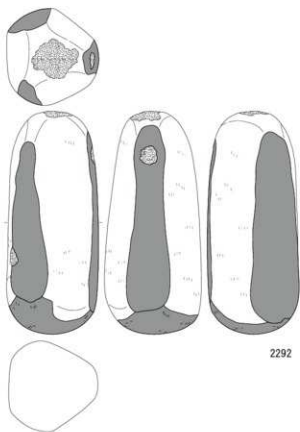


2288

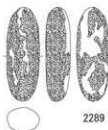


2291

S153



2292



2289



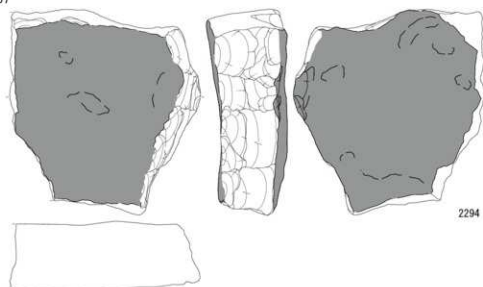
第203図 遺構内硬石器14

S154



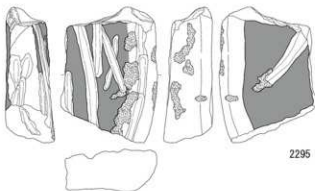
2293

S157

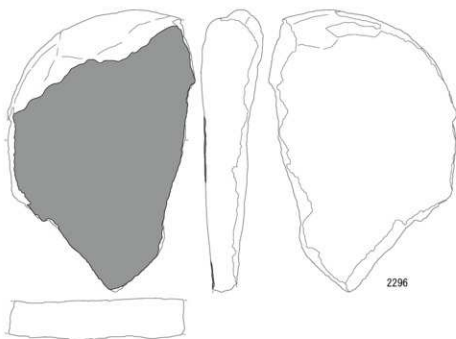


2294

S159



2295

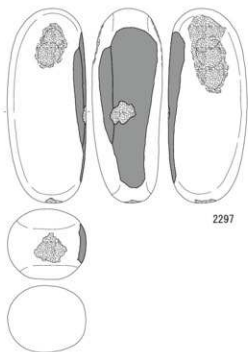


2296



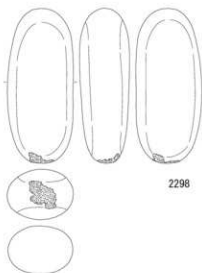
第204図 遺構内硬石器15

S160



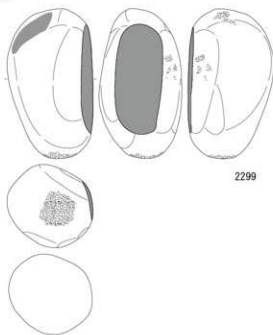
2297

S161



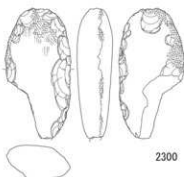
2298

S164



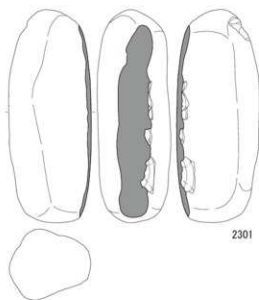
2299

S165



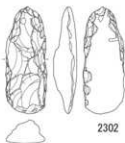
2300

S166



2301

SK105

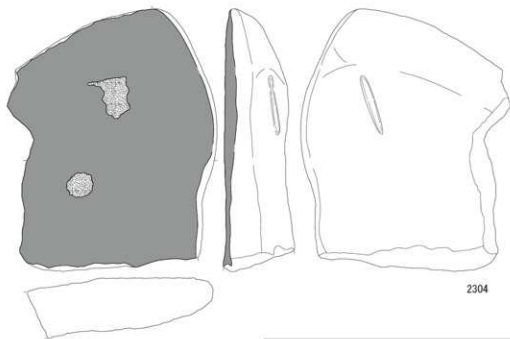
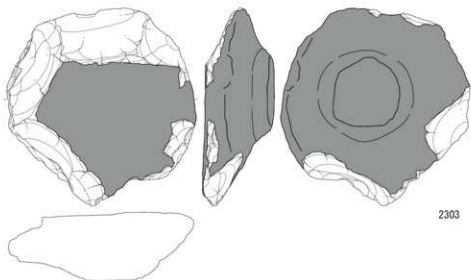


2302

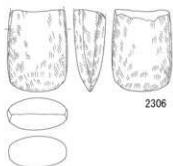


第205図 遺構内硬石器16

SK04



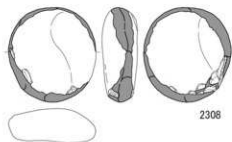
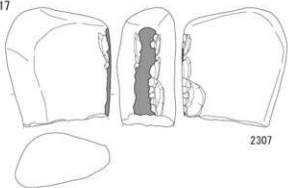
SK17



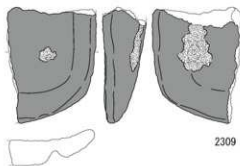
0 1:2 10cm

第206図 遺構内硬石器17

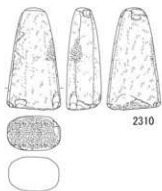
SK17



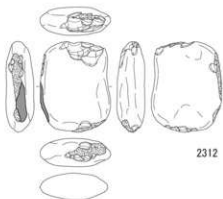
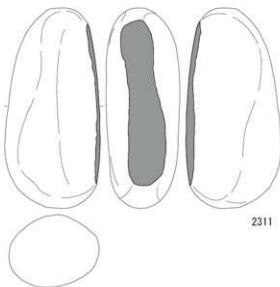
ⅢBj (IBSK38)



SKF02

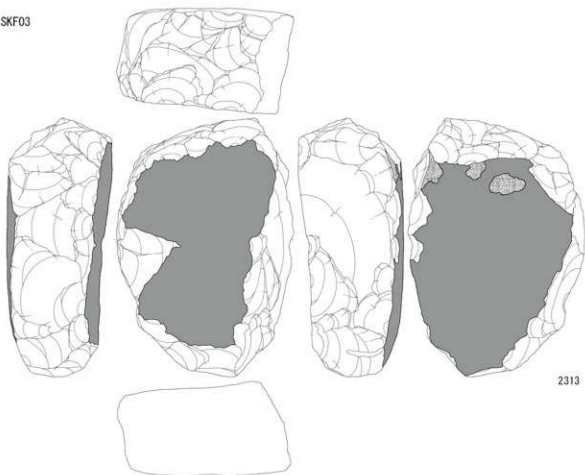


SKF03



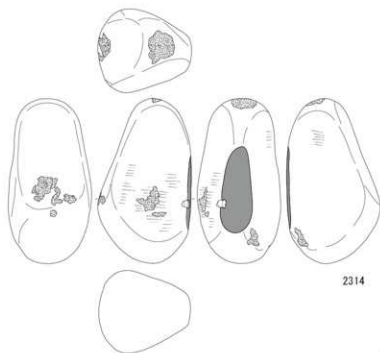
第207図 遺構内硬石器18

SKF03



2313

SKF04

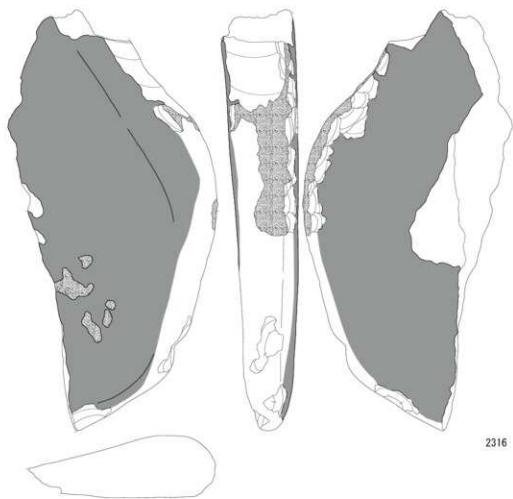
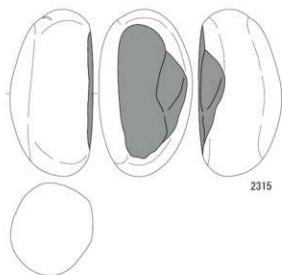


2314



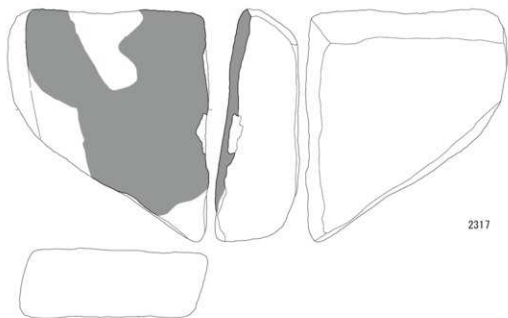
第208図 遺構内硬石器19

SKF05

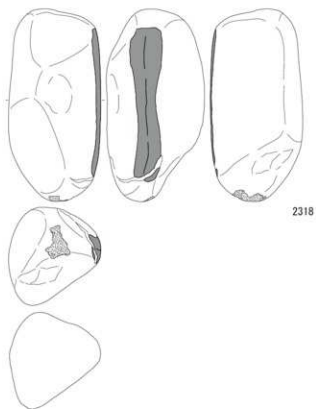


第209図 遺構内硬石器20

SKF05

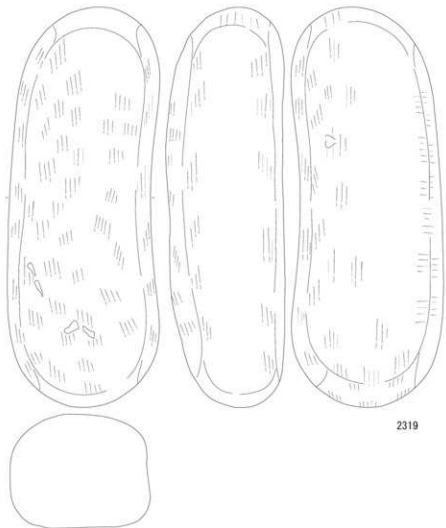


SKF07



第210図 遺構内硬石器21

SKF07



2319

SKF08

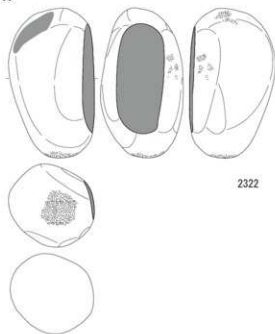


2320



2321

SKF09

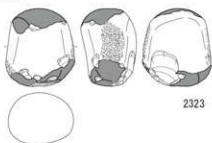


2322



第211図 遺構内硬石器22

SKT07

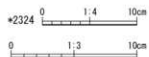


2323

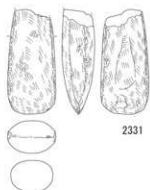
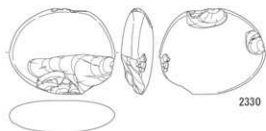
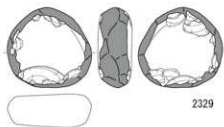
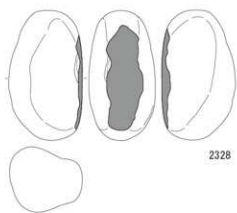
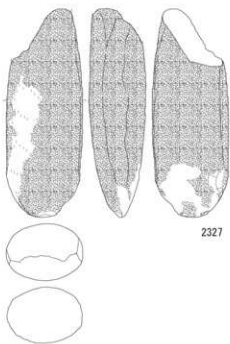
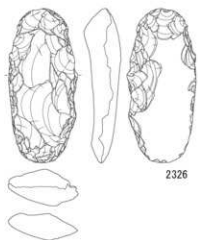
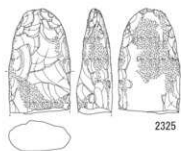
SX02



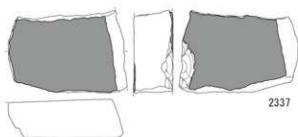
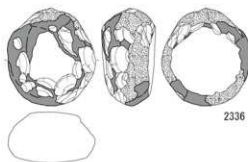
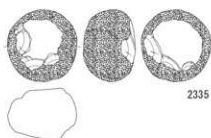
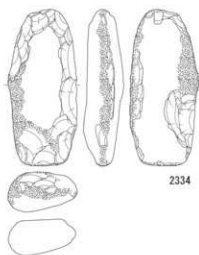
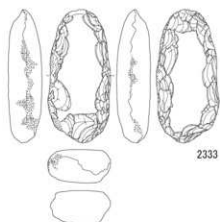
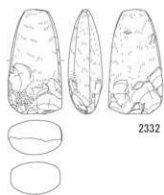
2324



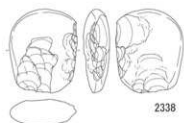
第212図 遺構内硬石器23



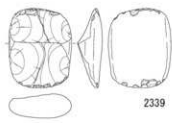
第213図 遺構外硬石器 1



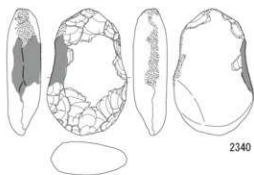
第214図 遺構外硬石器 2



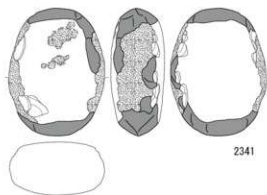
2338



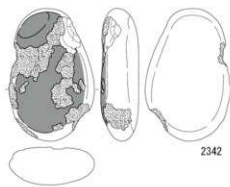
2339



2340



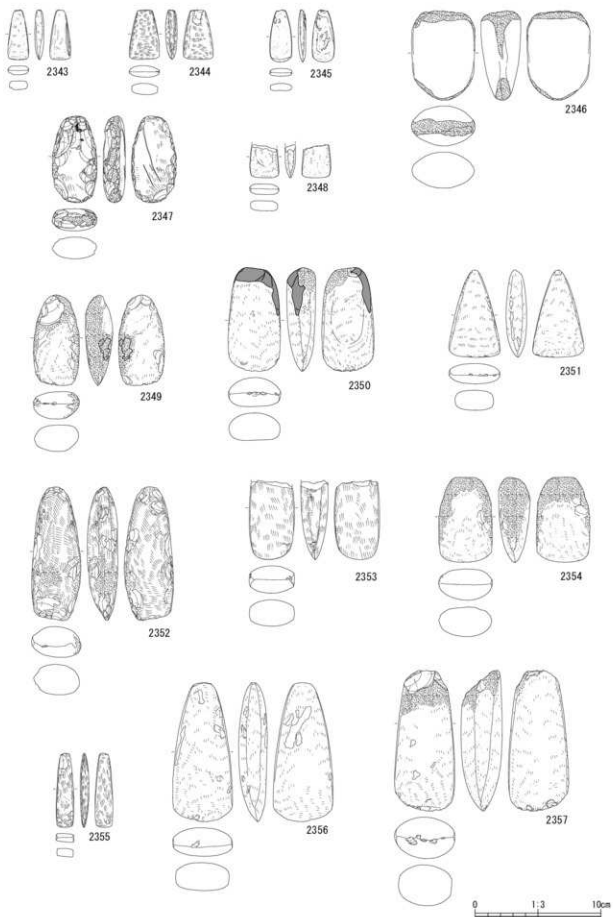
2341



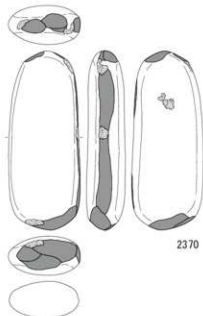
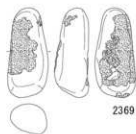
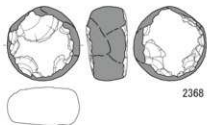
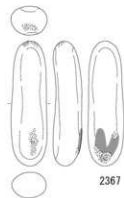
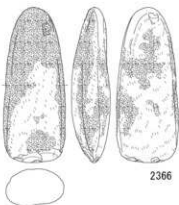
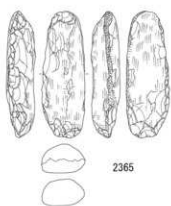
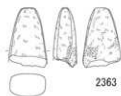
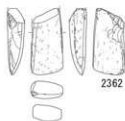
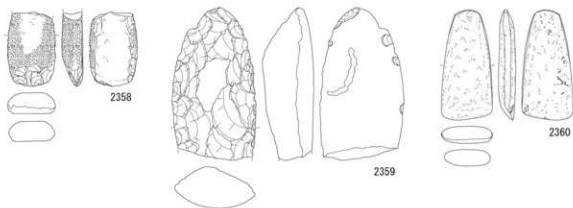
2342



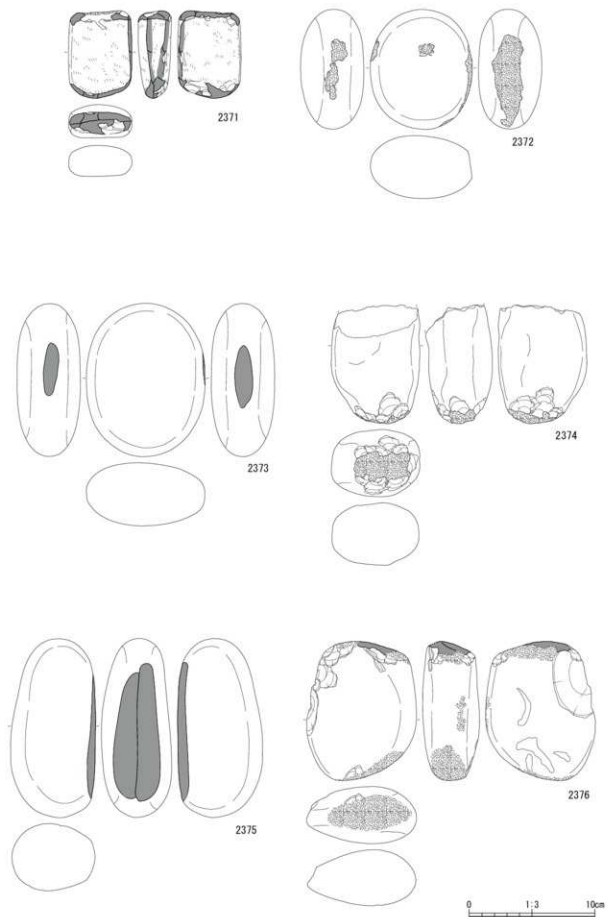
第215図 遺構外硬石器 3



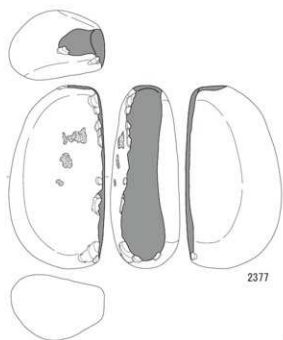
第216図 遺構外硬石器4



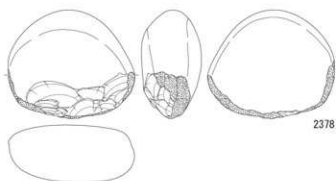
第217図 遺構外硬石器 5



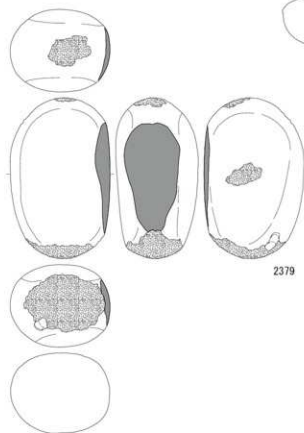
第218図 遺構外硬石器 6



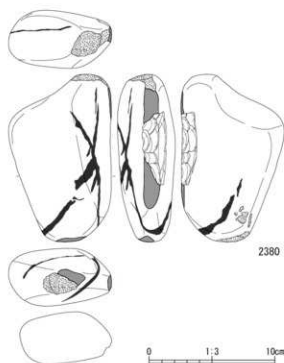
2377



2378



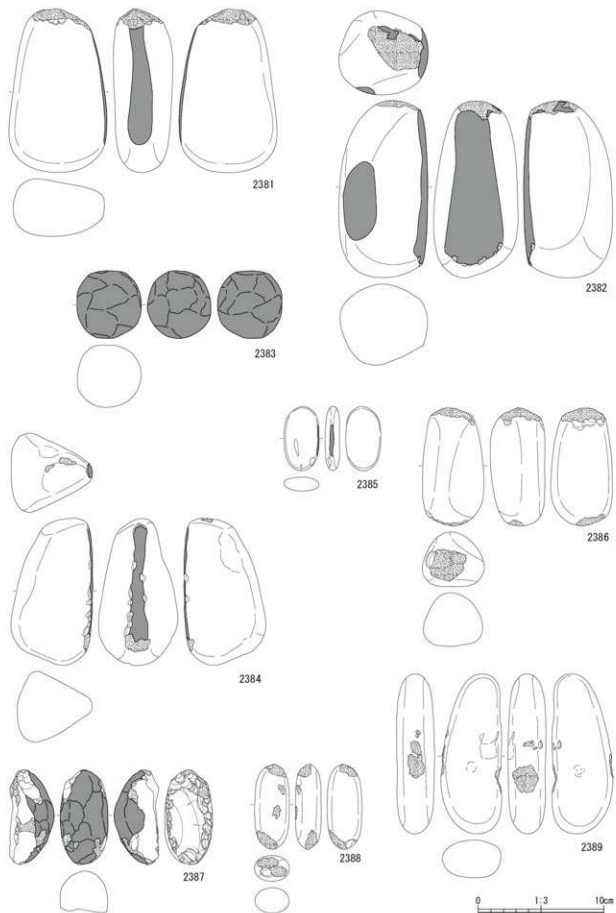
2379



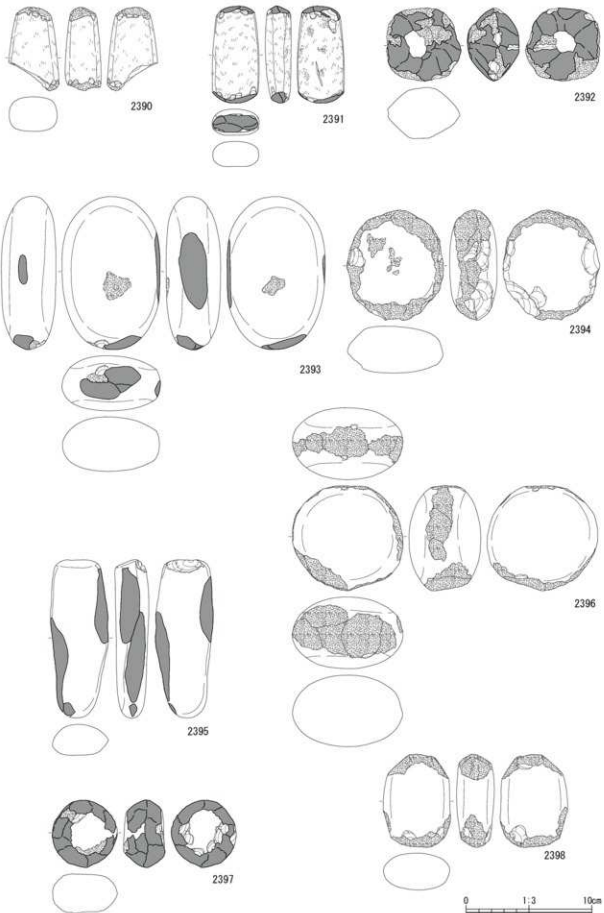
2380



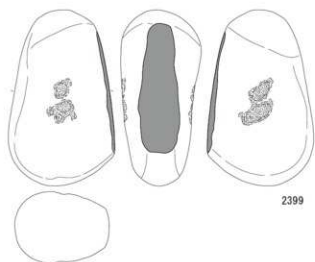
第219図 遺構外硬石器 7



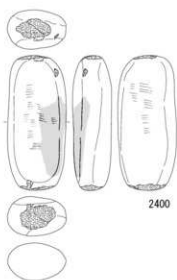
第220図 遺構外硬石器B



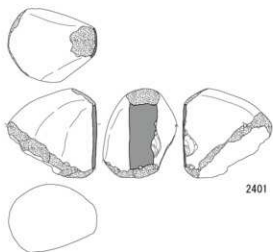
第221図 遺構外硬石器 9



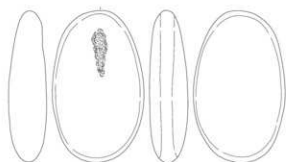
2399



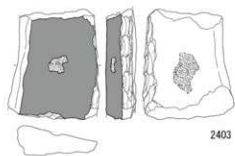
2400



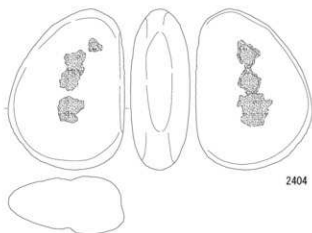
2401



2402

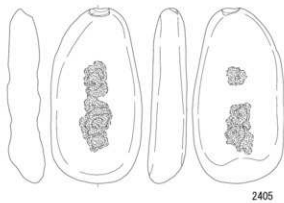


2403

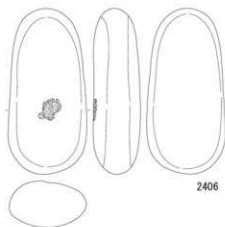


2404

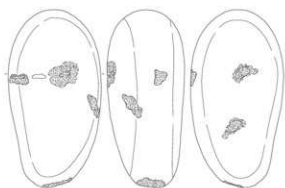




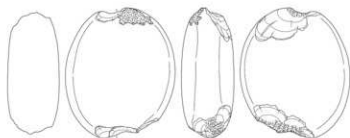
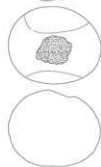
2405



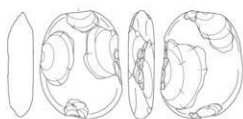
2406



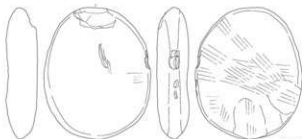
2407



2408



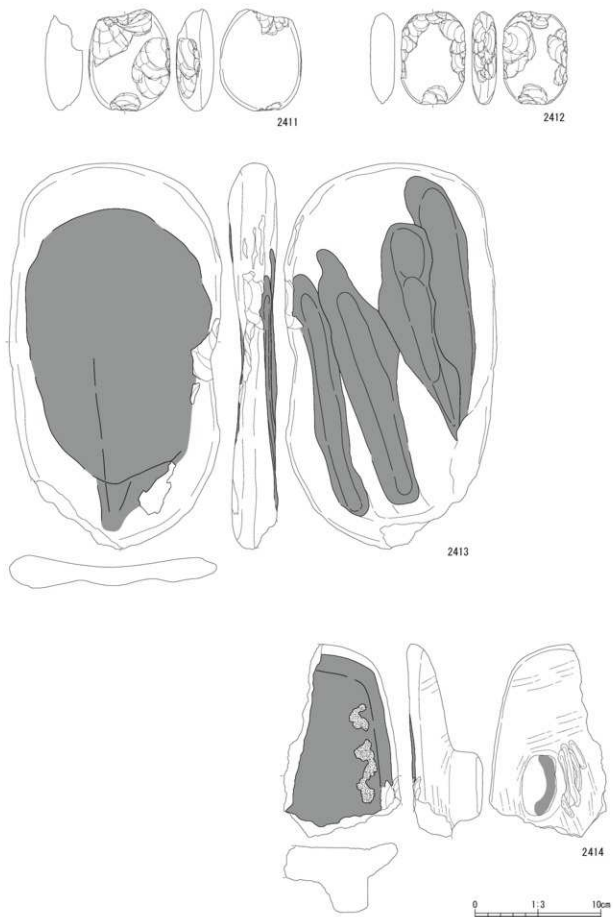
2409



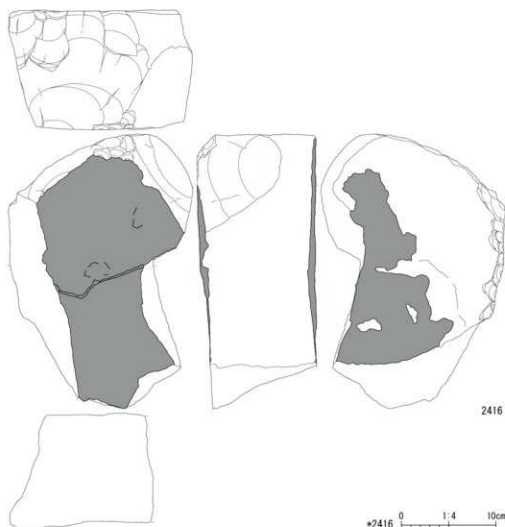
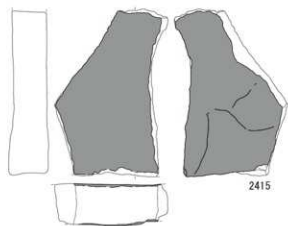
2410



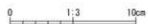
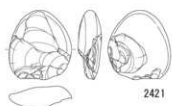
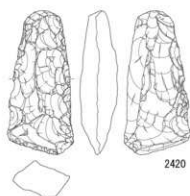
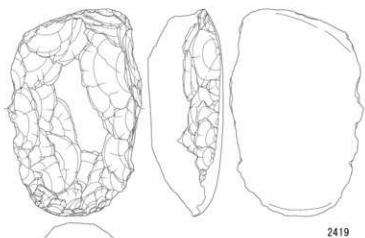
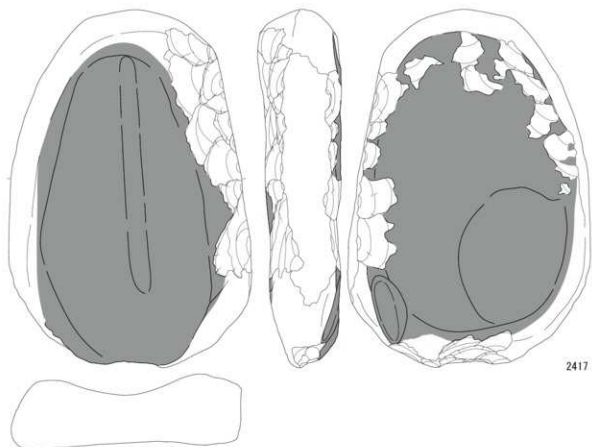
第223図 遺構外硬石器11



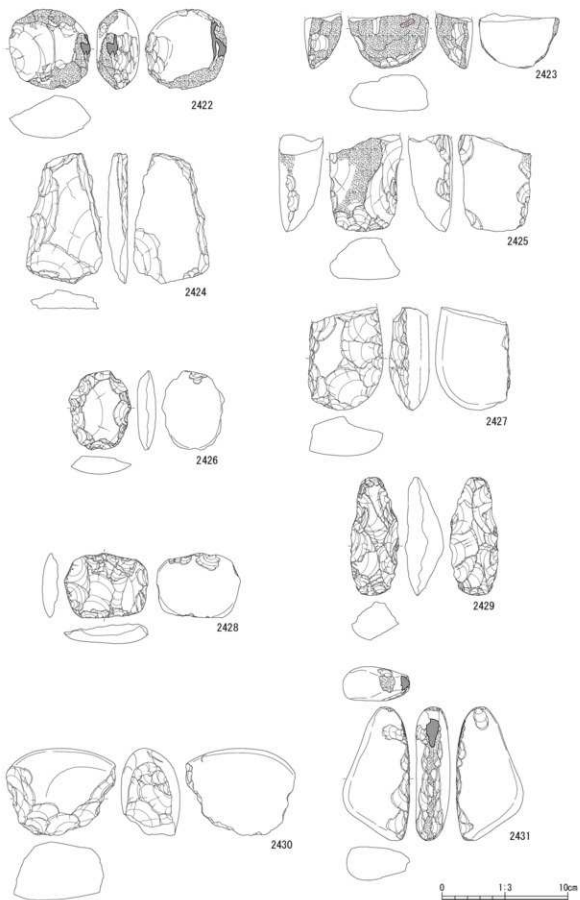
第224図 遺構外硬石器12



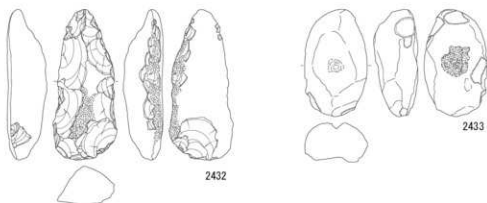
第225図 遺構外硬石器13



第226図 遺構外硬石器14

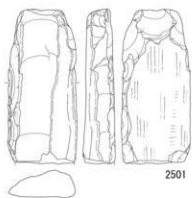


第227図 遺構外硬石器15



第228図 遺構外硬石器16

S104



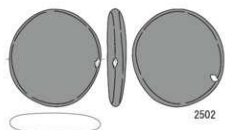
2501

VICH (IBS109)



2503

S107

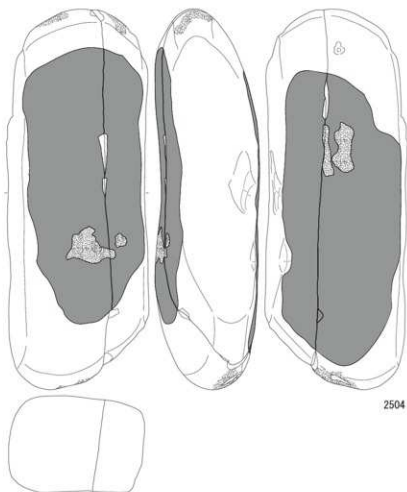


2502

S125

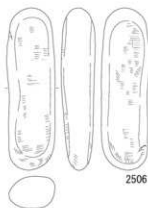


2505



2504

S132



2506



第229図 遺構内石製品 1

S135



2507



2508

S145

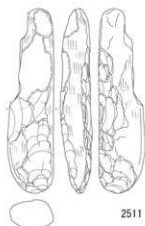


2509

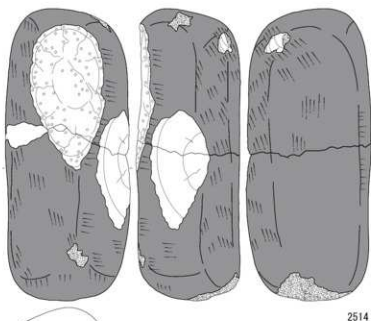
S149



2510



2511



2514



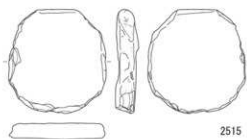
2513



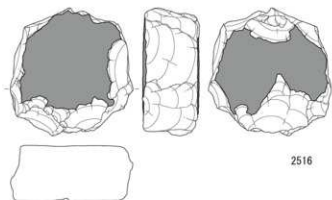
第230図 遺構内石製品2、遺構外石製品1



2512



2515



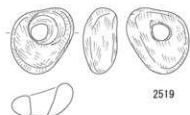
2516



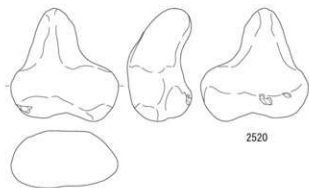
2517



2518



2519



2520



第231図 遺構外石製品2

VI 自然科学分析

1 放射性炭素年代 (AMS測定) -平成27年度-

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

乙部野Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市田老字乙部野地内に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化物14点である(表1)。

2. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と

同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{13}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{13}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{13}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{13}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{13}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al., 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{13}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5. 測定結果

測定結果を表1、2に示す。試料14点のうち、SI04、SI16、SI17、SI35出土試料11点は、おおむね近い年代値を示し、SK11、CP05、SI65から出土した3点は、これらから離れた値となっている。このため、この2群に分けて検討する。

SI04、SI16、SI17、SI35出土試料11点 (試料1、2、6、7、8-1、9、10、11、12、17、27) の ^{13}C 年代は、 $2500 \pm 20\text{yrBP}$ (試料11) から $2180 \pm 20\text{yrBP}$ (試料10) の間にあり、特に11以外の10点は 2200yrBP 前後に集中する。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い11が $762 \sim 554\text{cal BC}$ の間に3つの範囲、最も新しい10が $353 \sim 197\text{cal BC}$ の間に3つの範囲で示され、11は縄文時代晩期後葉頃、他の10点は弥生時代前期から中期頃に相当する (小林2009、小林編2008)。

SK11、CP05、SI65出土試料3点の ^{13}C 年代は、5が $7420 \pm 30\text{yrBP}$ 、19が $3720 \pm 30\text{yrBP}$ 、21が $3730 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、5が縄文時代早期後葉頃、19、21が縄文時代後期前葉頃に相当する (小林編2008)。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、徳山閣、55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{13}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-153119	1	SI04 暗褐色土 (埋土上位炭化物サンプリング①)	炭化物	AAA	-25.24 ± 0.21	2,220 ± 30	75.85 ± 0.24
IAAA-153120	2	SI04 暗褐色土 (埋土上位炭化物サンプリング②)	炭化物	AAA	-26.72 ± 0.21	2,230 ± 30	75.78 ± 0.24
IAAA-153121	5	SK11 4層中位 (拡張部)	炭化物	AAA	-25.93 ± 0.20	7,420 ± 30	39.69 ± 0.16
IAAA-153122	6	SI16 1層 (炭化物 1)	炭化物	AsA	-23.43 ± 0.32	2,220 ± 20	75.86 ± 0.22
IAAA-153123	7	SI16 1層 (炭化物 2)	炭化物	AsA	-26.65 ± 0.20	2,190 ± 20	76.14 ± 0.23
IAAA-153124	8-1	SI16 1層 (炭化物 4-1)	炭化物	AsA	-26.69 ± 0.23	2,200 ± 20	76.08 ± 0.23
IAAA-153125	9	SI16 1層 (炭化物 4-2)	炭化物	AAA	-29.37 ± 0.24	2,220 ± 20	75.84 ± 0.23
IAAA-153126	10	SI17 地表面 (標高 133.297m) より 0.52m 下 (炭化物サンプリング 1)	炭化物	AAA	-26.87 ± 0.30	2,180 ± 20	76.21 ± 0.23
IAAA-153127	11	SI17 地表面 (標高 133.297m) より 0.51m 下 (炭化物サンプリング 2)	炭化物	AAA	-30.88 ± 0.22	2,500 ± 20	73.27 ± 0.22
IAAA-153128	12	SI17 地表面 (標高 133.297m) より 0.52m 下 (炭化物サンプリング 3)	炭化物	AAA	-26.08 ± 0.32	2,230 ± 20	75.78 ± 0.22
IAAA-153129	17	SI35 検出面 (標高 134.19m) より 0.48m 下 (9°C)	炭化物	AAA	-24.28 ± 0.36	2,200 ± 20	76.03 ± 0.22
IAAA-153130	19	CP05 検出面 (標高 135.76m) より 0.47m 下 (床面)	炭化物	AAA	-26.63 ± 0.22	3,720 ± 30	62.91 ± 0.21
IAAA-153131	21	SI65 床直 (CIE 床直)	炭化物	AAA	-23.83 ± 0.32	3,730 ± 30	62.88 ± 0.21
IAAA-153132	27	SI17 土層 7 (土層内の土から出土)	炭化物	AAA	-26.39 ± 0.25	2,190 ± 20	76.11 ± 0.23

【#7835】

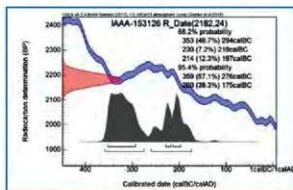
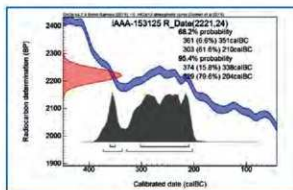
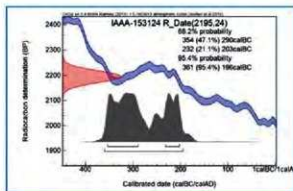
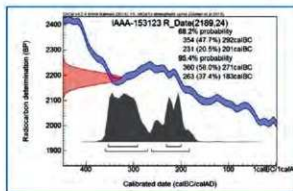
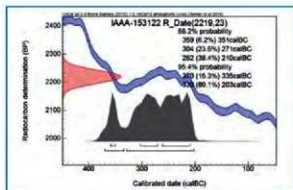
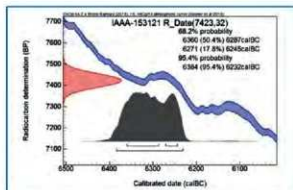
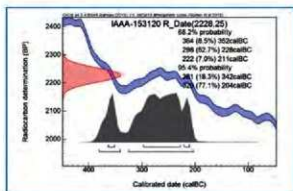
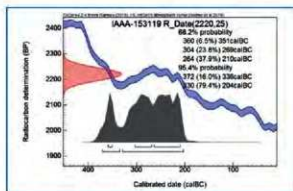
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)(1)

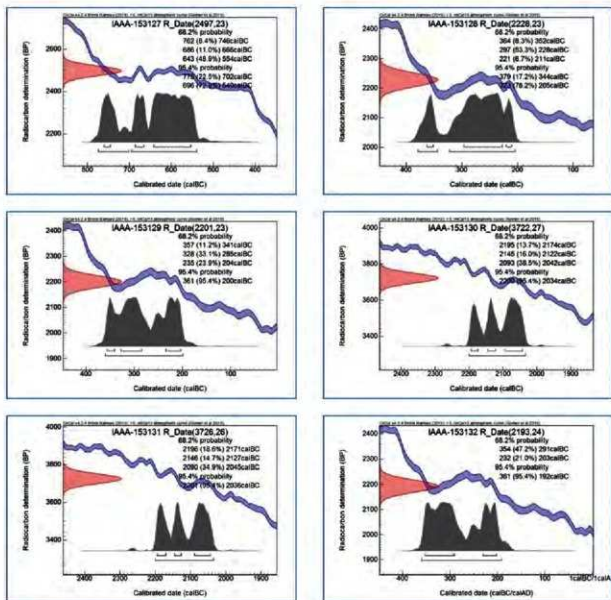
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-153119	2,220 ± 30	75.81 ± 0.24	2,220 ± 25	360ca1BC - 351ca1BC (6.5%) 304ca1BC - 269ca1BC (23.8%) 264ca1BC - 210ca1BC (37.9%)	372ca1BC - 336ca1BC (16.0%) 330ca1BC - 204ca1BC (79.4%)
IAAA-153120	2,260 ± 30	75.51 ± 0.24	2,228 ± 25	364ca1BC - 352ca1BC (8.0%) 298ca1BC - 228ca1BC (52.7%) 222ca1BC - 211ca1BC (7.0%)	381ca1BC - 342ca1BC (18.3%) 326ca1BC - 204ca1BC (77.1%)
IAAA-153121	7,440 ± 30	39.61 ± 0.16	7,423 ± 32	6360ca1BC - 6287ca1BC (50.4%) 6271ca1BC - 6245ca1BC (17.8%)	6384ca1BC - 6232ca1BC (95.4%)

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-153122	2,190 \pm 20	76.11 \pm 0.21	2,219 \pm 23	359calBC - 351calBC (6, 28) 304calBC - 271calBC (23, 65) 352calBC - 210calBC (38, 45)	370calBC - 335calBC (15, 35) 330calBC - 203calBC (80, 15)
IAAA-153123	2,220 \pm 20	75.89 \pm 0.22	2,189 \pm 24	354calBC - 292calBC (47, 73) 231calBC - 201calBC (20, 30)	360calBC - 271calBC (58, 05) 263calBC - 183calBC (37, 45)
IAAA-153124	2,220 \pm 20	75.82 \pm 0.23	2,195 \pm 24	354calBC - 290calBC (47, 13) 232calBC - 203calBC (21, 13)	361calBC - 196calBC (95, 4)
IAAA-153125	2,290 \pm 20	75.16 \pm 0.23	2,221 \pm 24	361calBC - 351calBC (6, 65) 303calBC - 210calBC (61, 65)	374calBC - 338calBC (15, 8)
IAAA-153126	2,210 \pm 20	75.92 \pm 0.22	2,182 \pm 24	353calBC - 294calBC (48, 73) 230calBC - 219calBC (7, 25) 214calBC - 197calBC (12, 35)	359calBC - 276calBC (57, 1)
IAAA-153127	2,600 \pm 20	72.39 \pm 0.21	2,497 \pm 23	762calBC - 746calBC (8, 45) 686calBC - 666calBC (11, 0)	775calBC - 702calBC (22, 5)
IAAA-153128	2,250 \pm 20	75.61 \pm 0.21	2,228 \pm 23	364calBC - 352calBC (8, 25) 297calBC - 228calBC (53, 3)	379calBC - 344calBC (17, 2)
IAAA-153129	2,190 \pm 20	76.14 \pm 0.21	2,201 \pm 23	357calBC - 341calBC (11, 25) 328calBC - 285calBC (33, 1)	361calBC - 206calBC (95, 4)
IAAA-153130	3,750 \pm 30	62.70 \pm 0.21	3,722 \pm 27	2195calBC - 2174calBC (13, 7)	2209calBC - 2034calBC (95, 4)
IAAA-153131	3,710 \pm 30	63.03 \pm 0.21	3,726 \pm 26	2196calBC - 2171calBC (18, 6)	2201calBC - 2036calBC (95, 4)
IAAA-153132	2,220 \pm 20	75.89 \pm 0.23	2,193 \pm 24	354calBC - 291calBC (47, 25) 232calBC - 203calBC (21, 0)	361calBC - 192calBC (95, 4)

[参考値]





【図版】暦年較正年代グラフ (参考)

2 放射性炭素年代 (AMS測定) -平成28年度-

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

乙部野II遺跡は、岩手県宮古市田老字乙部野83 ほか(北緯40° 52′ 34″ ~ 36″、東経140° 31′ 34″)に所在し、三陸海岸の海岸段丘上に立地する。測定対象試料は、竪穴住居跡等から出土した土器付着炭化物10点である。試料が採取された土器の出土遺構や層位、土器の器種、試料採取部位、推定時期を表1に示す。

2. 測定の意義

土器付着炭化物の測定により、土器の年代値を確認する。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の混入物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (H₂OxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代はδ¹³Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 (±1σ) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCal4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料が採取された土器の推定時期により、縄文時代前期前葉 (H28-8)、縄文時代後期 (H28-1、6、9、10)、弥生時代 (H28-2～5、7) の3群に分けて記述する。

縄文時代前期前葉とされる試料H28-8の ^{14}C 年代は $5420 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は縄文前期前葉頃に相当し (小林編2008)、土器の推定時期と一致する。

縄文時代後期とされる試料H28-1、6、9、10の ^{14}C 年代は、 $3870 \pm 20\text{yrBP}$ (H28-9) から $3730 \pm 20\text{yrBP}$ (H28-1) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、H28-9が縄文後期初頭頃、H28-1、6、10が後期前葉頃に相当する (小林編2008)。後期初頭と推定されるH28-1は推定に近いが、若干新しい値、後期とされる他の3点は推定の範囲内の値となっている。

弥生時代とされる試料H28-2～5、7の ^{14}C 年代は、 $2940 \pm 20\text{yrBP}$ (H28-3) から $2200 \pm 20\text{yrBP}$ (H28-4) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、H28-3が縄文晩期初頭頃、H28-5が縄文晩期中葉頃、H28-7が縄文晩期末葉から弥生前期頃、H28-2、4が弥生前期から中期頃に相当する (小林2009、小林編2008)。弥生前期～中期とされるH28-2、4は推定に整合する結果で、弥生時代とされるH28-7は推定と重なるが、やや古い範囲も含む。弥生前期～中期とされるH28-3、弥生前期末～中期初頭とされるH28-5は推定より古い値となった。

推定より古い値を示したH28-3、5の $\delta^{13}\text{C}$ を見ると、H28-3が $-15.78 \pm 0.17\text{‰}$ 、H28-5が $-17.29 \pm 0.18\text{‰}$ となっており、C3植物の値 ($-30 \sim -25\text{‰}$ 程度が多い、赤澤ほか1993) に比べてかなり高い。土器付着炭化物は食物等に由来すると考えられ、その $\delta^{13}\text{C}$ がC3植物より高くなる原因として、海生生物やC4植物由来の炭素が含まれる場合が考えられる。本遺跡が三陸海岸の海岸段丘に立地することと、試料が縄文時代から弥生時代に属することを踏まえると、C4植物より海生生物由来の炭素が含まれている可能性が高い。このような場合、海洋リザーバー効果によって、本来よりも古い年代値が示される

可能性がある。

したがって、H28-3、5が推定より古い値となったことについては、海洋リザーバー効果の影響が考えられる。H28-6～9も $\delta^{13}\text{C}$ がやや高く、同様の可能性があるが、上述の通り年代値は推定の範囲内か、推定と重なる範囲を含む。なお、AMSによる $\delta^{13}\text{C}$ は十分正確でないため、 $\delta^{13}\text{C}$ がやや高い試料4点については慎重に評価する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161804	H28-1 (遺物番号10)	SI10 (10号住居跡) 埋土一括蓋 (切筋蓋付) 胴部 内面 (縄文後期初頭)	土器付着炭化物	AAA	-26.01 ± 0.23	$3,730 \pm 20$	62.82 ± 0.19
IAAA-161805	H28-2 (遺物番号38)	SI17 (17号住居跡) 5層 深鉢口縁～底部 (ほぼ完形) 内面 (弥生前期～中期)	土器付着炭化物	AAA	-25.06 ± 0.16	$2,270 \pm 20$	75.35 ± 0.20
IAAA-161806	H28-3 (遺物番号50)	SI17 (17号住居跡) 5層 高坏口縁～底部 (ほぼ完形) 内面 (坏部) (弥生前期～中期)	土器付着炭化物	AaA	-15.78 ± 0.17	$2,940 \pm 20$	69.37 ± 0.20
IAAA-161807	H28-4 (遺物番号52)	SI17 (17号住居跡) P1+3・埋土一括 (単層) 蓋 口縁～胴下部 内面 (弥生前期～中期)	土器付着炭化物	AAA	-27.35 ± 0.20	$2,200 \pm 20$	76.04 ± 0.22
IAAA-161808	H28-5 (遺物番号150)	SI17 (17号住居跡) 床面直上 深鉢 (小型) 完形 内面 (弥生前期末～中期初頭)	土器付着炭化物	AaA	-17.29 ± 0.18	$2,700 \pm 20$	71.46 ± 0.19
IAAA-161809	H28-6 (遺物番号195)	SXF11 (11号フラスコ状土坑) 埋土下位 深鉢 口縁～底部 外面 (縄文後期)	土器付着炭化物	AaA	-23.91 ± 0.16	$3,770 \pm 20$	62.56 ± 0.19
IAAA-161810	H28-7 (遺物番号1488)	SI23 (23号住居跡) 埋土下位 深鉢 破片 内面 (弥生)	土器付着炭化物	AaA	-23.05 ± 0.17	$2,370 \pm 20$	74.45 ± 0.21
IAAA-161811	H28-8 (遺物番号2321)	SI62 (62号住居跡) 埋土上位 深鉢 破片 外面 (口縁) (縄文前期前葉)	土器付着炭化物	AaA	-22.03 ± 0.15	$5,420 \pm 30$	50.92 ± 0.18
IAAA-161812	H28-9 (遺物番号5074)	すて墓 (IIc ₂ グリッド) 1層 深鉢 破片 内面 (縄文後期)	土器付着炭化物	AaA	-22.10 ± 0.17	$3,870 \pm 20$	61.80 ± 0.18
IAAA-161813	H28-10 (遺物番号5165)	すて墓 (IIc ₁ グリッド) 下2層 深鉢 破片 内面 (縄文後期)	土器付着炭化物	AaA	-24.44 ± 0.30	$3,790 \pm 20$	62.42 ± 0.19

[#8324]

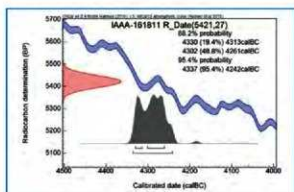
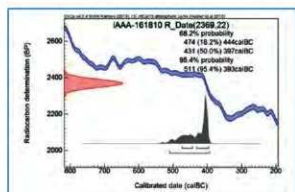
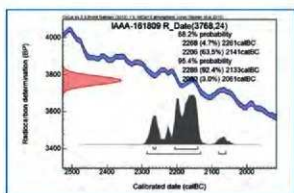
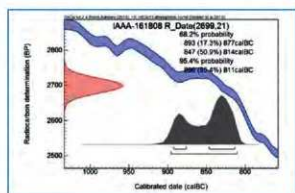
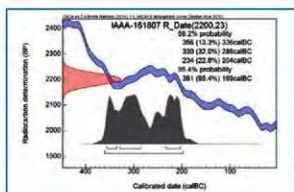
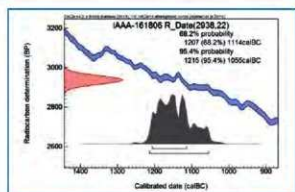
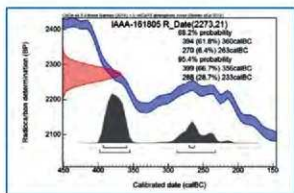
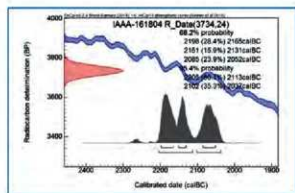
表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

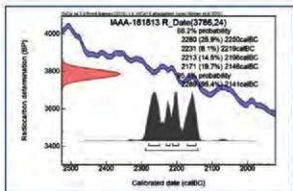
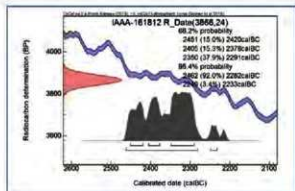
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-161804	3,750 \pm 20	62.70 \pm 0.19	3,734 \pm 24	2198calBC - 2165calBC (28.4%) 2151calBC - 2131calBC (15.9%) 2085calBC - 2052calBC (23.9%)	2205calBC - 2113calBC (60.1%) 2102calBC - 2037calBC (35.3%)
IAAA-161805	2,270 \pm 20	75.34 \pm 0.20	2,273 \pm 21	394calBC - 366calBC (61.8%) 270calBC - 263calBC (6.4%)	399calBC - 356calBC (66.7%) 288calBC - 233calBC (28.7%)
IAAA-161806	2,790 \pm 20	70.69 \pm 0.20	2,938 \pm 22	1207calBC - 1114calBC (68.2%)	1213calBC - 1055calBC (95.4%)
IAAA-161807	2,240 \pm 20	75.67 \pm 0.22	2,200 \pm 23	356calBC - 336calBC (13.3%) 330calBC - 286calBC (32.0%) 234calBC - 204calBC (22.8%)	361calBC - 199calBC (95.4%)
IAAA-161808	2,570 \pm 20	72.60 \pm 0.19	2,699 \pm 21	893calBC - 877calBC (17.3%) 847calBC - 814calBC (50.9%)	896calBC - 811calBC (95.4%)
IAAA-161809	3,750 \pm 20	62.70 \pm 0.19	3,768 \pm 24	2268calBC - 2261calBC (4.7%) 2206calBC - 2141calBC (63.5%)	2286calBC - 2133calBC (92.4%) 2080calBC - 2061calBC (3.0%)
IAAA-161810	2,340 \pm 20	74.75 \pm 0.21	2,369 \pm 22	474calBC - 444calBC (18.2%) 431calBC - 397calBC (50.0%)	511calBC - 393calBC (95.4%)
IAAA-161811	5,370 \pm 30	51.23 \pm 0.18	5,421 \pm 27	4330calBC - 4313calBC (19.4%) 4302calBC - 4261calBC (48.8%)	4337calBC - 4242calBC (95.4%)
IAAA-161812	3,820 \pm 20	62.17 \pm 0.18	3,866 \pm 24	2451calBC - 2428calBC (15.0%) 2405calBC - 2378calBC (15.3%) 2350calBC - 2291calBC (37.9%)	2462calBC - 2282calBC (92.0%) 2249calBC - 2233calBC (3.4%)
IAAA-161813	3,780 \pm 20	62.49 \pm 0.19	3,786 \pm 24	2280calBC - 2250calBC (25.9%) 2231calBC - 2219calBC (8.1%) 2213calBC - 2196calBC (14.3%) 2171calBC - 2146calBC (19.7%)	2289calBC - 2141calBC (95.4%)

[参考値]

文献

- 赤澤威, 米田穰, 吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡 本文編 (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14, 長野県教育委員会, (財)長野県埋蔵文化財センター, 445-468
- Brook Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363





[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

3 出土火山灰分析

(株) 火山灰考古学研究所

1. はじめに

東北地方北部の三陸沿岸域の地層や土壌の中には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、鳴子、肘折など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、始良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。とくに、後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴がテフラ・カタログ（町田・新井，1992，2003，2011など）に収録されており、考古遺跡などで調査分析を行って年代や層位が明らかな指標テフラを検出することで、地形や地層の形成年代、さらには考古遺物・遺構の層位や年代などに関する情報を得られるようになっていく。

宮古市田老地区に位置する乙部野Ⅱ遺跡の発掘調査でも、テフラの可能性のある堆積物が検出されたことから、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定）を行って、テフラ粒子を検出してその岩石記載的特徴を把握し、指標テフラとの同定を実施することにより、堆積物や考古遺構の層位や年代を明らかにすることになった。分析対象試料は、発掘調査担当者により採取・送付されたブロック状試料中の黄色火山灰層（層厚3cm程度）から採取した試料1（SI66ベルト・2層）と試料2（B区西壁・Ⅱa層）の2試料である。

2. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

試料1（SI66ベルト・2層）と試料2（B区西壁・Ⅱa層）に含まれるテフラ粒子の量や特徴を定量的に明らかにするために、最初に簡易的なテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料を観察して、高純度部から試料10gを採取。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥機により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料1（SI66ベルト・2層）には、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型火山ガラスがとくに多く含まれている。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

また、試料2（B区西壁・Ⅱa層）には、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状に発泡した軽石型火山ガラスが多く含まれている。微量ながら淡褐色を呈するものもある。不透明鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

表1 テフラ検出分析結果

試料 (採取地点・層位)	軽石・スコリア			火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)	
	量	色調	最大径	量	形態 色調		
試料1 (S166ベルト・2層)				****	pm (sp, f b)	白, 無色透明	opx, cpx
試料2 (B区西壁・II a層)				***	pm (sp, f b)	白, 無色透明, 淡褐	opx, cpx

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, lw: パズル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sc: スコリア型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, nm: 角閃石, bi: 黒雲母, (): 量が少ないことを示す。

3. テフラ組成分析 (火山ガラス比分析・重鉱物組成分析)

(1) 分析試料と分析方法

試料1 (S166ベルト・2層) と試料2 (B区西壁・II a層) に含まれるテフラ粒子の量や特徴を、定量的に明らかにするために、火山ガラスの色調形態別含有率と、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析と、重鉱物組成分析 (火山ガラス比分析と合わせてテフラ組成分析とする) を実施した。テフラ組成分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析済みの試料を対象に、分析篩により、 $>1/4\text{mm}$ 、 $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ 、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 、 $<1/16\text{mm}$ の粒子に篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の250粒子を観察して、火山ガラスの色調形態別含有率、軽鉱物と重鉱物の含有率をそれぞれ求める (火山ガラス比分析)。
- 3) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を明らかにする (重鉱物組成分析)。

(2) 分析結果

テフラ組成分析の結果をダイヤグラムにして図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳をそれぞれ表2と表3に示す。

試料1 (S166ベルト・2層) に含まれる火山ガラスの含有率は26.0%で、含有率が高い順にスポンジ状軽石型および繊維束状軽石型 (各11.6%)、分厚い中間型 (2.8%) が含まれている。軽鉱物および重鉱物の含有率は、それぞれ59.6%と7.6%である。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石 (46.4%) と単斜輝石 (22.4%) である。

試料2 (B区西壁・II a層) に含まれる火山ガラスの含有率は36.4%で、含有率が高い順にスポンジ状軽石型 (16.0%)、繊維束状軽石型 (14.8%)、中間型 (5.6%) が含まれている。軽鉱物および重鉱物の含有率は、それぞれ52.4%と8.0%である。不透明鉱物以外に含まれる重鉱物は、含有率が高い順に、斜方輝石 (36.8%) と単斜輝石 (14.4%) である。試料1 (S166ベルト・2層) と比較すると、不透明鉱物の含有率がやや高い傾向にある。

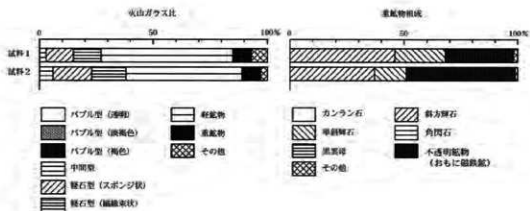


図1 乙部野II遺跡のテフラ組成ダイアグラム

表2 火山ガラス比分析結果

試料 (採取地点・層位)	火山ガラス						軽鉱物	重鉱物	その他	合計
	lw (cl)	lw (pb)	lw (hr)	md	pn (sp)	pn (fb)				
試料1 (S166ベルト・2層)	0	0	0	7	29	29	149	19	17	250
試料2 (B区西壁・II a層)	0	0	0	14	40	37	131	20	8	250

lw: パブル型, md: 中間型, pn: 軽石型, sc: スコリア型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, hr: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, 数字は粒子数。

表3 重鉱物組成分析結果

試料 (採取地点・層位)	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
試料1 (S166ベルト・2層)	0	116	36	0	0	75	3	250
試料2 (B区西壁・II a層)	0	92	36	0	0	120	2	250

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, opq: 不透明鉱物 (黒色で光沢をもつもの), 数字は粒子数。

4. 屈折率測定 (火山ガラス・鉱物)

(1) 測定試料と測定方法

試料1 (S166ベルト・2層) と試料2 (B区西壁・II a層) に含まれるテフラと、指標テフラとの同定精度を向上させるために火山ガラス (n) および斜方輝石 (γ) の屈折率測定を行った。測定方法は、温度変化型屈折率法 (壇原, 1993) で、測定には温度変化型屈折率測定装置を使用した。測定対象は、1/8 ~ 1/16mm粒子中の火山ガラスと、実体顕微鏡を用いて>1/4mm粒子から手選した後に軽く粉砕した斜方輝石である。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表4に示す。この表には、三陸沿岸域の後期更新世後半以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。

試料1 (S166ベルト・2層) に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (n) は1.510-1.514で、斜方輝石 (25粒子) の屈折率 (γ) は1.700-1.711である。また、試料2 (B区西壁・II a層) に含まれる火山ガラス (30粒子) の屈折率 (n) は1.511-1.514で、斜方輝石 (30粒子) の屈折率 (γ) は、1.702-1.711である。

表4 屈折率測定結果

地点・試料・指標テフラ	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率 (n)	測定点数	屈折率 (γ)	測定点数	
乙部野日遺跡・試料1 (S166-ベント・2層)	1.510-1.514	30	1.700-1.711	25	本報告
乙部野日遺跡・試料2 (B区西壁・IIa層)	1.511-1.514	30	1.702-1.711	30	本報告
三陸沿岸域の指標テフラ(後期更新世以降)					
十和田a (To-a, 青森)	1.496-1.508	1.706-1.708			町田・新井(2011)
十和田a (To-a, 岩手・秋田)	1.500-1.508	1.706-1.708			町田・新井(2011)
十和田b (To-b)	1.496-1.508	1.705-1.708			町田・新井(2011)
十和田中撒 (To-Cu, 青森)	1.510-1.514	1.704-1.708			町田・新井(2011)
十和田中撒 (To-Cu, 岩手・秋田)	1.508-1.512	1.703-1.709			町田・新井(2011)
十和田南部 (To-Nb)	1.512-1.517	1.708-1.718			町田・新井(2011)
秋田駒橋沢 (Ak-Y)	未詳	1.718-1.723			町田・新井(2011)
肘折尾花沢 (Oj-O)	1.499-1.504	1.712-1.716			町田・新井(2011)
秋田駒小岩井 (Ak-K)	未詳	1.708-1.712			町田・新井(2011)
十和田八戸 (To-H)	1.505-1.509	1.705-1.708			町田・新井(2011)
浅間板鼻黄色 (As-Y)	1.501-1.505				町田・新井(2011)
鳴子湯沼上原 (Nk-U)	1.492-1.500	1.711-1.715			町田・新井(2011)
始島Ta (AT)	1.498-1.501				町田・新井(2011)
十和田大不動 (To-Ot)	1.505-1.511	1.707-1.711			町田・新井(2011)
西谷手雪浦・生田 (Iw-Y, Od)	1.508-1.508	1.721-1.726			町田・新井(2011)
鳴子柳沢 (Nr-Y)	1.500-1.503	1.717-1.722			町田・新井(2011)
鏡石山形 (Yk-Y)	1.501-1.503	1.720-1.725			町田・新井(2011)
鏡石村崎野 (Yk-M)	1.503-1.508	1.717-1.722			町田・新井(2011)
十和田川口 (Ow)	未詳	1.707-1.712			町田・新井(2011)
阿蘇4 (Aso-4)	1.506-1.510				町田・新井(2011)
鳴子荷坂 (Nr-N)	1.500-1.502	1.724-1.728			町田・新井(2011)
肘折北原 (Oj-Nth)	1.499-1.502	1.728-1.733			町田・新井(2011)
三瓶木次 (Sk)	1.496-1.498				町田・新井(2011)
洞爺 (Toya)	1.494-1.498				町田・新井(2011)

本報告における屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法(堀原, 1993)による、テフラ・カタログ(町田・新井, 2011)の屈折率測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。

5. 考 察

試料1 (S166-ベント・2層)と試料2 (B区西壁・IIa層)に含まれるテフラ粒子の多くは、火山ガラスの色調や形態、斜方輝石や単斜輝石に富む兩輝石型の重鉱物の組み合わせ、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率特性から、約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中撒テフラ (To-Cu, 大池ほか, 1966, 早川1983, 町田・新井, 1992, 2003, 2011)に由来すると考えられる。層相を考慮すると、分析者が分析対象として採取した火山灰層は、To-Cuと考えられる。

分析者は現地において試料が採取された堆積物の層相を窺見する機会を得ていないが、三陸沿岸域中～南部において、To-Cuの一次堆積層が認められる際には、下部が細粒の黄色火山灰層、上部が比較的細粒の灰色火山灰層の組み合わせからなる場合が多い。おそらく今回の分析対象試料は、層相から、これらのうち下部に相当する可能性が高い。今回のテフラ同定結果を有効に活かすためには、試料の採取時に現地で得られている、試料採取層準の他の地点での層相などに関する情報と照会して、試料中のTo-Cuの層位および年代の指標としての有効性に関して議論を行う必要がある。

6. ま と め

宮古市田老地区の乙部野Ⅱ遺跡のテフラ分析試料2点を対象に、テフラ分析（テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定）を実施した。その結果、発掘調査担当者により採取されたブロック試料中に認められた火山灰層は、十和田中叡テフラ（To-Cu, 約6,000年前）と考えられる。

文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究，11，p. 254-269.
- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」，東京大学出版会，p. 138-149.
- 増原 徹（1993）温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」，p. 149-158.
- 早川由紀夫（1983）十和田中叡テフラ層の分布，粒度，組成，年代。火山，28，p. 263-273.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会，276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会，336p.
- 町田 洋・新井房夫（2011）新編火山灰アトラス（第2刷）。東京大学出版会，336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ。科学，51，p. 562-569.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰。第四紀研究，5，p. 29-35.

乙部野Ⅱ遺跡テフラ分析写真図版

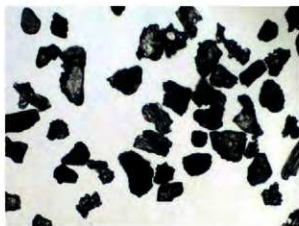


写真1 試料1 (SI66ベルト・2層)
中央：繊維束状軽石型ガラス。
中央下(有色鉱物)：単斜輝石。



写真2 試料2 (B区西壁・Ⅱa層)
右上・右下：繊維束状軽石型ガラス。
中央(有色鉱物)：単斜輝石。
左上(有色鉱物)：斜方輝石。

4 炭化材同定分析

吉川純子(古代の森研究会)

1. はじめに

乙部野Ⅱ遺跡は宮古市田老の海岸線から約1.5kmの国道45号線の東側に立地している。本遺跡は縄文時代後期初頭及び縄文時代晩期末～弥生時代初頭と考えられる堅穴住居跡を中心とした集落が確認された。分析に充てた炭化材試料は焼失住居とみられる床面から出土したもので、当時の住居構築材等または燃料材と考えられている。そこで当時の木材利用状況を調査する目的で分析をおこなった。今回分析に供した試料は4点で、縄文時代後期の住居跡SI16から3点、弥生時代初頭の住居跡SI17から1点となっている。炭化材は乾燥後に剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向に割り実体顕微鏡及び反射光式顕微鏡で同定した。

2. 同定結果

本遺跡の住居遺構から出土した炭化材同定結果を表1にまとめた。縄文時代後期の3点のうち2点はクマシデ属、1点はコナラ属コナラ節であった。弥生時代の1点はクリであった。以下に出土した炭化材の形態記載をおこなう。

表1 乙部野Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定結果

試料番号	仮番号	時期	遺構	地点	層位	樹種
1	9	縄文後期	SI16	炭化物4-2	1層(床直)	コナラ節
4	29	弥生	SI17	SW	暗褐色土(炭化物層直上)	クリ
6	7	縄文後期	SI16	炭化物2	1層(床直)	クマシデ属
7	8-1	縄文後期	SI16	炭化物4-1	1層(床直)	クマシデ属

クマシデ属(*Carpinus*)：やや小さい道管が単独ないし放射方向に数個複合して年輪内にほぼ均一に散在する散孔材で道管の穿孔板は単一と階段状があり、本試料は階段数が少ない。放射組織はほぼ同形で1-3細胞幅で集合放射組織がある。

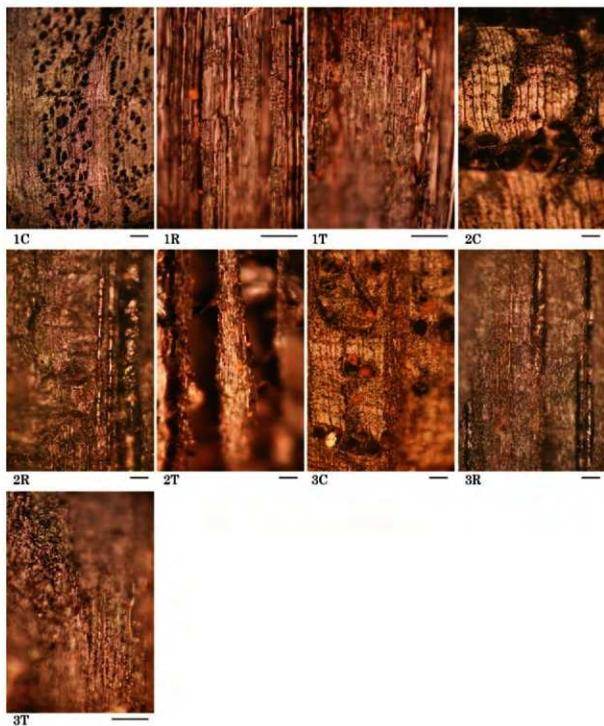
クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪はじめに大きい道管がほぼ単独で数列配列しその後径が急減して薄壁の角張った小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し、放射組織は平伏細胞のみの同形で単列である。

コナラ属コナラ節(*Quercus* sect. *Prinus*)：年輪はじめに大きい道管がほぼ単独で数列配列しその後径が急減して火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔を有し、放射組織は平伏細胞のみの同形で単列と幅の広い複合型の広放射組織がある。

本遺跡で炭化材が出土した遺構は焼失した竪穴住居跡とみられ、出土した炭化材は建築材か燃料材ではないかと推測されている。縄文時代後期からはコナラ節とクマシデ属を出土し、これらは建築材と燃料材いずれにも利用可能な樹種とされる。岩手県内の縄文時代から弥生時代の竪穴住居跡から出土する炭化材はクリが多いが、湯舟沢遺跡ではコナラ節のほうがやや多く、他の遺跡でもクワ属やトネリコ属、アサダなど数種類出土する場合が多い。炭化材の出土は建築材のみでなく製品や燃料材も含まれる場合があることや、建築材の利用も周囲に生育している様々な樹種を用いる場合があるなど、いくつかの可能性が考えられる。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久、2012、木の考古学 出土木製品用材データベース、海青社、449p



図版1乙部野II遺跡から出土した炭化材の顕微鏡写真

1. クマシデ属 (SI16炭化物4-1) 2. クリ (SI17 SW) 3. コナラ属コナラ節 (SI16炭化物4-2)

C:横断面, R:放射断面, T:接線断面, スケールは0.1mm

5 種子同定分析

吉川純子(古代の森研究会)

1. はじめに

乙部野Ⅱ遺跡は宮古市田老の海岸線から約1.5kmの国道45号線の東側に立地している。本遺跡は縄文時代後期初頭及び縄文時代晩期末～弥生時代初頭と考えられる堅穴住居跡を中心とした集落が確認された。分析に充てた炭化種実試料は焼失住居とみられる床面から出土したもので、当時利用していた食料あるいは利用残渣と考えられている。そこで当時の植物食料利用状況を調査する目的で分析をおこなった。今回分析に供した試料は5試料で、縄文時代後期の住居跡SI16が1試料、遺構外の土壌から1試料、弥生時代初頭の住居跡SI17から2試料、縄文～弥生の遺構SI05から1試料となっている。炭化種実実体は肉眼及び実体顕微鏡で同定した。

2. 同定結果

本遺跡の住居遺構から出土した炭化材同定結果を表1にまとめた。縄文時代後期の2点はコナラ属とオニグルミ、弥生時代2点はクリとオニグルミ、縄文～弥生の1点はクリであった。以下に出土した炭化種子の形態記載をおこなう。

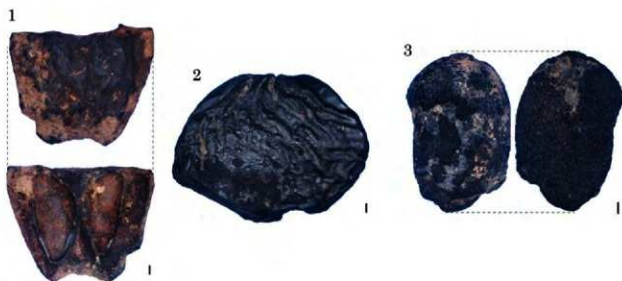
表1 乙部野Ⅱ遺跡出土炭化材樹種同定結果

試料番号	仮番号	時期	遺構	地点	層位	分類群	部位
1	-	縄文後期	SI16	ES	埋土一括	コナラ属	炭化子葉半分
2	-	弥生	SI17	NW	暗褐色土(炭化物層直上)	クリ	炭化子葉破片
3	-		SI05	N	暗褐色土	クリ	炭化子葉ほぼ完形
4	-	弥生	SI17	土跡1	土器内土	オニグルミ	炭化内果皮破片
5	13	縄文後期	外	IVCh	IIa層(300川)	オニグルミ	炭化内果皮破片

オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* Kitamura) : 内果皮は完形であれば球形で縦方向に2分割する縫合線があり、壁は木質で固くやや厚く、表面には粗い筋状の不規則な網目模様があり不規則なおうとつがある。壁内部に空隙があり内果皮内側は4室に分割される。出土した試料はいずれも破片であった。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) : 子葉はまるみがある三角形で扁平で、頂部から下端方向に波状のしわがある。本遺跡で出土したほぼ完形の試料は高さ13mm、幅16.8mm、厚さ7mmと小さい。コナラ属(*Quercus*) : 出土した子葉は本来楕円球形である完形子葉が半分に割れた状態で、一端に小さい溝状の胚の痕跡がある。表面は平滑で浅いおうとつと浅い筋がある。

炭化種実が出土した遺構は焼失した堅穴住居跡とみられ、出土した炭化種実実体は保管してあったものか利用後の残渣ではないかと推測される。本遺跡では縄文時代後期から弥生時代にかけてオニグルミ、クリ、コナラ属を出土し、これらを食料として利用していたと考えられる。



図版1 乙部野II遺跡から出土した炭化種実の写真

1. オニグルミ、炭化内果皮破片 (SI17土器1) 2. クリ、炭化子葉 (SI05-N) 3. コナラ属、炭化子葉半分 (SI16-ES)
スケールは1 mm

6 花粉分析

吉川昌伸（古代の森研究所）

1. はじめに

乙部野Ⅱ遺跡は、宮古市の北東、田老地区に位置する縄文時代前期から弥生時代初頭の遺跡である。縄文時代後期初頭には、堅穴住居跡が31棟確認され、フラスコ状土坑や捨て場も検出されており集落として利用されていた。ここでは縄文時代後期初頭とそれ以前の時期の植生を明らかにすることを目的に花粉分析を行った。

2. 試料と分析方法

花粉分析は、B区西壁Ⅱa層とⅢ層、B区中央Ⅱa層から採取した3試料で行った。Ⅱa層は縄文時代後期初頭、Ⅲ層は縄文時代前期以前の堆積層とされている。花粉化石の抽出は、試料約2.5gを秤量し体積を測定後に10%KOH（湯煎約15分）、傾斜法により粗い砂を取り除き、48%HF（約15分）、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸1：無水酢酸9の混液で湯煎5分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しミキサーで十分攪拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量0.1mg）シグリセリンで封入した。同定と計数はプレパラートの全面を行った。細粒微粒炭量は、プレパラートの顕微鏡画像をデジタルカメラで取り込み、画像解析ソフトのImageJで75 μm^2 より大きいサイズの細粒微粒炭の積算面積を計測した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。

3. 結果と考察

分析試料はⅡa層が灰黄色細粒砂質シルト、Ⅲ層が黒褐色細粒砂質シルトからなり、いずれも多孔質で有機物を比較的多く含む（表1）。

表1 乙部野Ⅱ遺跡の堆積物の特性(重量%)

地点	層	堆積物の特徴	砂(%)	シルト 粘土(%)	強熱減量(%) (有機物量)
B区	西壁Ⅱa層	灰黄褐色中～細粒砂質シルト(多孔質)	32.3	53.1	14.6
B区	西壁Ⅲ層	黒褐色細粒砂質シルト(多孔質)	22.4	58.2	19.4
B区	中央Ⅱa層	灰黄褐色細粒砂質シルト(多孔質)	20.5	61.5	18.0

花粉化石は、西壁のIIa層からは比較的多く出現したものの、西壁III層と中央IIa層は少量しか検出されなかった(表2)。西壁IIa層では、コナラ亜属が高率で出現し、花粉保存が悪いためクリ属近似種とした花粉が比較的高率で出現した(図1)。他にクリとウルシ、シナノキ属などが出現した。草本では、ヨモギ属が多産し、イネ科や他のキク亜科が出現したが、出現した分類群数は少ない。また、回虫の寄生虫卵が検出され、細粒微粒炭は1605nm²/cm²と比較的多く含まれていた。一方で、西壁III層と中央IIa層から出現した花粉は少なく保存状態も悪いが、その中ではクリ属近似種が相対的に多かった。

表2 乙部野II遺跡6区から出現した花粉化石の一覧表

和名	学名	西壁IIa	西壁III	中央IIa
樹木				
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	2	-	-
ハンノキ属ハンノキ亜属	<i>Alnus subgen. Alnus</i>	17	1	-
ブナ	<i>Fagus crenata Blume</i>	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	53	1	-
クリ	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i>	11	-	-
クリ属近似種	<i>cf. Castanea</i>	26	28	19
ケヤキ属型	<i>Zelkova type</i>	1	-	-
ウルシ	<i>Toxicodendron vernicifluum (Stokes) F.A.Barkley</i>	5	-	-
トチノキ	<i>Aesculus turbinata Blume</i>	1	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	4	-	-
草本				
イネ科(野生型)	<i>Gramineae (Wild type)</i>	8	-	1
ギンギシ属	<i>Rumex</i>	-	1	-
キンボウグク科	<i>Ranunculaceae</i>	2	-	-
ネナシカズラ属	<i>Cuscuta</i>	2	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	57	8	5
他のキク亜科	<i>other Tubuliflorae</i>	6	2	-
シダ植物				
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	2	-	-
他のシダ植物胞子	<i>other Pteridophyta</i>	12	2	1
他のバリノモルフ				
回虫(寄生虫卵)	<i>Ascaris</i>	1	-	-
樹木花粉				
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	121	30	19
草本花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	75	11	6
シダ植物胞子	<i>Fern spores</i>	14	2	1
花粉・胞子数	<i>Pollen and Spores</i>	210	43	26
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	28	2	2
樹木花粉量(粒/cm ²)		1360	530	360
細粒微粒炭量(nm ² /cm ²)		1605	1703	835

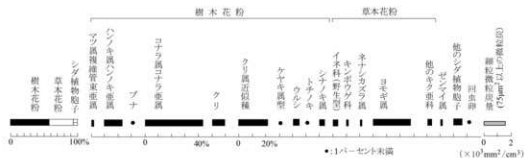
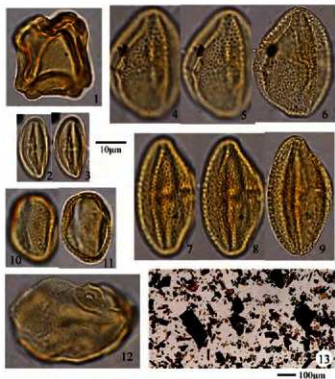


図1 西壁IIa層の主要花粉分布図

(出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基として百分率で算出した)

縄文時代後期初頭の西壁Ⅱa層では、クリ属近似種が多いもののクリ花粉も出現していることから、近似種とした花粉の多くはほぼクリ花粉と推測される。西壁Ⅲ層や中央Ⅱa層からもクリ花粉近似種が比較的多く出現しており、周辺にはクリの木が分布していたと考えられる。クリ花粉の樹木花粉比率は、クリ林の周囲に落葉広葉樹林が広がった植生においては、クリ純林内で30%以上、林内に約25m以上入った中央部で約60%以上を占め、クリ林から離れると急減し、風下側の樹冠縁から約20mで5%以下、約200mでは1%以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことが明らかになっている（吉川，2011）。さらに、空中浮遊花粉の調査においてもクリ林から約15m以内でクリ花粉が急減した（吉川，未公表）。西壁Ⅱa層ではクリとクリ近似種の出現率が31%を占めることから、調査地点の周辺にはクリ林が形成され、その周りにコナラ亜属やハンノキ亜属が分布していたと推測される。また、ウルシ花粉が西壁Ⅱa層で樹木花粉比率で4%と比較的多く占めた。ウルシ花粉は散布範囲が狭いことから（吉川ほか，2014）、調査地点から数十mの範囲にウルシの木があったことはほぼ確実であり、ウルシ畑であったかもしれない。

以上のように、西壁Ⅱa層以外では出現した花粉は少ないものの、各地点の花粉化石群の組成に基づく、集落周辺にはクリ林とウルシ畑が形成されていた可能性が高い。クリ林は、縄文早期以降に拡大し、縄文前期や中期には関東から東北地方の各地の集落の周辺で広く形成されている（吉川ほか，2006；吉川，2011）。縄文中期後半以降には、トチノキが関東から東北地方の遺跡の傍の丘陵や台地の斜面を中心にクリ林の縮小を伴って拡大する遺跡が多く（吉川，2008）、縄文時代後期から晩期ではクリとトチノキと一緒に形成された遺跡が多く認められる。岩手県遠野市の新田Ⅱ遺跡においても縄文時代後期初頭にクリとトチノキが優勢な森林が形成されており（吉川，2014）、縄文時代後期には集落の傍にはクリ林が形成され、部分的にトチノキ林を形成していたことが推測される。



図版1 乙那野Ⅱ遺跡より産出した花粉化石

1. ハンノキ亜属(西壁Ⅱa) 2-3. クリ(西壁Ⅱa) 4-6. ウルシ(西壁Ⅱa)
7-9. ウルシ(西壁Ⅱa) 10-11. ヨモギ属(西壁Ⅱa) 12. イネ科(西壁Ⅱa)
13. プレバート状(西壁Ⅱa)

引用文献

- 吉川昌伸. 2008. 東北地方の縄文時代中期から後期の植生とトチノキ林の形成. 環境文化史研究1号: 27-35.
- 吉川昌伸. 2011. クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況. 植生史研究, 18: 65-76.
- 吉川昌伸. 2014. 花粉分析. 「新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道釜石秋田線(遠野～東和間)関連遺跡発掘調査」(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 編, 257-268.
- 吉川昌伸・工藤雄一郎・能城修一・吉川純子・佐々木由香・千葉敏朗. 2014. ウルシ花粉の散布調査. 国立歴史民俗博物館研究報告, 第187集: 469-478.
- 吉川昌伸・鈴木 茂・辻 誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔. 2006. 三内丸山遺跡の植生史と人の生業. 植生史研究特別第2号: 49-82.

7 珪藻分析

吉川昌伸（古代の森研究所）

1. はじめに

乙田野Ⅱ遺跡は、宮古市の北東、田老地区に位置する縄文時代前期から弥生時代初頭の遺跡である。縄文時代後期初頭には、堅穴住居跡が44棟確認され、フラスコ状土坑や捨て場も検出されており集落として利用されていた。ここでは縄文時代前期以前と推定される層の堆積環境を明らかにすることを目的に珪藻分析を行った。

2. 試料と分析方法

試料は、B区西壁のⅢ層の1試料である。珪藻化石の抽出は、試料約1gをトルソービーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後に、沈底法により水洗を5～6回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分攪拌後マイクロベットの取りカバーガラスに展開して乾燥させた。スライドガラスにマウントメディア（封入剤）を適量のせ、これに先程のカバーガラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレパラートを作成した。プレパラートを観察したところ珪藻化石が確認されないため、400倍の光学顕微鏡を使用して、プレパラート全面を検鏡した。

なお、珪藻殻が含まれていた場合は、1000倍の光学顕微鏡を使用して同定・計数を行い、珪藻の同定および各種の生態情報はKrammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、Round et al. (1990)、渡辺 (2005)、小林ほか (2006) を参考にし、古環境の復元のための指標としては安藤 (1990) の環境指標種群や渡辺 (2005) の有機汚濁とpHを用いる。

3. 結果と考察

B区西壁のⅢ層からは、珪藻化石は破片も含め全く検出されなかった。プレパラートには、植物珪酸体のウシクサ族泡状細胞、タケ亜科ササ属型泡状細胞、ヨシ属型短細胞、長台形（ウシノケグサ型）短細胞などが含まれていた。堆積物は黒褐色極細粒砂質シルトからなるものの土壌化しており、さらに珪藻化石が検出されず湿地性のヨシ属型短細胞珪酸体も少量含まれるのみであることから、縄文時代前期以前と推定されるB区西壁Ⅲ層は風成環境で形成された堆積物と考えられる。

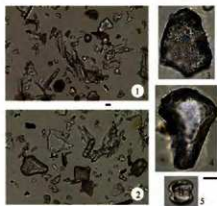


図1 西壁Ⅲ層のプレパラートの状況と産出した植物珪酸体
1-2. プレパラートとの状況 3. ササ属型泡状細胞
4. ウシクサ族泡状細胞 5. ヨシ属型短細胞 スケール=10 μ m

参考文献

- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Hendey, N. I. 1964. An introductory account of the smaller algae of British coastal water. (Fishery Investigations Ser. IV). 317p.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田敬五. 2006. 小林弘珪藻図鑑. 531p. 内田老鶴園, 東京.
- Kramer, K. and H. Lange-Bertalot. 1986, 1988, 1991a, 1991b. Bacillariophyceae, 1. Teil, 2. Teil, 3. Teil, 4. Teil, 876p., 539p., 576p., 437p. In Ertl, H., Gerloff, J., Heyning, J., Mollenhauer, D., Süßwasserflora von Mitteleuropa, 2(1), 2(2), 2(3), 2(4), Gustav Fischer, Jena.
- Round, F.E., Crawford, R.M. & Mann, D.G. 1990. The Diatom. Biology and morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 渡辺仁治. 2005. 淡水珪藻生態図鑑. 666 p. 内田老鶴園, 東京.

8 植物珪酸体分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

乙部野Ⅱ遺跡(岩手県宮古市に所在)は、山間斜面地に立地し、これまでの発掘調査により縄文時代～弥生時代の遺構・遺物が出土している。今回、弥生時代前期末～中期初頭に帰属するとされる焼失した堅穴住居跡(SI17)について植物珪酸体分析を実施し、稲藁等が住居跡床面に敷かれていた可能性について検討する。

2. 試料

試料は、SI17で出土した土器内に充填された土壌から採取され、土器3(No.1)、土器8(No.2)、土器9(No.3)、土器11(No.4)、土器2(No.5)、土器1(No.7)、土器5(No.9)、土器12(No.15)、土器18(No.16)の9試料である。いずれの土器内にも、黒褐色を呈した砂やシルトで埋積されている。

3. 分析方法

今回の分析調査では、イネなどに由来した灰像(珪化組織片)の産出に注目する。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993)。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの分類群が明らかになると考えられる。

各試料については、以下の手順で処理を進める。過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、珪化組織片や植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレパラートで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。また検出された分類群とその含量を図示する。

4. 結果

結果を表1、図1に示す。調査した土壌試料9点では、いずれからもイネなどに由来する珪化組織片が全く認められない。また各試料からは、クマザサ属を含むタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科などに由来する単体の植物珪酸体が検出される。その含量は多くても600個/g程度であり、概して少ない。

5. 考 察

単体で検出された植物珪酸体で認められた分類群からは、集落の周辺にクマザサ属などのタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科などイネ科植物の生育がうかがえる。これらには、乾いた場所に生育する種類が多く含まれることから、集落の周辺に乾いた場所が広がっていたことがうかがえる。またクマザサ属はブナ林の林床に生育するほか、何らかの要因で失われたブナ林の一部に先駆的に進入してササ草原を作ることも多い。おそらくこれらの植物珪酸体は、周辺のイネ科植物相を反映しているとみられる。

表 1. 植物珪酸体分析結果

(個/g)

分類群	土器 3	土器 8	土器 9	土器 11	土器 2	土器 1	土器 5	土器 12	土器 18
	1	2	3	4	5	7	9	15	16
イネ科葉部短細胞珪酸体									
クマザサ属	200	100	200	<100	<100	200	-	200	100
タケ亜科	100	200	200	<100	<100	200	-	200	200
ススキ属	<100	100	-	-	-	<100	-	<100	-
イチゴツナギ亜科	200	100	200	-	<100	<100	-	100	<100
不明	600	300	300	<100	300	500	<100	400	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
クマザサ属	200	100	200	<100	300	200	-	300	200
タケ亜科	<100	200	200	<100	400	400	-	300	300
不明	<100	300	<100	200	200	600	100	400	400
合 計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,100	700	800	200	400	1,000	<100	1,000	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	300	600	500	300	900	1,200	100	1,100	900
植物珪酸体含量	1,400	1,300	1,300	500	1,300	2,200	200	2,100	1,500

含量は、10 の位で丸めている (100 単位にする)

計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100 : 100 個 / g 未満

ところで、今回、コメの収穫後に容易に入手でき、燃料材や住居構築材などの生活資材に古くから利用されているイネが住居で利用されていたとするならば、そこにイネ属植物珪酸体が残存し、それらが住居床面にみられた土器内の内部に流入していることが予想された。今回、弥生時代前期末～中期初頭に帰属するとされる焼失した竪穴住居跡SI17より出土した土器の内部から採取された土壌からは、イネなどの珪化組織片、およびイネ属短細胞・機動細胞珪酸体、イネ属短細胞珪酸体など、栽培植物に由来する植物珪酸体が全く認められない。さらに、イネ属以外においても珪化組織片もみられない。したがって、今回の結果を見る限りでは、本住居跡でイネ科植物が住居跡床面に敷かれていた、あるいは上屋根材などにイネ科植物が利用されていた可能性を積極的に支持することは難しい。また、時代的な面を考慮すると、周辺で稲作が行われていなかった可能性もある。したがって、今後、住居址床面の平面的な調査を行うとともに、周辺

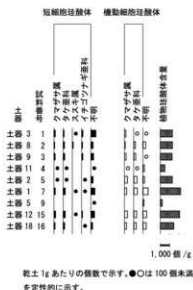


図 1. 植物珪酸体含量

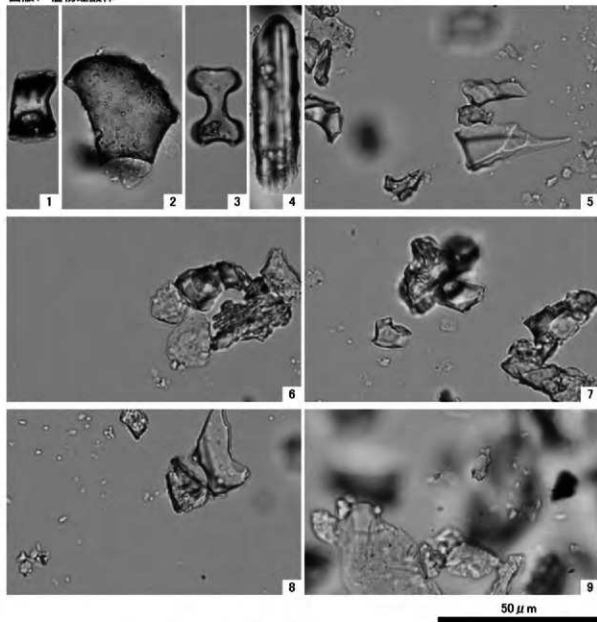
の谷内などにおいて垂直的・平面的な調査を行い、本地域における稲作分布時期についても検討していくことを進めていきたい。

引用文献

近藤純三, 2010, プラント・オパール図譜, 北海道大学出版会, 387p.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993, 自然科学分析からみた人々の生活(1), 慶應義塾鎌倉校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.

図版1 植物珪酸体



1. クマザサ属短細胞珪酸体(土器9:3)
2. ススキ属短細胞珪酸体(土器8:2)
3. ススキ属短細胞珪酸体(土器3:1)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(土器12:15)
5. 状況(鉄物粒子が散在)(土器3:1)
6. 状況(鉄物粒子が散在)(土器11:4)
7. 状況(鉄物粒子が散在)(土器1:7)
8. 状況(鉄物粒子が散在)(土器18:16)

2. クマザサ属機動細胞珪酸体(土器2:5)
4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(土器12:15)
6. 状況(鉄物粒子が散在)(土器11:4)
8. 状況(鉄物粒子が散在)(土器5:9)

9 顔料分析

(株) 第四紀 地質研究所

1. 化学分析・実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製J SX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（F P法）による自動定量計算システムが採用されており、6 C～92 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30 k V、4 mA）の採用で微量試料～最大290 mm φ×80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルクF P法でおこなった。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。実験条件はバルクF P法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30 k V、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。

分析対象元素は分析チャートに対して自動定性分析を行い元素濃度と元素酸化物濃度について分析した。分析結果は第1表元素濃度化学分析表、第2表元素酸化物濃度化学分析表に示すとおりである。分析値は土器の含水量＝0と仮定し、元素と酸化物の重量%を100%にノーマライズしたものを表示した。

2. 化学分析結果

第1表化学分析表には乙部野II遺跡から出土した土器4点を分析した。化学分析結果は以下に示すとおりである。

- 1) 分析結果に見られるように4点の土器の表面と裏面の分析値の中には鉛が検出されておらず、鉄分の検出のみであり。ベンガラによる赤色顔料の付着である。
- 2) 鉄の検出濃度が高いのは写真に示すように土器1の裏面と土器2の表面と裏面で、元素濃度は20～27%と高い。土器1の表面と土器4の裏面はともに元素濃度は19%と高いので赤色顔料の付着が推察される。土器3の表面と裏面は鉄の濃度が低い。
- 3) 検出された赤色顔料には硫黄分が検出されており、原岩は硫化鉄の可能性が高く、砂鉄とは異なるようである。

第 1 表 元素濃度化学表

試料名	Na	Mg	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Fe	Mn	Zn	V	Sr	Zr	Cr	Total
土器表面-1	0.0000	0.0000	20.2484	53.9487	0.0000	0.1710	2.4408	1.6423	2.9267	19.0975	0.6725	0.0000	0.0798	0.0000	0.2213	0.0000	99.7787
土器表面-1	0.0000	0.0000	20.5472	32.1235	0.2923	10.1885	6.9845	1.1092	2.0710	26.1666	0.0008	0.0000	0.0414	0.3184	0.1774	0.0000	99.8226
土器表面-2	0.0000	0.0000	21.9355	44.9761	0.0000	0.4566	2.5692	0.9664	2.9683	25.5989	0.2138	0.0000	0.0633	0.0677	0.1563	0.1208	99.7166
土器表面-2	0.0000	0.0000	17.7446	49.5984	0.0000	1.2800	2.9885	0.9356	3.5397	23.5974	0.1975	0.0000	0.1172	0.0000	0.0000	0.0000	100.0001
土器表面-3	0.0000	0.0000	26.1550	54.5759	0.0000	0.1884	1.2597	1.3343	3.1013	12.7413	0.1034	0.0568	0.1744	0.0564	0.1331	0.0000	100.0000
土器表面-3	0.0000	0.0000	26.3654	56.8188	0.0000	0.1452	0.9882	0.9506	2.9793	18.6330	0.0000	0.0000	0.1396	0.0867	0.0000	0.0000	98.9158
土器表面-4	0.0000	0.0000	17.8282	59.4350	0.0000	0.2924	1.4740	1.1820	2.7851	16.5189	0.0000	0.0000	0.0617	0.0876	0.2162	0.0000	99.6489
土器表面-4	0.0000	0.0000	16.4321	58.0976	0.0000	0.0000	1.3733	0.0940	3.2113	19.2653	0.0131	0.0541	0.0000	0.0938	0.2900	0.0000	98.9255

第 2 表 酸化物濃度化学表

試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	SrO	CaO	TiO2	Fe2O3	MnO	ZnO	V2O5	SrO	ZrO2	Cr2O3	Total	
土器表面-1	0.0000	0.0000	23.7791	61.0161	0.0000	0.1925	1.3039	0.9985	2.1919	10.4137	0.0367	0.0000	0.0099	0.0000	0.0977	0.0000	100.0000
土器表面-1	0.0000	0.0000	24.8198	39.4926	0.3471	12.9953	4.0916	0.7298	1.5944	15.6669	0.0000	0.0000	0.0339	0.1370	0.0670	0.0000	99.9954
土器表面-2	0.0000	0.0000	28.1123	53.6552	0.0000	0.5547	1.4917	0.9696	2.2784	14.9952	0.1187	0.0000	0.0516	0.0281	0.0739	0.0425	100.8100
土器表面-2	0.0000	0.0000	20.9789	58.9504	0.0000	1.5207	1.6791	0.5979	2.6360	13.4388	0.1043	0.0000	0.0927	0.0600	0.0000	0.0000	100.0000
土器表面-3	0.0000	0.0000	30.4148	59.1447	0.0000	0.1958	0.6707	0.7529	2.0319	6.5123	0.0487	0.0304	0.1215	0.0207	0.0557	0.0000	99.9999
土器表面-3	0.0000	0.0000	30.3462	46.6151	0.0000	0.1866	0.4699	0.5234	1.8732	5.2080	0.0000	0.0000	0.0943	0.0315	0.0000	0.0000	99.4082
土器表面-4	0.0000	0.0000	20.6017	46.8234	0.0000	0.3123	0.7176	0.6740	1.8806	8.4460	0.0000	0.0000	0.0443	0.0325	0.0914	0.0000	99.9328
土器表面-4	0.0000	0.0000	19.1098	46.6301	0.0000	0.0000	0.7211	0.5437	2.2510	18.3773	0.0066	0.0221	0.1021	0.0356	0.1280	0.0000	99.9452

乙部野II遺跡・土器顔料分析・写真



土器1表 (No39)



土器1裏 (No39)



土器2表 (No89)



土器2裏 (No89)



土器3表 (不掲載)



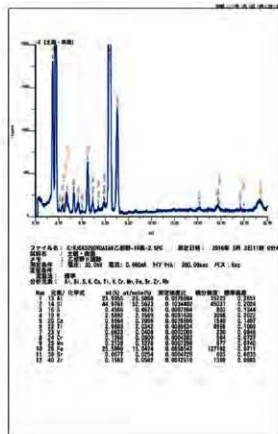
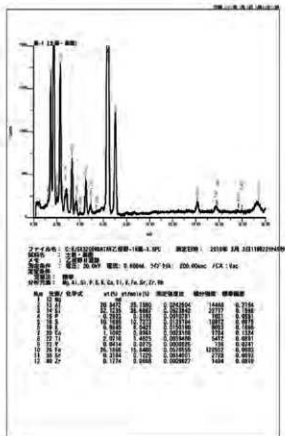
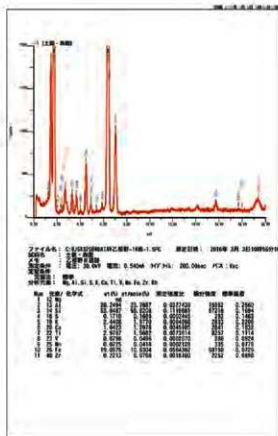
土器3裏 (不掲載)



土器4表 (No159)



土器4裏 (No159)



10 黒曜石産地同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

乙部野Ⅱ遺跡は岩手県古宮市田老字重津部地内に所在する。発掘調査において、主に縄文時代後期初頭の遺物が多数出土した。ここでは、当遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器4点である(表1)。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

表1 分析対象

分析No.	仮番号	出土遺構	出土地点	層位	種別
1	20237	S125	NW	褐色土 (IIa層)	石鏝
2	20238	S131		埋土一括	石槌?
3	20239	S141	B	底層	石鏝?
4	20240		調査区西側トレンチ	I層下部~IIa層	刮片



図1 黒曜石産地分布図(東日本)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で囲んである。

分析の結果、2点が北上折居1群(北上川エリア)、1点が北上折居1群と2群の重複域の範囲にプロットされた。分析No.4は、合致する判別群がなかった。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白糠	白糠1	赤石山山頂(43), 八号穴遺跡(15)	
		白糠2	7の穴(15), 北沢(10), 1番石(10), 阿蘇山(10), アンナイの滝(10)	
	非井川	非井川	鹿川-七木川(24)	
		上土幌		
		渡戸	渡戸山	渡戸山(5)
			所山	所山(5)
		豊浦	豊浦	豊浦(10)
		旭川	旭川	近文台(30), 雨合台(2)
		名寄	名寄	忠勝川(19)
		秩父別	秩父別1	中山(96)
			秩父別2	
		遠軽	遠軽	社名河川河床(2)
	生田原	生田原	仁田和川河床(10)	
	留辺蘂	留辺蘂1	ケンマツツ川河床(9)	
留辺蘂2				
青森	新郷	新郷古武スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)		
	木造	出来島海岸(15), 鶴ヶ丘(10)		
	八森山	岡崎浜(7), 八森山公園(8)		
	青森	天田内川(6)		
秋田	男鹿	金ヶ崎遺跡(10)		
	雄本	雄本海岸(4)		
岩手	北上川	北上折居1		
	北上川	北上折居2		
	北上川	北上折居3		
宮城	宮崎	瀬ノ倉(40)		
	色麻	根岸(40)		
	仙台	依成1	土蔵(18)	
		依成2		
塩竈	塩竈(10)			
山形	羽黒	月山	月山荘遺(24), 大畑沢(10)	
	柳町	たらのさ代(19)		
新潟	新発田	板山	板山牧場(16)	
	新津	金津	金津(7)	
栃木	高野山	甘藷沢	甘藷沢(22)	
		七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 桂沢(3)	
	和田	西館屋	栗原バラライト土砂壱遺跡(30)	
		鷹山麓山	鷹山(14), 栗原(54)鷹山(14), 東館屋(54)	
		小栗沢	小栗沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
長野	和田	土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)	
		古峠	和田峠トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)	
	ブドウ沢	ブドウ沢(20)		
	教ヶ沢	教ヶ沢(20)		
	高松沢	高松沢(19)		
静岡	藤枝	星ヶ台	星ヶ台(35), 星ヶ塚(20)	
	藤科	赤山山	赤山(20), 赤草峠(20), 赤草峠東(20)	
	高根	芦ノ鹿	芦ノ鹿(10)	
		畑留	畑留(5), 畑留(5)	
静岡	新治原	新治原(20)		
	上多賀	上多賀(20)		
東京	天城	初峠	初峠(20)	
	神津島	忍島島	忍島島(27)	
高根	隠岐	砂糠崎	砂糠崎(20)	
		久見	久見バラライト中(6), 久見探検現場(3)	
		実浦	実浦海岸(3), 加茂(4), 岸浜(3)	

表3 測定値および産地推定結果

分析No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn/100 Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア
1	200.0	112.1	2655.4	418.7	553.0	379.5	1139.9	16.81	4.22	22.20	1.12	北上折居1	北上川
2	200.9	111.1	2558.1	405.9	538.1	372.9	1125.8	16.62	4.34	22.03	1.11	北上折居1	北上川
3	184.8	107.5	2436.6	404.5	491.8	374.8	1060.5	17.35	4.41	21.09	1.12	北上折居1or2	北上川
4	193.4	72.8	1694.1	306.9	363.2	499.5	814.3	21.18	4.30	8.71	0.94	?	不明

11 アスファルト産地同定

弘前大学人文社会科学部 上條信彦・片岡太郎
株式会社古環境研究所

1. はじめに

乙部野Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市田老に所在する。発掘調査において、アスファルト塊2点、アスファルト容器2点、アスファルト付着土器1点の計5点が検出されている。

アスファルトは、高い粘性と撥水性を有し、熱を加えると容易に融解する性質を持つため、縄文時代には接着剤、防腐剤、防水剤などに使用されてきた。本試料がアスファルトであれば、その採取地は、油田がある日本海沿岸域と推定され、アスファルトの産地と交易ルートを知るうえで重要な知見をもたらす。そこで本遺跡出土の試料について、観察および成分分析を行い、黒色物質の正体を明らかにするとともに、その産地推定を試みたい。

2. 試料

試料は、アスファルトNo.1～5の5点である(表1)。No.1とNo.4はいずれも塊状である。No.1には容器の痕跡が残る。No.4は劣化により多数の小塊に割れている。No.2は土器底面内部に沈殿した状態であり、土器内で溶解させた残存物とみられる。No.3は壺形土器内面から口縁部にかけて薄く付着しており、保管容器とみられる。No.5は赤塗壺頸部の接合面に付着することから、頸部破損後に補修用に塗布されたものとみられる。

表1 分析試料

No.	土器No.	容%	出土地点	層位	備考
1	-	-	S125 CN	増地色土	未洗浄
2	205	858	SKP05	埋土一括	未洗浄、土器底面に沈殿
3	443	-	IIIbc	IV層(漸移帯)	洗浄済、土器内面に付着
4	-	-	IVCh	II a 層(3回目)	未洗浄
5	30053	6451	V Bd・i	II a 層	洗浄済、赤塗土器、接合面に付着

3. 方法

(1) フーリエ変換赤外分光分析

試料から剥離した小片について、表面付着物を取り除いた後に分析に供した。分析は、フーリエ変換赤外分光分析法(Fourier Transform Infrared Spectroscopy, FT-IR)により、顕微FT-IRのATR法による赤外吸収スペクトルから同定を試みた。測定条件は分解能 4 cm^{-1} 、積算回数64回とした。測定波数範囲は $4,000\text{ cm}^{-1} \sim 700\text{ cm}^{-1}$ である。

(2) 元素分析

試料を加熱分解して発生させたガス中の炭素(C)、水素(H)、窒素(N)、硫黄(S)各元素の含有率を算出する。元素分析はElementar社製 vario EL cubeを使用し、分析装置の標準的な手順に従った。粉体にした試料2mgを3回測定した。得られたデータについてはDaily Factorの計算および計算値によ

る各測定データを補正し、その平均値を示した。

4. 結 果

(1) フーリエ変換赤外分光分析

図1に赤外分光スペクトルを示す。全ての赤外分光スペクトルが類似したプロファイルを示した。共通してみられた特徴として、 $2,920\text{cm}^{-1}$ 付近と $2,856\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収（図中実線）、 $1,460\text{cm}^{-1}$ 付近及び $1,375\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収と $2,952\text{cm}^{-1}$ 付近のショルダーピークが認められた（図中破線）。前者は、CH基に由来する吸収であり、アスファルトと漆に共通して存在する。一方で、後者は、アスファルトと漆の二択であった場合、アスファルトに特徴的に存在する吸収である（高妻ら2011）。以上から、本試料の全てはアスファルトである可能性が高い。赤外分光スペクトルだけでは漆の混入の可能性は否定できないが、形状や質感、使用状況から併せ考えると、その可能性は低い。

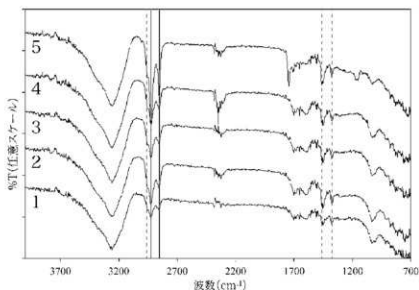


図1 フーリエ変換赤外分光分析の結果

(2) 元素分析

本遺跡出土黒色物質の元素分析の結果を表2に示す。このうち、4点の試料（1・2・4・5）はおおよそCが80～85%、Hが8.8～9.2%、Nが1.0～1.3%、Sが0.78～1.0%、H/C原子比は1.24～1.38と、比較的まとまる。一方、3の試料のみ全体的に各元素が少ない。これは、3の試料のみ1度のみ分析ができなかったため、再検討を要する。

元素組成から、5点ともアスファルトである。そのうち4点の組成は、かなり近似していることから、その産地も同じである可能性が高い。

表2 分析結果

試料	条件	各元素の重量 (wt%)				H/C原子比
		H	C	N	S	
1		9.20	84.83	1.24	1.00	1.30
2	2mg70s	8.89	80.85	1.17	0.83	1.32
3	2mg70s	6.06	60.96	0.40	0.30	1.19
4	2mg70s	8.80	85.77	1.39	0.80	1.24
5	2mg70s	9.25	80.45	1.05	0.78	1.38

5. まとめと産地の推定

以上の分析より黒色物質はアスファルトと判断される。なお、元素組成の結果を分析手法は異なるが、これまでの分析結果（氏家ほか2015）と比較すると（表3）、釜谷（北海道）、ニツ井（秋田県）、申川（秋田県）、福米沢（秋田県）、桂坂（秋田県）、上浜（秋田県）の各油田データに類似しており、おおよそ秋田県八郎潟周辺もしくは秋田県南部の油田データにまとまる。したがって、今後他の分析と比較してみる必要があるものの、元素組成からみると、本分析試料は秋田県域の油田が原産地である可能性が高く、奥羽山脈を介した日本海沿岸域との交易をうかがうことができる。

表3 アスファルト試料の比較

地域	試料名(産油地名)	アスファルト生成条件生成条件	日	元素の重量(wt%) C	N	原子比 H/C
サハリン	オハ	200°C <12h>	10.26	84.91	0.90	1.45
サハリン	ズトウ	200°C <20h>	9.69	84.18	0.42	1.38
サハリン	タカンダリ	200°C <16h>	10.14	82.96	0.68	1.47
北海道	石狩	200°C <3h>	9.47	85.41	0.83	1.33
北海道	釜谷釜谷	200°C <14h>	9.90	83.33	1.00	1.43
青森	蟹田	200°C <4h>	8.60	76.60	1.50	1.35
青森	前田野目	250°C <4h>	9.87	85.56	0.61	1.38
秋田	船越	200°C <4h>	10.00	83.88	0.91	1.43
秋田	豊川	200°C <4h>	8.95	73.48	1.06	1.46
秋田	駒形	200°C <4h>	4.95	34.70	0.57	1.71
秋田	ニツ井	200°C <17h>	8.21	80.01	1.06	1.23
秋田	申川	200°C <14h>	9.98	83.72	1.12	1.43
秋田	福米沢	200°C <17h>	8.65	84.02	1.01	1.24
秋田	桂坂	200°C <14h>	8.35	84.86	1.01	1.18
秋田	上浜	200°C <11h>	9.16	85.70	1.18	1.28
山形	吹浦	200°C <6h>	10.37	84.51	0.89	1.47
山形	余目	200°C <11h>	10.55	86.25	0.49	1.47
新潟	新津(天ヶ沢)	200°C <4h>	10.32	86.56	0.90	1.43
新潟	新津(鎌倉新田)	200°C <4h>	9.82	87.76	0.88	1.34
新潟	頸城	200°C <4h>	6.37	57.27	1.05	1.34
新潟	黒川	200°C <6h>	11.03	85.84	0.69	1.54

h: 時間

氏家ほか2015より作成

引用文献

- 高峯洋成・赤田昌倫・本多貴之 2011 「関連調査資料の調査」『淡路遺跡-森古ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XXIII- 第4分冊 自然科学分析 まとめ篇』秋田県文化財調査報告書第464集 pp.112-120
- 氏家良博・相澤武宏・川村啓一郎・安田創・上條信彦 2015 「石油地質学からみた遺跡出土アスファルトの原産地推定」『考古学と自然科学』67号, pp.47-56



試料No.1 : S I 25 CN 暗褐色土



試料No.2 : SKF05 埋土一括



試料No.3 : III Bc IV層 (漸移帯)



試料No.4 : IV Ch II a層



試料No.5 : V Bd・i II a層

12 胎土分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

乙野野Ⅱ遺跡は岩手県宮古市に所在する。遺跡は北部北上山地の東縁部に分布する中期更新世に形成された開析の進んだ海成段丘を構成する緩斜面上に立地しており、これまでの発掘調査によって、縄文時代から弥生時代にかけての遺構・遺物が出土している。本分析調査では、弥生時代前期末～中期初頭に帰属するとされる竪穴住居跡（SI17）、縄文時代後期初頭に帰属するとされるフラスコ状土坑（SKF08）、縄文時代後期初頭に帰属するとされる竪穴住居跡（SI13）の各遺構から出土した土器合計6資料について、薄片作製観察を実施することにより胎土の特徴を把握し、その製作に関わる資料を作成する。

2. 試料

試料は、乙野野Ⅱ遺跡の発掘調査により出土した土器片6点である。この内、4点は弥生土器とされ、2点は縄文土器とされている。弥生土器の器種は、高杯が2点、深鉢・壺が各1点、縄文土器の器種は深鉢と壺である。出土遺構名、層位、器種、部位、時期および発掘調査者による胎土所見等を一覧にして表1に示す。

表1. 分析試料一覧

試料番号	遺構名	出土層位	器種	部位	時期	備考
34	SI17	土器13 5層	高杯	ほぼ完形	弥生時代前期末～中期初頭	試料：口縁部。焼失住居の焼失時堆積層(最下層)から出土。灰褐色の胎土でSI17内の土器は同様の色調が多い。
96	SI17	土器15 5層	高杯	口縁～台	弥生時代前期末～中期初頭	試料：胴部(口縁部下)。焼失住居の焼失時堆積層(最下層)から出土。赤褐色の胎土。
48	SI17	土器12 5層	深鉢	口縁～底	弥生時代前期末～中期初頭	試料：口縁部。焼失住居の焼失時堆積層(最下層)から出土。
148	SI17	土器5 5層	壺	ほぼ完形	弥生時代前期末～中期初頭	試料：胴部。焼失住居の焼失時堆積層(最下層)から出土。白(黄褐色)の胎土。
183	SKF08	埋土一 6層	深鉢	口縁～底	縄文時代後期初頭	試料：底部。光沢のある粒子(片岩質)が多く混入しており本遺跡の同時期の土器によくみられる。
2743	SI13	M5C 2層	壺	胴～底	縄文時代後期初頭	試料：胴部。1cm以上の砂粒が多く混入しており本遺跡の同時期土器の多くにみられる。

3. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は薄片作製が主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。これらのうち、薄片作製による観察は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類や被熱による鉱物の変質なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、

土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細砂～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレバート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

4. 結 果

結果を表2、図1～3に示す。以下に、鉱物片・岩石片の種類構成、粒径組成、砕屑物の割合の順に述べる。

1) 鉱物片・岩石片の種類構成

掲載番号143、141、142の3点は、石英と斜長石の鉱物片および花崗岩類の岩石片を比較的多く含むことで共通する。ただし、詳細にみれば、3点のうち掲載番号143と141は、微量または少量の角閃石を含み、極めて微量の堆積岩類(チャート、頁岩、砂岩)を含むのに対し、掲載番号142は角閃石と堆積岩類を含まずに、極めて微量の火山岩類(流紋岩・デイサイト、安山岩)を含むという違いが指摘できる。

掲載番号147は、石英と斜長石の鉱物片および凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩の各岩石片を比較的多く含む。仮番号183は、白雲母の鉱物片と頁岩および粘板岩の岩石片を比較的多く含む、石英や斜長石、角閃石などの鉱物片と砂岩、多結晶石英、花崗岩類、脈石英などの岩石片を少量伴う。仮番号2743(不掲載)は、斜長石の鉱物片が突出して多く含まれ、他に少量の石英の鉱物片や微量の凝灰岩の岩石片などが含まれる。

2) 粒径組成

弥生土器4点のうち、掲載番号143、141、147の3点はいずれも中粒砂をモードとし、掲載番号142は細粒砂をモードとする。これに対し、縄文土器2点の試料は、いずれも粗粒砂をモードとする。

3) 砕屑物の割合

弥生土器の4点の試料と縄文土器の掲載番号705については、砕屑物の割合がいずれも20%前後を示し、大きな差は認められない。縄文土器の仮番号2743(不掲載)は、砕屑物の割合が13%程度であり、上述した5点に比べて若干低い傾向が窺える。

5. 考 察

(1) 胎土から推定される地質学的背景と材料採取地

胎土に含まれる鉱物片や岩石片の種類構成は、胎土を構成している粘土や砂の採取地の地質学的背景を反映していると考えられる。乙野野Ⅱ遺跡の立地する海成段丘を構成している地質は、中生代白亜紀に貫入した深成岩類(主に角閃石黒雲母花崗閃緑岩)からなる田老岩体である(吉田ほか、1984; 日本の地質「東北地方」編集委員会、1989)ことから、花崗岩類の岩石片を比較的多く含む仮番号34と

46の2点は、乙部野Ⅱ遺跡周辺の堆積物が土器の材料となっている可能性が高いと考えられる。吉田ほか(1984)による周辺地質の記載から、掲載番号143と141で微量伴う堆積岩類は田老岩体北部内に局所的に分布する白亜紀の堆積岩類からなる宮古層群に由来する可能性があり、その場合、これら2点の土器の胎土は乙部野Ⅱ遺跡の位置する海成段丘の南方を流れて田老町市街に下る長内川流域の堆積物に由来する可能性があると考えられる。

掲載番号142の胎土は、上述した2点の試料と同様に花崗岩類の岩石片を比較的多く含むことは共通するが、共伴する岩石片が火山岩類であり、堆積岩類が含まれないことで、上述した2点の試料とは、地質学的背景の異なる地域で採取された堆積物に由来する可能性がある。上記の地質記載を参照すると、乙部野Ⅱ遺跡周辺には、原地山層と呼ばれる白亜紀の火山岩類からなる地質が田老岩体の周縁を取り囲むように分布している。現時点では、掲載番号142の胎土の由来する堆積物の採取地は、具体的に推定することはできないが、乙部野Ⅱ遺跡周辺である可能性があると考えられる。ただし、試料中に認められた火山岩類は鏡下の観察ではややガラス質であり、新第三紀以降の火山噴出物に由来する可能性もある。新第三紀以降の火山噴出物を含むような堆積物は、乙部野Ⅱ遺跡の周辺に分布する可能性が低く、北上川の沖積低地までその由来を求めなければならない。すなわち、掲載番号142については遠方からの搬入品である可能性もあると言える。

掲載番号147については、凝灰岩や火山岩が比較的多く含まれ、それらは結晶質であることから、上述した原地山層の分布域内を流下する河川の堆積物に由来する可能性がある。乙部野Ⅱ遺跡周辺で見れば、青の滝川下流域の堆積物などは掲載番号147の岩石片の組成に近いことが推定される。

表2. 薄片観察結果(1)

試番号	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計										
		鉱物片				頁石片											その他									
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	白雲母	黒雲母	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	武蔵岩・アライサイト	安山岩		花崗岩類	多結晶石英	ホルンフェルス	緑板岩	黒石英	雲母岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	植物性残体
143	細 礫																									9
	極細粒砂								1																	1
	粗 粒 砂	9	3	6	1	1						1				3	7		1							32
	中 粒 砂	12	3	11		1	2										5	7		1		1				43
	細 粒 砂	11	3	12			5	1									2					1				35
	極細粒砂	1						1																		2
	粗粒シルト																									0
	中粒シルト																									0
基 質																									372	
孔 隙																									20	
備 考	基質は褐色粘土鉱物、セリサイト、炭質物などで埋められる。																									
141	細 礫																									9
	極細粒砂																									2
	粗 粒 砂	8		3						1									5							17
	中 粒 砂	18	2	14			2				1					1	6				3					47
	細 粒 砂	11		3			1				1															36
	極細粒砂	3		3																						6
	粗粒シルト																									0
	中粒シルト																									0
基 質																									336	
孔 隙																									20	
備 考	基質は雲母粘土鉱物、酸化鉄などで埋められる。																									
142	細 礫																		1							1
	極細粒砂	1																		10						11
	粗 粒 砂	5														1				13						19
	中 粒 砂	5	1											1		2	1									10
	細 粒 砂	20	3	6	1											1					1					34
	極細粒砂	13	3	5							2											1				22
	粗粒シルト	4	1	3																						8
	中粒シルト	2																								2
基 質																									423	
孔 隙																									15	
備 考	基質は褐色粘土鉱物、セリサイト、炭質物などで埋められる。緑礫石、火山ガラス、植物性残体あり。																									
147	細 礫																									0
	極細粒砂										1										1					2
	粗 粒 砂	1		1							1				4	2					2					11
	中 粒 砂	5		10	1									5	2	7	2				1	3	2	1		28
	細 粒 砂	7		5	1									4	3							1				21
	極細粒砂	5		1																					6	
	粗粒シルト	4																						1	5	
	中粒シルト	2																							2	
基 質																									433	
孔 隙																									6	
備 考	基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、炭質物などで埋められる。																									

表2. 薄片観察結果(2)

試番号	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計											
		鉱物片						岩石片						その他													
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	緑泥石	白雲母	黒雲母	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	凝灰岩・ツェルサイト		安山岩	多助基岩類	花崗岩類	ホルンフェルス	粘板岩	碧玉英	雲母岩	珪化岩	火山ガラス	炭質物	植物遺骸
705	細 礫										1																2
	極細粒砂								1		3	3				1	1			5	2	4	1				21
	粗 粒 砂	1	1			2					1	9	4				3	3	1	11	4	5	2		1		48
	中 粒 砂	4	1			1			1	1	7	2		1		1	2			6	2	5	1				35
	細 粒 砂	3	3					1	14	1	2					2											27
	極細粒砂	4	1			1			16																		22
	粗粒シルト	2							4																		6
	中粒シルト																										0
	基 質																									665	
	孔 隙																									24	
備 考	基質は雲母粘土鉱物、白雲母、酸化鉄などから構成される。白雲母は、土器の成形された平面と並行に定向配列を示す。土器の内面には、幅0.1~0.3mm程度の厚さで発泡した炭質物が付着している。																										
7743	細 礫																										0
	極細粒砂	1	3																			1					5
	粗 粒 砂	5	11									1															17
	中 粒 砂	4	4			2						1				1											12
	細 粒 砂	1	3										1														5
	極細粒砂					1																					1
	粗粒シルト	1																							1	2	4
	中粒シルト																										0
	基 質																									270	
	孔 隙																									15	
備 考	基質は褐色粘土鉱物、炭質物などで埋められる。斜長石、石英は新鮮で清澄である。																										

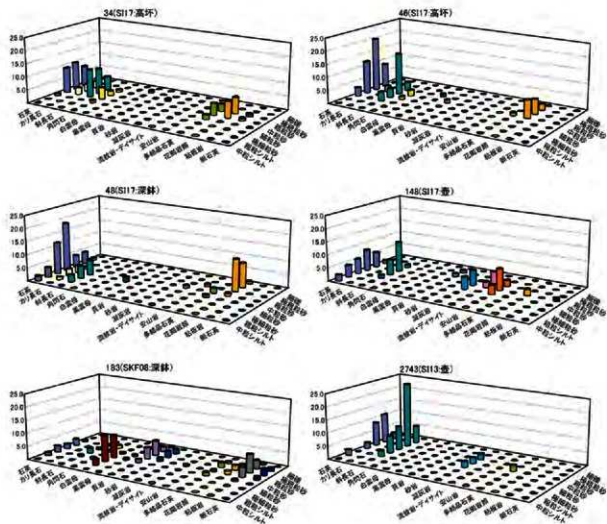


図1. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

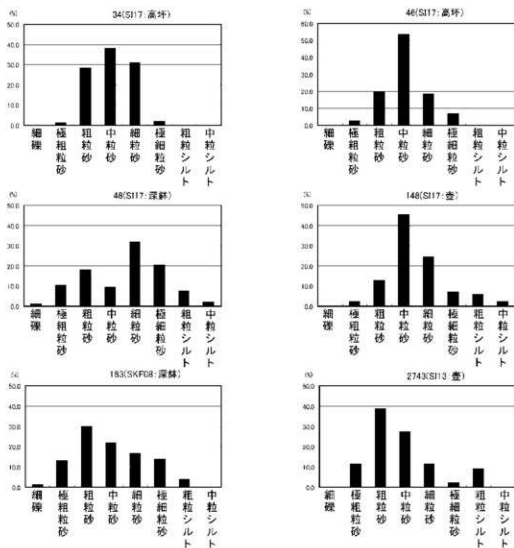


図2. 胎土中の砂の粒径組成

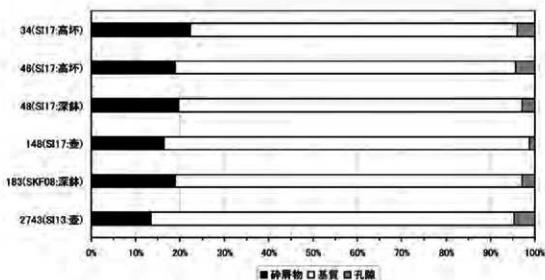


図3. 砕屑物・基質・孔隙の割合

掲載番号705の特徴は、多量の白雲母の鉱物片と粘板岩の岩石片であるが、これは地質学的背景として変成岩からなる地質の分布を含むことを示唆している。乙部野Ⅱ遺跡の位置する北上山地北部の東縁付近には変成岩の分布は認められていないことから、掲載番号705は遠隔地からの搬入品である可能性が高い。北上山地における変成岩としては、花巻市周辺の北上川の沖積低地の東縁に臨む北上山地に分布する母体変成岩類を上げることができる。変成岩類の分布域のさらに東側の山地には古生代二畳紀の堆積岩類が広く分布し、また変成岩類の南側の山地や二畳紀の堆積岩類のさらに東側の山地には宮古岩体と呼ばれる白亜紀の花崗岩類からなる地質も分布することから、堆積岩類や花崗岩類の混在する仮番号183の岩石片の種類構成は、花巻市周辺の北上川沖積低地の地質学的背景に整合するとも言える。現時点で仮番号183の製作地をこの地域に確定するものではないが、製作地の可能性の一つとして呈示しておきたい。

仮番号2743については、多量の斜長石の鉱物片が特徴であるが、地質学的背景を示唆するものとしては微量ながらも凝灰岩の岩石片があげられる。凝灰岩は、鏡下の観察により、低度ながらも結晶質であることから、前述した原地山層に由来する可能性がある。その場合、仮番号2743の製作地は、原地山層の分布を地質学的背景として有する地域内と考えることができる。すなわち、乙部野Ⅱ遺跡周辺で製作された可能性があると考えられる。ただし、前述した仮番号148の胎土とは岩石片の産状が異なることから、掲載番号147の製作地とは同一ではないと考えられる。

(2) 胎土と土器の時期・器種・出土遺構等との関係

今回の試料において4点の弥生土器と2点の縄文土器との間には、含有する砂分の粒径組成に違いが見出せる。弥生土器胎土の砂の粒径組成のモードは中粒砂または細粒砂であり、これに対して縄文土器2点の胎土の砂の粒径組成のモードは粗粒砂である。縄文土器に比べて弥生土器は、材料として使われる砂の粒径組成に細粒化の傾向があったと考えられる。

器種間の胎土の違いについては、高坏である掲載番号143と141はほぼ同様の鉱物・岩石組成であり、他のそれぞれ器種の異なる試料の胎土は、それぞれ異なる鉱物・岩石組成であることが確認された。この結果は、器種によって材料採取地が異なるなど、それぞれ製作に関わる事情が異なっていたことを示唆している可能性が高いと考えられる。

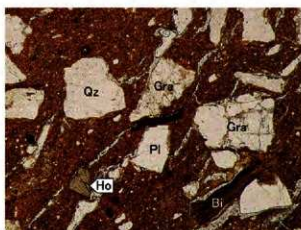
引用文献

- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—。日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121。
日本の地質「東北地方」編集委員会 1989 日本の地質2 東北地方, 共立出版, 338p。
吉田 尚・大沢 積・片田正人・中井順二 1984 20万分の1地質図幅「盛岡」, 地質調査所。

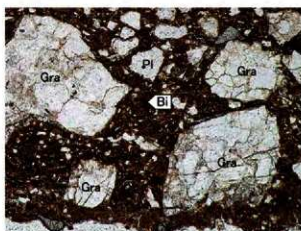
図版1 胎土薄片(1)



1. 仮番号 34(S117) 土器 13 5層 高坏 ほぼ完形 弥生時代前期末～中期初頭)



2. 仮番号 46(S117) 土器 15 5層 高坏 口縁～台 弥生時代前期末～中期初頭)



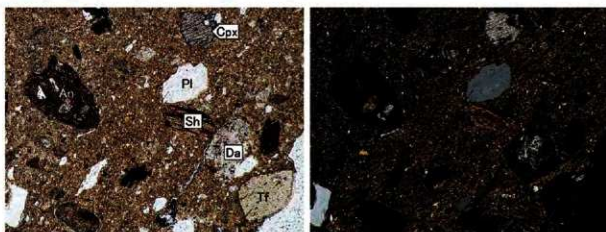
3. 仮番号 48(S117) 土器 12 5層 深鉢 口縁～底 弥生時代前期末～中期初頭)

Qz: 石英. Kf: カリ長石. Pl: 斜長石. Ho: 角閃石. Bi: 黒雲母. Gra: 花崗岩.

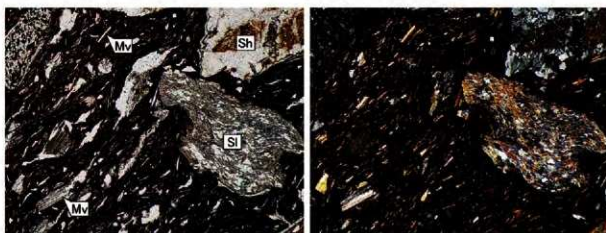
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

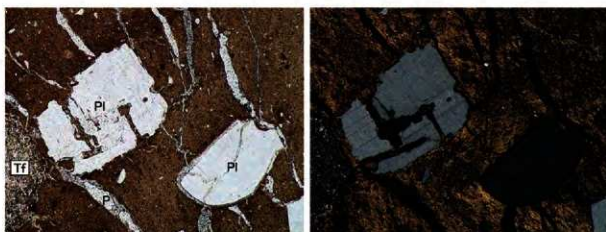
図版 2 胎土薄片 (2)



4. 仮番号 148 (SI17 土器 5 層 壺 ほぼ完形 弥生時代前期末～中期初頭)



5. 仮番号 183 (SKF08 埋土一括 深鉢 口縁～底 縄文時代後期初頭)



6. 仮番号 2743 (SI13 NE区 2層 壺 胴～底 縄文時代後期初頭)

Pl: 斜長石, Cpx: 単斜輝石, Mv: 白雲母, Sh: 頁岩, Tf: 凝灰岩, Da: デイサイト,
An: 安山岩, Sl: 粘板岩, P: 孔隙.

0.5mm

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

Ⅶ 総 括

1 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、SI（堅穴住居跡）61棟、SKI（堅穴状遺構）7棟、SK（土坑）36基、SKF（フラスコ）11基、SKT（陥し穴）11基、SL（焼土）14基、SX（不明遺構）3基である。時代・時期毎に概観すると、縄文時代前期前葉、縄文時代後期初頭、弥生時代前期の堅穴住居跡ほか、後期初頭の貯蔵穴と思われるフラスコ状土坑、後期の捨て場と判断した遺物包含層、陥し穴などの検出があげられる。

遺物は、縄文土器・弥生土器が合わせて1,359.8kg、土製品は134点、石器は剥片石器が950点、礫石器が2,041点、石製品が22点出土している。その他に陶磁器が出土している。

以下には時代・時期毎に、遺物、空間占地、堅穴住居跡の特徴などを整理しまとめてみる。

(1) 縄文早期

[空間占地] 早期の遺構は認知していないことから、土器の出土地をもとに占地について傾向を述べると、調査地南側の南向き斜面地からの出土を中心とする。このことは、比較的限定された範囲が早期の活動域であった可能性を示唆される。

[遺物] 縄文早期の土器は認知できたもの全てを掲載した（13点）。前葉と中葉に分かれる。前葉としては、Na610・849・850・852・855・856が挙げられる。何れも押型文を施文するもので日計式に比定されよう。さらに、Na610については、文様のあり方から日計2～3式に類似する。若干の留意点として、押型文の施文を持って当該時期としたので、他の特徴、例えば縄文を施文するものなどが含まれるのか否かは判別が難しいことを述べておく。中葉は、Na848・851・853・854・857・858などが挙げられ、鳥木沢式や大寺式に相当する。その他として、No243を早期?としたが、胎土中に繊維の混入が認められることから、あるいは前期の可能性もある（※他の前期土器と比べて胎土の様相が異なることから早期?とした）。

出土層位はⅠ層からⅣ層までばらつきが看取される。傾向として前葉はⅠ層表土からの出土がほとんどで、本来の帰属層位を保っているとは判断できない。中葉はⅡ～Ⅲ層として幅を持たせて取り上げた層位から一定量出土しているが、あるいはⅡ層とⅢ層の漸移層が本来の帰属層位であった可能性も示唆される。

最後に土器以外の遺物、例えば石器などについては、土器の出土状況が一括性に乏しいことから言及が難しい。Ⅳ層出土の石器の中には敲磨器が一定量得られており、これらの石器の帰属時期は今後検討を有する。

(2) 縄文前期

[空間占地] 縄文前期は、出土土器の形式特定が難しいものも見られるが、ほとんどは前期前葉の範疇に収まり、主体は大木2a式と判断される。遺構の空間占地は、堅穴住居跡が調査区中央部のⅢ・Ⅳ区を中心に分布する（標高132～136mでほぼ平らな部分に分布する）。SKIとした堅穴状遺構は調査区中央やや東寄りの東向き緩斜面に分布する。SKTとした円形の陥し穴は、堅穴住居跡や堅穴状遺構から離れた調査区東端部や南端部に分布する。堅穴住居跡は大木2a式期の可能性が高い。堅穴状遺構と円形の陥し穴からは出土量は少ないが、組縄縄文を施文する土器も出土している。組縄縄文を施文

する土器が大木2a式より古いと仮定するなら（大木1式期？）、堅穴住居跡より古い時期に帰属する遺構の可能性も考えられる。

【前期堅穴住居跡】推定を含め5棟を検出した。平面形や規模ともに推定すら難しいものがほとんどである。ただ、方形と円形の両方存在する可能性がある。なお、SI32やSI66など方形基調の一端のみ検出したものについては、これらが短軸辺と捉えると長方形基調の大型住居である可能性も示唆される。

炉は、5棟中4棟で検出したが、全て地床炉である。特記事項として、SI62・66は十和田中撤火山灰（To-Cuテフラ）降下時期より古い。

【遺物】縄文前期の土器は、縄文後期の土器に次ぐ量が得られている。その出土傾向として、第232図を見る限り縄文後期とほぼ同様の出土分布と捉えられる。このことは、縄文前期と縄文後期の活動域が似たような範囲であったものと考えられる。

土器型式は、特定できるものとしては大木2a式が圧倒的に多い。それ以外として大木1式（No.861・914・915など、環状き末端ループが認められるもの）、早稲田6類a?（No.561）、大木2b式（No.922）が含まれる。また、No.469など、大木2a式と大木2b式どちらに比定されるのか躊躇されるものもある。

前期の土器の出土層位は、中撤火山灰（To-Cu）の混入が局所的であるがⅡ層中位に認められ、それより下のⅡ層下位付近が本来の帰属層位と捉えられる。また、調査区南側に限定して堆積が認められるⅡa層と命名した土層においても、Ⅱa層中位相当に中撤火山灰が混入するが、その下から出土する傾向が窺える。遺構単位では、縄文後期の堅穴住居跡からも相当量の出土を得られているが、それらは異時期の混在と捉えられる。当該時期の一括資料としてはSI62・66を挙げておきたい。これら2棟の堅穴住居跡は、当該時期同士での切り合い関係にあり、SI66からSI62への変遷と判断された。ただし、SI62・SI66の出土土器は、共に大木2a式主体と捉えられ、明らかな時期差は看取されない。なお、SI62・66出土土器は、土器との共伴から同時期の帰属と判断される。No.2082・2085・2086のように一辺が垂直で一辺が斜め気味の形状（三日月形）を呈する石匙や、No.2301などの側面に磨り痕を持つ蔽磨器類（※いわゆる特殊磨石と捉えられるもので、磨り面部分には磨り面を切る剥離が認められることが多い）は当該時期に特徴的な器種と指摘し得るものである。

(3) 縄文後期

【空間占地】後期の堅穴住居跡は、調査区中央西側を中心に、南北約60mにかけて広がる（弧状若しくは半円状にも見て取れる）。また、この地域から見つかったSK（土坑類）やSKF（フラスコ）も当該時期に帰属する可能性が高い。これらの様相からは、調査区外西側に集落域が広がることはほぼ確実と推定される。また、第100・101図に示した調査区中央東側の東向き斜面地に広がる捨て場範囲は、後期のほぼ単純包含層と捉えられる。従って、居住域や貯蔵域は調査区中央～西部に集約され、捨て場が調査区東部に、それぞれ占地する集落構造と推定される。補足として、仮に調査区外西側に居住域が広がるとするならば、環状気味の構成をとる可能性も否定できない。

【後期堅穴住居跡】推定も含め44棟を検出した。岩手県内でも数少ない当該時期の大規模な集落と判断されよう。本地域の当該期の土器型式編年は確立された状況にはなく、また今回の出土土器は地文のみを施文するものが多いことから、詳細な時期特定は難しい。ただ、後期初頭や後期前葉、もしくは両時期の移り変わる過渡期である可能性が高い。平面形や規模について、全般に遺存が悪く確実な情報提供のできる状況にはない。推定・検討を含みで言及するなら、平面形は、円形17棟、楕円形

16棟、隅丸方形3棟、不明（※推定できないもの）8棟に大別される。規模は長軸長もしくは直径で、円形のもの3～5.5m（平均的には4m前後）、楕円形のもの4～6.3m（平均的には4.5m）、隅丸方形が2.4～4mとなる。明確とはいえないが、傾向として円形と楕円形を呈するものが多く、尚且つ楕円形のものやや大きいものが多いことは言及できよう。炉の作り（炉の形態）に着眼すると、4種類に大別される。石囲炉（13基）、石囲土器埋設炉（2基）、土器埋設炉（7基）、地床炉（16基）で、ほかに炉が未検出（7基）である。それらが、併設されてみられる堅穴住居跡も見受けられる。炉に伴う埋設土器の埋め方（設置の仕方）は、正位（正立）斜位、横位があり、斜位が多い。また、用いられている土器は胴～底部のみで口縁部を失っているものが傾向として多いことも言及できようか。石囲炉は、円形または崩れたような石組みのものがみられ、石組みの掘り方が浅いものやあまり明瞭ではないものが多い。燃焼部（焼土）は石組みの中にみられるものがほとんどであるが、石組みの横付近（近接地）の床面に燃焼部をもつ住居も一定数みられた（地床炉としている）。特異なものとして、SI07は前底部のような掘り込みが検出され、重複関係からも後期初頭でも古い住居である。複式炉の名残ともとらえられる。特記事項としては、SI24から狩猟土器が出土している。

【遺物】 該期の土器は今回の調査の主体を占める。ただ、V章でも記載したとおり、後期初頭～前葉の土器は、本地域が北と南の土器文化が接触する地域であることに関わり、土器型式への比定が難しい様相にある。本報告では地文以外の文様の描出を対象に、隆帯、沈線、原体圧痕、刺突列、微隆起線を施文するでⅢ群A～F類に分群し、さらに諸要素で細分を試みた。

展望を志向し若干土器型式に踏み込むなら、上村式や菫窪式などより北の地域の影響を受ける土器が主体と考えられる。その中であって、№456・948・955・996・1002・1039などは門前式の属性が認められることから、より南の地域の影響を受ける土器と判断しておきたい。また、今回蜜沢式などに比定される土器は特定できていないが、№1・754・755などに代表されるⅢ群B類とした土器群は、十腰内I式に類似することから、菫窪式の時期よりやや後出の後期前葉前半に帰属する可能性もある。最後に、当該時期の土器は、豊富な堅穴住居跡の切り合い関係をもとに、編年観の分析を志向したが、結果としてその方向性は示せなかった。今後の課題の一つとして、検討されることを望む次第である。土製品はミニチュア土器が多く、次いで土偶である。ただ、今回の調査で最も多い円盤状土製品は時期の帰属が特定できないものが多く、あるいは当該時期の産物が多い可能性もある。

(4) 弥生時代

【空間占地】 弥生期の堅穴住居跡は、調査区中央西側に集中する。大グリッドで表記するとⅢB・ⅣB・ⅣC区である。縄文後期と空間占地が重複するが、縄文後期より狭い範囲に集約される様相と判断される。

【弥生期堅穴住居】 推定を含め11棟検出した。今回の調査全体で出土した弥生土器の大半が前期（青木畑式や砂沢式）であることから、当該期の帰属と推定されよう。平面形や規模について、平面形は円形若しくは楕円形、規模は直径3～5mの範囲にあるがバラつきがややある。炉は石囲炉と地床炉が検出されている。石囲炉が主体である。特記事項として、SI17の焼失住居からまとまった遺物量を得られているが、これらは同時期の器種組成を検証する上で良好資料を提供する。

【遺物】 今回の調査で出土した弥生土器は、そのほとんどが前期で、中期と後期がわずかに含まれる。前期の良好資料を提供した堅穴住居跡としては、SI12・13・16・17・23・31などから纏まりのある状態で出土した。これらは、当該時期及び本地域の土器組成を検討する上で良好な資料と捉えられる。

土製品について、弥生期と推定されるものが23点出土している。

本節の補足として、第232図の所見を加えたい。V章で大別した第Ⅰ～Ⅳ群土器について掲載・不掲載の調査区内における出土傾向を図化した。掲載遺物を抽出する際の大まかな分類をもとにした情報であるが、遺跡の特性は反映されていると捉えられる。ただ、不掲載土器を含めた点数の集計や重量の出土傾向など細分まではいっていないことも追記しておく。縄文土器と弥生土器の区分については、胎土や焼成の違いから分け、さらに繊維の有無で縄文土器を前期と後期のものに分類した。早期については胎土と文様で判断したが、V章で触れたとおり相当時期のものと判断できていない土器（地文のみまたはそれに沈線が入る土器）が含まれていた可能性があり、縄文時代の他の時期に混入している可能性も考慮される。

小結すると、土器の出土状況から調査区内における時期ごとの利用域まで語ることは本来安易であるものの、縄文早期に対して、縄文前期以降は出土傾向が異なっていることは把握できた。また、縄文前期と縄文後期の土器出土状況が類似する範囲にあることも指摘できるが、縄文後期の人的活動による土の移動現象などに求められると、ここでは推定するに留める。

2 自然科学分析について

自然科学分析は、11種類（年代測定は2カ年の2回に分け実施）を行った。以下には目的と分析結果をまとめてみる。

（1・2）放射性炭素年代(AMS測定)

分析を委託した年度毎に記載する。

（1）平成27年度年代測定

目的：遺構から出土した炭化物14点の測定により年代値を確認する。

分析結果(考察)：SI04、SI16、SI17、SI35出土資料11点は、おおむね近い年代値を示した。その中でSI17出土が最も古く縄文時代晩期後葉頃の値を示し、他の10点は弥生時代前期から中期頃に相当した。SK11、CP05、SI65から出土した3点は離れた値となっており、SK11出土は縄文時代早期後葉頃、CP05とSI65は縄文時代後期前葉頃に相当する年代である。上記の結果は、出土土器の年代観ともおおむね整合する。

（2）平成28年度年代測定

目的：竈穴住居跡等から出土した土器付着炭化物10点の測定により土器の年代値を確認する。

分析結果(考察)：Na520の測定値は縄文時代前期前葉頃に相当し、土器の推定時期と一致する。Na813は縄文後期初頭頃、Na51・730・788が後期前葉頃の年代値を示した。後期初頭と推定されていたNa51は若干新しい値を示したが、他の3点は推定の範囲内の値と捉えられる。Na137・140・169・136・187は弥生時代と推定されているが、Na140は縄文時代晩期初頭頃、Na136は縄文晩期中葉頃、Na187は縄文時代晩期末葉から弥生前期頃、Na137・169が弥生前期から中期頃に相当する年代値を示した。Na140とNa136は推定よりも古い値を示したが、分析の考察に従えばこれは海生生物由来の炭素が含まれているため、海洋リザーバー効果によって本来よりも古い年代値が示された可能性がある。

(3) 火山灰分析

目的：テフラ分析を行い、テフラ粒子を検出してその岩石記載的特徴を把握し、指標テフラとの同定を実施することにより、堆積物や考古遺構の層位や年代を明らかにする。

分析結果(考察)：約6,000年前に十和田火山から噴出した十和田中継テフラである裏付けを分析結果から得られた。本遺跡に限らず、宮古市田老地区の調査事例からは、かなりの頻度で十和田中継火山灰が検出される傾向にあり、広域テフラとして遺跡や遺構・遺物の年代を知る手がかりとして有意情報を提供する。

(4・5・6・7)炭化材の樹種・炭化種実・花粉・珪藻分析

目的：調査区周辺の古環境復元を意図して実施した。特に、弥生時代にイネ科植物の使用がなかったか、さらには稲作につながる結果が得られないかを想定して分析を行った。

- (4) 炭化材の樹種の分析結果(考察)：本遺跡で炭化材が出土した遺構は焼失した堅穴住居跡とみられ、出土した炭化材は建築材か燃料材ではないかと推測した。分析の結果、縄文時代後期からはコナラ節とクマシズメ属を出土し、これらは建築材と燃料材いずれにも利用可能な樹種とされる。炭化材の出土は建築材のみでなく製品や燃料材も含まれる場合があることや、建築材の利用も周囲に生育している様々な樹種を用いる場合があるなど、いくつかの可能性が考えられる。
- (5) 炭化種実の分析結果(考察)：出土した炭化種実は保管してあったものか利用後の残渣ではないかと推測される。本遺跡では縄文時代後期から弥生時代にかけてオニグルミ、クリ、コナラ属を出土し、これらを食料として利用していたと考えられる。
- (6) 花粉の分析結果(考察)：縄文時代後期初頭の西壁Ⅱa層や西壁Ⅲ層、中央Ⅱa層の周辺にはクリの木が分布し、その周りにコナラ亜属やハンノキ亜属が分布していたと推測される。また調査地点から数十mの範囲にウルシの木があったことはほぼ確実で、ウルシ畑であったかもしれない興味深い考察も得られた。
- (7) 珪藻分析結果(考察)：B区西壁のⅢ層からは、珪藻化石は破片も含め全く検出されず、湿地性のヨシ属も少量含まれるのみであった。このことから、縄文時代前期以前と推定されるB区西壁Ⅲ層は風成環境で形成された堆積物と考察された。

(8) 植物珪酸体分析

目的：弥生時代前期末～中期初頭に帰属するとされる焼失した堅穴住居跡(SI17)について植物珪酸体分析を実施し、稲藁等が住居跡床面に敷かれていた可能性について検討する。

分析結果(考察)：弥生時代に帰属する焼失住居SI17より出土した土器の内部から採取された土壌からは、栽培植物に由来する植物珪酸体が全く認められない結果が示された。さらに、イネ属以外においても珪化組織片もみられない。したがって、本住居跡でイネ科植物が住居跡床面に敷かれていた、あるいは上屋材などにイネ科植物が利用されていた可能性を積極的に支持することは難しい。また、時代的な面を考慮すると、周辺で稲作は行われていなかった可能性もある。

(9) 顔料分析

目的：後期でも弥生でも赤彩された土器が出土している。原材料の特定、時期ごと(後期と弥生)による材料の違いがあるかどうか。

分析結果(考察)：4点の土器の表面と裏面の分析値の中には鉛が検出されておらず、鉄分の検出のみでベンガラによる赤色顔料の付着である。鉄の検出濃度が高いのは土器No.39の裏面と土器No.89の表面と裏面で、元素濃度は20～27%と高い。土器No.39の表面と土器No.159の裏面はともに元素濃度は19%と高いので赤色顔料の付着が推察される。土器No.3の表面と裏面は鉄の濃度が低い。検出された赤色顔料には硫黄分が検出されており、原岩は硫化鉄の可能性が高く、砂鉄とは異なる結果を得られた。

(10) 黒曜石

目的：産地の特定、物資の移動を考える。

分析結果(考察)：乙部野II遺跡より出土した黒曜石製石器4点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、3点が北上川エリア産と推定された。残り1点は産地不明であった。この結果を積極的に支持すれば、北上川上流域付近との交流も推定されようか。

(11) アスファルト

目的：産地の特定、物資の移動を考える。

分析結果(考察)：元素組成からみると、本分析試料は秋田県域の油田が原産地である可能性が高く、奥羽山脈を介した日本海沿岸域との交易を窺える。

(12) 胎土分析

目的：前期・後期・弥生で胎土の違いがみられるか、また他遺跡との比較(混和材の変化や持ち込みを検討する情報として分析した)。

分析結果(考察)：今回の試料において4点の弥生土器と2点の縄文土器との間には、含有する砂分の粒径組成に違いが見出せる。弥生土器胎土の砂の粒径組成のモードは中粒砂または細粒砂であり、これに対して縄文土器2点の胎土の砂の粒径組成のモードは粗粒砂である。縄文土器に比べて弥生土器は、材料として使われる砂の粒径組成に細粒化の傾向があったと考えられる。

器種間の胎土の違いについては、高坏である掲載番号143と141はほぼ同様の鉱物・岩石組成であり、他のそれぞれ器種の異なる試料の胎土は、それぞれ異なる鉱物・岩石組成であることが確認された。この結果は、器種によって材料採取地が異なるなど、それぞれ製作に関わる事情が異なっていたことを示唆している可能性が高いと考えられる。

参考引用文献

<論文関連>

- 岩手県：1973『土地分類基本調査—田老—』国土調査岩手県企画開発室(北上山地開発)
- 小林 達雄監修：2008『総覧縄文土器』
- 工藤 崇・佐々木 寿：2007『十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年』『地学雑誌』第116巻5号公益社団法人東京地学協会 p 653～663
- 佐藤 達夫：1983『青森県上北部早稲田貝塚』『東アジアの先史文化と日本』p 224～283
- 高橋 亜貴子：1992『東北地方縄文時代前期前葉組縄文土器について』『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤俊先生還暦記念p593～632
- 千葉 毅・高山理美：2014『東北地方北部における縄文時代後期初頭から前葉土器編年研究の現状と課題—青森県安部遺跡出土土器の理解のために—』『縄文時代』第25号 縄文時代文化研究会
- 辻 誠一郎：2006『三内丸山遺跡の層序と編年』『植生史研究特別』第2号 p 23～48
- 早川 由紀夫：1983『十和田火山中殿テフラ層の分布、粒度組成、年代』『火山』第2集第3号 p 263～273

早瀬 亮介：2008「前期大木式」『総覧縄文土器』小林達雄編p226～233

早瀬 亮介：2009「前期大木式土器の流通と地域性—編年研究の現状と課題—」『日本考古学協会2009年山形大会研究発表資料』p 273～282

本間 宏：1987「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第3号p31～50

本間 宏：1988「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）」『よねしろ考古』第4号p71～84

三宅 徹也：1989「早稲田6類と表館式の関係」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会

武藤 康弘：2008「表館式・早稲田6類土器」『総覧縄文土器』小林達雄編p210～217

<他県報告書関連>

青森県階上町教育委員会：1989『白座遺跡・野場遺跡(3)発掘調査報告書』

三沢市教育委員会：1985『根井沼（1）遺跡 緊急発掘調査報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書第2集

三沢市教育委員会：1988『根井沼（1）遺跡 緊急発掘調査報告書Ⅱ』三沢市埋蔵文化財調査報告書第4集

三沢市教育委員会：1988『根井沼（1）遺跡 発掘調査報告書Ⅲ』三沢市埋蔵文化財調査報告書第5集

三沢市教育委員会：2008『根井沼（3）遺跡』三沢市埋蔵文化財調査報告書第23集

<岩手県報告書関連>

滝沢村埋蔵文化財センター：2008『弘沢Ⅲ遺跡—平成2年度発掘調査報告書—』滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第3集

盛岡市遺跡の学び館 2009『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』（資料集）

盛岡市教育委員会：1983『大館遺跡群 大新町遺跡—昭和57年度発掘調査概報—

<岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書（発行年順）> ※岩手埋文と呼称し記載

岩手埋文1983：『小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第52集

岩手埋文1994：『寺久保遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第239集

岩手埋文2000：『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第318集

岩手埋文2009：『本波Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第536集

岩手埋文2014：『屋形遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第629集

岩手埋文2015：『平成25年度発掘調査報告書』岩手埋文第630集

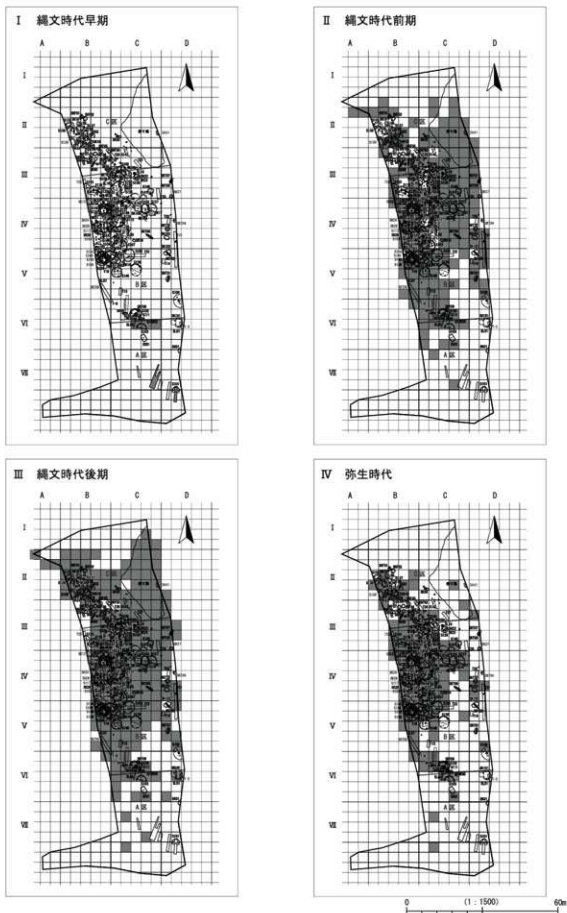
岩手埋文2015：『菅窪遺跡発掘調査報告書』『島越Ⅱ遺跡・島越Ⅳ遺跡・菅窪遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第645集

岩手埋文2016：『向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第657集

岩手埋文2016：『青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第658集

岩手埋文2017：『重津部Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第664集

岩手埋文2017：『越田松長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第666集



第232図 遺物出土傾向図

報告書抄録

ふりがな	おとべの2いせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	乙部野Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第682集							
編著者名	松政里奈・星 雅之・北村忠昭・佐々木隆英・森 裕樹・金子佐知子・菊池貴広							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2018年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
乙部野Ⅱ遺跡	岩手県宮古市田老 字乙部野83他	03202	K684-2107	39度 45分 44秒	141度 58分 12秒	2015.08.03 ～ 2015.12.18	4,494㎡	三陸沿岸道路 関連発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
乙部野Ⅱ遺跡	集落跡 狩猟場	縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡 50棟 竪穴状遺構 7基 土坑 36基 フラスコ状土坑 11基 陥し穴状遺構 11基 竪穴住居跡 11棟	縄文土器 (早期・前期前葉・後期初頭～前葉) 弥生土器(前～中期) 剥片石器・礫石器 土製品 石製品 陶磁器			縄文時代前期前葉の集落。 縄文時代後期初頭～前葉の 集落・捨て場。 弥生時代の焼失住居の検 出。	
要約	乙部野Ⅱ遺跡は、縄文時代早期・前期・後期・弥生時代に亘る複合遺跡であることがわかった。主体時期は、縄文時代後期初頭～前葉で、当該時期には大規模な集落を形成する。また、縄文時代前期前葉と、弥生時代前期～中期の竪穴住居跡も検出されており、長期に亘り断続的に集落として営まれた遺跡であることも合わせて分かった。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第682集

乙部野Ⅱ遺跡発掘調査報告書

(第1分冊)

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成30年3月8日

発行 平成30年3月15日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話 (0193) 62-1711

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 あべ印刷株式会社
〒023-0003 岩手県奥州市水沢区佐倉河字東広町60
電話 (0197) 24-8303
